俳諧文庫第十編

大野洒竹校訂

元禄名家句集

附 女流俳句集

東京博文館藏版

大埜洒竹校訂

元禄名家句集

東京博文館藏版



元祿名家句集

附 女流俳句集

目次

あさつくと梅
家さしかれ
きくらむ

智月

落鮎や
日に日に水の
おそろしき

千代





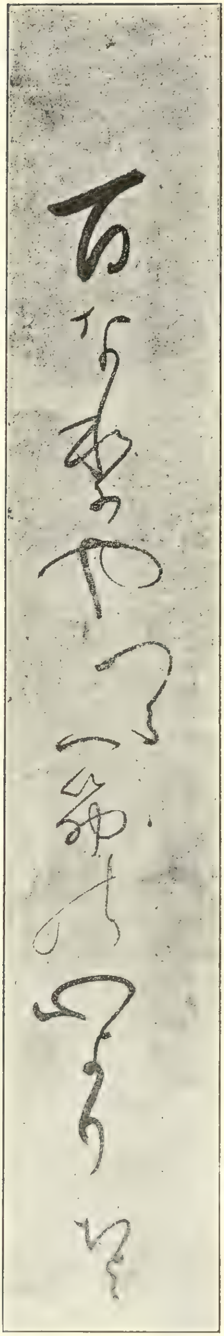


園女筆蹟

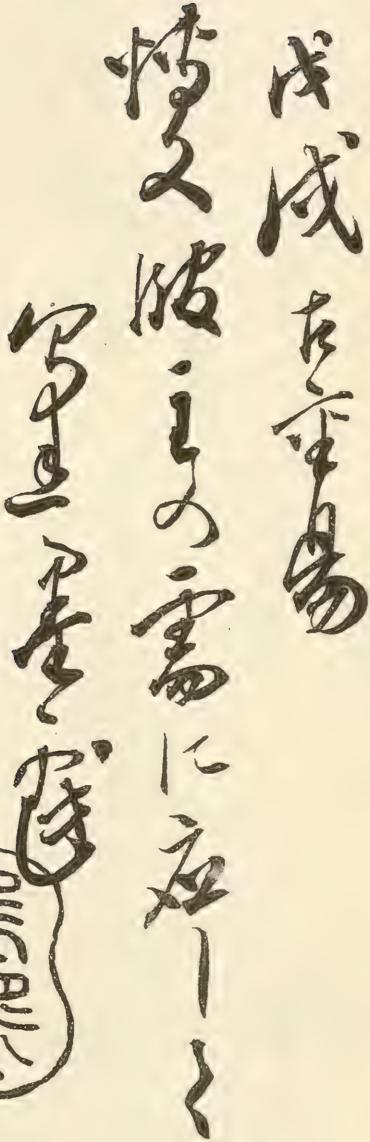


（雪中庵雀志藏）

千代女筆蹟



（同上）

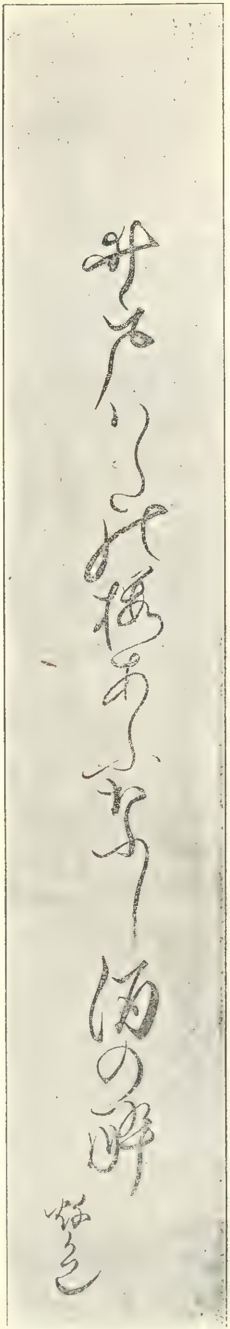


烏黒川村應心先生題画



小西來山筆蹟

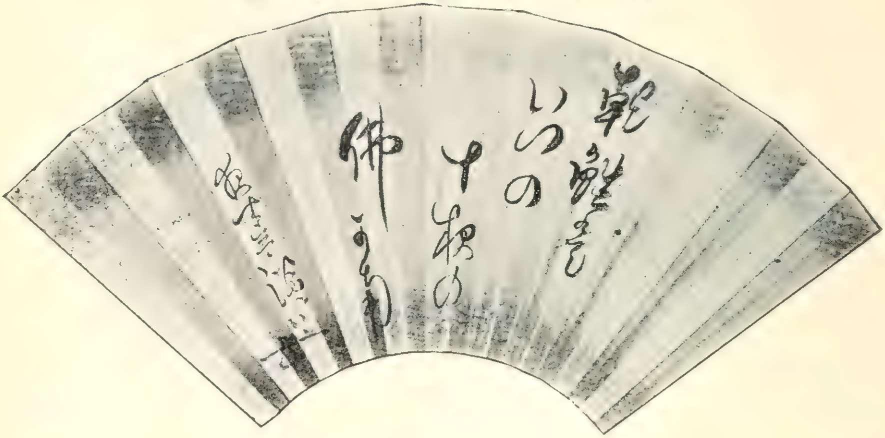
（雪中庵雀志藏）



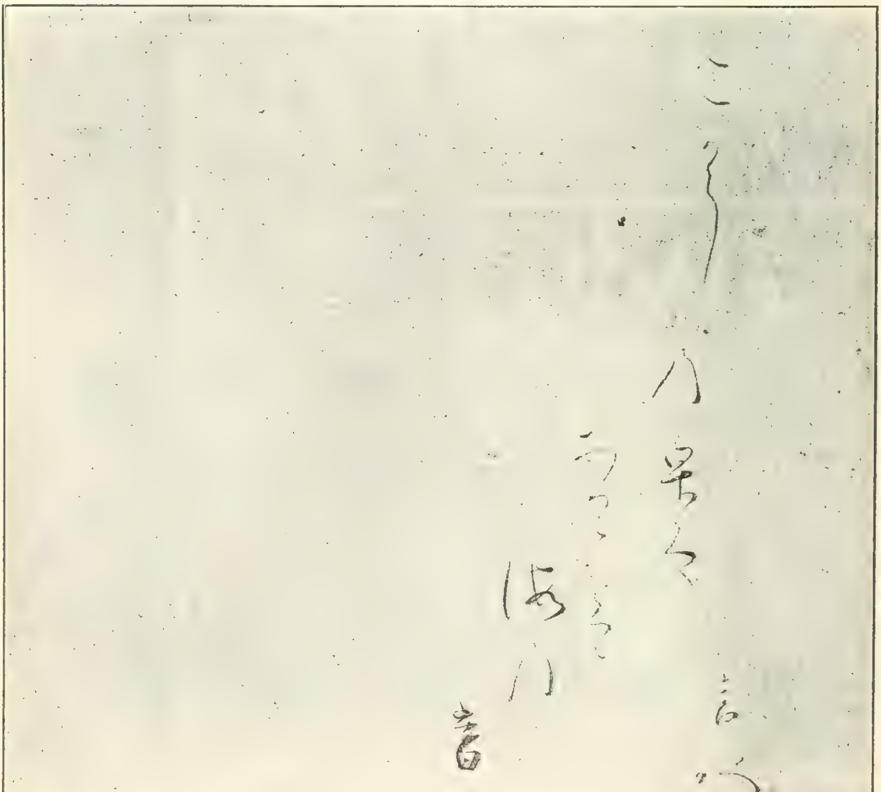
秋色女筆蹟

（同　上）

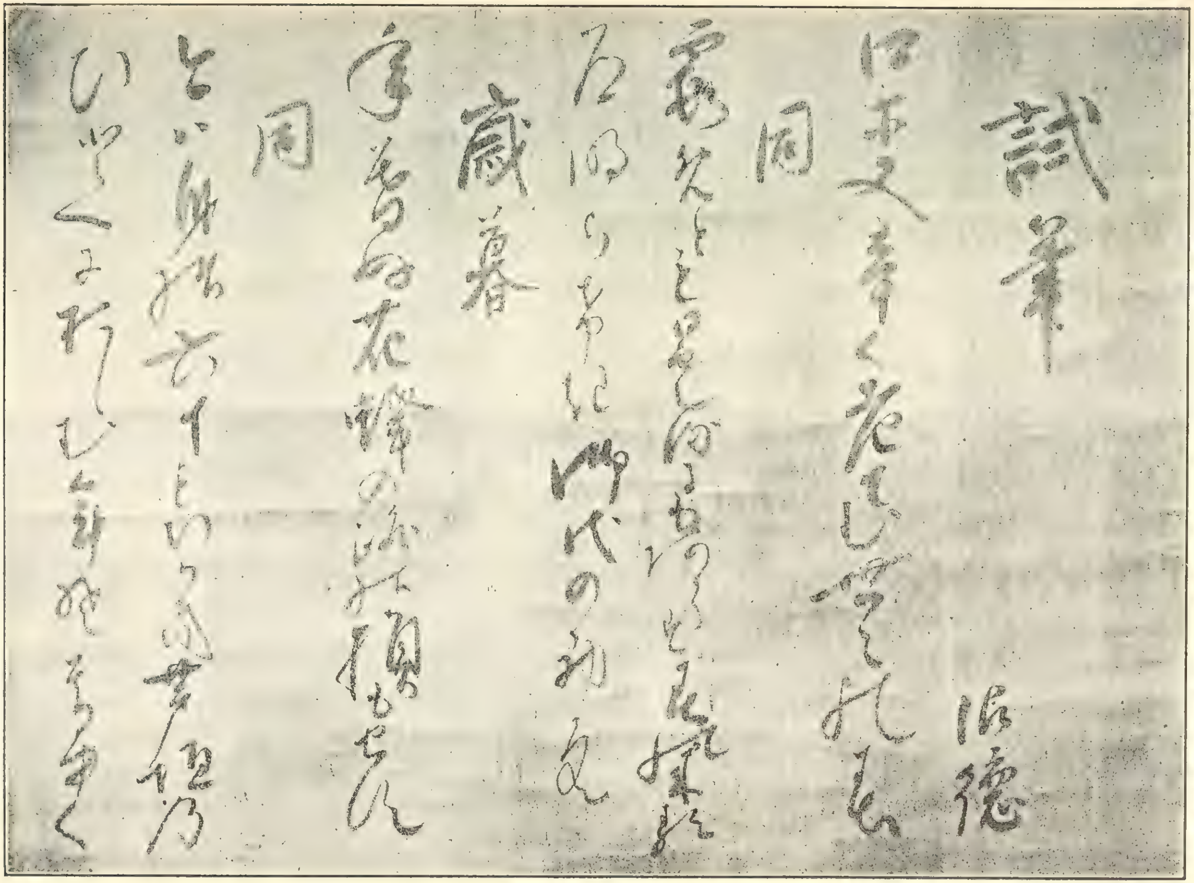
夜半亭淡々筆蹟



池西言水筆蹟



（雪中庵雀志藏）



水間沾徳筆蹟

（雪中庵雀志藏）

解題

言水句集

言水は池西氏、通稱八郎兵衛、名は則好、紫藤軒また風下堂と號す。南都の人なり。始め東都に遊び、檀林の輩と交を通じ、後年京師に登り、室町椹木町に卜居せり。曾て「木枯の果はありけり海の音」の句を吐てより、木枯の言水と異名せらる。晩年自ら洛下堂と稱せり。俳諧は松江維舟に從て學ぶ。或云、北村季吟及高島玄札の門より出づと。享保四年(或云七年)九月廿四日歿、行年七十三。其句集は安永四年刻、俳諧五子稿(蘆陰舍大魯閱、朝陽館主人編)中に收めらる。本篇載する所、即ち是なり。

來山句集

來山は小西氏、蚤歲父母を喪し、姻戚の爲めに育はれて人となる。資性敏活、平素書を讀むことを好む。檀林の俳人前川由平、曾て見の宗族と善し、强て請うて門弟となす、由平之を愛する子の如し。來山齡いまた二十に滿ずして、業を補て詞宗と爲る。十萬堂また湛々翁と號す。初め攝津平野に住し、後攝南今宮に移る。享保元年十月三日歿、行年六十三。後享保十九年門人無名園古道、古梅園長江、金英舍梅七、其遺稿を集めて「今宮草」といふ書を出す。來山の句と文とを載せたり。文は尾崎紅葉氏が擔當の俳

柿喰三吟、琵琶五吟、霜六吟また一種の趣味あり。

深川集

元祿五年の編なり。洒堂の選する所、芭蕉及其門弟の連句を窺ふべし。洒堂は濱田氏、初め珍碩と號す。芭蕉の門人なり。深川集の外、ひさご集の編あり。

有磯海

元祿八年浪化の編なり。元祿二年、芭蕉翁奥羽行脚に、春夏を送り、秋風立つ頃越路にかゝり、浪化が住せる越中井波に辿り着き、「早稻の香や分入みちは有磯海」と吟ぜられしより、此句を集の根さしとなし、穂を拾ひ葉を集めて、やがて此一卷とはなしゝなり。浪化は越中井波瑞泉寺の住僧にて、東本願寺一如大僧正の連枝なり。蕉翁の門弟にて、應々山人とも號せり。元祿十六年十月九日歿、行年三十二(或云、三十三又三十四)。

芭蕉菴小文庫

元祿九年、史邦の編なり。深川長溪寺の禪師は、芭蕉年來の語らひの友なれば、鯉屋杉風かの寺に一の塚をつき、更に宗祇のやどり哉と、書きおかれたる一紙を壺中に納め、此塚のあるじとなし、猶師の恩を慕ふのあまり、落葉かきのけて、かたの如くなる石牌を建て、霜枯の芭蕉を植ゑつ。この手向として史邦、日の影のかなしく寒し發

諸文集に加ふることゝし、此には其句のみを載す。但し今宮草載する所の句甚だ多からず、今俳諧五子稿によりて之を錄せり。

沾德句集

沾德は水間氏、通稱治郎左衛門、名を友兼と云。別に友齋の號あり。內藤露沾の門弟なり。始め福田露言に隨て沾葉と號しき。江戸の人、後一家を爲して四海に鳴る。余花千句、一字幽蘭集等の編あり。享保十一年六月卅日歿、行年六十二。其句集二卷ありと雖も、今世に逸せり。此に俳諧五子稿載する所を以て收む。

薦獅子集

元祿六年の俳書なり。加賀の巴水が編する所に係はる。巴水の傳詳かならず。序文に曰く、予滑稽の板短尺を思ひ立ち、都鄙遠境の佳句を乞盡すあまりに、蕉門の句どもをくゝりて、我に與ふ、寫し得て是を舒卷し、日々に清廉にすゝむ。神慮にかなひけるよと、此名をこも獅子と烏帽子を着せ、桐の箱に房結んで、奉納し侍りぬ云々、以て此書の解題とすべきなり。

卯辰集

元祿四年の刊なり。芭蕉翁の門人楚常の輯めたるものなるが、楚常歿後、立花北枝之を梓に上したるなり。春夏秋冬の四卷に爲れり。蕉門名家の句を見るに適す。卷尾の

容といはんを可とす。然ども俳諧文庫別に、享保を代表するの一卷を出すの計なきを以て、特に此篇に加ふる者なり。淡々句集二卷、延享三年の刻にして、浪花書林分外といふ者の出す所に係はる。

俳諧溫故集

延享五年刻、雷風庵蓮谷の選する所なり。蓮谷は箕輪氏、別に嘉祿齋、玉蘆堂の號あり。其詳傳を知らず。此書古の公案、武家、釋門、遊哥師の發句より、守武宗鑑を經て談林蕉風に及ぶ句を普ねく集めたるものなり。元祿名家の範疇を出ると雖も、其大半は皆元祿盛時の名流なりとす、因て茲に之を收む。

園女句集

園女は勢州松坂の人なり。(或云、勢州山田の祠官渡會氏の女)。備前の人岡西惟中の妻となり、難波に住す。和歌を嗜み、俳諧は杉本美津女(望一門人)に學ぶ。元祿二年の冬より、芭蕉の門に入り、後其角に隨ふ。夫歿して後、江戶に來り、深川に居し眼科を以て生營とす。性風雅にして世事に拘はらず、袖下の紅絹を以て木履の緖に換へ、文庫の蓋を厨の水流しに用ゐしといふ。深川八幡に歌仙櫻とて、園女が三十六本の櫻を植ゑしがありし由、江戶砂子に見えたれど、今は過半枯れ果てたり。園女後年禪に參じ、名を智鏡尼と改む。しかも猶頂上に十根許の髮を遺せり、人其の理由を問はんと

句塚と詠み、其緣によりて、芭蕉翁を始めとし、其門弟等の發句等を集め、こゝに此集なりしなり。史邦は尾張の人、蕉翁の門弟にて、五雨亭とも號せり。

千鳥掛

正德二年の編なり。芭蕉翁曾て尾州鳴海の千代倉知足の亭に宿りし時、「翁おもへらく、此所は名古屋熱田に近く、桑名大垣へもまた遠からず、千鳥掛に行通ひて、殘生を送らんと、」星崎の千鳥の吟も此折のことなり。主人知足この言葉を耳に留めて、其程の風月を記し集めて、千鳥掛と名付けて、世に行はんとしたる折しも、程なく病歿したりしかば、其子蝶羽父の志を次いで、漸く此歲に至り印行したるなり。此書芭蕉門の外、談林派伊丹調の人々の句をも收めたるは面白し。

淡々句集

淡々は松木氏、幼名熊之助、後傳七と謂ふ。大阪の人なり。初め東都に出遊して、其角の門人となり、學ぶこと年あり、後京に出で詞宗と稱る。自ら勃窣翁と號す。菴を祇林の南、菊水の傍に結んで半時菴といふ。呂國、曲淵、渭北、三楊、百川等皆其別號なり。點印青肉を用ゐるもの、此叟權輿たり。享保中點印家譜を以て、門人竿秋に與奪して、京師を退き去て、再び東都に赴き、復た浪華に返る。寶曆十一年十二月二日歿、行年八十八。編著十八種あり。淡々は元祿の俳人と稱するより、寧ろ享保の俳

書を以て、其遺漏を補ふ。句數の極めて少なきは、其傳ふるもの少なきに由るなり。讀者之をとがむることを勿れ。附錄として卷末に其連句二編を擧ぐ。其角の類柑子より抄する所なり。

千代尼句集

千代は加州松任の人、某製陶彌八の妻なり。幼にして俳諧を好む。然れども俳邑師に乏し。會々支考の門人盧元坊、行脚の途松任に來る。千代女其旅宿を叩く、坊方に饌にあり。千代女就て志を述べ教を乞ふ。坊時鳥の題を與ふ。句成るに及び、坊捨てゝ顧みず。又一句を作るに復斯の如し。而して坊既に睡れり。然れども千代去らず。沈吟曉に達す。坊驚き問うて曰、夜明けたりやと。時に千代一句を吐く。「時鳥〳〵とて明にけり」、是に於て坊大に嘆賞して曰く、是なり是なり。以て止まずんば終に其堂に至らんと。廿五歳にして、夫死す。自ら尼となり、素園また妙林と號す。初め盧元に就き、後支考を慕ひ、終に乙由を師とす。千代書を越後の呉俊明に學びて頗る風致あり。百合の圖多し。安永四年九月八日歿、行年七十四(或云、七十五)。千代尼句集世に流布するもの四本あり。(一)は寶暦十三年無外庵の編にて闌更の序あるもの、(二)は天保の頃、柳廼下菊朗といふ者が、寶暦本の句序をたがへて再刻したるもの、(三)は嘉永二年加賀の大夢が、寶暦本を掌中本に刻したるもの、(四)は同じく大夢が編にて、其掌中本と、

欲すれども、威風端然問ふに由なかりしと云。享保十一年四月廿日歿、行年六十三(或云七十四)。其句諸集に多く散見すと雖も、未だ單行を以て世に出でしを聞かず。此篇蕪村の玉藻集を基とし、傍ら諸集を以て余が補ひしものなり。固より遺漏の多きを期す。讀者諒之焉。

智月尼句集

智月は近江大津の産なり。乙州の母にして、共に芭蕉の門人たり。智月曾て芭蕉に向て句を乞ふ、曰く紀念となさんと欲するなりと。芭蕉六十有餘の老嫗に遺句を乞はれて、忸怩たりしと雖も、苦笑して終に之を與ふ。時に元祿七年なり。此歳芭蕉歿す。世に智月豫め蕉翁の死を知るものゝ如しと傳ふ。智月の句、諸書に出づと雖も、園女の如く多からず。亦玉藻集に據り、諸集を以て之を拾遺す。

秋色女句集

秋色は名を阿秋といふ、江戸の人、照降町菓子司大目氏が妻なり。俳諧は其角の門人なり。十三歳の時、上野觀音堂にて井戸端の櫻あぶなし酒の醉の吟を吐て、俳名世に高し。二男あり、共に俳諧を好む、一男林鳥、二男紫萬と號す。享保十年四月十九日歿、行年五十七。秋色の傳は京傳の奇跡考及骨董集に就て見るべし。其句世に傳はるもの甚だ多からず。多く江戸座の俳書に其名を出せり。今玉藻集を基となし、他の俳

元祿名家句集　附女流俳句集

大野洒竹校訂

紫藤軒言水句集

春之部

元日や鐸の音の網代守
歯固やとは云さして水の恩
歯朶の葉の七種は誰を小鹽原
面影や暦左右さす恵方棚
初空やたはこ吹輪の中の比叡
はつ空や有ノ蕭條叢無ノ悪魔
鏡餅たつは鋒をあれ鼠
思ひ出つ赤人にまてかゝみ餅
もれゐやは短山まて四方物
福壽草一寸ものゝ始なり
人も来る雜煮に鰹花かつら
白魚のちりも撰けりと志男
酢に酢貝酒に醴あり睦月

六十餘歳亦化兒

海老の腰も越えぬへらえ小鹽原

きそはしめ

花染の羽袖や去年の寒苦鳥
夫にせよ 妻にせん 我手に安し松の羽子
蓬莱に夜は薄きぬ着せつへし
西行は不二を詠けんか組蓬莱

若干代の句の漏れたるを集めし後篇とを合刻したる安政六年出板のもの、是なり。安政本名は後篇と稱するも實は重複なり。今寶暦本に依る。

花讃女句集

花讃女は古川氏、名は松、横山萬著の妻なり。箕帚の暇、採茶庵萬里に隨て俳諧を學ぶ。文政十三年(即天保元年)七月廿四日歿、年僅かに二十三。其句集を萩陀羅尼といふ、夫萬著の編する所にして、文政十三年冬の刊行なり。卷尾に花讃女追悼の俳句連句等あり、其儘之を載す。

多代女句集

多代女は市原氏、奥州岩瀬郡須賀川の人なり。卅一歳にして夫を喪ふ。舍兄峯馨亭主人、其心やりに俳諧をすゝむ。乃はち雨考といふものを介して、金令舍道彦に隨ひ、遠香市集を編む、後松窓乙二の門に入る。晴霞庵は其別號なり。文政六年江戸に出遊して、諸風子と交を通じ、俳名一時に上る。多代三子あり。長女は他に嫁せしも、緣薄うして家に歸り歿す。二男總司家を續き、阿部侯に仕へて、用人の席に列なり、三百石を領す。三男は元介といふ、邑長撿斷なり。多代女慶應元年八月廿日歿、行年九十。晩年自ら年來の句を集めて晴霞句集といふ。嘉永六年の梓行なり。本編收むる所、即ち是なり。

明治三十一年戊戌秋

大野洒竹

うごくとは土筆の雷のはしめ哉
松風を盲の聞り呼子鳥
東山の臺にて
菜の花や淀も桂も忘れ水
尼寺よ只菜の花の散さくら
凧裸子は見ぬ都かな
ふら糸やひつしさる／＼凧
行女江戸に夫あり初櫻
關白房輔公御前にて即興花
夜さくらにあやしやひとり須磨の蜑
交松と云題
家つとや櫻のあゆむ小松原
東山にて
ゆき／＼て蝶の根ひくし山櫻
題落花浮水
待ておのれ櫻たゝきし水鶏棹
智恩寺に遊ぶ
入相の黒みを染ぬさくら哉
桑門友元の許にて一本のさ
くらに書つけぬ
そめは花さきぬは櫻はねつるべ

みよし野にて
人ゝにおなしさまなし山櫻
仁和寺
腮杖に阿呼さたまる櫻かな
祇園
花そやとり乞食涙人幕つくし
花曇南に黒しかはら竈
はや花に女夫物くふ後堂
東山千もとの花に帷幕引は
へて
行くものは隔夜はかりそ花の陰
下戸花に腫を折へし芳野越
海棠か父夢遊居の古事を思
ひて
花もなし雑煮からして夢の味
籬の床風の花や敷ふすま
日岡峠にて
伊勢参り都見かへせ花曇
頃そ花揚屋の盛壬生念佛
定家あかし四方の執心花かつら
網海老や塵なき詞酒の花

雪の戸や若菜斗の道ひとつ
とし玉に梅折る小野の翁かな
朧月弓手かへしつ梅の花
猫逃て梅うごきけりおぼろ月

八百年の遷廟

梅にほふ時松風拜め若し自然

南禪禪林にて

酢をとへは無味を答へつ梅花

水口にて

此月に折れぬ梅の御館かな
つかみさしとこやら梅の不足顔
釋迦霞けるや生駒は雨曇

湖上眺望

破れ鐘も霞む類ひか鳰の海
霞けり日枝は近江の山ならす
日枝にこそ額の彼は朝霞

卜誰追悼

無我の信濁のはやしの霞かな
御忌の鐘皿割罪や曉雲
御忌まおり都そ鈴珠數併

井手にて

玉川や蛙なかるゝ馬の沓
蓮池に生れてもとの蛙哉
神歸り其座や袖の花鎮
つま猫の胸の火やゆく瀞

大井川邊にて

猫の子やいつく筏の水馴掉
尾をひけは草にとらるゝ雉子哉
美しや麥踏とかはなき雉子
藁屋根に烏見ぬ日そぬれ燕
桑摘のゑく径に落る雲雀哉

二月堂行

から井戸の御法待らん雨蛙
灯心に火さくら近し二月堂
鼠とる涅槃の猫となかめけり

不生不滅の心を

莖立を折てさとるに早し涅槃粥

難波津を出る時鶴翁以仙ー
時軒のともがら我をかへさ
ず

我かへせ蘆に角生ィ魚白く

六角堂月次會巻頭

待郭公
地藏いぬす樗花咲り杜鵑
大原野
操しけり清水は朧ほとゝきす
卯の花も白し夜半の天の川
うの花と闇の明けり產の水
婆且夕て卯花に文をよむ女
賀茂祭二句
老樂もふたつ鏡やあふひ草
葵草かゝれとてしも牛の角
花摘みや先行人は見の母
余花に行嵯峨また寒し一つ酒
玉水や葉螺から啼かんと鳥
爐路下駄の音や梢のかんこ鳥
けいせいにかはりて
身をおもへはいなする蚊屋の螢哉
皷子花にしはし羽なき螢かな
因州鋤麟公伏陽御旅館に召
されて都邊のありさまいか
にとの御意何の品なし
宇治瀬田を串す葉裏の螢哉

牛部屋に晝見る草のほたるかな
君來ませ笹の螢の羽繕ひ
難波何某追悼
引汐の世や夜たゝ啼よし雀
君來すは翌吹蚊屋の不二おろし
晝蚊帳の題
ひる蚊屋は人魚に網のまよひ哉
元祿丙子九年刊行「反故集」に青水
が蚊句二吟有之を補ふ（校訂者）
犬猫は外に臥夜の蚊遣かな
蚊柱の礎となるすて子哉
洋々公御會に
釣そめて蚊やおもしろき月夜哉
冲膾箸の東や淡路島
わすれ草後家のねさめや若牛房
鎌倉にて神垣に橘の咲ける
を
花橘ふとく立けり鼻柱
我戀は夜鰹に逢ふ端居かな
鎌倉網引地藏にて
鰹網地藏や浦のあたま役

梨園
梨の花水こひ鳥や幾めぐり
嵯峨の庵にて
梨の花うるはし尼の念佛まて
山吹や折らて過まく淵の上
汐干には淀まて淺し水車
けふそしる潮干を龍の眼玉
その事よ蜑の嘲干るけふの海
二見浦
なときせぬ岩に烏帽子を春の海
勝鷄の世は若衆に抱れけり
御身拭淨土や北の越後布
江戸を旅立人のかたへ
馬潜圖若らむさきや國みやげ
東御門主一如上人御前にて
即興
明ぬ日の風鈴は蜂のやとり哉
樂と云題にて
膝枕かな物の音の喜春樂

夏

今朝そ袷花なき里の歸雁鳥
待時鳥
人いまた荊には寐す郭公
初聞郭公
夜着きても愛宕は早し杜宇
ほとゝきす馬子の寐てゐる松はやし
志賀山越
花の魂入日や志賀の時鳥
杜宇櫻は柚に伐れけり
山田原
この華表こゆるはてなし蜀魂
忍山時鳥といふ句を望む人あり
ほとゝきす行基の繩や山かつら
牧方にて
流れ去る夜やなら茶舟子規
伏見江聽蜀魂
鯉はねて水靜也ほとゝきす

夏草や魯論かそふる番や川

江島にて

夏草や島に氣を増白蛇散

日枝にて

高根より礫打見む夏の海

枇杷の實塵の行方やしゆろ箒

六月や芭蕉ゆすりて露涼し

大井川名越のりふや纜はらひ

秋

七草に酢みそのかれて秋の花

玉櫛笥親のとりおく踊かな

をとり靈樺に鐘もわらはこそ

人魂は消えて梢の灯籠哉

雷盆木もみていね伊勢のつゝと入

白露のしらけ仕舞や淀の水

追悼

どこへゆくどこへしら露節衣

文持て禿付けり蘭の舟

女郎女うては扇の匂ひかな

神路山

笑へとのおしてや折て女郎花

山薮のそへ竹はなし去なから

稲の花吸はぬを蝶の艶（みやび）かな

高野山

何佛乘せ來る秋の山かつら

嵯峨にて

あさましや蟲鳴中に尼ひとり

後から物めさせけり雁の聲

初月の弓に甦なし雁の聲

鳴子引二日の月もちから哉

須磨の秋三日月からは來ぬ人そ

淀にて

名月や汲ぬも寒き水車

おもへたゝけふを桂の太郎月

月を是にひと雲非なりけふの山

廣澤や禿も底に月の聲

口に手をあてゝ心の月見かな

一思案扨も離なし秋の月

むつかしや粽とくても桑門
蘆田鶴の香をかぎ出す粽かな
子に世話を狂人ともいへ笹粽
朝湯より傾城匂ふあやめ哉
とからしにあらぬはけふの幟哉
藥玉や灯の花のゆらくまて
朝酒やまた見起ぬ杜若
不二に目はやらても寒し五月雨
業になけき麥にむさほる浮世哉
在郷法師麥の秋風と讀りけり

鳥羽にて

見てゆくや早苗のみとり里の藏
早乙女の見に行宮の鏡かな
田植女能因後の歌也けり
夏の夜は山鳥の首に明にけり
あまつさへ經木踏行く鴨川かな
先達や今朝の御山を氷室守
六月の蜜柑見せけり氷室守
守る人と逢ふ氷のつかひかな

南京藥師寺の繪馬に書

凉風や眠漕く船のやくし寺
引袖も凉し太皷の四かしら
穴狐も子持てり松の下すゝみ

河原凉

夕凉み姤しや湖のあり所
花瓜や絃をかしたる琵琶の上
とかせはや礫ひとつに玉卷葛
馬子の袖にひる顏かゝる假寐哉
蠅打や己かむくいをなめし革

關宿昌貢年經て此京に席も
よふすにかく云遣す

東嶺に又契る世や水の蟬
父と呼ひ母はまたあり遊の花
白雨に割ぬ葉もあり志名の遠
夏菊は陶淵明かひや也けり

川狩

成長て左手にかさせり枕蟵

打出の濱に遊ぶ

月は山美犬こそ眠れ篁

帋屋川

東の立志都の掉歌おの〳〵
口すさふ中に

冬

神無月火ともす禰宜の直キ哉

吉田殿へ暮をやりけり神無月

初時雨舌打海膽の味もこそ

傘提てしらぬ翁そ村時雨

また死ぬ氣に伽羅さかす時雨哉

團栗は小春に落る端山哉

卅餘年一昔都外の閑人を尋
ぬ所は壬生領又閑子か許

鳰眠る冬木なからや枯檸

南京研心比丘を訪ふ

爐の炭の瘦もとはゝや夜半の霜

爐の眠り涙こそきかぬ須磨明石

待戀

來ぬ人を爐にけふらせつ椎のから

羇路冬

火燧出て古郷戀し星月夜

黒塚やつほぬ女のわく火鉢

碁は妾に崩されて開千鳥哉

火の影や人にて凄き網代守

風のはては有けり海の音

十夜鉦明日の納豆もたゝきけり

はつ雪や菅笠とつて櫻川

枯野哉雪くれに寐てみん不二の味

冬椿

されはこそ茶入しら涙玉椿

山茶花に囮鳴日の夕かな

見消ぬ奥は山茶花崩壁

內宮山本太夫にて

かや萱や雀もこふをちから草

雲路ふみ水仙消つ夜の鰒

霜白し鳥のかしら歸り花

白玉も紙燭よせけり冬牡丹

金澤にて

繪にたにも筆捨松や鰒嫌

鉢たゝきさらに都の聲音なし

空明の姿ふたつや石菜の花

早梅

三符に添ぬ男なりけりけふの月
更〳〵て鞠垣すゝしけふの月
うかれ出て扇しめれり星月夜
夙に起て妻に芭蕉を縫けせけり
神樂歌書ん芭蕉の廣葉哉

自撰五十歌仙に

山城に見くるし野あり我木香
朝霧やさても富士呑む長二郎
賤の戸や織機にしほむ花木槿

享保の元號としのはつ秋打出の濱に遊びしも御代かはりのかぎりなき御賀富貴草によそへて乍恐

松風の賦をさゝ波や早稲遲稲
目あかしや生るを放つ神の庭
芋の葉の露しはし銀持賤屋哉
さひしさも二つの鴫に笑ひけり
石打て立さる鴫に哀なし
豆からや松にのこして里の月
鼻紙の間の紅葉や君かため
犬吼て家に入なし蔦紅葉

日枝高く吹かへさるゝ野分かな
曉の雪顯富士の暴風哉
乙吹や秋のなてしこ會下の笠
行我も匂へ花袖を來るひとり

那須野川にて

石燒や落鮎則那須野川
目にかれし里は柿の木末にたつ吹矢

衣川にて

つとにして鮭のほるなり袖みやけ
咳氣聲夜着やもぬけの秋の蟬

西鶴十七回訪虎石

秋の蚊の吸つく石や一むかし
かしまし〳〵此須磨の秋

出羽なる象潟に旅寐し

夜や秋の海士の痩子や啼鷗
象潟や稲木も網の動杭

釋氏の許にて

玉むしは掃捨る師の掟かな

秋の夕暮

法師にも逢はす鳩吹く男かな
梓聞く神子に惚けり秋の暮

十萬堂來山句集

春

元日やされば野中の水の音

有様は命ちゞまる今朝の春

舊臘三日の五更夢想あらたなり幸の事にして翁の旦は

一句に祝す

蓬萊や升の中から山が出る

今宮に幽居せしはしめ

花の春命に枝や東うけ

蓬萊に熨斗の高橋かけまくも

十三絃潤年に衣して

嶺の松調子揃うて今年より

おもたくと雪つけて來い若菜賣

三昧線も小哥ものらす梅の花

梅の花名によひよくて匂ひかな

小坊主に腋石さかせて梅の花

座論梅

一時に散る身と梅の座論かな

鶯に問めや梅の假名遣ひ

ほのかなる鶯聞つ羅生門

蛙〳〵土のけて見ん歌の種

何の役にたゝてつらるゝ蛙哉

梵遊居詞書略

玉椿柱も石になりかゝり

古梅園編集跋文略

汲溜ゝ玉に聲あり花椿

住吉にて

若みとり神の濱松ひねたれと

今更に土のくろさや朧月

是や此日くれにつゝく朧月

行月や朧は雲にしみこます

悼晋子詞書略

折られけりいらちて梅の德は何
　菅太臣社奉納
桂折る左も可也冬の梅
　雄島にて
袖ぬるゝ海士の子寒し涎かけ
大神樂親に添寐の夢もなし
　湯婆
姨捨んたんぽに闕せ星月夜
瓢簞より利休か術を獸炭
よく富士に紙子ぬれてもひとつ橋
もち花や母の心の闇の梅
餅花や都しめたる家さくら
餅花や迦葉の笑しをさな貌
槃特が愚痴も德ありとし忘
羽衣や松に忘るゝ年の皺
年もけふ我儘に暮つ白是界
白晝に雉子拾ひけりとしの暮
　背柏は露をやりて事たりし
　が四十年以前東にありしと
　しのくれ
質に置ん露さへ氷る年の暮



黒い蝶あれても花にめつるかな
はりまより信濃へ所替して
行るゝ仕官のもとへ
ちる花や雪の稽古を馬の上
かいま見る山吹ぬれたむ菜種かな
野の花や菜種か果は山の際
山のへや風より下を行燕
海士の子の神子町に行汐干哉
桃日
桃の花けふより水をさかな哉
むらさきの塵編干て小判かな
高砂の鹽竈を見て
いつれとも雨の鹽かま雨の藤
葛井寺
むすひ逢や花のかつらきふちゐ寺
愛子をうしなうて
春の夢氣の違はぬか恨めしい
住吉奉納
浦の松帆に撫られて幾春歟

夏

病中の吟
疊なから見やつた斗夏衣
袷出せ花さへ芥子のひとへなる
時鳥ぬれてかたびらひとつなり
郭公裸て起て橋ふたつ
きつね川にて
宗鑑か託宣かけよほとゝきす
床縁は枕にひくしほとゝきす
血を吐て思ふあたりの時鳥
病中吟二句
はつかしや醫師待身に郭公
木も草も八日めきたる若葉哉
きら〳〵と若葉や花のおもわすれ
若楓一ふりふつて日か照て
短夜を二階へたしに上りけり
ちろ〳〵と見れはよその天
井なり
みしか夜や高い寐賃を出した事

霞けり消けり富士の片相手
鳴音の柳に似たる嵐かな
雨方に髭が有なり猫の戀
むしつては〳〵捨春の草
春の野やなかきかつらの褶につく
春風や堤こしなる牛の聲
住吉にて
はる風にしら鷺白し松の中
やはらかな水に角豕く田螺かな
春雨やもらぬ家にもうとん桶
春雨や降ともしらす牛の目に
春雨や巨燵の外へ足を出し
飯蛸の哀やあれてはてるげな
精進すなといはれし親の彼岸哉
寐姿を佛の恥やけふまても
長柄にて
陽炎にむらなしとこか橋所
出すとよいとかけは人を驚かす
土筆たけたは誰も手に合はす
香をもつて堀おこさるゝ芽獨活哉
世の事はいさ耳なしの山さくら

竹田西行寺
とし〳〵に名に枝の出る櫻かな
木ひとつに花と櫻の咲にけり
西吟追悼
今までは所の名なりさくら塚
東山にて
九重も奈良茶かはやる櫻咲
見かへれは寒し日暮の山櫻
花ちりてよい古ひなり一心寺
花咲て死ともなひか病かな
若隱居見限り切た花とはん
無二又無三
花いけてそこな丸寐や刀鍛冶
小座頭や花見ぬまてもよしの山
題道成寺
花の闇わる銀もつて追かける
其角七回忌
花の名よ彫寸刻ますいつまても
鳥啼て鐘は花よりとつとうへ
女人形記文略
折事も高根の花や見たはかり

今朝よりは我〱顔の荻薄
星の夜の寐られぬ罪や蚊かはいる
　胸痛しきりなれは何を待身
　とおかしなから
魂まつり身は養生にこもりけり
蕣に置とは露のつよみ哉
朝顔や虫に喰るゝ花の運
毎日の花蕣のこりぬかな
　天地平等人壽長短
秋風やことし生れの子にも吹
秋風や男世帯になく千鳥
　今宮に卜居して
今宮は蟲ところなり聾なり
行水も日まぜになりぬ蟲の聲
寐あまつて又見る月や老の勝
酒硯去年にもこりすけふの月
松の月枝にかけたりはつしたり
名月や草とも見えす大根畠
熊野から南はとこそけふの月
こよひの月小笹へぬけた人ならん
　今宮草庵記文畧

名月や耳の山風目の曇り
家〱に月の中言雨の音
馬方に請なし扨もけふの月
雨風の中に立けり女郎花
　ひたすら萩にめてゝ庭にう
　つし植たるを訪はんとて
萩さかは鹿のかはりに寐に行ん
鉢に植てかひなき萩のそよき哉
夕顔や我葉を敷てころひ寐を
春日野に釋迦の案山子は笑止也
唐からし茄子にあけも奪はれず
　重陽
栗の日や槌も紅葉ものりこえす
けふの菊袴きて寐る狐かな
　詞書略
香箸に菊の蟲とる緣てこそ
添竹もないに健氣に此菊の
　十日菊
菊はかへてほし女郎そめてたけれ
花ならは花野の花にわけかあろ
雨戸越す秋のすかたや灯の狂ひ

眠る蝶それともに散る牡丹哉
　牡丹の記文略
ものいはゝ人は消ぬへし白牡丹
座所は花の指圖やぼたん講
きく中にむらさき斗杜若
　田家
古沓やくたいて入るゝ瓜作り
ひとり居や蚊屋をきて寐る捨心
蚊ふすへの中に聲あり念佛講
　其物ほして其ものをそこなふ
竹の子を竹になれとて竹の垣
　端午二句
幟出す南はせかす和田恩地
快やけふの浴に蚊の迯る
早乙女やよこれぬ物は歌はかり
　盃の記文略
四ロの月夕立雲の晴間より
涼しさに四橋を四つわたりけり
　乾氏餞別
道〳〵の涼しさ告よ土用東風

　立志餞別
涼しさや坊主ふたりのみたれ髪
　納涼舟
是ほとの三昧線暑し膝の上
水踏て草て足ふく夏野哉
　無音せし人の許へ忘れ草を送るとて花の料に云なして
せめて扨人の氣になん忘れ草
萱草の花とはかりやわすれ草
色に香に江戸せぬ武士や花茨
　由平追悼
有の無のといふ間も何も夏の月
東雲や西は月入夏の海

秋

來る秋や住吉浦の足の跡
秋たつやはしかみ漬もすみきつて
手なし坊又もや秋のたつか弓

中〱に火燵か明て寒かな

貧家にうたゝ寐て

古火燵また足はさむ別れ哉

我寐たを首上て見る寒さ哉

打やむに間のなき冬のきぬた哉

鉢たゝき顔の雫を呑みにけり

二いろに氷らぬ袖のなみたかな

眼はかりは達摩に負し冬籠

酔て非筒屋の高樓に登る

楊貴妃や踏皮まてぬかすたいこ持

誓文身の事にてはいはぬそ

ひとり寐や幾度夜着の襟をかむ

松吹て横につらゝの山邊哉

手も出さす物荷ひ行冬野哉

埋火やしらぬ命に息かけん

細工繪を親に見せたる火桶かな

妓婦に寄す

鰤の腹廣し文箱の入れ所

年内立春

日を八日馴染むほとあり今朝の春

顔にむかゐ時もあるらむ節季い

僧ひとり師走の野道梅の花

大坂も大坂まん中に住て

お奉行の名さへ覺えす年暮れぬ

角もたぬ石もころ〱としの波

としの瀬や漕す櫓せす行ほとに

風雅はおのつから業となれ

は問にこたへもこそすれ

としの急き書とむなしや只の狀

夢にさへ落るやうなる師走かな

揉にうむ歌舞伎の城や大卅日



初夜と四つあらそふ秋に成にけり
行方なき雲に組して野分かな
若葉の頃跋文畧
闇照るや紅葉にかこむ箱根山
神明奉納
早稲晩稲皆こちからのしむけ也
過し頃三千風か行脚をうら
やましくはなむけして身の
ほとをいふとて
幾秋かなくさめかねつ姥ひとり

冬

稲津氏剃髪賀詞書畧
旅櫛笥あけてゑむらん神無月
あさましやまた十月の暦賣
雪まてのなしみを竹の時雨哉
千網に入日染つゝ時雨つゝ
宿老に夜番の供や時雨降

六字詰の念佛晝夜怠らず十
二時の鐘聲遠近の耳をあら
ふ
時雨やしくれの中の一心寺
梅七のもとへ
喃は時雨に香あり菊屋酒
初雪ことしも待かねて
花とよむ雪につほみはない事か
雪を汲むて垢とは船の詞かな
憶自他
酒買にあの子傘かせ雪の暮
李天集文畧
是はとは朝戸〳〵に雪の聲
余の物にいたまぬ松を雪の勝
一切衆生悉有佛性
盗人の錢おく雪のやとり哉
達磨の讃
枯木にも着あり木〳〵の歸り花
何の木と問ふまてもなし歸り花
若き妻におくれし人のもと
へ

うくひすや朝日綱張壁の穴

沙原霞

海はすこし鮫は引つる霞哉
狂ひても霞を出ぬ野馬かな

如渡得船

御忘やよふ靈岸樣と渡し守

傳奏歸路

傳奏の雲井にかへる鶴見哉

妻是吾子の心を

似我蜂にならぬ子もなき御法かな

或人の妻よそより猫の子三
つかりて見侍りしにひとつ
二つの間にひとつ死にける
にふたつぬし〻歸すとて
心よりうきめをみつの猫の子の
歎さへたらてかへす悲しさ
と讀てつかはしけると聞て

猫の子も妻こはぬ間そ人の愛

君臣の鹽梅そしれる人は誰
子葉　春帆　竹平なり

なきあともなを鹽梅の芽獨活哉

神主の和布にそへものや貝杓子
霜解や都に出し下駄の跡
くま笹のへり取御座や別れ霜

山家

北國の貴家見する雪消哉
初午や妻の影ふむ素湯入
はつ午やあたりの乳母は夕月夜
地諷のもえしさりなる薪かな
寐返れは雄島なりけり春の月
手とゝかぬ琴にもてなす雛かな
帶ほとに川も流れて汐干かな
路〳〵は東ねても散る杉菜かな

君臣有義

飯蛸のをのれ足くふ河内越

和歌浦にて

貧乏な烏賊の黑みにかたおなみ

隅田川に遊ひて

鮎時に貞室おもへ都とり
菜を喰ひに來むといひつゝ初櫻
人の氣もかく窺はし初さくら

伊勢にて

合歡堂沾德句集

春

元日の晝や留木の立わたり
元日も旅人を見る大路かな
嬉しさに寐かねて宵の年も明ぬ
引付は是藥なり醫師の袴
今朝見れは發句にてはなし春の輿
家にある蓬萊作り覺えけり
庵の春に帋子借けり都人

通町に住ける比

去年やきのふつとめて休む車牛
母もちて筆耕すそ田のからす
七種は枯葉にしめる草履かな
ほたはらや濱松か枝の手向艸
足跡を野中の梅のあるし哉

何事も梅の跡なる枯木かな
霜の後の梅知る人よ白髮迄

平太

梅の花及早き顔に折れけり

性善の心を

折て後貰ふ聲あり垣の梅

長幼有序

梅折れは鼻をさし出す弟かな
紅梅やかの銀閣寺やぶれ垣

大井川

大井川馬もあやをる柳哉
垣朽てみとりにはぬる柳かな

徂徠子京へゆく時歸る日を
待て

死るよりましと待日や玉柳
遠乘や鞭は柳の有次第
鶯や誰呼たかる柴の門
鶯や附木ほに出る藪の内

鎌倉建長寺宗長法師の碑を
よみて
分て此三月まれり石の銘
雉子も世に追立らるゝ廣野哉
百姓の茶の濃いうちや桃の花
父子有親
おもへさそ打老見丸の桃の露
富士
宿〳〵は富士の家中か桃の花
三月三日
蠅も來てけふあたゝけし瓶の桃

夏

是非までと月やいつはる郭公
はた〳〵は草に細しほとゝきす
山畑のうねりてそ行ほとゝきす
讀書有感
君が名のくぼみへ水も時鳥

淀のわたりのまた夜深きに
とりまはす山や籏て出す杜宇
年禮の負ある軍や子規
下駄はいてあなさら〳〵や杜鵑
高ひくも若葉揃へて並木哉
川筋や卯の花あれは妻子持
麥一穗推參申す牡丹哉
午鷄
青麥のおくそ晝なる鷄の聲
冬は此麥まき殘す屋陰かな
さすか又麥の穗低しひとつはし
よき瓜の後にくはぬそ夏の味
程〳〵に競ひて茂る木末かな
螢見
待程に螢よりけに燒茄子
名所螢
牧方に箸の見らるゝほたる哉
重五
今日よりは眞菰に臥よ青疊
我門やあやめ一間香一間
あやめふく御射山なれやあやつり場

松さくら手に手をくむや五十鈴川

　其角追悼

世の中をされ書さつとのさくら哉

ます影もなつかし花の連歌堂

　吉野にて

そら腹は花に肌ぬく山路かな

鷲の尾に請状はなし花の友

　市中の庭の花に遊ひて

日こそあれ花に家路は五町程

たはらなる山や花見の足たまり

　題夜櫻

ついとけて寐るとの鐘や花の陰

　矢橋歸帆

矢橋のる人からでなし櫻かり

　濟海寺八景のうち驛亭

　春色

むまやろや泥も嫌はて落る花

　舊友の塚にて

つれたちて道はくれしや野邊の花

　同し道にといひかはせし人
に

追付てぬけかけ恨む花見かな

　火醋芹命を

駒犬も花もぬし知るいがき哉

　友の別墅に一夜語りて

海棠の雨見よとてやとまりかけ

　俳の風躰つたなき道にあそ
ふ人をかなしむ

異草もつまきり捨し菊の苗

　岩城に住侍りし比友に訪は
れて

君火をたけ我菜をつむも藪の中

春の野や木瓜は蓮の敷合せ

　詞書畧

伊勢て貝京てひろはゝ袖に風

　獻水

物ゆかし魚の見みる春の水

舟橋を春日そゆくむ水のあや

一尺の蕨の外や松かしは

春の疵おもへ旅たつ友の數

　別芭蕉

松志まや名にとめられぬ春の旅

遊濟海寺
あるものか鷗といふ舟の人の汗
牧牛
總角もおくし食之夏の草
江戸に居て夏のやどりや隅田川
市廓にはさまれゐてたま〳〵淺艸川に遊ふとて
釜木
米まきと見つゝ舟出や夏の川
猶子母にはなれし頃
柄をなめて尋る母や蚊り團
いやしさの見えて身安き木平哉
青砥左か百日紅や水の影
岩城に住侍りし頃江戸に來りて
夏山を出てあかるしもとの江戸
祇園會
月鉾や松原西へいるさ山
朋友有信
有るなしの世話やいさむる雲の峰
押はなす氣を舟頭や御萩川

秋

五百機の窓に草鞋や二ほし
七夕やちからも入す寐る斗
七夕にねかひやは寐て莊子よむ
玉芍
鼻紙で舟作る身や星の糸
妓を送る
をとり子の跡しら浪や迎ひ船
朝貌や筆句ひなき松花堂
栗津晴嵐
低きかたへ水のあはつや初あらし
麥ふかき徑横きる鶉かな
洛外
赤繩の尾となる町に鶉哉
かけろひてさはしさむけき紵哉
有明や二斗とる稚の梢より
初雁や思ふ田へ只一文字
つゐの世は土山樅を相撲とり

はゝ木々の夜習寒き蠅かな
大蠅山を出ぬ蚊もはねくべし
門前兒
潜たる龍はうらにか呑蠅
竹植て此後花は目數寄哉
柚の花よ仇名あた醉むかし誰
五月雨や隣にわかる水の經
啼立る蟬にはしるかくたり坂
此笈の椽の下行淸水かな
碑の銘の淸水を呼や石木ッ端
笈と我二人影見る淸水哉
草を這ふ淸水に立や笈の足
瀧につく子もさあ歸れ合歡の花
誰かすく用ひられぬそ合歡の花
木根川に遊ひし時の家なる
ねむをもらひて轢居に移し
侍るとて
市を出てねるを我名そ合歡花
足跡の蜘手にあるやかきつはた
其角母を悼
眉ひらく爲に手向て杜若

人影を呑む魚もあり池の蓮
誰か紅ゐ蓮丈低き野路の池
蓮の香や田は仕付たる水の後
石竹の蠅は四町の馬や哉
逢隱名戀
買捨と見し夕顏も行方哉
名所魚
鰺のすむすさと割むや紫蘇と蓼
虫干
書を干て龍と添寐の軒哉
水と羽の合をゆく鵜や夕すゝみ
勢田夕照
切箔の四條へつゝく凉かな
瞽女や草津に出ばる橋すゝみ
蚊の聲のしらむにさむし村の雨
熟桃
九牛か毛桃の色や稲荷前
見渡しは百性地とやけしの花
布に寐て餘りをさかふ葛の花
三井晩鐘
札燒に憎い物何くれの鐘

遠平と水栗のこす夜明かな

常陸國日高寺にて

景によりとまるや秋の日高寺

冬

冬たつや御所柿の手にひゆる程

泥付かぬ落葉なりけり袖の上

落葉見し人やおちはの底の人

思ひなし木の葉ちる夜や星の數

垣をへたてゝ念佛の聲を聞
て

初夜申す心や木葉髮や霜

はつ雪や鑓の稽古に雛子眠る

二筋と今朝は又みん道の雪

旅行紙

鼻かんて名所な捨そ雪の暮

昔いつ武士六七騎門の雪

鑓になり長刀になり杉の雪

幸の塀にもたるゝ竹の雪

田にそひて益なき程を氷哉

氷花子へおの／＼餞別に驛
路を題とす

品川や武家の汀の氷水

若松の椀荷見初る枯野哉

庵をもとめし人に

生壁に梅そふ冬の日向かな

鶺鴒の燒火に迯る朝戸哉

のかれなは斯とかたちす投頭巾

片眼山嘶や炭のもゆるまて

山茶花に糞する鳥も旅寐かな

大澤侍從基明三十一首の歌
勸進ありしに烏丸亞相公の
狩場の風といへる題をたま
はり侍て時過るほとに元祿
四のとし春と冬とに雨君か
くれ玉ひけれはむなしき短
冊を見侍りて

世をふたり狩場の風を書捨けり

冬あかし家にそふ木と土手の草

北殿よ月に問ふへき渡世なし
二階から下りたつ田子や雑魚の月
誰提し網の車そ橋の月

風虎翁七回忌
寄月釋教

水の月汲てひろはん梨葡萄
いとふとは是見る事か寺の月

病後對月

月ゆゑに瘦笑はるゝ明日も話

石山秋月

繪馬も其御影果しや山の月
更やうを見定る夜や今日の月
月今宵寐にくき暑さ過し來ぬ
見て居るか宿かへ好の松の月
行月や淡路あまへる明石かた
灘船に堪忍おほき月見かな
海に濡てかはくや月のひかし山
月の名に片枝さしたり衛矛

忍戀

うつ衣忍ふ夜比の氣か減そ

篁幽公の歸城を送り奉る

綺羅ほめて又寐るもあり萩の露
そかきくの隣に覗く朝出かな
對の屋に旅人は寐て菊と文
今朝見れと引合菊や蓼の節
宿入のよしや葭垣今朝の菊
かんたんの又寐は園に菊作り

重九

濱菊や御薬の上に横たふし
花見よと下葉かなしや菊の様
温泉歸りの松露配るや後の月
柿に六つ藝つくしあり十三夜
今宵かな梨子の帶とく男部屋
もとあらは小刀もあり玉芙蓉
隨臣の目に隣ありつるし柿
源兵衞の勢にかはるものや榎茸
さゆり葉にもし秋風や晝さかり

畫讚馬上達磨

風の秋履は金屋の河原にも
稻一穗門田に涼む目當哉
稻妻も目付所は田面かな
くゝり目をつゝ夜長き枕哉

鷹獅子集

高砂住の江の松を古今萬葉のためしに引れしより塵うせすして連歌につたふ然るに此松は枝葉百開にあまりて諸木にことなる氣色尤俳諧なるべし

蓬萊の松にたてはや曾根の松　江戸 其角
朝戸出や鍬にかけ行小田の注連　仝 遠水
立寄て我成(セイ)ひくし梅の花　仝 露沾
柴部屋を北の隣に梅のはな　仝 曾艮
昆若にけふは賣勝若菜哉　桑門 芭蕉
春駒を優にのせたる堤哉　江戸 沾德
紅のひかりや桃の二百年　仝 桃鄰
一本の中に品あり初櫻　仝 岩翁
青葉して又題に成櫻かな　仝 尺草
咲花も亂より後の古ひ哉　大坂 酒堂

花守や白きかしらをつき合せ　京 去來
空腹に須磨を呑こむ鹽干かな　仝 史邦
時石や藏の戸前の玉椿　大坂 之道
夏秡目の行方や淡路しま　江戸 嵐雪
地嵐の末も波こす田麥哉　仝 横几
なつかしき津守の家の若葉哉　牧童
雲の峯あまの羽衣干て見せ　大津 乙州
一しきり篠の葉曲るあつき哉　仝 木節
御秡や砂地をはしる足のうら　僧 丈草
熨斗(ノシ)むくや磯菜涼しき島かまへ　ぜゞ 正秀
其鷲のかゝむはいつこ雲の峯　青楊
白雨に降たてられし小鳥かな　賢廣
御隨入弓矢そとつてそ紅葉狩　闘來
此今宵誰押のこふ月のかほ　雲口
月今宵琵琶にのりたる光哉　ノ松
月見るに黑き顏なし須磨の海士　三十六
芋の葉のまねきあらして月夜哉　南市

さえ〳〵て鶴の足干る嵐かな

夫婦有別

賓たのむ石に水筋はなれ鴛

煤はきの疊もたすな梅の花

年くれぬ春を相手に叉ねがひ



初花や何習へとも十八九　小松 本遺坊

春都（ハルイチ）は幾たひ花に誘はれし　宗壽

ねかはくは花のもとにては
る死なんと讀しを

西行は死まて花のこゝろ哉　山中 自笑

閻魔堂にて

心から鬼とも見えす壬生の花　三十六

わかれに

馬士を見てうす着をするな春の空　江戸 文桂

花に飽こゝろもなしや夕月夜　越後長岡 吟薌

海鳴もいつしか絶ておほろ月　青楊

かりの情も別れとあれはか
なしくて

盃の花とり捨て力なし　江戸南村氏少人 弁子

星崎の煙は晝の朧かな　尺草

朧夜や菜の花わくる人の顔　南甫

菜の花もあし代ならん朧月　周來

病中を訪人のありし夜

夢の間に鷄鳴おほろ月夜哉　幽明

こほれては蛙のにらむ雫かな　放生津 池月

宇治川の水に臂はる蛙哉　山中 桃妖

山吹や鮎新しき板折敷　京 嶋枝

根芹摘人の袖ふむ蛙かな　山中女 はな

頓て産腹やかゝえて摘若菜　小松 夕市

山賤の小晝喰ふ場や花すみれ　最上 羅陽

人に誘はれものまふてする
時

たんほゝの咲拍子にやかしま立　みの 巴水

雛を見に奥迄はひる男哉　みの 此筋

重箱や一輪添し桃の花　小松 千川

片〳〵は雛さゝへ形の哀れさよ　孤衾

羽黒の呂丸はいまた若うし
て風雅の友をしたひ初て濟
にのほり程なくなき身とな
りしこそ猶あはれなれ

國の子はわろさいふらん手向花　智月

旅する身の行方おもひやら
るゝそかし

旅人の葬の供にや行胡蝶　乙州

鰯雲鯛も鮑も籠りけり　北枝
稻妻に星やましろく淡路潟　呂谷
御火燒のもり物とるな村烏　大津尼 智月
風寒き流れの音や手水鉢　京 素牛
輪(ソリ)橋やふまて目出度今朝の雪　友琴
茶の花の梅そゝのかす匂ひ哉　冬雅
住吉の隅に雀の冬籠り　句空
御神樂や漁(スナドリ)父笛の吹渡し　宇路
御神樂や心〳〵に聞てとれ　巴水

魚荷は大道を過鴉は榎にとまる神の鳥居にとよみけん予滑稽の板短尺をおもひ立都鄙遠境の佳句乞盡すあまりに蕉門の句ともをくゝりて我にあたふうつし得て是を舒卷し日々に清廉にすゝむ神慮にかなひけるよと此名をこも獅子と烏帽子を着せ桐の箱に房結んて奉納し侍りぬ于時元祿酉冬日加陽巴水

生

春もやゝけしきとゝのふ月と梅　芭蕉
一莚ちるや日かけの赤椿　去來
種池の底澄わたる寒みかな　小松 塵(せし)生
陽炎のさたかに藍の田つら哉　曲翠
陽炎や庇ふきたる杉の皮　素牛
宇治川を鳴鶯や芦つたひ　酒堂
鶯や藪のかまへの爾(クツ)屋門　正秀
しら魚の白き匂ひや杉の箸　之道
春雨や湯殿にたまるすまし物　木節
毒ための其名もゆかし春の草　几兆
麓迄米貰はや花の雲　丈草
日にほして花をまたはや煮山桝　句空

ちりて後まこと顔なりけしの花　何處
闕の戶や突棒さすまた芥子の花　巴水
紫の欲目絕けりかきつはた　沾德
鬼百合や人を便りに咲氣色　李泰

東武に志ありて白川の橋はら〳〵鷄に踏初與市か蹴上の水にわらちをしめ直すもあとゆかしく

鈴掛をかけぬはかりの暑哉　史邦

芭蕉の舊庵木曾塚にて史邦に別るゝの二首

宵寐して凉しく步め朝のうち　智月
凉風になまり行らん馬の鈴　木節
河中の蚊に喰れたる夜ぶり哉　槃月
茶あぶりの水呑に出る暑かな　放生津 正秀
小腕の國名しらるゝ暑かな　池水
夢の中の芝居破るな時鳥　巴水
目をあけは月よふさげば時鳥　乙州
蚊の鳴もかりに此世を市屋形　巴水
くつろきて月影見せよ菱の花　亡人 何處
若楓茶もみ出す夕日かな　雨邑

柿の葉も役にたちけり鮓の蓋　冬雅
手のひらを返す卯月の雲雀哉　大坂 車庸
になひ棒ころはす音や花かつみ　邑史
夏山やほのかに寒し切通し　沾德
蓮のかやことに瘦たる身は凉し　木節
鷄に居替る陰や藪すゝみ　酒堂
小佛をあつめて凉し浮御堂　乙州
鞍かけに暑さそうつる夕凉み　山中 松風
暖簾にもたれてころふ凉かな　三枝

路通西國旅寐も去年今年と立歸り文來りしを發句して返す

其まゝにあれよ凉しき骨海月　智月

乙州越へ下るとて立寄しを留て

凉風の綱にも入を堅田鮒　堅田竹內 成秀
藥もて白根の麓幾淸水　同所僧 絡睡
二度生の齒も落果て淸水哉　木節
道つれの多くなりけり川淸水　石動 吟雪
ぬか星や淸水流るゝ西の岡　乙州

白壁にまようてたゝぬ胡蝶哉　昌（せい）房
蝶〳〵や鬼の顔とて憚からず　小春
花の蝶そろ蹙か顔に來て留れ　魚素
あく〳〵なや奴の圖のつく〳〵し　木節
探幽かゝける神農の圖に
あえ物や儒者も佛者も春の草　巴水
年〳〵や猿に着せたる猿の面　芭蕉
漣（サヽナミ）やいつれのうねを初手水　吟和
桃花坊に春をむかへて
赤人の名は付れたり初霞　史邦
七種や寺の男の數にらみ　支（僧）考
春雨や簑につゝまん雉子の聲　酒堂
洛外や觀音堂と初さくら　孤衾
山櫻ちるや小川の水車　智月
忠度の繪を見て
鎧にもちるは覺ゆる櫻哉　路通
いにし年奈良の大佛開眼い
とたふとくありかたく思ひ
奉りて
春日野に智落しけり人の角　句空
肥田子の間より出ぬ芋の蔓　ノ松

門口はつゝし計や石地藏　吟和
黄檗に諸羅漢堂をめくりて
土筆鼻の穴へも入られず　魚素
赤土の中に堀ぬ藤のはな　羅陽
おそろしの浦にやさしき和布哉　はな
とも〳〵に人のすゝきや鷄合せ　孤衾
猫の尾の何うれしいそ春の夢　賢明
何をして今に歸らぬ小屋の鴨　之道
舟のほとをしれといへる七
文字を思へは
家鴨（アヒル）そと見られて安し春の夢　乙州
海棠に誰はちきけん水の色　巴水

長

堅田の成秀亭にして前書あり
しかと略す
蚊屋船の地をはなれたる泊り哉　貞室
宵の間や芥子の蕾に入月夜　酒堂
芥子の花散しつまりて佛在世　乙州

清書の時分またすや蓮の花　桃妖
茄子木のまふ日面や境垣　大津原田 正心
蕣の二葉にうくるあつさ哉　去來

秋

との葉の紅葉はかふもこさらふか
なふ／＼／＼そなたの事か花薄　宗因
秋もはや江湖の僧のいとま乞　正秀
植出しを苅込比の曇り哉　素牛
編たして椽先淺し小萩原　曲翠
一枚に麗の萩や風おもて　鵜枝
いろの濱に誘引れて
小萩ちれますほの小貝小盃　芭蕉
初雁や家をはなれて暮(い)聲　里(ぜ)、東
嵯峨かつらに暮して
夕陽や材木店も薄紅葉　乙州
文月や何かにつけて泪くみ　一洞

言觸の装束やとる星の中　賢明
天津星うそにはしまぬ逢夜哉　錦江
初秋や水はきのふの手洗水　尺草
一念三千
秋風のたつ日やなれが魚袋　巴水
新酒や秋風渡る藏の隅　洒堂
曇る日や鶸(ヒカラ)かたよる梅もとき　車庸
異なる娘の囃しを聞て
生(イキ)靈はさし鯖喰うて現かな　北枝
聖靈や同し旅寐の枕もと　丈草
草原や鶏はふらん玉まつり　巴水
立かゆる卒都婆も秋の道具哉　全
蟬の音も遠さかり行麻木垣　梨月
母の身まかりけるに
舛かきを切て間もなし早稲の備供　木節
小望月茄子の針の見ゆるなり　賢廣
侍の身を露にして月見哉　史邦
今日月に召るゝ神は何番目　乙州
名月や里の匂ひの苅手柴　大津 木枝
名月や腹一はいに馬の草　京 巴流
名月や猫のかきつく床柱　大坂 志用

刈かけて寐た形凉し麻畠　梅子
そぶともにちり盡しけり麥の花　素牛
秋風を待や身の椋の先　京寸章
木つゝきの枝打にけり土用干　柯山

伊勢の園女にあうて

雲の嶺心のたけをくつしけり　路通
鴨の子をうむ池いつこ雲の嶺　巴水

武江より上るに南江とかやいひし茶やに宿りしか其夜白雨しきつて前後の百川往來留りぬ明れは空にくけにてりわたり書親の眠りもぎやう／＼し鳥にさめ旅は棒もをかしく相客の臭かる縫談盡果ければ

國／＼の咄し續きやかんと鳥　乙州

武者繪のかけ物に發句このまれて

戰ひの身か夏の夜の碁一番　仝
磯際にうこきもやらす夏の月　松任周來
眠たさも其時／＼や夏の月　友交

南都に旅寐せし比大智院の孫七といひしおとこの厚情により小屋にふして

夏の夜のこれは奢そあら莚　素牛
五月雨や葛の裏葉に肥る蝶　三枝

餞別

さしむかふ別やともに遠國　丈草
竹の子や其間いくつ兄弟　舟路
竹の子や京は何たる土水そ　幽明
しんなりとむかしゆかしき角大豆哉　大津原田氏女錦江
螢谷出る螢の栗かな　乙州
ひからすに行導ならぬ螢哉　萬聲
灯のなければくらし夏の虫　春紅

羇旅

汗かきの瞿麥くもる泊かな　乙州
草も木も一息寐入五月闇　仝
馬洗ふ川すそ闇き水鷄哉　北枝
更衣成のひくきも浮世哉　梅子

庵にて

口くせや夏は坊主になりたきと　亡人流志
成佛もあぶなき物よ蓮の上　其糟

と旅僧の語り捨て通る

蕣や晝は鎖おろす門の垣　同

蕣や京見ぬ人と寐る人と　宮腰 波之

あさかほや葛城山の片旅籠　巴水

高野にまふて

ぬち君もぬちけて立そ女郎花　同

相撲取身の白きこそ哀れなれ　放生津 夕市

思ひ出の種をつくすは踊かな　孤雁

木曾塚より歸るとき

蓮の實の雕つゝほんとぬけにけり　名古屋 越人

北州の人とならはや蓮のから　乙州

江西長途

邪〳〵馬や萩の手形に風寒み　巴水

露時雨旅籠拂ひをする夜哉　一泉

渡り鳥鳴は古郷の咄かや　交草

行雁や跡より續く峯の隈　石動 宇白

越の湯涌は景色異替り入湯のいとまには前の流水に遊び殺生するも保養のひとつか

湯臭(クサ)やなさび結かゝむ石の間　乙州

猿の身もたのまれぬ夜寒哉　同

徒然〳〵にかからむ柿の蟲喰ひ　龜柳

干稲やともに枯たるかたつぶり　作者しらず

徒に菊咲里のいぬの香(カザ)　南甫

深窓別

菊の香や宵の寐卷の吹返し　巴流

中風病何かは笑ふ秋の暮　秋水

伊勢の蜑の息つく音やうそ寒き　何處

客舍吟

鼾(イビキ)かく小者は蟲の鳴音にて　乙州

同し身を誰にゆつりて蟬の衣　錦江

加茂山や若宮の舊跡を禮し

大木や蟬の空ふむ音もうき　一洞

たちかねて巷の鶉の鳴音哉　素牛

風雲あつまりやすく又去やすしはからす難波にとゝまりしに空能坊尋來られければ枕を破窓にならべて物がたりする事六十日秋風たちて行末の旅おほつかなけれと此度は木曾路をへて寐覺

人〱の歸りし跡猶すみ渡る氣色の面白さに枕をも定めかね

名月や蚊屋踏さけて西枕　三十六

蕉門をまねきて

名月や後は誰着ん檜笠　園女
手をついて月指のそく松の間　智月
鎖あけて月さし入よ浮御堂　芭蕉
湖のなれの果見よ橋の月　木節
九折そぎのひなたや夕月夜　加昰
訪ふ人に酒買せたる月夜哉　宇路
出る月に所替けりむしの聲　南甫
氣のすみて寐られぬ夜半やきり〱す　巴水
きり〱す鳴やかゝしの袖のうち　智月
きり〱す顔にとひつく袋棚　北枝
旅人や合羽かたしくきり〱す　句空
山畑の鳴子や風の吹おろし　斐立
鳥おとし流すや秋の湊川　巴水
野さらしに何の情そきり〱す　雨柳
稲妻の影にとひつくいなこかな　不知
行暮て人喰ふ蚊より秋の蠅　蘇守

一の谷一見の比

蟷螂(カマキリ)の先にすゝむや足まとひ　巴水
乘かけの荷をしめ直す野分哉　冬雅
何事もなきそ野分の石佛　友交
波かしら海より續く花野かな　子格
稲首をすかして見はや月の影　巴水

土肥の杉山を通りしに

哀泣うこかさりけり三つの秋　周來
よはずとも終に行なり秋の鳩　錦江
雷(カミナリ)もおとろふ秋の行方哉　乙州
行秋や落たきまゝの水の音　六街
行秋や野の中たるむ石の蔦　三十六
石垣のあふなくならん蔦の壁　雲口

親にはなれし人に

しほるゝやまたき時雨の薄衣　錦江
禁酒する廬に生こめ蔓瓢　舟路
結はるゝ形に延たる薄かな　青揚
其色の花とはならす唐からし　雨柳
繪にかける女や化に花薄　小春

深川いつれの菴主とかや此何を待て他にかたくあはす

初雪や狐なくなる寶寺　す草
朱の鞍か佐野のわたりの雪の暮　北枝
、旅より歸りし人に
飛廻る鳥も古巣に雪の暮　錦江
雪の夜や麗豆腐のなつかしき　智月
雪の夜やふは〳〵鍋の置火燵　柯山
寒き夜や水に釣瓶のあたる音　昌房
はきちぎる八疊敷の寒さ哉　去來
ふしつけの柴のあまみや魚の味　巴水
いとけなき子を法師になし
ける比
つやつけの衣にはしる丸雪哉　三十六
草庵のすゝはきに
法然の天窓にたまれ玉丸雪　三國水音
茶の花や鳴子のこりて鎌平寺　ぜゝ遊刀
うこく時木の葉散けり井戸の內　智月
火燵にはいかにあたるそ蛸の足　洒堂
雑鴨の羽や時雨ても同し色　楚山
炭賣やいかに時雨るゝ親の形　小春
水仙は佐藤か館か匂ひ哉　塵生
練壁やわれて日のもる水仙花　曲翠

水仙や葉はかり作る北の國　自笑
寒垢離の己かはたかはどの祖師ぞ　春紅
月花の愚に針たてん寒の入　芭蕉
北越の歸るさ智月をたつね
はしめてかたる
冬の日の晴〳〵しさよ此休み　京轍士
早梅や茶臼にも力入られす　羽雪
鉢たゝき廿日の月の鵜の森　巴流
鉢叩きがんぜん堂のまくらづき　巴水
幽靈に見しよ網代の瘦男　洒堂
枯蘆や足ひとつある鷺二つ　文水
田舍清江由紫門古道傍
曉を飛行鴨の水はなれ　柯山
生壁の足代寒し神無月　ぜゝ探旨
鹽鯛の齒くきも寒し魚の店　芭蕉
所化の貌見やるに寒し應かみね　木節
意地もなく水なるまゝの氷哉　言踏
冬籠鹿こそ人に喰はるれ　乙州
雪信か草花珍し冬籠り　智月
下帶や竿にかけつゝ冬籠　木節
蕎麥切の先一日や年わすれ　宗因

の床の鹿の聲をなむとすゝ
まれけるまゝにとかくして
別れぬ

うらやさし君か木曾路の橡の粥　路通
鷄や稲するかたをよりむけり　作者しらず
畑中の柿小屋高き野分哉　鳩枝
朝霧や萩の籬の蔟細　巴流
才覺に狐の穴や萩の花　柯山　巴流撰
清書の假名しほらしや花薄　鷗子
紫の花の亂やとりかふと　素牛
鹿追や朝寐して出る黍の中　梨月
秋野のゝ花々しさよ皮肉骨　乙州

しのはらの古戰場にて

笹蟹のくんて落たる一葉哉　仝
鹿小屋や花は山田の鶉の聲　正秀

藏

日能上人より一折おくられ
けるに

ひら茸に雲をそ思ふ比良の山　立甫
走りよりわからしんせん神送　鷗子
風に食こほしたる乞食かな　秋水
こからしに新し家の寐覺哉　羽雲
化物の化らからなき枯野哉　夕市
時雨來や横平者の道急き　三互
柚の色に三ヶ月はやし十夜前　臥高

御影講や油の様な酒五升と
ありし句を思ひやりて

有難の餅そ十夜の腹こゝろ　三十六
楊場の坊主臺や冬の月　里東
馬町や薬火焼山冬の月　梅子
冬の日にきゆるやうなり沖の島　乙州
冬の日に雁の落來る干土田哉　巴水
洗菜に朝日の寒き家子哉　素牛

にくかりしやもめからすも
嬉しきは唯ひとりぬるあか
つきのそら

初霜やからす飛込島中　鳩枝
ひころにくき烏も雪の朝哉　芭蕉

うきを手本に鳥羽の戀塚　州
鶏（ミソサヽイ）つとふ植木の株（カブ）の蘂　節
出そこなひたるくつさめの顔　水
夜とほしのつれ待合に礼の辻　秀
日遣宗の經のいきごみ　旨
吹おろす嶺より續く瀬曇り　牛
鳶と鳥の立わかれ鳥　房
拜殿の礎をこばする花莚　州
五葉の松に八重の梅咲　筆

むかし今の哀三人語り遊て　路通

へばりつく冬草の戸や薬罐水　路通
綿からふるふあられころ〱　巴水
どつかりと風吹あとはけもなくて　乙州
雲にぬるみのかゝる月影　通
袴着て郷の秋の自身番　水
買れて籠のきり〱す鳴　州
怱（ロ）くとて川原を横に歩み行　通
杖を刀に腰のさしそへ　水

うらみても格子に額つきあはせ　州
頃日見たる夢の書つけ　通
白銀の福〱敷を撰置て　水
いやがうへなる若荷咲なり　州
如何なれば惣領とのは無器用に　通
峰に蕨をとる墓のつみ石　水
丸木橋これも琴によまれたり　州
心の筋や痂氣ひきつる　通
月花に赤蠟燭の片なだれ　水
角根かゆがるかすか野の鹿　州
の（名）どかさや法論味噌はこぶ毒鉢　通
風ばまをたるわらの辨當　水
飛乗に福（フク）瀬（ラ）の舟の便乞て　通
信（シ）太（タ）ひとさしを舞て鼻ひる　州
あたまから鐵炮無盡判を續　全
女夫の襟にたかれあふ友　通
小便に敷居をぬらすふはつかし　水
蘭のにほひのめつたにそする　州
朗詠を狸に習秋の野邊　通
月むつくりとしかも形よく　州
鎖明る御手なし御所のくゝり口　水

他郷に暮す身のたま〳〵家に歸り

客人の心になりて年忘れ　乙州

打こほす小豆も市の師走哉　正秀

掛乞や身と覺えしは帶の下　羽雪

暮の市誰を呼らん羽織殿　其角

年の暮蜜柑とり込干鯛箱　京 野童

蛤の生るかひあれとしの暮　芭蕉

節季候や痳てもつめたき鼻の先　冬稚

流るゝや師走の町の煤の汁　智月

* * * *

とりみたせし中にたつねられて與行

屋根葺や比良の時雨の晴て行　隱士 木節

紗窓たつ蓋の小渡し　巴水

鼠もちの實は莖よりも冬かれて　正秀

馬て追付乘物の供　探旨

月の雲たをの嵐にまくり出し　素牛

何かに露の眞盛なり　昌房

一枚の薦引まとふ肌寒み　乙州

寐時わすれす歸る鷄　節

かん鍋に盃添て竈の前　水

共に泣けり國本の傳手　秀

ほとけてもとり上やすき兵庫由　旨

火をつき出す茶屋の熾炭かき　牛

早稻晩田唯一息に植つけて　房

太鼓はかりの祭こそすれ　州

ちぐ〳〵の皿を並へてもる鱠　節

森にかたよる志那の朝明　水

月花に運强丸の二間鑓　牛

陽炎もゆる金の鯱　旨

春風に吹れて家の町渡り　秀

手水もらひに與のこしもと　房

五大尊いとしらしげな顏もなし　州

まだ西へらを殘す請柿　節

小ありきの番にあたりし秋の中　水

月は晝より出て更行　秀

忍冬の匂ひ吹たつ蚊のきをひ　旨

あらき木綿に薄き豆の色　牛

年ゝのあく程を家もつ契りにて　房

王昭君か胡國の旅にかはり
て
此あつさ人の見しらぬよごれ面(ツラ)　肥後助成寺 使帆
ほとゝきすをのれか聲はふさからす　同市眞中 長水
塵塚の夜のひかりや古扇　大坂 保直
路通に別るゝとて
ひるかほの夕邊は何をまきれ事　大和 葉文
秋風にうなりのつよき野犬哉　長崎 臥牛
思ひ切て能もさけたる芭蕉哉　仝 三木
俳勸進坊のたより久しくな
かりけるに周介三木への文
參りたるよし聞てなつかし
さに
余所の文と思へと見たし雁の傳　仝 百川
月雲をひとつにしたる紅葉哉　仝 村童
此句此ほと村童かせしと路
通夢に見えたるなり床しさ
に書留めけるとそ
見あくれはいよ〳〵高き紅葉かな　仝 雨草

いそかしき人もしつまる月夜かな　大和今井 越桃
九月十三夜をあかして
香明す月の名殘や空(ウツ)眠た　大坂 休計
淡雪もつもりて牛の重荷哉　大和今井 吟松
湯あかりや鴨の香爐に火の加減　大坂 離可
已上



面瘦てさへにほふまゆすみ　通
業作る無間の山は眞闇に　州
時鳥鳴てさつと降雨　水
ちからつゝ粥のねばりの腹心　仝
襟にこほるゝ月代の浮氣　通
花の雲鐘は上野か淺草か
きり〳〵めくる春の中日　州

* * * *

住吉奉納薦獅子集　一卷
　　願主　藤井氏某

一俳諧平生安穩
一朋友和合
一風雅之徒各淨邪
　海岸靈
　　蠢四時雜化情
右ひもを結ひはこをさゝ
くるの心さしを扱にしる
すへきのよしねかひ申さ
れけれは憚からす筆をふ
るひてこゝに演る
　　諸國俳諧勸進路通

* * * *

奉納の板行究りしとも其末
に此句共御撰集たのみ入れ
邊國の人〳〵心指の深き事
捨難くあら〳〵書しるし置

雪折の枝なき竹や門かざり　豐後竹内 松風
安房名の譽れ成けり年男　大和今井 隨松
深山木の古木にそうて芽立哉　豐後 松花
青梅の實をかたむる夕日かな　長崎 可久通
植がちに腰のはしたる早苗哉　仝 周介
　つねならぬ夕暮に
中に此女見えすく青簾　大和今井 天弓

卯辰集卷第一

春

日の春をさすかに鶴の歩み哉　其角

けさの春は李白か酒の上にあり　杉風

我山里に春をむかへて

春立や山家に入て袖の數　楚常

東君また身の耻ゆるしたひにけり　釋秋之坊

病にふして

來るとしのをも湯につなく命哉　貞室

湖水のほとりに春を迎へて

薦を着て誰人います花の春　翁

元日に誰か越ゆく不破の關　小春

はる立やさすか聞よき海の音　牧童

曙のおしや春たつ夷かしま　七尾 勤文

江戸にて

山は富士野はむさしにて年とりぬ　漁川

四日には寐てもや春の花心　北枝

のとかさに又かりそむる酒債哉　牧童

正月やかならす醉て夕附夜　萬子

越中の國宇坂の神祭の事に

おもひよりて

卯杖とはうさかの神の切にけん　句空

たゝくにも君を忘れぬ薺哉　紅爾

若殿を抱てまたうつ薺哉　牧童

藪の中のなつなは人にあはぬ也　女 けん

かれ薄がさくさと摘なつなかな　湊宮司 [illegible]之

あら雪の若菜こやして消にけり　大津尼 智月

七種のみくさは摘し雪野かれ　四睡

十錢を得て芹賣の歸りけり　小春

麥のためまづ風ゆらく雪の上　北枝

木曾義仲の塚に詣て

雪消てあはれに出し朝日塚　尼 智月

殘雪を見渡す貌の陽氣や　林芳

卯辰集

この言草は、こしの志ら根の林下鶴來の里の楚常子、歌林に樂しむあまり、かつ實を拾ひ、すき人ともに味はゝせん事をおもひしかと、その秋のはしめかし世を夢になしぬ、跡に一つゝみのものあり、立花氏北枝是を袖にして、猶志ば栗のゑめるも、とん栗のころ〳〵せしも、とりあつめて、我住かたの山の名にしいふ、卯辰集とはいふなるべし。

桑門句空書

きし鳴て跡は木を伐る響かな　蘇守
橋桁や日はさしなから夕霞　北枝
砂よりや霞ゆり出す岸の浪　譽風
ますかさや朧は月の香のやうに　漁川
朧月羽こく鳫も旅寐哉　貞喜
磯の家の菊植分む歸雁　春幾
陽炎を見はるやもの〻くらきほと　薫下
かけろふや朔藥月のくもるほと　楚常
絲きれて蛸はま〻根を行方哉　山中少人 桃葉

粟ヶ崎漁家にて

はすれめや胡葱（アサツキ）膾浦小綱　牧笛
君いくら我はやつくし五七本　李東
頭陀袋うち明て取る土筆哉　須之
春の野に袂も袖もつくし哉　和平
七くさにあはてさかりや蒲草　大坂 何處
たんほ〻や芹生小原のまかひ道　牧童
草もえて土のほろつく野澤哉　魚澤 不的
くさの芽のうへに干おく莚かな　和之
なつかしき人のなつけん猫のつま　女
手を上てうたれぬ猫の夫かな　尼 智月

曙やことに桃花の鶏の聲　其角
ふつ〻かに青葉や交る桃の花　雨邑
ひとつ家のもゝそ野道の春の色　破瓶
雨降ていつ迄ぬる〻木蓮花　言諾

秋之坊によす

遍昭の簑さへもたし春の雨　牧童
春雨や淋しきやうて梅柳　漁川
もるまては庵にあらし春の雨　雨邑
はる雨や木のよこれとる下頭　石動 字白
また鳴か曉過の江の蛙　一笑
鳴出てみななく小田のかはつ哉　孤舟
うち返し寐らぬ背戸の蛙哉　宇路
誰の家のひくさや空になく蛙　流志
あまおいる柳を落て釜もなし　其糟
飛こて穴へ落たる蛙かな　魚素
蛙子のおよき習し古江哉　鶴來 雨柏
青柳に追出されたる燕かな　句空
川舟の跡に鳴來るつはめ哉　一草
とらへても放したうなるつはめ哉　宮腰 普人
海棠にゆらりと來たる胡蝶哉　燕子
草をたつ小蝶や風の一なひき　紅爾

のこる雪下部あまたにあくまれし　譽風
氷とけて鮒うく池の東かな　唐爾
春さむきとし
にかく／＼しいつ迄嵐ふきのたう　宗鑑
寒しやと歸る春野の風くもり　秋之坊
匂ふらし梅さく里の牛の角　句空
蝶鳥にあふなき梅の雫かな　岫曲
手鼻かむ音さへ梅の匂ひ哉　翁
病中に
毒たちに障らぬ梅のにほひかな　李・東
酒與
おとけすとおらはおれかし梅の花　秋之坊
駕籠よりは牛の上から梅のはな　萬子
さりながらむめにはしまる月夜哉　チハリ野水
けふの梅勝たり右も椿かな　同胡及
鶯やうは毛しほれて雨あかり　江戸晉夏
うくひすのはまり過たる山家哉　北枝
鹽さかひ忘ろ魚のかきる風情あり　百動亨白
白魚や海にをしおすにこり水　鵜來梅東
鹽河鮀やはるも蛙のなかぬ時　越人

種ものや池にひたりて春の水　楚常
いたつらに柿接て居る彼岸哉　宮腰普入
栗持ておもひをのふる木の目哉　李東
白椿ちるや岩根のうつせ貝　松任薰煙
雪はちく柳やいそく淺みとり　小松致畫
蝶の羽におし分らるゝ柳かな　蘇守
木つたひてましらのころふ柳哉　楚常
涅槃像人はまつ見る詞雑哉　遲櫻
ひとたひは寐ておかまるゝねはん哉　李東
鈴鹿の社にて
山蛐の遊ひに出る花表かな　京風喬
雲雀より上に休らふ峠かな　翁
うつむいてきけは草なるひはり哉　句空
ひとつともふたつともきく雲雀哉　元之
獨たゝみてたれ初てや鳴ひはり　秋之坊
若草に雌をかくしてやなく雲雀　南甫
かけはつす鷹より落るひはり哉　其糟
鳴雉子やみとりのひ立小松原　梅露
火屋ひとつ鳴殘したるきゝす哉　小松斧卜
屋腰より雉子鳴ゆく山路哉　四睡

錫杖よ心つくしのやまさくら　同
夕風やあいたを置てちるさくら　鶴來女 不中
かしましく櫻いためそてゝつゝき　おなし所 柳江
根なからや櫻のせゆく渡し舟　少年 桃英
むら雨の羽織干にけり山櫻　紅爾
山さくら見ゆる昨日の所かな　李東

旅行

風流の國主なるらん山さくら　北枝
とにかくに胸うこく若木の櫻哉　同
水鳥の胸に分ゆく櫻かな　越中いなみ 浪化
岩根ふみひとめ／＼や山さくら　萬子

秋之坊老母追悼

たのもしき子を置ちるや姥櫻　牧童
葎箒かくす寺は自慢のさくら哉　春幾
山吹やよりむく岸の舟はやし　路舟
黄なる花は皆やまふきか川向ひ　譽風
山ふきやおる手をはちく瀧の露　楚常
やま吹に干つゝけたる手染かな　林陰
鶯かひする人は古代のすかた哉　江戸 晋貝

餞別

雲に只鳥の巣たつわかれ哉　楚常
柿の花蟻のちからを斗哉　京 可廻

初瀬にまふつとて

空大豆の花に初瀬の道もなし　句空

西大寺にて

木ゝは藤春の柳を尋ける　同
家つとや包こほれし藤の花　四睡

いつく島に詣しころ

巖しまよこれぬ足を春の浪　同
此儘に罪つくる身の日は永し　大津 乙州

紅爾か武藏にゆく時

いたつらに富士見て永き日をたてな　北枝

秋之坊にて

窓ひとつ有とて暮る春日哉　李東
行春や蕨ほうけてつねの草　尾張 野水

羽をれし蝶のあゆみよるすみれ哉　雨邑
手にとれは猶うつくしき菫かな　孤舟
夕くれの籬に蝶のたつを見
おりて
籬る所ありて行らめ穴の小蝶　北枝
おもしろき盜や月のうごき垣　李東
かくれ家や食喰さして摘五加木　牧童
里の晝菜の花深し鶴の聲　仝
なの花や幾野かゝやく朝日影　拾葉
菜の花に虻ゐつかむ朧月　其糟
草庵をとむらひて
梨一本菜の花二間四方かな　春蓁
花に只來てはほしかる庵哉　漁川
雨ほち／＼ふらしとて行花見哉　孤舟
中ゝに花のつよみや深みとり　素洗
寢に來るな花のちる迄山鳥　浮葉
花や雲橋よりわかる道の數　松任 柳川
四方より花吹入て鳰の海　翁
湖や心はしりて四方の花　北枝
元祿三のとしの大火に庭の
櫻も炭に成たるを
燒にけりされとも花はちりすまし　仝
判官をおもふ
かいそんか來て見ん花の笈宅哉　楚常
海士か家磯邊の花のおもて哉　宇路
ちる花の澤蟹かつく岩間かな　元之
肌のよき石に眠らん花の山　路通
村雨や我跡ぬれぬ花の下　梅露
これは扨ゆけとも／＼はなのやま　松任十歳 春之
何人そもとゆひ拂ふ花の寺　遲櫻
花咲て猶いかめしき二王かな　三秋
提灯にちりかゝる迄花見哉　柳絮
醉臥て次手に花を二日見ん　小松 斧卜
獺やちらぬ花ふむよし野川　拾葉
渦のまくはなとめくれる鱥哉　可友
手折とて花にかり着の袖長し　古庭
花も見す此長にかゝる碁打哉　一傘
またも見る闇かは花のあかりある　秋之坊
朝な／＼花を立のく乞食哉　草籬
草庵
おもしろや海にむかへは山櫻　句空
よし野にて花のちりけるを

先頼む椎の木もあり夏木立　翁
ゆく水や裏屋芹咲夏こたち　楚常
雨をたに軒にまなす茂りかな　富山 達風
ひとつ屋は捨もせぬ世の茂り哉　水橋 卜幽
くたけすもあたに成にし桐の花　幾葉
ひよく／＼と人跡になく水鷄哉　伯之
眞こも刈うさに戸扣く水鷄かも　圓木
淋しかる人をよはるやかんこ鳥　孤舟
浮雲にまきれても行夏の月　乙州
廿日とてやさしや遅き夏の月　楚常
みしか夜や百合咲かけて明にけり　林陰

志のふもちすりの石はみちのくふくしまの驛にありて往來の人の麥くさを取てこのいしをこゝろみけるを里ひとゝも心うくおもひて此谷にまろはし落しぬ石の面はあたさまにふしたれは今はさるわさする事もなく風雅の昔にかはれるをなけきて

早苗つかむ手もとやむかし志のふ摺　翁

更科山を見やりて

ところ／＼雲ある谷のさなへかな　紅爾
さみたれやあかるき方に鷄の聲　雲口
降出し日もわすれけり五月雨　三秋

中將實方の塚はみちのく名取の部笠島と云所にて道より一里はかり侍るといへと雨志きりにふりて日もくれかゝりけれは

かさ島やいつこ五月のぬかり道　翁
さみたれや軒に崩し土火桶　字路

僧の路通おもひたつ心とゝまらさりけれは

さみたれや夕食くうて立出る　尾張 荷分
五月雨やけふも又きく松の鶯　古庸 水
さみたれに龜の甲ふむ山田哉　高岡 市巷
小雨して田貝ふみわる花かつみ　貞室
鷺立て人やら分るあやめ草　尾張 李東
もの取をく氣色そ池にかる眞菰　旦藁

卯辰集巻第二

夏

ふもとの里見おろして
衣かへせしや綿ほす谷の家　句空
土を着る節もあるへし更衣　富山 秋之坊
更科に戀しかるなりほとゝきす　五歳 遠風
振舞の中に聞けりほとゝきす　長皿
坂もとにおはしすみ侍しころ
貌見せぬ尼も戻らやほとゝきす　句空
橘やいつの野中の郭公　翁
時鳥まことはとりがすくないか　牧童
辨慶はかしこまりけり佛生會　玉斧
やとはれて鬼に成たる祭かな　少人 古庭
牡丹ちり芍薬ひらく且かな　桃英

一輪のぼたんやちりてそこら内　其糟
何事そぼたんをいかる猫の様　南甫
麥の穂や芍薬埋む里の背戸　自笑
四睡か武府にゆくおり
牡丹散て心もおかすわかれけり　北枝
子におくれたる人につかはしける
ちる事は催しに似ぬ牡丹哉　牧童
卯木垣似たる子のなく恨哉　楚常
うの花はたか折来しもおなひけり　秋之坊
青鷺のなとやねむれる杜若　小松 致畫
かきつはたおところに咲し吉江哉　鶴来女 不中
八橋をかける繪を見て
橋ことに踏はすしなんかきつはた　唐爾
尼か薗泪にやそたつ芥子の花　草雛
竹の子をおる音響く小寺かな　鶴来 襄茂
小麥田に鳴や狐の妻をなみ　京 疎松
麥秋は身の僧ところなかりけり　風喬
石山のほとりにかりなる庵をおつらひて

思へとも雛の歌かく扇子かな　萬子
うつくしき人にかられし扇子哉　孤舟

四條河原涼

川かせや薄柿着たる夕涼み　翁
川はたにあたま剃あふ涼み哉　楚常
松原に山臥涼し補まくら　同
すゝみ／＼ゆく／＼森の田中哉　句空
猶涼し松には人の居りかはり　露睡
涼しさや下馬より末の小松はら　雨邑

秋之坊の行脚に

とく起て米をもらへ朝すゝみ　李東
よはる身のものにもつかぬ涼み哉　何處
捨舟に乗てはすつるすゝみ哉　其糟
顔洗ふ川邊涼しや魚の影　蘭子
川涼み扨もちいさき扇子かな　玉斧
すゝしけに蘇積屋か家の川柳　乙州
六月は涼むはかりそ萩の聲　遙里
白雨や猫の尾をふむ簀子椽　小春
ゆふたちのけしきに遊るちんは哉　京柳宴
夕暮やはけならひたる雲の峯　去來
夢中に申侍る

はきなから屐を洗ふ清水かな　北枝
暑やはつむ清水の中汲ん　一泉
岩に只口付て呑むしみつかな　古庭
松伐て古年の清水のまかひ哉　英之
茶碗ひとつかり出したる清水哉　一男
雨をや近江となりし川の數　乙州
あつき日やおもけに落る瀧の水　山中自笑
寐くるしく燈あつき枕かな　新露
誰かふせる蚈なるらんさくら麻　普人
行ぬけて家珍しや櫻あさ　一笑

病よはりて山里に歸る比を
のゝ餞別せし返しに

麻にそふ蒸麥よはなれくるしさは　楚常
なてし子や貴妃の喰さく花のつま　春幾
夏の日やかんひ喰ふ虫の紅に　牧童
いたつらに蓮に立し吹矢哉　遠里
はす二本切れは淋しや寺の庭　僧白函
晝かほは鹽燒賤の詠かな　光山

尋る戀

ゆふかほやふくへやまかふ君か宿　萬子

鴨の子や袋に入しまこも刈　邑姿
青梅を買うて花問ふ里家哉　三岡
入ありや窓の枇杷くふ山烏　楚帶
山さとや明ゆく窓の麥いり粉　井闌
あちさへは只おしやすき扉哉　伯之
ひとりすむ法師のためか夏の菊　女

ある女房に申侍る

鬼ゆりのまとしからぬ赤さ哉　秋之坊
辨なから百合草は臥けり夏の雨　雨邑
渡りかけて藻の花のそく流かな　京 加生
蓴葉の名の入めくもあはれなり　萬子

幻住庵の夕を尋て

水汲に跡や先やのほたるかな　乙州
さひしさや一尺きえてゆく螢　北枝
瀧つ瀬やひかりそろへて飛螢　小松 塵爾
螢火にとひつく魚や水の音　鐘音
のほるよりおるゝは多きほたる哉　蘭子
打かへし扇に通すほたるかな　春幾
家に來て袖よりにくる螢かな　一洞
乘る駕籠をひらりとぬけし螢哉　源之
妹背山おとこはかりの鵜舟かな　萬子

つかれ鵜やたれ羽干す間の峰の月　行山
まゆはきを俤にして紅の花　翁
山の井に蚊の鳴いつる夕哉　三秋
かり蚊屋の庵にあまる笑ひ哉　康樂
ほころひを明は尋ん蚊帳かな　春幾
蚊に覺て馬屋の音も哀なり　好
ほち／＼と草の音きく蚊遣哉　李東
打拂ふ扇にうつる蚊やりかな　芦沼

病中

花鳥に死はくれひて蚕むしろ　楚常
東雲や耳そはたつる氷室守　何處
車にはさのみきえぬかひむろもり　高岡 市巷
梢より海ゆく蟬の命かな　梅露
むさし野は蟬の鳴へき草もなし　李東
空蟬や石の花表を鳴捨し　一井
水うてや蟬もすゝめもぬるゝ程　其角

無常迅速

頓てしぬけしきも見えす蟬の聲　翁
せみの鳴中に起たるうつら哉　又笑
蟬の脱(カラ)ははたらくやうて哀なり　句空

少人のあふきに

楚常追善

月薄もし魂あらは此あたり　牧童

あはれにしなしたるみどり
子の葉にまゐりて

秋風に卒都婆きはつく涙哉　鶴来女 不中

高燈籠松の木の間に見ゆる哉　九才 長皿

七月既望

高燈籠しはらくあつて後の月　北枝

赤〳〵と日はつれなくも秋の風　翁

行雲のうつり替れる残暑哉　魚素

稲妻に馬引かくる田面かな　洞梨

いなつまのつかへて戻る板戸哉　幽子

船中

いなつまやしは〳〵見ゆる權所の城　素洗

稲つまに行先〳〵の小家哉　孤白

旅行

霧くらき歩みちからや鷄の聲　濵茂

宵闇や霧の氣色に鳴海潟　其角

離の花の朝しめりとはよみ
たれとも庵のわひしさよ

うす霧のまかきにしめるわか木哉　句空

舟てなし只朝きりに木に乗りて　楚常

翁へ餞をおくりて

しら露のまたあらみのゝ行方哉　北枝

古御所や露日にのこる石の橋　雨邑

わかくて身まかりし人に

さそあらん仕のこす事や露の数　尾張 旦藁

雨鹿身まかりし時

露は袖に葬禮せんと立さはき　鶴来 何之

おなしあはれを

春夏はやせて秋死ぬ哀かな　瀘水

小さくらとわろひす名乗ル相撲哉　秋之坊

山陰の水のみにゆくすまふかな　盛弘

面なけに物うち着たる相撲哉　素幾

蕣は咲ならへてそしほみける　北枝

あさかほやきのふは五けふは三　牧童

蕣の庭にのとけし鶴の聲　其糟

家とほし詠る庭の芭蕉哉　宮腰 閑之

稲妻の形ははせをの廣葉哉　一風

しかられて芭蕉の陰の小僧哉　遠里

夕貌のさけとも遲き夫かな　幽子
ひさからに蚊やりの細き住居哉　盧水
ゆふかほに片尻懸ぬさんたはら　北枝
虫おくり賤か志はさや夏はらへ　山中 自笑

卯辰集卷第二

秋

越中に入て
早稻の香や分入右は有磯海　翁
君か代はかくす事なき稻葉哉　一笑
河骨にかゝる匂ひや早稻の花　牧童
夕暮やわせ立のひて入見えす　七尾少人 松鶴

蜻蛉の立居にちりぬ稻の花　遙里
實のる時民の撫置く田面哉　李東
臥しほを告るや早稻の時鳥　貞室
楚常身まかりしよし母のもとより告來したる返しに
來る秋を好ける物を袖の露　北枝
古畑や所〳〵に麻のはな　鶴來 李圃
ひとり寐
七夕を笑うて寐入端居哉　牧童
雨夜
明方の星にかしたる袷哉　雨邑
銀河かきまくりても渡れかし　宇路
聖靈やけふこよろきの磯の波　句空
旅宿玉祭
聖靈も我も旅寐は水はかり　楚常
おなし時
聖靈に近付もなし草枕　李東
聲ひくに魂まつ宵の一間哉　盛弘
くま坂さかと云所にて
熊坂か其名やいつの玉祭り　翁
玉祭なく〳〵質を置く女　松任 雨柳

山中の温泉にて

子を抱て湯の月のぞくましら哉　北枝
隠もなく名もなき原の月見哉　意情
鑰もなき庵預る月見かな　洞梨
月は田面海鳴そふる夜頃哉　秋之坊
櫂上て休める舟の月見哉　如柳
座敷より我舟さして月見かな　浮葉
月見する座にうつくしき貌もなし　翁
月み舟櫓綱きれたる笑ひ哉　雨邑
わや／＼と坊へ押込月見かな　唐爾
花薄きひは穂に出てくはれけり　萬子
はなすゝきまねけは喰ふ野馬哉　宮腰 清流
寐覺ても起ちからなし荻薄　路通
起もせす寐もせぬ雨の薄かな　松任柳川 姉
おり立て馬かゆる野の薄かな　民屋
むら／＼とむら／＼とおり花すゝき　盛弘
蜻蛉もともにまねくや花すゝき　三岡
はなすゝき戸にはさまれし夜風哉　牧童
荊萱や露もち顔の董のふし　同
ゆく路の野菊の果は湊かな　柳宴

咲まゝに只さく儘に野菊哉　句空
　りうたんをかくして
よりうたん藪越しにきく鼓哉　玉斧
村雨や見る／＼沈む澤桔梗　幾葉
　このかみにおくれて我も病
　にふして秋も半過ゆく頃
是非ともの命よ露の赤毛蓼　鯆由
　山色清浄心
烏の糞つきても拾ふ菌かな　紅爾
　翁の捨ゆく庵に行て
蓮からの獨うそ／＼と行方哉　乙州
跡にたつは姥鴫と云鳥なるか　鶴洞
雁落ゝ蘆半町のそよきかな　遙里
吹からに鹿そうつむく山嵐　句空
起あかる墓の後の小鹿かな　孤舟
ますら男か矢を放つ間や鹿の聲　草離
　栗柄峙に泊りて
越中に健うつなり夜中道　四睡
待宵のちからに成しきぬたかな　大坂 川柳
眠りつゝ現につよき健かな　七里
打ものは淋しさしらぬきぬた哉　遲櫻

つふ／＼と露けし層所の女郎花　乙州

熊野へまうてける道すから

ひとつ葉をたよりや岩のをみなへし　秋之坊

娘の追善に

くひものや大きにかへて女郎花　素洗

秋の野に花やら實やらゑのこ草　楚常

野田の山もとを伴ひありき

翁にそ蚊やつり草を習ひける　北枝

つくろはぬ里の木槿のにほひ哉　四睡

咲つゝけ其家わすれしむくけ垣　鶴來女 不中

いつの間に背戸の木槿は咲ぬらん　如柳

霧ふかき旦渡月橋を渡りて

北嵯峨に分入頃

川音やむくけ咲戸はまた起す　北枝

村雨や萩の根にある蜂の聲　冷袖

夕露に盃なかせ萩の原　楚常

萩原や鉢の子洗ふわすれ水　牧童

萩見つゝゆけは此野の祭哉　忍市

はきに來て立はおもたき雀哉　雨邑

蟷螂や露引こほす萩の枝　北枝

氣多の社にまうてゝ

竹のつに絕鈴弁をくつはむし　英之

はた／＼のはたと入來る葎かな　四睡

物にあたり尻ほつ立るつゝり虫　同

引まけて草に首ありきり／＼す　乙州

秋草に何のゆかりそ黑き蝶　萬子

色／＼にくたけて秋の小てふ哉　牧童

多田の神社にまうてゝ木曾

義仲の願書幷實盛かよろひ

かふとを拜す三句

あなむさん甲の下のきり／＼す　翁

幾秋か甲にきえぬ鬢の霜　曾良

くさすりのうら珍らしや秋の風　北枝

芭蕉葉の打かへされし月夜哉　乙州

かしましき樫の眞や月の隅　楚常

月を松にかけたりはつしても見たり　北枝

逢坂やおの／＼月のおもひ入レ　邑姿

くもれとも月夜はやさし丸木橋　五歲 左里

南天の枝にうつろふ月夜哉　長皿

月の夜や道いそかしき人のくせ　漁川

稻舟も月も我屋も明にけり　順之

心あつて樽にもみぢをしかせけり　秋之坊
行馬の笑ふにもちる柳かな　李東
つふ足の跡のみ多し刈田原　何之
二葉なる麥田にやせしいなご哉　雨柏
目に高し稲刈末の御調藏　宮腰 稼青
橙の葉の持こたえぬる哀なり　何處
秋の雨雞の尾のしだりけり　小松 孤衾
入は住居はかりすごすや秋の暮　楚常
あき暮て淋しき炭の匂ひ哉　尾張 呂碧
行秋のさて〳〵人をなかせたり　越人

卯辰集卷第四

冬

寒さ來て野守の花の篭子様　楚常
藥出て壁におし込寒さ哉　草籬
路通の行脚を送りて
見ゆるさへ旅人寒し石部山　大津尼 智月
さむき夜の雨たりすごき菲莚哉　鶴來女 甚子
から風や氷はちゝみて網代杭　鶴來 何之
淋しき庵のすさみ二句
山あらし來よさむかりて明すへし　秋之坊
爐の隅に身や附の神といはゝれん　同
木からしや晩鐘ひとつ馬十疋　楚常
凩によりかゝり行馬上かな　春幾
木からしや顔のみ動く鳩の聲　雨邑
釣瓶くる音風と成にけり　梅露
木枯に咲て見せたる八手かな　林陰
身まかりたる人の庭のけしきを
鉢の木やぬしなきつゝしかへり咲　溪川
伊賀へ歸る山中にて
初しくれ猿も小蓑をほしけ也　翁
奧山は猿一聲にしくれけり　幽子

さびしさに來れはおもやも砧かな　孤舟
三ケ月の鞍に道あるきぬた哉　萬璧
燈心をゆりこむ夜半の砧かな
猪もともに吹るゝ野分かな
音程はものにあたらぬ野分哉

草庵をたつねありきて
捨る身のもの冷しくさす戸哉

旅わたりして
あさ寒み醉のまきれにわかれはや
足はやき朝戸の音やゝ寒み

松岡にて翁に別侍し時あふきに書て給る
もの書て扇引さく名殘かな　翁
笑うて出る朝きりの中　北枝

となく〳〵申侍る
ひよ鳥の行方見れは山女かな　鶴來 李圃
市人の聲にもあはず烏瓜　椎雪
志き鳥やへちまの糸も捨たりき　南甫
取跡や淋しく見えしすいき畑　如柳

我身
秋かせや息災過て野人也　北枝

すはしりや秋ふく風のねらひ網　四睡

秋淋し二句
秋や猶崩し池のにくり水　紅爾
鷺鳴て秋の日よはき曇り哉　牧童
秋の日や猶いたつらに馬の鞭　意情

山中かうろきはしにて
あきの日や猿一つれの山のはし　楚常

山中十景高瀬漁火
いさり火にかしかや波の下むせひ　翁

有省
よしあしをいはて守るはかゝし哉　僧 光山
物の音は水のむ瀬と案山子哉　雲口
志よんぼりと山田のかゝししくれけり　和角
秋の野を壁土にとる哀哉　德子
冬瓜や花にも葉にも捨られし　圓木
かもうりの方にかたかる庵哉　廬木
蓬生に持あはせけり菊くらへ　遲櫻
小家つゝき垣根〳〵の黄菊哉　牧童
志ら菊の一重は寒し秋の暮　宮腰 橡青
鮭とんてさゝ波殘る川邊哉　圓木
山川にいほりかゝりし紅葉哉　如柳

寒念佛歸る庵も氷るらん　康樂
辛風の簑ぬきて見るつらゝ哉　鶴來 雨鹿
狐ゆく跡は霜ふる氷かな　牧童
初雪や人のありくと日のさすと　楚常
はつ雪や松にはなくて菊のはに　北枝
初雪のかくしえぬ石のはつれ哉　三岡

老人をまもり居て

あら雪の花とも見えぬつふり哉　李東
元日の心や雪の朝茶の湯　孤舟
舟さして柳の雪を打かふり　其糟

野田の山もとに住人をたつ
ねまかりしにあはすかたへ
の垣に桂のかゝりたるを

なんの實そたま／＼見たす雪の門　北枝
折とてもあまり至極の雪吹哉　秋之坊

寒山讃

寐る恩に門の雪はく乞食哉　其角
喰うてや死ぬかと黒ふふくと汁　小松 斧卜
あれはこそいさゝ櫻はめてたけれ鰒　牧童
おもしろをならうて身にしむ神樂哉　北枝
戀しさもなくて寐られぬ師走哉　乙州

見めきて泣つゝ寐るや年の暮　楚常
年の暮わやめくを只余波哉　盧水

草庵をおつらひけるとしの
暮に

物うりの聲聞たゆる師走哉　荷兮
一とせや餅つく日のわすれ水　萬子
大年や難波堀江の鴨の聲　森幾
いさ汲ん年の酒屋のうはたまり　其角
輕薄を申つくせる歳暮哉　牧童

* * * *

元祿二の秋翁をおくりて山
中温泉に遊ぶ三両吟

馬かりて燕追行わかれかな　北枝
花野みたるゝ山の曲め　曾良
月よしと相撲に袴踏ぬきて　翁
鞘はしりしをやかてとめけり　北枝
青淵に獺の飛込水の音　曾良
柴かりこかす峯の笹道　翁
霰降左の山は菅の寺　北枝

嵐山に口影ゐるおり夕時雨　紅爾
しくれけり頓てその儲春てなし　牧童
古地藏しくれ催す苍かな　（小松）斧卜
ふり初て日毎〳〵の時雨かな　句空
しくれきゝ時雨闇夜のしくれ哉　梅露
德利さけて賤の子うたふ時雨哉　四睡
垣あれて菊のうら見るしくれ哉　洞梨

とかくに悲しき時

ひえなから打寐て時雨きくはかり　北枝
十月にふるはしくれと名をかへて　同
葉茶つほやありともしらてゆくあらし　宗因

囊中路有七千首不負行年風月身

我もとに袋に入し落葉かな　牧童
あはれにもつるみて落る木の葉哉　四睡

宗祇十三回忌

地こくへは落ぬ木の葉の夕かな　宗鑑
這出て落葉にねまる蛙かな　（鶴來）跡松

海のかたはしくるゝに庵の庭は木の葉をしくもおりしりかほなりや

はく跡も木の葉はもとの庵哉　句空

庵の暮と云事を

此夕たそや落葉にすへる音　句空
ねかははや戀をはせしと日蓮忌　（鶴來）何之
藪過て霜のみ寒し葱茅　柳宴
燐火や今朝は霜おくかれ蓬　牧童
あさ戸明てしも消る迄何もせす　其糟
晉落て梢に丸し月の影　孤白

十月ノ望

から崎の鮒煮る霜の月見哉　北枝
鶯の女の世をあまりなる姿哉　蕉下
篝火絕て鴨落る夜の寒哉　楚常
舟よせて立ては足見ん都鳥　雨邑
山茶花や蝶のをらぬも靜なり　李東
山茶花やさすかふりさす庭の雪　幾葉
水仙はほの咲篭のみそれかな　楚常
種馬の駒待あはすあられかな　同
さむしろや疊ふりおく旅芝居　朱花
曙やひかしも桶もうす氷　萬子
有明の其まゝ氷る盥かな　字路
行道の音おもろしき氷哉　孤白

しほりつきたる涙さへうき　州
ちつくりとあたま結ける袴着に　枝
雪はつもれと去ぬ物買　童
臍の垢ほり盡したる世の中や　州
のぼり〳〵て淀の晝船　枝
水雲は島のうねを作るかと　童
式部か夢は泣づ笑ふつ　州
月花は男なふりと詠むへき　枝
酒とりにやる春の蛤蜊　童
鴈歸る鉢ふせ師あれやらん　州
宿の二階の裏はみな山　枝
いつの日か障子に張し人歩帳　童
額もぬかす角入レてより　州
唐の芋料まとひし夕間暮　枝
かさある月の雲にかきはす　童
肌寒くなえたる衣のうすよごれ　州
つるし〳〵とならす鰐口　枝
夏來ては葉さまにくさる赤椿　童
小歌計のあかる所化寮　州
さかせともとれぬ釣瓶に草臥て　枝
行燈とほす頃のむら雨　童

怨靈の段讀返すむかし本　州
涙もろける里の肝煎　枝
いさかひてのかれ行らん後つき　童
灸する日さもいへは風ひき　州
花の香の太秦迄も押移り　童
うかさはなかぬ小鳥鷺

琵琶五吟

凩やいつことをならす琵琶の海　牧童
西もひかしも燕引空　乙州
道草の旅の牝馬追かけて　小春
足の灸のいはひかへりし　魚素
さかやきの湯の涌かぬる夕月夜　北枝
髭籠の柿を見せてとりおく　童
陣小屋の秋の餘波をいさめかね　州
あたなる戀にやとふ物書　春
埒明ぬ禰に歩みを運ひかけ　素
池のすほんの甲のはけたり　枝
橋普請木の切レさかす役に付　童

遊女四五人田舍わたらひ　曾良
落書に戀しき君か名は有て　翁
髮はそらねと魚くはぬ也　北枝
遣の糸とるも中〳〵罪ふかき　曾良
先祖の貧をつたへたる門　翁
有明の祭の上座かたくなし　北枝
露まつ拂ふ籙の弓竹　曾良
秋風は物いはぬ子も涙にて　翁
白きたもとの續く葬禮　北枝
花の香は古き都の町作り　曾良
春を殘せる其仍の箱　翁
長閑さやしらゝ難波の貝つくし　北枝
銀の小鍋に出す芹燒　曾良
手枕にしとねのほこり打拂　翁
うつくしかれとのそく覆面　北枝
つき小袖薰賣の古風なり　翁
非藏人なるひとの菊畑　同
鳴ふたつ臺にすゑても淋しさよ　北枝
あはれに作る三ケ月の脇　同
初發心草の枕に修行して　翁
小畑も近く伊勢の神風　同

疱瘡は桑名日長もはやり過　北枝
雨晴くもり枇杷さはる也　同
細長き仙女の姿たをやかに　翁
あかねをしぼる水のしら浪　同
仲綱か宇治の網代と打詠　北枝
寺に使を立る口上　同
鐘ついて遊ん花のちりかゝる　翁
醉狂人と彌生暮行　筆

柿喰三吟

八朔や脾の臟つよき柿喰ひ　乙州
だゝくさにつむ雜木のから　北枝
つゝり虫靜に見れは動き出　牧童
旅の月夜は物たらすなり　州
頃の點取ともゝ巻からけ　枝
麁言つく人の顏をしろ〳〵　童
楞陰馬の燒鐵ふすふらせ　州
盆の李を置こぼしけり　枝
入御饌に跡戻りして覗くらん　童

相撲はすけと祖宜のぬるさよ　枝
はへ〳〵と秋の空なる赤とんぼ　睡
はつみもぬけてものおもふ比　川
花見よと局かしらにいさなはれ　爾
こたつふさけは廣う成ぬる　東
照降も志どろもどろに春めきて　童
鼻につきたる旅の燒魚　睡
山道の草鞋ふなりに作りかけ　枝
淚は敦賀の磯にうつ也　爾
藪いしやのとろゝはけたる箱なから　川
また仲人を志そこなひたり　童
戀種のとはぬ事迄云通し　東
月夜烏も寐ほれ行らん　枝
身にしめる風より蚤はとらへられ　睡
とこやら芋のわるき腹あひ　川
とり立てかりに連歌の草の庵　童
鶴見に出る人はさはかし　東
風かはる夜は星影のきらめきて　爾
ふすふりかちに木綿ねり揚　睡
起るにも寐るにもとらぬ角頭巾　枝
いらぬもの迄かさぬなりけり　童

溝きはの花に後地を盛出して　川
春の小鮒の口ならふ見ゆ　爾

元祿四年卯月日

賀陽庶人北枝



晝寐せぬ日のくせのむか腹　州
むら薄おほふ隣の味噌くさき　春
無欲にまつる聖靈の棚　素
布袋にも能似し人の踊出　枝
伏見の月のむかしめきたり　童
花はちる物を見つめて涙ぐみ　州
人は思ひに角おとす鹿　春
春の日に開帳したる刀自佛　素
交〳〵にたかる飴うち　枝
馬盥額に成まてやり置て　童
越の毛坊か情のことはさよ　州
月の前痛む腹をは押さすり　春
扨〳〵野邊の露のいろ〳〵　素
簀戸の番烏帽子着なからうそ寒く　枝
ゆるさぬものか妹か痘瘡　童
うつくしき袂を蠅のせゝるらん　州
倉打こほす郭公かな　春
醉狂は坂本領の頭分　素
松にきあはす辛崎の茶屋　枝
初しくれ居士衣かふる折もあり　童
吹て通りし夜の尺八　州

旅枕志らぬ亭主を頼みにて　春
藥を削る床の片隅　素
うくひすは杜子美に馴るゝ花の陰　枝
山と水との日々のはる　童

霜六吟

人の手の霜の降る夜に寄にけり　四睡
洗ひすとせる河豚は味なき　北枝
鷹宿の壁も疊もよこされて　紅爾
木賊つりおく音はさら〳〵　漁川
あの月は耳にかけたらかゝるへき　牧童
秋の夕を頭ならふす　李東
幾度も小鯛ねきりて買もせす　筆
尿の馬を行ぬけにけり　睡
山科の諚所になれは衣着て　枝
まつなけ出すかれの状箱　爾
水風呂を跡の先のと長ひかせ　川
垂井ね深ときけはゆかしき　童
時々は月にきしくる燕にて　東

さら〳〵と霰降なり　水
乘物て和尙は禮にあるかるゝ　堂
たてこめてある道の大日　蕉
撲揚けて水田も暮る人の聲　水
莚片荷に鯨さけゆく　蘭
不斷たつ池鯉鮒の宿の木綿市　蕉
どを抱へこむ土間のへつゝゐ　堂
米五升人がくれたる花見せむ　蘭
雛子のほろゝにきほふ若草　水

草庵の留主

冴そむる鐘そ十夜の場の月　杉風
志のひ返しにのくる擡〳〵　酒堂
高取の御脊乘行霜ふみて　曾良
朝のいとまの提たはこうる　石菊
人聲も御藏出る日のにきやかに　桃隣
えた垂さかる松は久しき　宗波
中形の半着もものも旅馴て　筆
其まゝつくる鱠一皿　風
蓮の葉はちいさき岸の杜若　堂

地を摺はかり駕籠の振袖　良
五六人天台坊主いろめきて　菊
太刀なきなたの光る塀こし　隣
月出て八つの太鼓を打仕廻　波
蒲團の時宜のあはれ秋の夜　堂
玉子吸顏もおかしき濁り酒　風
壹歩いれたる細布はなさぬ　菊
花の春小田原陣の前の年　隣
陽炎萬てかはる川筋　波
能因か身は留らぬ雁の聲　良
釋迦に讃する壁の掛もの　風
眞木一駄なくても年は取れけり　堂
節季候さむき雪の編笠　良
出かゝりて茶の湯の客を誘ひ合　菊
島をへたつ吉田岡崎　隣
雨がたき空に月澄鱗雲　波
迎へがねたる駒のくたひれ　堂
ひやゝかに中宵の花を吹むどし　風
山の内裏の歌もしまさる　菊
糸の塵ほそき指にて擇分る　良
下着の紅に顏のかゝやく　波

深川集

壬申九月に江戸へくだり芭蕉庵に越年してとしきさらぎのはしめ洛にのほりてふろしきをとく

酒堂

深川集

深川夜遊　芭蕉

青くても有へきものを唐辛子
提ておもたき秋の新ラ鍬　洒堂
暮の月槻(ケヤキ)のうつはかたよせて　嵐蘭
坊主かしらの先にたゝるゝ　岱水
松山の腰は躑躅の咲わたり　堂
焙爐の炭をくたす川舟　蕉
祝(ウ)ひ日の冴(サエ)かへりたる小豆粥　水
ふすま掴(ツカ)むて洗ふ油手　蘭
掛乞に戀のこゝろを持せはや　蕉
翠簾(トホ)にみそるゝ下賀茂の社家　堂
寒徹す山雀籠の中返(カヘ)り　蘭
正氣散のむ風のかるさよ　水

目の張に先千石はえてやりて　堂
きゆる斗に鐙をさゆる　蕉
踏まよふ落花の雪の朝月夜　水
那智の御山の春遅き空　蘭
弓はしめすくり立たる息子共　蕉
荷とりに富士の海へ飛こむ　堂
町(名)中(ナカ)の鳥居は赤くきよんとして　蘭
吹もえこらす野分しつまる　水
革足袋に地雪踏重き秋の霜　堂
伏見あたりの古手屋の月　蕉
玉水の早苗ときけは懷しや　水
我か跡からも鉦鼓うち來る　蘭
山伏を切つてかけたる關の前　蕉
鎧もたねはならぬよの中　堂
付合は皆上戸にて呑あかし　蘭

奉行の鑓に誰もかくるゝ　蕉
鼓垣に木やり聞ゆる塀の内　堂
日はあかう出る二月朔日　六
初花に伊勢の鮑のとれそめて　蕉
釣樟若やく宮川の上ミ　蘭

支梁亭口切

口切に堺の庭ぞなつかしき　芭蕉
笹見たき藪のはつ霜　支梁
山雀の笠に縫へき草もなし　嵐蘭
秋の野馬の樣〳〵の形　利合
旅人の睡しに月の明わたり　洒堂
大戸をあげに出る裸身　岱水
雛のたまこの數を産そろへ　桐奚
あらたに橋をふみそむるなり　也竹
緣さす六田の柳堀植て　梁
掛菜春めく打大豆の汁　蕉
細かなる雨にもしほる蝶のはね　合
錯かなくる空坊の樣ン　堂
ばら〳〵と錢落したる石のうへ　水

酒て乞食の成やすき月　蘭
行雲の長門の國を秋立て　堂
露に朽けむ一腰の鉐　梁
西日入ル花は庵の間半床　竹
苣の二葉のもえてほのめく　奚
みやこをは去年の行脚に思れて　合
見にまたるゝ釋迦堂のくれ　堂
咲初て忍ふたよりも猿すへり　蕉
鳥のなみたか枇杷のうすいろ　蘭
凡卑して鎖すさもなき旅の宿　奚
清げに注連をはゆる社家町　竹
日盛に鯔賣聲を夢こゝろ　堂
みよしの房の双ふ川口　梁
水つきの稲のしつくに肩寒し　合
はえ黄みたる門前の坂　蘭
皮剝の物煮て喰ふ宵の月　蕉
上毛吹るゝしろほろの鷲　奚
谷つたひ流しかけたる竹筏　竹
太刀持はかりふたこゝろなき　堂
物音も靡靜におろしこめ　蘭
盆に算ゆる丸藥の數　梁

祭見る向ふの見せの竹すだれ　鱗
背はら〳〵とひらく傘　風
あの男やらしと路をたてふさき　堂
駿河の田植ゆり輪いたゝく　貞
長持に注連ひらめかす花の旅　菊
雲雀鳴たつ聲もにこらす　淡

二日とまりし宗鑑か客煎茶
一斗米五升下戸は亭主の仕
合なるへし　酒堂

洗足に客と名の付く寒さ哉
綿舘双ふ冬むきの里　許六
鷦鷯階子の鎰を傳ひ來て　芭蕉
春は其まゝなゝくさも立ッ　嵐蘭
月の宮氷ものこる小鮒賣　六
築地のとかに典藥の駕籠　堂
相國寺牡丹の花のさかりにて　蘭
椀の蓋とる蕗に竹の子　蕉
西衆の若堂つるゝ草まくら　堂
むかし咄に野郎泣する　六

きぬ〳〵は宵の踊の箔を着て　蕉
東追手の月そ澄きる　蘭
青鷺の榎に宿す露の音　六
ふたりの柱杖あと先につく　堂
乘掛の挑灯しめす朝下風　蘭
汐さしかゝる星川の橋　蕉
村は花田つらの草の青みたち　六
塚のわらひのもゆる石原　堂
薦僧の師に廻りあふ春の末　蕉
今は敗れし今川の家　蘭
うつり行後撰の風を讀興し　六
又まねかるゝ四國ゆかしき　堂
朝露に濡わたりたる藍の花　蘭
よこれしむねにかゝる麥の粉　蕉
馬方を待戀つらき井戸の端　堂
月夜に髮をあらふ揉出し　六
火とほして砧あてかふ子共達　蕉
先積かくるとしの物成　蘭
うつすりと門の瓦に雪降て　六
高觀音にから崎を見る　堂
今はやる單羽織を着つれ立　蘭

鎌入れぬ山は公事なき花の春　正秀
長芋の芽のもゆる赤土　臥高
里裏のすゞみ起せは去年の雪　野徑
かすむ夕部の鼠とる犬　昌房

松の中

鳥の鳴やむ岨の若葉かな　曲翠
おぼろの月の椿つら〳〵　洒堂
新簀子先二疊敷く嗣生來て　同
赤手すりたる馬士の佞言　翠
晴かゝる節句の朝の天氣相　同
餅ふこの鮎をあくる滿付　堂
深草はをなこはかりの下屋敷　同
伏見の戀を晩鐘にきく　翠
錢の利を志めて百つゝならへ置　同
掃とむすこかてゝをおなつる　堂
春先に田の荒仕事隙明て　同
鼠の穴をふさく二ツ月　翠
花啖と鳴鵐のひよ〳〵と　同
晝は衣をつらむ風呂敷　堂

佗しさや甲斐の夕けの小麥餅　同
志とろに生へて赤き雞頭　翠
類當をはつして月を打詠メ　同
惡七兵衛かけきよか秋　堂
世の中は手間もいらすに年寄て　同
さま〳〵かはる月額の形り　翠
通天の紅葉をちらす初時雨　同
筏に切し大根の湯煮　堂
追おろす犬も疊の上に寐て　同
山雀籠のかゝる析釘　翠
菊やりて若衆〳〵となふらるゝ　同
戀もがさつに塀下の月　堂
また暮ぬうちより藥師押合て　同
ところてん喰こはり立しま　翠
笠縫の里とみえたる竹の皮　同
何を心に行ゝ子鳥鳴　堂
待宵の身をもたえたる四ツの鐘　同
ほして干かぬる綿の下帶　翠
逗留の內をあかれて口おしき　同
門に立添ふたそかれの空　堂
森の花甍見えたる增上寺　同

花さかり御室の路の人通り　奚
麥と菜種の野は錦なり　合

九月廿日あまり翁に供せられて淺草の末嵐竹亭を訪ひて卒に十句を吟ず興のたえん事をおしみて洛の舊友をもよほしそのあとをつく

苅かふや水田の上の秋の雲　洒堂
暮かゝる日に城かゆる鷹　嵐竹
衣うつ麓(フモト)は馬の寒がりて　芭蕉
糞(こへ)草けふる道の霧雨　北鯤
古戰場月も靜に澄わたり　嵐蘭
しはし見送る我客の笠　堂
さし汐の門の柱に打よせて　竹
窓を明れは壁に入虹　蕉
巻藁に肩休まするはづし弓　鯤
水仙徘たる房州の傳手　蘭
餅つきの釜まはし出す雪の上　(膳所)昌房
塲にかさなる鰤の桶漬　正秀

小作りな内儀かしこき初あらし　臥高
雞(トリ)も鳴など月待の戀　探志
懷にこぼす泪のやゝ寒さ　遊刀
とつていたゝく三方の熨斗　野徑
花の陰射來(ヨコ)す鏑(カブラ)防くらん　(京)去來
鎧にはねのあがる春雨　同
暖に遊ふ狐の耳かきて　野童
池の小隅に芹の水音　同
燒付る蛤茶屋の朝の月　吏邦
風に實のいる賤か破れ戶　同
老僧の帽子つれたる秋の昏　景桃
太皷聞こゆる源太夫の宮　同
六月は綿の二葉に麥刈て　素牛
たはこ飲子の北座淋しき　同
操(アヤ)をりの腰にさけたる操の總(フサ)　(大坂)之道
時雨に馬を下りる冬の日　同
枝作る松に階子をさしかけて　車庸
二軒並て家のあたらし　同
聞えまき加賀の藏本ゆるさるゝ　探志
女夫かたふく木庵の禪　遊刀

有磯海

序

はれの歌讀むと思はゝ、法輪に詣て、所から薄を詠よとおしへ、雪見の駒の手綱しつかにして、澗橋の邊にあそへと示しけん、よくも風雅のわり符を合せて、向上の關を越過ける事よ、然れともつく〴〵おもふに、是等みな文吏官士の上にして、たまさかに市塵を離るゝ便なるへし、平生身を風雲に吹ちらして、心を大虚にとゝめむ中には、限もなき江山に足ふみのはして、行先毎の風物をあはれみ、雪ちるやほやの薄と、しほれ果たる風情いかてか其法輪澗橋にのみかたよらんや、されは芭蕉庵の主、年久しく官務の身をもぬけて、しはしの暇の遊にも、膝あたゝまる暇なく、所〳〵に病床の曉を悲しみ、年〻に衰老の歩を費して、またとなく古ひたる後姿には引かへて、何ことのあたらしみは、折〳〵に人の唇を寒からしむ、一年越の幽蹤に杖を引て、秋を山路のわたくし雨にしほり、海岸孤絶の風吟心を腦されしかと、聞入へき耳持たる本末も見えす、辰巳あかりの棹歌のみ聲〳〵なれは、むなしく早稲の香の一句を留て通られ侍りしを、年を經

鹽に音なき鳥の囀り　翠

＊　＊

忘年書懷　素堂亭

節季候

節季候を雀のわらふ出立かな　芭蕉

餠舂

餠つきやあがりかねたる鷄の泊屋(トヤ)　嵐蘭

衣配

文箱の先模樣(セヤウ)見る衣くばり　曾良

佛名

佛名や饅頭は香の薄けふり　酒堂

歳暮

腹中の反古見はけん年のくれ　素堂

餘興

としわすれ盃に桃の花書ン　酒堂

膝にのせたる琵琶のこからし　素堂

宵の月よく寐る客に宿かして　芭蕉



有磯海

あきのまき

早稲の香や分入みぎは有そ海　芭蕉

此句は元祿二年奥羽の行脚に春夏を送り秋風たつ頃三越ちにかゝり處／＼の風吟有けるなかに當所の句と申つたへける

芭蕉翁當國の行脚も志らす其程を經て其句をまふけ其人を慕ふ

早稲の香や有そめぐりのつゑのあと　涙化

早稲の香や有その濱の放れ駒　よみ人しらす

わせのかやゝとひ出るゝ庵の舟　丈草

わせのかや田中の庵の入出入　曲翠

わせのかや田中を行は弓と弦　支考

芭蕉翁の伊賀へこし給ふを洛外に送りて

先入や山家の秋をわせの花　惟然

行人や門田のわせの籾つもり　之道

田隣へ早稲かる志きの日和哉　正秀

早稲干や人見え初る山のあし　去來

世のうさや早稲つみたるゝ舟の垢　エツ中 呂風

刈入てうらやまれけりわせつくり　同 嵐青

米になる早稲の祝や秋露入　同 其纖

早稲の田に刈すかさるゝ小村哉　同 林紅

山水やまた初秋の香薫哉　句空

病中

秋の細かうへむや／＼足せゝり　カヽ 秋之坊

すか／＼と西瓜切也碗のかせ　イカ 陽和

七夕や秋をさたむるはしめの夜　芭蕉

酒もりとなくて酒のむほしむかへ　去來

聖靈も出てかりのよの旅寢かな　丈草

露もるや聖靈棚の瓜なすひ　サカ 荒雀

玉棚のはしとをのほるすゝめ哉　小倉山僧 閑夕

て浪化風人の吟髭を、此道に撚られしより、あたりの浦山頭をもたけ、翠をうかへしかは、いつとなく此句の風に移り、浪に殘りてえもいはれぬ趣の浮けるにそ、ひたすらに其境のたゝならさりしことを、おしみ感せられけるあまりに、穗を拾ひ葉をあつめて、終に此集の根さしとはなりぬ、この頃洛の去來をして、あらましを記せん事を蒙る。かゝる磯山陰をも、たとり殘す方なくして、かゝるとの葉をこそ、あまねく世の中にも聞えわたらは、猶ありとし國のくまくには、いかなる章句をか傳られ侍るにやと、思ひつゝくる果しもなく、ありそめくりの杖のあとを、したはれけん、筆の跡も又なつかしきにひかれて序。

懶窩埜衲丈艸謾書

とりかこの曙はやし秋の聲　エツ中 平水
木啄の入まはりけりやふの松　丈草
日當にせゝくりなかすうつら哉　正秀
馬夫にふみ立られてなくうつら　臥高
粟の穗のひくに入たるうつら哉　惟然
薪ともならてくちぬるかゝしかな　正秀
しろ人になりてわかるゝかゝしかな　惟然

太宰府を通りけるに女とも
のおほく集りて稲こきける
中に申遣しける

一夜さもゆるしてねせぬかゝし哉　長サキ 卯七

かへし

うき人の袖引やふるかゝしかな　よみ人しらす

奈良の鹿　二句木辻に宿りて

門立のたもとくはゆる小鹿かな　其角
篝の火を便にねるや鹿のなり　セヽ 探志
啼はれて目さしもうとし鹿のなり　丈草
ひさ見せてつくはう鹿に紅葉哉　半残
かんせきに四足そろゆる小鹿かな　彦根 汶村

西搭に宿して二句

明星や尾上に消るしかの聲　曲翠
いすまひをふつと直すや鹿の聲　蕉葉

秋日游小倉山　同詠鹿角

振あけて薄に立や鹿の角　野明
諸角に月いたゝきて出鹿哉　サカ 來兒
鹿たてや角かたむけて志のひ足　荒雀
たゝきあふ角見てなくや鹿の聲　闇夕
飛鹿の角にもつるゝすゝきかな　爲有
臥處かや小萩にもるゝ鹿の角　去來
あつさをも志のきつけゝり稲の稲花　セヽ 遊刀
禪門の後手さむし稲のはな　大坂 芝栢
出揃ふや稲の田つらのさんさふり　尾州 露川

なか月の末大井川をわたり
て

いつしかに稲を干す瀬や大井川　其角
猿のこの頃はやる晩稲かな　支考
稲村の鶴を見ておるすゝめ哉　孤屋
稲といふ名もきかゝりやいもか門　史邦

嵐蘭子をいたみて

なき出して米こほしけりいな雀　智月

籠かきの佛見事や玉まつり　京 風國
尼壽貞か身まかりけると聞
きて
數ならぬ身となおもひそ玉祭り　芭蕉
ならの片わきにやとりて
うら盆や宗のうらとふはかまゐり　イカ 卓袋
三浦には九十三騎やはかまゐり　乙州
とぼしては風にけさるゝ切籠かな　セヽ 蟬鼠
村としに見せてやきのふ高燈籠　ミノ 淵貝
明る夜をとらて仕舞や下手相撲　サカ 野明
物との御物ににたり相撲取　曲翠
勝まけをわすれて立や相撲草　長サキ 錦水
電の山を出かぬる夜あけ哉　嵐青
電や門の茶による物かたり　大坂 伽香
朝かほに野邊のちきりや稻光　サカ農 爲有
あさかほや宵のかやりの燒ほこり　セヽ 昌房
蕣や梢に垣の遣あまり　杉風
あさかほや水の引たる堺のきは　越中 平交
おくれしと木槿の花のみたれ咲　土芳

女郎花ゑのころ草になふらるゝ　野童
荷の端もかけにとさすや女郎花　イカ 尾頭
駒買に出迎ふ野へのすゝき哉　セヽ 野明
花薄たけをのひ切るあきの雨　關河
歌枕見に行人の從者にとら
せける
花すゝき達者にあるけ十文字　イカ 車來
比丘定
かまくらの女郎はすゝ竹の
つめたに織ものゝ手おほひ
うつの宮かさをきりゝとめ
されて
秋のゝを舞臺に見たる薄かな　セヽ 萬里女
世の中をかう見て行ん花野哉　胡故
鷄の尾につられけり初あらし　荊口
芭蕉庵のるす
立まつ春の用意やちり柳　桃隣
初かりや比良て追つく帆懸舟　木節
行かりの友のつはさや魚の棚　惟然

まゝおどろきて立かへるとて
宵の間をくつとねてとる夜寒哉　臥高
かへし
あんどんをけして引込よさむ哉　イガ 正秀
木枕にはなかみあつる夜寒かな　風麥
友すれの舟にねつかぬよ寒かな　ミノ 丈草
生柴をちよろ〳〵させて碪かな　千川
手の下に居るやいなごのちからおし　岱水
秋もはやくるゝと居らす飛いなご　風國
すゝむしの啼そろひたる千くさ哉　カヽ 桃妖
すゝむしに客を通すや廻り縁　セヽ 兒龍
燈明に蟲もよらぬやひえの山　蘇葉
聟けれど穴にもなかすきり〳〵す　丈草
薬屋の一うるをひやあきの雨　李由
菊の香になくや山家の古上戸　北枝
草木綿の頃さひしや菊の花　支考
桃かくのたらぬ住居やきくの花　李由
菊の花見に來てゐるかいしたゝき　京 可南女
蒼濱にのそみたえけりきくのきし　嵐雪

九日に菊をたねとやおろ椿　セヽ 待彼
松茸やふとをおろしてかほくらへ　爲有
天王寺に遷座ましましける
善光寺の如來を拜して
みた頼むこよひになりぬ後の月　之道
あるほどの節句仕舞て月見哉　江戸 八桑
寒やみの火燵もほしや後の月　斜嶺
蔦の暮や貝からひろふ岩の間　臥高
彦山に詣同國五百らかんを
拜み侍るとて樵のかよひけ
る紅葉谷といふところに入
みちとほと五六里通にほへ
の猶も見えず同所に寄侍り
ける
秋の道一日かなしもみち谷　長崎 田上尼
かへし
數十里は雲も燃けり紅葉谷　仝 魯町
澁柿やゝふのうちから山の路　呂風
晝中にやねからおつるふくへ哉　江戸 呂國
行秋にきるほどもなき袷かな　牡年

粟畑の奥まであかき入日かな　イセ空芽

暮待て盛見せけりそはの花　セヽ雨汀

狐火のしらけて過やそはの花　荒雀

口取も咳氣こゑ也駒むかへ　曲翠

京かさは皆駒曳のもとりなり　涙化

一番にかゝしをこかす野分哉　許六

みのむしの家くつしたる野分哉　句空

日より能なるとてよるの野分哉　涙化

くすの葉にふきり／＼て野分哉　小松塵生

風の俣をてり付にけり秋の空　長サキ卯七

電の切れて殘るか三日の月　ミノ文鳥

待宵や流涙のうへの秋の雲　惟然

伊賀山中にありて。

名月や花かと見えて綿はたけ　芭蕉

明月に蓮のきりや田のくもり　仝

野山にもつかて晝から月の客　支草

名月や野山をあしのつゝくまて　江戸太大

めいけつや馬より下るせたの橋　彦根者如元

名月やいかり打込むなみのくま　セヽ正于

明月や舟にもたえす岩の上　長サキ野青

日てりにはあふなけもなき月見哉　イカ買山

賑な内を出て來る月見かな　利牛

名月や宵は女の聲はかり　木節

明月や里の匂ひの青手柴　大ツ木枝

不破の宿に寢て

目利してわるい宿とる月見かな　如行

明月や向への柿やてらさるゝ　去來

明月や家貸の外の坪のうち　野馬

飼猿も呼出す庭の月見かな　殘香

明月や御手に文と座頭の坊　左柳

明月にもたれて通るはしら哉　野童

仕舞せく勝手はねせる月見哉　山峰

明月やはら／＼鶴の餓客　涙化

月影にはぬ鯉ねらふ獺師哉　江州關牛村宮城氏

豆腐やゝつとめて月の七つおき　長サキ牡年

おそ／＼とむかへば月の御光かな　智月

やゝさむし早稻のひつちの角芽立　野童

正秀か方へまかりけるに物

一つ謂ほともなく枕引よせ

て共にねにけりやゝふくる

こからしや明星ぬれて三保の松　麥芽
音もなし木の葉のあるゝ社家の庭　八桑
紅葉ちるやねの木の葉や石ましり　イカ 氷固
黄になりて落るこのはや蝶のはね　野朝
あらし山猿のつゝうつ栗のいか　野明息十一歳 小五郎
とんくりのころひ合たり窪たまり　杜年
馬ゑかる麓もかれのゝあらし哉　尚翠
野はかれて砂にすり込うつら哉　イカ 荻子
枯あしや何に打たる蹴干かた　彦根 沸
丸なからけよ嬉しき十夜哉　越中 仙

小倉の常寂寺にて

御命講やあとの月には月の友　葉雀
開山忌となりは留主のいなり山　濱化
夷講我料理してゑらぬかは　幽翠
大屋から先にしてとれゑひす講　嵐青

芭蕉翁の難波にてやみ給ひ
ぬときゝて伏見より夜舟さ
し下す

舟にねて荷物の間や冬こもり　去來
そこ意にや廣間の番も冬籠　ミノ 恕風

炭の火に並ふきんかのひかり哉　北枝
冬籠り炭一俵をちからかな　僧 滄波
炭うりも面出しかぬる嵐哉　カヽ 溫故
口燒や吹草祭りの酒のかん　ミノ 竹戸

洛にのほりて寺社おかみめ
くりけるに淨土の寺ことに
にきはしかりけるをかきの
そきて

口切や講薪煎を筆かしら　正秀
くち切やことし作りしふくへ共　イカ 木導
宿かへてまた土くさき火燵かな　我峯
埋火に根ふとの痛む夜頭かな　汶村
埋火やふとんを通す茶の匂ひ　許六
折かゝし數もかふるもふとん哉　大坂 海動
繕うてやつとさけたるふすまかな　杉風
雑水に琵琶きく軒の霰かな　芭蕉
ねこ島の山田にうつるあられかな　正秀
新田に水風呂ふるゝあられ哉　昌房
白丁の根に吹まくるあられかな　支考
みそるゝや鶏のそくとまり時　平夾

行秋をふらりと蚊屋のつりて哉　史邦

冬

古鄕に高い杉あり初しくれ　荊口
いさかひに根もなき市の時雨哉　正秀
　嵯峨山にあそびて
宇治木幡京へしくれてかゝる雲　曲翠
住よしのま一しくれとくゝるまて　之道
鹽間に結死かゝるしくれかな　如行
やゐふきの海をねちむく時雨哉　丈草
日枝までものほれ時雨のはしり舟　李由
牛馬のくさゝもなくて時雨かな　浪化
志くるゝやもみの小袖を吹かへし　去來
ふる〳〵と晝になりたる時雨かな　臥高
芋ほりに男はやりぬむら時雨　風國
門火たくたもとにやみのしくれ哉　エツ中 闇夕
秋露の持とほしたる時雨かな　平水
五器さへも手當かたしけさの霜　露川

　芭蕉翁の七日〳〵もうつり行あはれさ猶無名庵に偶居してこゝちさへすくれす去來かもとへ申つかはしける
朝霜や茶湯の後のくすり鍋かへし　丈草
朝霜や人參つんで墓まゐり　去來
馬の息ほのかに寒し今朝の霜　セヽ 民丁
霜のくさ裏かへし見る志とゝ哉　江戸 素龍
おく霜に聲からしけり物狂　大阪 呑舟
雜水の名たてに寒し神送り　エツ中 紅朝
此里の牛の聲きけ神おくり　エツ中 木枝
こからしや廊下の志たの村雀　夕兆
こからしや天井はらぬ堂の内　林紅
木枯の更行かたや螺たまり　其纎
　芭蕉翁の送葬に逢ひ侍らんとさかより木曾寺へいそきて
こからしの尻吹すかすす鞍かな　野明
凩や田より田にゆく水のおと　彦根 木導

寒菊のふるこものそく日和哉　ミノ嵐舟
寒菊の隣もありや生大根　許六
日の緣にあたる大根や一むしろ　臥高
すみかまや口付かゆる風のむこ　子珊
河つらや聲吹なかすあしろもり　其繼
河鮑洗ふ水のにこりや下河原　其角

粥をくはねはいな由といへは

蠅ほとの物と思へと大師講　句空

岡崎村に住侍りけるころ

うしなはて落穂をたくや大師講　可南
肝煎の手をはなれけり冬の月　曲翠
かり金や官におくれて寒の入　風國
のら猫の聲もつきなや寒のうち　濵化

大名の參會し給ひけるを二人物の陰よりかきのそきて

正客の行儀くつさぬさむさ哉　野坡

とかんしけるを其大名にかはりてかへし

れき〳〵の本昇たるゝ寒さ哉　利牛
すりこきに眼つく老のさむさ哉　野明

手もたさて机にむかふさむさかな　六戊介雉
まかめたる鏡のかほの寒さかな　イカ九節
いつそふにわめひてかへる寒さ哉　セヽ鼎吹

いたはり侍る頃洛の鴨川の邊に旅宿して

ふし折離の聲高になる寒さ哉　桂年
をし鴨のつくへき水の見晴かな　林紅
筑摩江やたつへをのそくかゐつふり　汶村
白濱や千鳥あつまるあみのあと　ヒヽ巖房
鹽燒の夜働になくや濱千鳥　サヽ川支
客たてゝ跡の仕舞や小夜千とり　左次
あら鷹もその鷹匠もつきんかな　李迪
猿のひよつと喰へし鉢たゝき　野童
雉子の尾にせはき師走の構殿哉　雁生
錢湯の朝かけきよき師走かな　イカ惟然
煤掃や二階をおろす古かはこ　イカ望翠
すゝはきやかしらをつゝむみなとかみ　ヒコネ賁邁
煤掃のあかにかくるゝ數寄屋哉　史邦

春とゝもに旅立んさいふ人のもとにて

はつ雪や人の機嫌はあさのうち　桃隣
初雪も飛石ほどの高さかな　斜嶺
はつ雪や人まつ市の松かゝり　之道
芭蕉翁の住捨給ひける幻住
庵をあつかり侍りけれは
はや雪や去年も山で焼たうふ　セヽ靈椿
初雪や小坂にはやくすへりみち　イカ配刀
はつ雪や奥の洞屋の雪なだれ　李由
日枝一つ前に置たる雪見哉　乙州
川こえて身ふかひすこし雪の鹿　臥高
ひる通る岡部の鹿や雪あまり　魯町
雪の原ほつこりとなる木かけ哉　ミノ此筋
雪の夜も湯かた一つや酒まふて　奈良含粘
ゆきふりや堤にかゝる片ゐさり　大坂舎羅
砂川の雪をちからやむまの沓　ヒヽ嗣石
から鮭の目つらも見えす舟の雪　正秀
鴨の背にゆふ日やのこす雪のあし　セヽ支幽
かりよする鷹かこや雪のあさ　惟然
はたれ雪ひらりとしてはみそさゝい　イカ新甫

さゝ一葉ちりとなりけり雪の上　土芳
ほつかりとわれて落けり笠の雪　イセ芦本
笠の雪いくひになりておしまるゝ　卯七
米貳俵おろしおきけり雪の中　彦根胡風
雪空や片隅さひし牛のるす　丈草
かはゆさや雪を負手でかへる猫　セヽ堀江氏妻
應〳〵といへとたゝくや雪のかど　去來
大雪や隣のおきる聞合せ　浪化
手水湯や流しそこなふ雪の上　セヽ磐鳥
御築地のうちをおかみ侍り
けるに如意か嶽よりいつる
月の南門にかゝりてかきり
なくめでたけれは
から花に月雪こほすとひらかな　嵐雪
竪横にをらせて見はや雪のいと　支考
雪うちや首らら尻に瀧のいと　荒雀
御坐そりや先に立たる道具持　羽州不玉
あし代や屋くらの下のうすこほり　許六
茶の花や鶯の子のなきならひ　浪化
小坊主の上下きたり水仙花　尾州素覧

山鳥と小松の殘る燒野哉　イカ洞木
やまとりの樵を化す雪間かな　支考
曉の雉子にさめけり猿のかほ　關河
やまうらの夕轟きやきしの聲　イカ空芽
雉子なくやほろゝは消る瀧の上　車來
子をつれて岩にふりむく雉子哉　セヽ魚光
つゝくりと雉子つくなるや木爪の花　露川

源平の古戰場をたつねて兵
庫にいたる

便船や雲雀の聲も聞くもり　吏邦
四五尺を雲に入とや雲雀かこ　千川
志ら雲を瀧へけ落す雲雀哉　萬里
むそわるゝ夢のかしらの野駒鳥哉　卯七

いせより江府へまかるころ

鴈の聲朧〳〵と何百里　支考
波先や勢田の水行朧月　猿雖
朧夜に引や網場のからす貝　乙州
野馬やあとのさひしき小大名　李由
馬の尾に陽炎ちるや輩はたこ　惟然
かけろふや輩より前はあくのかす　其繼

陽炎やしたは流るゝ水なから　平水
陽炎のもえて田にちる椿かな　曲翠

老鏡

九月より春まて花の老椿　イカ風麥
見おとるや里に植ては山つはき　イカ貢品
糸の添ふ椿は道てもけにけり　利牛
大佛やよこねもならす御入め川　不玉
春雨やはたこもとはて奥坐敷　正秀
水風呂に茶をはこはせて春の雨　曲翠
鶺鴒の尾にたゝきたすつくしかな　セヽ嵐三
置土やへきおこしたる踏の塔　江戸子祐
茄子なへもらはん雨のしめりかな　江戸壺蛙
ゐのしゝのやふほりかへすのひる哉　野明

女のもとより白魚を人のも
とにおくるとて

白魚や道て氷らん飛鳥川　よみ人しらす

ときこえけれは其人にかは
りて

志ら魚に透ても見えよ胸のくま　曲翠
志ら魚のすへり落れたる硯かな　木導

春かけて旅の萬やとし忘れ　惟然
牛の子の角や待らんとし忘れ　荊口
節季候や夕日につゝく袋持　濵化
此句は夢中に句作り侍りけり
盗人に逢たよも有年のくれ　芭蕉

春

むつくりと皿の枯木も霞けり　杉風
宿うらや風すけましき梅の花　土芳
痩はてゝ香にさく梅の思ひかな　去來
梅かゝのかみのそりぬにとまれかし　句空
梅が香にはつんて反や折の鋼　臥高
伊賀の城下にうにと云もの
ありわるくさき香なり
香にゝほへうにほる岡の梅の花　芭蕉
梅かゝや風呂屋のみちの一たより　越中 濵化
むめか香や雪かてひとる軒の晴　夕里

掃切て梅か香遠きひろまかな　江戸 凉葉
梅かゝや別當をおくる村の口　呂風
ゐかるべき松原も有むめの花　如行
笠ぬきて顔洗ふたる野梅哉　素覽
手水場のまたほのくらし梅の花　嵐青
梅さくやまたひをむしの朝ちから　荊口
ちりゐほやはせうる里の梅花　許六
竹簀戸のあほちこほつや梅のはな　丈草
ちる時をさはかぬむめの一重哉　桃隣
七種や唱歌ふくめる口のうち　北枝
ならへ置膳になつなのひゝきかな　我峯
數〳〵は女房のせわのなつなかな　風睡
鶯の小かろきなりややふ椿　微房
別支考
鶯や尻をもためす暇こひ　イセ 許徒
化粧する果やなき出す猫の戀　史邦
猫の戀風のおこらぬ斗なり　風國
更る夜を水のむ猫の別かな　川支
背戸中はさえかへりけり田にしから　丈草
是までか〳〵とてはるのゆき　エッ中 支考
出替や酒の使の名のはしめ　路健

居はなれぬは従者をかへし
て中道しける

つれまつやとろ／＼坂の薄すみれ　尾頭（イカ）

かへし

盃の中にさかせんつほすみれ　示蜂（イカ）

山吹や水そこ見こむ馬の上　石推（イカ）

やまふきに牛の尾をふる道もなし　荻子（イカ）

五六反志さりて見るや松のふち　爲有

やはらかに濁るか藤の雨志つく　木枝

狼のによろりと出るや藤の花　荒雀

山ひとつ青みも見えぬつゝし哉　文鳥

梅かえにこそ鶯は巣をくへ

もすの子をそたて揚るや茨くろ　素（セ）顰女

三月盡

何番の花てつくるや春の空　野童

夏

ほとゝきすたれに渡さん川むかへ　丈草

時鳥二ッの橋を淀の景　惟然

ほとゝぎすせたは鰻の志まん哉　許六

頭のうへにむせふや摩所の時鳥　支考

啼ころふ曉あらんほとゝきす　北枝

竹の子もひかれておそし時鳥　李由

麥めして將明客やほとゝきす　之道

木を立て木にうつる間そ時鳥　其仙

句空法師か山寺に來りける
をとゝめて

豆腐こそなのらぬ山はほとゝきす　浪化

かへし

ほとゝきす山に付界もなかりけり　句空

雀よりやすきすかたや衣かへ　雪芝

衣更雑巾ひとつ出來にけり　之道

鶯に糊ちらしけりひとへもの　呂風

竹の子や風呂やの土のあたゝまり　朱廻

たけの子や皮つきこはし甲武者　智月

許六か江戸よりやかてかへ
るへきといひこしけるに申
つかはしける

身の春を飛んで見するや池の鯉　殘香
春かせや蝶のうかるゝ長廊下　林紅
イカ
はるかせの空にのほるやくれ木つみ　配力
イセ
市中や馬にかけ行いかのぼり　園友
花鳥の空にいそくやいかのほり　土芳
エツ中
あひおひの姫とつるゝや雛あそひ　宇白
イガ
煤けたる壁ほのくらし紙雛　雪芝
土器のはくもゆりこせもゝの花　其繼
鷄の相手もなしやもゝのはな　殘香
菜畠や境てりあふもゝの花　浪化
はれ物にさはる柳のしなへかな　芭蕉
狙の鞭をなかすやなきかな　曲翠
五六本よりてしたるゝ柳かな　去來
をしよせてたはぬる程の柳哉　樸芝
待花に小さむい雨のあした哉　杉風

櫻をはなと思ところに世ぬ
そはなにねぬはるの鳥のこ
ゝろよ

花にねぬ此もたくひか鼠の巣　芭蕉
片尻は岩にかけけりはな莚　丈草

一本をくるり〳〵とはな見かな　浪化
花見にもたゝせぬ里の犬の聲　去來
ちかつきになりてくつろく花み哉　正秀
喰物に喰入やつもはなみ哉　嵐蘭

寺中花

小坊主にしかられてのく花見哉　其繼
ぬり笠に花の末うつあらし哉　來儿
あつらへの天氣也けり花くもり　史邦
物干や夜着かゝへ出て花の雲　岱水
花の雲世を一はいの入日かな　卯七
鳥追て花つかみ行す鷹哉　想風
かし家や花のさかりに門の錠　風睡（嵯峨農十二才）
花ちりて二日おられぬ野原哉　市
ミノ
御封切る廊下の口やいとさくら　支考

東叡山

八ツ過の山のさくらや一しつみ　其角

日枝のやまにのほりて

悪僧の弓はるあとや山さくら　野明
立臼の木取て有やゝま櫻　孤屋
野遊くれかゝりぬれど猶獨芝

蚊の中を軒つたひ行螢かな　イカ 車文

露川か等さやまて道おくりしてともにかりねす

水鶏なくと人のいへはやさや泊り　芭蕉

くる音は麥わらかつく水鶏哉　イカ 玄虎

うしろより戻りかゝれはなくゝいな　半殘

水札なくや懸泝したる岩の上　去來

よし鳥や日のさし廻る假の庵　錦水

片壁にはやためらふや蚊のやどり　イカ 蛙弓

蚊の聲の中にいさかふ夫婦かな　李由

蚊やり火や麥粉にむせる咳の音　許六

訪農家

行水の下たき立るかやりかな　野明

かへし

客ともにつれてけふたき蚊やり哉　爲有

妻をうしなひける頃

子をねせて頼む人なき蚊遣かな　膳所 忙玄

やうやうと涼しくなれはかやり哉　不玉

うたゝねをこかし入けり蚊屋の内　車來

鵜つかひの壹隷の床や蠅の聲　史邦

日のかけをおはえて蠅のさしき哉　長サキ 近習

苦しさや笹葉かけ行牛の蠅　九節

町幅のいんきなりけり京の夏　孤屋

あたりから晝ねの客や夏の亭　桃隣

さしきまてとゝかぬ夏の木陰哉　野坡

月代にゆゝみて蟻か蟬のこゑ　正秀

時々に雜言かましやよるの蟬　句空

降うちや蟬のなかねは物わすれ　子珊

あふ坂やいとゝ鳴き合せみのこゑ　智月

空せみとなるまてなくを仕事哉　乙州

しかみつく力やのこす蟬のから　此筋

すゝしさや爪ふむやみのあせ傳ひ　支考

しふかみに爪の匂ひや市あかり　夕兆

茶ほこりの手をあらははや眞桑瓜　正秀

水かへてこすほとすゝし眞桑瓜　游刀

水仙のとちはりかへしあつさ哉　舞芝

馬の目のおろかにくるゝあつさかな　カヽ 牧童

髯の手のひゝもかはるゝあつさ哉　野明

白砂に雀あしひくあつさかな　遲望

立合て牛うる軒のあつさ哉　探芝

暑き日や馬屋のなかの糠俵　想風

竹の子のきほひや人を待日數　李由

かへし

竹の子の上る競や夜々の露　許六

顔をあけて咲かゝけりけしの花　斜嶺

ぬけ道や垣ゆひ切てけしの花　左次

むまにのる顔おり〳〵や若楓　卓袋

芍藥や廬路をひらけは奥の前　支考

草むせやところ〳〵に百合の花　イセ宗比

人〳〵川崎まで送りて餞別

の句を云其かへし

麥の穗を便につかむ別かな　芭蕉

むき秋は身の置ところなかりけり　風蒼

疱瘡する兒も見えけり麥の秋　越中浪化

麥秋やとんぼうとまる淵の上　和求

麥わらを取かふせけり地藏堂　平交

麥笛やふいて見による師子かしら　イカ魚日

夕雲雀鳴やむ麥のくろんぼう　野童

一朝に降ふつめけり麥ほこり　平水

元祿七年久しく絶たりける

祭のおこなはれけるを拜て

醉顔に葵こぼるゝ匂ひかな　去來

奈良の萬僧供養に詣て片ほ

とりに一夜をあかしけるに

明て主につかはすへき料足

もなければ枕もとのから紙

に名處とゝもに書捨のかれ

出侍りけり

短夜や木賃もなさてこそはしり　惟然

あやめ草茶師のよろこぶ節句哉　木枝

大井川水出て島田塚本氏の

もとにとゝまりて

さみたれの空吹おとせ大井川　芭蕉

うつのやまにて

さみたれや樟にふすふる十團子　左柳

五月雨にもてあつかふははし哉　江戸里東

眞白に鹿の星毛や五月あめ　楚舟

鉢〳〵と留主の間めくる田植かな　示蜂

鳩の巢や螢もかりの足やすめ　越中少年荊口

たゝ一ツやなに落たるほたるかな　イカ寛也

顔つきや藤の裏葉の螢とり　セヽ苔蘇

水うちて跡にちらはふほたる哉　回鳧

涼しさの心もそなしつたうゐし　丈草

紀の藤代を通ける比此處に
三郎重家の末今にありと聞
およひぬれは道より少山そ
ひに尋入侍しに門ついち押
廻し飼たる馬みかきたる矢
の根たてかさりていみしき
ものゝふなり又庭にいにし
への弓懸松とて古木など侍
りけり

藤代やこかしき門〻に立すゝみ　去來
暮まつや白地扇の風あたり　亘品
町禮や袴のひもにあふきさす　曲翠
置さまと書なくりたる扇かな　望翠
水無月をきはたつ雲のたかね哉　靈椿
八雲たつ此嶮嶼を雲のみね　其角

ありそ海集撰たまひける時
入句とも書あつめまゐらせ
けるにそへて祝す

鷲の子よ野分にふとる有そ海　去來

元祿八乙亥歳花老上旬　正竹書焉



上下とひねる枕のあつさかな　魚日
ゆつくりとねたるうへにも暑さ哉　（大坂）遊糸
そろはんも枕數なり竹婦人　（イカ）卯七
夕立に吹ちるものや竹の皮　（イカ）澤雉
白雨や山伏里に入かゝる　萬平
ゆふ立やろちより出る水の穴　望翠
麥かりし夜は猶うすし夏の月　（越中）山紫
われ鐘のひゝきもあつし夏の月　北枝
暑き夜や井戸に水なき夏の月　（イカ）荻子
かやの手に馬追なくや夏の月　（イカ）裾道
夕貌やあるしのしよさのなつかしや　我峯
ゆふかほをくゝり廻るや夏さしき　臥高
夕顔にかんひやうむいて遊ひけり　芭蕉
日さかりの花やすゞしき雲の下　呑舟
おさないに花むしらるゝけまん哉　（イカ）一鷺
くらかりにいつこ喰けり草枕　史邦
なつもゝや一搆つくにかこ竹　空芽
磯きはをやまもゝ舟の日和哉　惟然

淀川晝舟

浦／＼のうしろに實なき榎かな　風蕎

からむしのあさからそこの二葉哉　浪化
種麻やくるりに殘るやけ畠　全仙
やねふきの額しろしや麻頭巾　壽仙
おもたかも田草の數にひかれけり　如行
川狩や村は御藏の藪の腰　嵐青
馬柄杓を岩に割込清水かな　野徑
先馬の背しめし行清水かな　猿雖
我かあとへ猪口立よる清水哉　許六

老懶

暮しはし縁までにしる涼み哉　（イカ）補甫
葛布のきこゝろしれや夕すゝみ　（江戸）買山
嫁つれて涼やせとのま木の上　龜水
とき立る庖丁すゝしすのこ縁　其繼
すゝしさや折ッて見せたる生鯛　臥高
風すゝし膳出しかゝるはな鰹　洞木
出嫌のおされて行や夕すゝみ　仙枝
すゝしさやうか／＼行は行とまり　里東
里の子の乘物のそくすゝみかな　萬平
砂川をわたりてあそふ涼み哉　土芳
すゝしさや水の流の畠なり　蘇葉
涼しさや八人代の田の青み　荒雀

小文庫

冬之部

島田の宿にて　　はせを
宿かして名をなのらする時雨哉

旅宿
はつ時雨戸あけてみれは反歩(タンボ)也　山店
米河岸てきくや穐田のはつ時雨　嵐竹
雷おつる松はかれ野の初しくれ　丈草
食ときにさしあふ村のしくれ哉　去來
板壁や馬の寐かぬる小夜しくれ　史邦

雑冬
冬空やすがもは江戸の北はつれ　嵐竹
ほうづきやとけその山の九十月　史邦
城山に雉子出けり小六月　山店
青き穂に千鳥啼也ひつち稲　史邦
寒菊に野武士も住かわに堅田　同
薫物のもれてやにほふ枇杷の花　同
下苅の数きれいなりつはの花　蓑浩

大通庵の主道圓居士芳名をきくとしたしきまゝにまみえむことをちぎりてつゐにその日をまたず初冬一夜の霜と降ぬけふはなほひとめぐりにあたれりといふをきゝて
其かたち見はや枯木の杖の長　芭蕉

蕉庵師の像に謁
芭蕉會と申初けり像の前　史邦
達摩會やもつそう食の一文字　同
水風呂をふるまはれたる十夜かな　同
御命講や油のやうな酒五升　はせを
上人の鼻にはくおけ御命講　史邦
惠比壽講酢賣にはかまきせにける　芭蕉
ゑひす講あひるも鴨に成にけり　利合
まづ鯛と筆を立けり惠比す講　史邦
玉あられ百人前そおとりこし　山店
御取越内儀の客が一ざしき　嵐竹

芭蕉庵小文庫

木曾の情雪や生ぬく春の草、と申されける言の葉のむなしからすして、かの塚に塚をならへて、風雅を比悳日頁の雪にのこしたまひぬ、さるをむさし野のふるき、庵ちかき長溪寺の禪師は、亡師としころむつひかたらはれけれは、例の杉風、かの寺にひとつの塚をつきて、さらに宗祇のやとりかなと、書おかれける一帋を壺中に納め、此塚のあるしとなせり、たれ〳〵もかれに志をあはせて情をはこひ句をになふ、猶師の恩をしたふにたへす、霜落葉かきのけてかたのとくなる石牌をたて、霜かれの芭蕉をうゑし發句塚と、杉子かなけきそめしより、愁腸なほあらたまりて

邦史

日の影のかなしく寒し發句塚

冬梅のひとつふたつや鳥の聲　土芳
水仙の花の高さの日かけかな　智月
はち巻や穴熊うちの九寸五分　史邦
あな熊の寝首かいても手柄かな　山店
丹波路やあなくまうちも悪右衛門　嵐竹
月花の恩に針立む寒の入　芭蕉
寒聲や山伏村の長つゝみ　仙杖
一雨や相撲のかはる事納　嵐竹
身代も籠てしれけりとおさめ　史邦
金公事もつく／＼にして事納　山店
せつかれて手忘するきけんかな　芭蕉
魚鳥の心はしらすとしわすれ　同
さかもりや一箱にて年わすれ　智月
うちこほすさゝげも市の師走哉　正秀
蛤のいけるかひあれ年の暮　芭蕉
さかやきや咳氣をなくる年の暮　探志
客人の心になりてとしのくれ　乙州
隣かとれて蜜柑も年の名殘哉　之道
いせゑひを耳あはせけり衣配　史邦
餅搗に小腹たてけり瘰疽やみ　同

石臼之讃　はせを

市中にありて俗塵によこれぬ物はけにその始をよくするよりもその終をとくる事はかたし商山竹林の猛士も猶出てつかへ寛平華山の上皇も終にたしかならすたまたま是を見るに唯石臼のひとつのみ聖一國師は是をもつて肉身をやしなひ法身をまる民家にはまた麥粉をそむるころよりも粉こき粹す冬に至るまて片時もよ所にすゑ事なし其たかきことを論すれは役の優婆塞の庵の中にかくれて彼たくひを道引切の上に立べし上と下とふたつなるは力たらさる者のために專なればなり不斷士

檜物屋も間にあはせけりおとりこし　養浩
おとりこしまづ左座は松の坊　史邦
ひたるさに馴て能寐る霜夜哉　惟然
ころ／＼と虫もむらつく霜夜哉　種文
霜腹の寐さめ／＼や鴨のむれ　丈草

ふるき世を忍ひて

霜の後なてしこ咲る火桶かな　芭蕉
火燵より寐に行比は夜中かな　雪芝

正秀亭當座

草粥纖とりかくされて火燵哉　史邦
凩のあたりところやこぶ柳　丈草
こからしの藪にとゝまる小家哉　殘香
凩や窓にふき込みそさゝん　蘭芳
冬川や木の葉の黑き岩の間　惟然
くむ鹽にころひ入へき生海鼠哉　梨雪
雁鴨やわちかひめくる水けふり　蘇入
毛衣につゝみてぬくし鴨の足　芭蕉
雞の片脚つゝやふゆこもり　丈草
金屏の松もふるさよ冬こもり　芭蕉
小屏風に茶を挽かゝる寒サ哉　斜嶺

旅宿

大名の寐間にもねたる寒サ哉　許六
猫の食干からひてある寒さ哉　山店
夜神樂に歯も喰しめぬ寒さ哉　史邦
葉をきさむ廣敷寒し吹ごほし　支考
留主のまにあれたる神の落葉哉　芭蕉
甲を干すあたゝかけさや帋紙子　史邦
子祭や梅まつ宿の赤豆食　山店
子祭に目貫ほり出す自慢哉　史邦
餅蜜柑吹革まつりやつかみ取　下風
圍爐に水のませたか鉢たゝき　智月
娵入の門も過けりはちたゝき　許六
はつ雪やかけかゝりたる橋の上　芭蕉
初雪やひしり小僧の笈の色　同
雪とにうつはりたはむ住居かな　同
鷦鷯家はときるゝはたれゆき　如行
狼の聲そろふなり雪のくれ　丈草

打出濱眺望

嫌／＼や鵆とりまはす雪けふり　史邦
納豆するとぎれやみねの雪起　丈草
長尻の客もたゝれしみそれ哉　史邦
さつ／＼と萩の氷もあられかな　同

をあけて一用とせむやまた
二用とせんや
應蘭子求元祿仲冬芭蕉書

對門人僧

是や世の煤に染らぬ古合子　芭蕉

煤掃之說

明ほの丶空より物のはたはたときこゆるは疊をたゝく音なる可けふは師走の十三日すゝはきのとふきなりけにや雲井の儀式九重の町の御法は嘉例ある事にして唯なみ〳〵の人のすゝはく躰こそいとおもしろけれおの〳〵門さしこめて奥のひと間を屏風にかこひなし火鉢に茶釜をかけて姫が帽子の上張爪さき見えたる足袋もいとさむく冬の日かけのはやく晝になりゆき庭の隅調度ともとりちらしたる中に持佛のうしろむきたるぞめには立なれ家の童の椽のやふれすのこの下をのぞきまはるはなにをひろふにやとあやし味噌とよばる大男の袋かぶり簑きたるもめつらかに米櫃のサンうちつけ俎志らけ行燈はりかへてたつくり鱠あきつけのかほり花やかにかみしもの膳すゑならべたるにほどなく暮て高いびきとはなりぬ

〇酒竹云煤掃の說芭蕉の作にあらず支考が手に出たるを東都みだりに書き加へたるならんと成美の說なり

すゝはきや暮行宿の高鼾　はせを
なくれて雪のかゝるから竹　山店

間に有て莚より外を見ぬは謙に居る事の調へるにあらすやかりにも黄姉の手にとられさることの有かたきことをふかくさくり志るべし目なたらか成時はかますを荷ふ老翁のいこ來りてこつ〳〵とする音すみてのちは李札が劔を塚にかくるとをはつへし名をぬすむ盜人はあれども石うすをぬすむ盜人はなしまたひどの心をみたさゝるの至りならずや月さしのぼるゆふかほのかげに獨はおとろの髮をまくねひとりは佛のまねをするあたまなりにてくるしきとを覺えす挽まはす力に其飢をたすくるは文王の始に仕たまへるに事たかはすや丶今様のむつかしき歌のふしにかまはす聲も唱歌も古代のまゝにして枝黨さかゆる葉も志げると志はふきがちにわなゝかれたるそおかしきや

○酒竹云此れ芭蕉の文にあらず越人の作なる由不猫蛇といふ書に見ゆ

机銘

間なる時はひぢをかけて嘯焉吹噓の氣をやしなふ志つかなるときは書を紐といて聖意賢才の精神をさくり靜なるときは筆をとりて羲素の方寸に入たくみなすおしまつき一物三用をたすく高さ八寸おもて二尺兩脚にあめつちのふたつの卦を彫にして潛龍牝馬の貞に習ふ是

小文庫

春之部

年〳〵や猿にきせたる猿の面　芭蕉

鳰の海邊に年をこえて三日

皆を氷す

大津繪の筆のはしめやなに佛　仝

ふたみの机硯箱は翁ふかくいとをしみてみつから繪かき讃したまひぬまた一とせ洛のほりにいさゝらは雪見にころふ所迄と輿し申されける木曾の檜笠越の菅蓑に桑の杖つきたる自畫の像此しな〳〵はさぬる年花洛の我五雨亭に幽居し給ふ時一所不住のかたみとて予に下し給りぬされば師のなつかしき折〳〵あるは月花に情おこる時は是をかけこれをすゑひたすら生前のあらましまて句の味をうかゝふのみむ月七日はことにわか菜のあつものをすゝめて例よりもかなしくかしこまる袖になみたこほれて

折そふる梅のからひや鞘はつを　史邦

若菜つまん三浦の大助百六ッ　嵐蘭

一かふの牡丹はさむき若菜かな　尾頭

根小屋まてうち下したるなつな哉　史邦

しろ水の押わけて行根芹哉　山店

一村を讃でよふや具足餅　史邦

いかなる事にやありけむ去来子へつかはすと有

菎蒻のさしみもすこし梅の花　はせを

寺の名やわすれて梅の花さかり　李由

扶持かたのはし米取に入やりて　史邦
またぞろ〳〵とかみなりがなる　嵐竹
風雲のはしる間を居のかげ　養浩
毛蓼のはなのみゆる堀うら　執筆
雁わたるむかひは平野久法寺　店
便にやれは味噌つかせける　邦
普請場てこしらえてくる火吹竹　竹
よそほと風のあてぬ山けは　浩
松苗のはえ揃ふたる一里鐘　邦
田うゑの留主に煩うて居る　店
夏の月いらぬ葛籠は梁へあけ　浩
たゝきなかして雨はるゝなり　竹
篠原や黒ばね山もうちつゝき　店
馬すりかへてしらぬ顔する　邦
はつ花に酒毒か出來て取かぶり　竹
年子まびけは望みたるゝ　浩
御築地の雪もきえ行新在家　邦
敷て垢かく水風呂のふた　店
雨方へあかりみせたる手行燈　浩
そよ〳〵草のなひく日の暮　竹
戀人のいつか後に立て居る　店

文引さいてほうはりにけり　邦
盆前は貳歩にもつけぬ小脇差　竹
隠れて京の月を見るなり　浩
槿のくつれたうへを踏あるき　邦
纔はたけは鷄がよる　店
雲きれの山の端うすく寒くらし　浩
千日谷の銀杏冬たつ　竹
跡さきを木戸てしめたる組屋敷　店
追〳〵醫者を呼にやらるゝ　邦
いら〳〵と星のいらつく横雲に　竹
野水たゝゆる椿新田　店
藪岸にほそき櫻の咲出て　浩
夕日の筋に胡蝶むらがる　邦
分別の底たゝきけり年の暮　芭蕉

栖去之辨　　はせを

年號はいつれの年にやしらす
こゝかしこうかれありきて
橋町といふところに冬こも
りして睦月きさらきになり
ぬ風雅もよしや是までにし
て口をとぢむとすれば風情
胸中をさそひて物のちらめ
くや風雅の魔心なるへしな
ほ放下して栖を去り腰にた
ゝ百錢をたくはへて柱杖一
鉢に命を結ふなし得たり風
情終に菰をかふらんとは

雲萑より上にやすらふ峠かな　芭蕉

呂丸追悼三句

雲萑なく聲のとゝかぬ名こり哉　會覺
ふみきやす雪も名殘や野への供　去來
野おくりや膝かくつきて臘月　史邦

伊賀新大佛之記

伊賀の國阿波の庄に新大佛
といふあり此ところはなら
の都東大寺のひしり俊乘上
人の舊跡なりことし舊里に
年をこえて舊友宗七宗無ひ
とりふたりさそひ物してか
の地にいたる仁王門撞樓の
あとは枯たる草のそこにか
くれて松のいはゝ事とはむ
石居はかりすみれのみして
と云けむもかゝるけしきに
似たらむな猶分いりて蓮花
臺獅子の座なんとはいまた
苔のあとをのこせり御佛は
しりへなる岩窟にたゝまれ
て霜に朽苔に埋れてわつか
に見えさせ給ふに御くし斗
はいまたつゝかもなく上人
の御影をあかめ置たる草堂
のかたはらに安直したり誠
にこゝらの人の力をついや

うす雪や梅の際まて下駒のあと　魚目

ひら〳〵と菰槌越やむめの花　史邦

鞍馬金銀の隱士の跡尋ね兼て

むめか香や是が賣喰の火打石　同

白梅やたしかな家もなきあたり　千川

山崎にて

しら梅や木食寺の料理人　史邦

はれ物に柳のさはるしなへかな　芭蕉

此句浪化子のありそ海にさはる柳のしなへかなと去來が書誤りて入集しはへるとて常に此事をくやみぬるまゝこのついてとなしぬ

春水滿四澤の氣色を

川柳水もうこかす柴葉口　山店

靑柳の路次かまへなり鎗つかひ　嵐竹

川越して帶ときによる柳かな　岱水

靑柳とともに動くや近かつえ　史邦

馬乘の下くゝり行柳かな　里倫

春風に吹出されけり水の胡蘆　去來

いかあくる風にこほすやいもはしか　白貢

草先や追鳥狩のむさうわな　史邦

苔淸水

凍とけて筆に汲干す淸水哉　はせを

おなしく

はる雨の木下にかゝる雫かな　同

鞍馬

僧正か谷をすへれは餘寒也　野童

黑ほこの松のそたちや若綠　土芳

呼出しに來てはうかすや猫の妻　去來

鎌倉も別のことなし猫の戀　南鄰

こかれ死ためしもきかす猫の妻　史邦

南良こえ

春なれや名もなき山の朝かすみ　はせを

二月堂取水

水とりや氷の僧の沓のおと　仝

味噌きめの熱るにほひや朧月　史邦

蛇くふときけはおそろし雉子の聲　芭蕉

多田の御廟に詣

いきほひもさすかに神の雉子かな　史邦

へともゆきのふる日は　はせを
寒むくこそあれ花の降日はうかれこそすれ

芳野

花さかり山は日ごろのあさぼらけ　同
損にして食たかせけり花曇り　山店
花雪とちらすや錢のあゐの山　去來
ちか道や木のまた通る花ざかり　洞木
村中へ咲下したるさくらかな　養浩
景淸も花見の座には七兵衞　芭蕉
ゑらあやに金王櫻さきにけり　史邦
藪陰に衛門櫻のはなみかな　山店

三月盡

赤猫のうるさくなりぬ春の暮　山店
新宿は麥に黐かつく春の暮　史邦
水風呂の置所なしはるのくれ　嵐竹

三吟

櫻見る袖ちいさしや田舍染　嵐竹
麥の中からあひふ暗たす　史邦
うら座敷山をうしろに春くれて　山店
手にくく膳を持てたゝるゝ　竹

ひつそりと夜半の月のさひかへり　邦
堤の雁のさきさかりなる　店
八朔のさかやき剃にまはるらん　竹
御門徒寺のすまふつふるゝ　邦
秋蟬のいりつく樣に鳴時そ　店
すへつた馬を引おこしける　竹
若黨に內證きかする戀もあり　邦
汁も鱠もいなだなるらん　店
はつ雪の風にはつれてひらくと　竹
お堀の月のさえわたるかな　邦
あみ笠を腰にはさみて丹波道　店
六帖しきをふたりしてかる　竹
花のかけ緣日はかり播たて　店
躑躅くつるゝ赤土の谷　邦
ひとつても皿の揃はぬ小瀧鯛　竹
寅背中とてけふも灸せす　店
暮かけて暗盛りたるほとゝきす　邦
山も御茶屋も青葉なりけり　竹
本堂を右へきはれは反歩にて　店
ころふといなや狐はなるゝ　邦
十五夜を吹ちらしたる西の空　竹

し上人の貴願いたつらにな
り侍るともかなしく涙もお
ちて談もなくむなしき石臺
にぬかつきて　　　　はせを

丈六に陽炎高し石の上

賀茂にあそびて

照つゝく日やかけろふの芝うつり　史邦
ゑこまれて苗代馬のあゆみ哉　山店
千刈の田をかへすなり難波人　一鷺
川淀や淡を休むる声の角　猿雖
物よはき草の座取やはるの雨　荆口
はる雨や渾雛あかる臺所　游刀
引馬の中にましるや田螺取　支考
咲みたす桃の中よりはつ櫻　芭蕉

三月三日堺の海邊に遊て二句

胸透て須磨をのみこむ汐干哉　史邦
のほり帆の淡路はなれぬ鹽干哉　去來
鹿島には杉葉のはゆる汐干哉　山店

すみ吉に詣

一日の日を春かせや松のひま　史邦

堀川甲山

上代の春日も光れかふと山　同
出替や哀すゝむる奉加帳　許六

下品の情

あさつきやうちとけ安き片結ひ　史邦
下〳〵もみな居なしみてよめか萩　山店
馬よけや畑の入なる桃柳　北鯤
梅つはき是にも客し屋敷守　山店
藪に居て挽きらるゝな赤椿　同

旅行

内庭を見せかにけり白つゝし　嵐竹
堀起すつゝしのかふや蟻のより　雪芝
熨斗目着て来る人もなし菫草　山店

難波にて

海棠や入つうち出す堂のまへ　史邦

僧丈草に別

慇懃に成りしわかれや藤の陰　同
萬日の小屋も見えけり百千鳥　嵐竹
呼子鳥なくか碓氷の盤根石　史邦

西行像讃

すてはてゝ身はなき物とお

一つ脱てせなに負けり衣かへ　同
からたちも菊揃へたり佛生會　山店
灌佛や釋迦と提婆は從弟とし　之道
　落柿舍閑居嵯峨日記に見え
たり
ほとゝぎす大竹藪をもる月そ　はせを
郭公鳴や湖水のさゝにこり　丈草
夕やけやきら〳〵とゝふほとゝきす　山店
ほとゝきすまつ〳〵宵の丸寐にて　岱水
　美濃にて
紅麥に鳴やうきかんほとゝきす　史邦
　あかし
ほとゝきすきゝ行方や島ひとつ　はせを
　須磨
月を見ても物たらはすや須磨の夏　同
　佛頂禪師の庵をたゝく
木つゝきも庵は破らす夏木立　同
葉さくらや千躰佛のみかきばく　史邦
嶺の戸をうつふせにして藥より哉　嵐竹
太鼓にてほいろを返す藥撰哉　史邦
狹莚のへり踏ありく藥より哉　山店

藪畔や穗麥にとゝくふしの花　荊口
かみなりの鳴らて曇し梧の花　史邦
山樫やわか葉のくさき一ときり　北鯤
子にせうといへは迯こむふき籠　乙州
よせ馬の土手のあちらや紙のほり　嵐竹
　乙州餞別
花葵の秋はあふみとおもへとも　山店
　落柿舍閑居嵯峨日記に見え
たり
柚の花にむかしを忍ふ料理の間　はせを
　さがにて
おのつから梧にならふやことし竹　史邦
五月雨や鑑わつろふ菓のはた　薗蕉
無病さや物うちくうて五月雨　史邦
さきたちのふみ込音やさつき闇　山店
川へりに狐穴立やついりはれ　史邦
箱崎や岩たて雲をつゆあかり　責浩
只おかね麥のくるりや道つ迄　山店
　聞不ㇾ容ㇾ髮といふ事を
ほとゝきす起合せたゝ嶺の中　同
おなしく

稻こす水に祠(ホコラ)うきたつ　店
竹藪の鶺上戸うらかれて　邦
又たゝくやら泣こゑがする　竹
一はしり行て見て來る朝肴　店
八尋あきて晴わたるなり　邦
庭(ウ)せゝる松や小笹のうゑ所　竹
返事にそへてかへすぬり臺　店
擣はねばえらけて通る鉦たゝき　邦
とこでもおそき町の朝食　竹
景のよき山はつらりと花ちりて　邦
番鶯のきれ行梅若の森　店

花の雲鐘は上野か淺草か　芭蕉

小文庫

夏之部

文字摺石

忍ふの郡しのふの里とかや文字すりの名殘とて方二間はかりなる石あり此石はむかし女のおもひに名になりて其面に文字ありとかや山藍摺みたるゝゆゑに戀によせておほくよめりいまは谷合に埋れて石の面は下さまになりたればさせる風情もみえずはべれどもさすがにむかしおぼえてなつかしければ

早苗とる手もとや昔忍すり　はせを

前書きれて見えず

風かをる羽織は襟もつくろはす　芭蕉
さかさまに扇をかけてまた涼し　丈草
琴引て老をかませよ夕すゝみ　智月
籐木に口かけか出來てすゝみかな　山店
石竹に雀すゝしや砂むくり　史邦

ふたみ

あら波やあれに涼しき入日影　同

鴻之台眺望

切岸や卯の花下し一文字　山店
安房上總うしろに置て夏木立　嵐竹
うき雲や左右にわかれて青嵐　史邦

同所古戰場

山は刀根のなかれより生れて營を南にみそなはす水中に河水ともふけて是かためにそはたち山のしりへを斷てなほ潮をかさねたりさはかりのものゝふのおほく此ところにうしなはれてやゝ百の秋の露むすひ霜うつれともなにかし誰某と時めきのゝしれる名はさすか人の耳にのこりてむなしからぬそせめていちしるき松櫻よきほとにしけりうのはなのくもりあひたるそらに時鳥のこゑもたえきる斗なれは魂魄の胸もはるゝにやいとゝ哀に覺えて

幽靈のあそび所や花うつき　山店
いかつちの荒てひさしき夏野かな　史邦
黒雲の折／＼かゝる青葉哉　嵐竹

首塚

首塚やとげに咲たる花むはら　史邦
首塚やひるは螢の草かくれ　嵐竹
首塚や入ものほらぬ夏わらび　山店

眞間寺

眞間山や茄子の畔もむかし繩　嵐竹
なつ山や麥も櫻も寺の分ゞ　山店
さひしさに涼しき眞間の寺接　史邦

同所楓

雲すきや尾越の鹿のねらひ狩　嵐竹
同しく
草むらや蠅取蜘の身つくろひ　史邦
蘭の花にひた／＼水の濁り哉　此筋
一田づゝ行めくりてや水の音　北枝
蟲の喰夏菜とほしや寺畠　荊口
卯月のはしめ庵に歸りて旅
のつかれをはらす程に
なつ衣いまた虱を取つくさす　はせを
わか宿は蚊のちいさきを馳走也　同
みな月の竹の子うれし竹生島　去來
六月をきつめてさくや雪の下　東以
正成之像
鐵肝石心此人之情
なてし子にかゝるなみたや楠の露　はせを
撫子にふんどし干や川あかり　嵐蘭
ひるかほに虱のこすや鷺のあと　同
五六十海老つひやして鯨一つ　之道
とろ／＼とすはや夕たつ鈴鹿山　史邦
ゆふたちや蓮の葉にふる池のくま　木白
蓮の花ちるや八島のみたれ口　史邦

澤瀉をうなきの濁す澤邊かな　嵐蘭
麻の葉のあからむすゑや雲の峰　史邦
三日月のいつか出て居る櫻麻　嵐竹
麻臥て風すちとほす小家かな　斜嶺
蠅打になるゝ雀の子飼かな　河瓢
日の勢やくるしくうこく百合の花　素繪
鬼百合やりんとひらいて蟬のこゑ　史邦
水仙の種を干日やせみの聲　嵐竹
森の蟬すゝしきこゑや暑き聲　乙州
鴨の子の蘆根はなれぬあつさ哉　桐奚
甲斐郡内をすきて
道はたにまゆ干かさのあつさかな　許六
あさかほの二葉にうくるあつさ哉　去來
煤下る日盛あつし臺所　怨風
旅行
瘦馬の鞍つほあつし藁一把　史邦
牢人して東武へ下る日粟田
口にて
すゝかけを着ぬはかり那る暑か那　同
すゞしさや先蛤の口の砂　句空
丈山之像謁二句

雛をまたぬすまれしけさの月　店
畠はあれて山くずのはな　蕉
日光へたんから下す秋のところ　店
くれ〳〵たのむ弟の事　蕉
ゆふ風に蒲生の家も敗れ行　同
物にせはやとさすか天目　店
花のあるうちは野田をふらつきて　同
藤くれかゝる黒谷のみち　蕉

甲斐にて

行駒の麥になぐさむやどりかな　はせを



小文庫

秋之部

はつ秋やたゝみながらの蚊屋の夜着　はせを

弔初秋七日雨星

元祿六文月七日の夜風雲天にみち白浪銀河の岸をひたして烏鵲も橋杭をながし一葉梶をふきをるけしき二星も屋形をうしなふへしと今宵只に過さむも殘おほしと一燈かゝげ添る折ふし遍昭小町か歌を吟する人あり是によつて此二首を探て雨星の心をなぐさめむとす

小町が歌

高水に星も旅寐や岩の上　芭蕉

日蓮の歌にも見えす若楓　史邦
もの喰に茶莚かるや若楓　嵐竹
大木やはつれ〱はわか楓　山店

同繼橋

繼橋の田うゑや寺の男とも　嵐竹
つき橋や田草もとらぬそゞろ水　山店
つきばしのあとは水田の水雞哉　史邦

歸路の吟

ほとゝきす水戸海道も夜船也　山店
なつ空や情をも出さす渡し守　史邦
舟梁もまくらにならすなつ衣　嵐竹

餞別

新麥はわさとすゝめぬ首途かな　山店
また相蚊屋の空はるかなり　はせを
馬時の過て淋しき牧の野に　同
四五千石のまつのたて山　店
方〱へ醫者を引する暮の月　同
躍の左法たれもおぼえす　蕉
盆過の頃から寺の普請して　同
ほしかる者に菊をやらるゝ　店
蓬生に戀をやめたる男ふり　蕉
濕のふきてのかゆき南氣　店
丹波から使もなくて啼鳥　蕉
節季か來れど利あげさへせぬ　店
雪に出て土器賣を追ちらし　蕉
たゝ原中に月そさえける　店
神鳴のひつかりとして沙汰もなき　蕉
しやくりがやんで氣かかるうなる　店
奥の院をづ〱花をさしのそき　蕉
けさからひとつ鶯のなく　店
春の日に產屋の伽のつゝくりと　同
かはり〱や湯漬くふらん　蕉
いそかしくみな股立を取並び　店
目つらもあかす霰ふるなり　蕉
からひたる櫟(クヌギ)林に日がくれて　店
佛の木地をつゝむ糸だて　蕉
ころ〱と臼挽出せばほとゝきす　店
そゝろに草のはゆる竹椽　蕉
羽二重の赤はるまでに物おもひ　店
わかい時から神せゝりする　蕉

友とし貧を富りとして五十年の頭夫自書自禁戒となす

あさがほや晝は鎖おろす門の垣　芭蕉
槿にまぎれて木槿あはれなり　史邦
寢道具のかた〲やうき玉祭　去來
乳母が來てまた泣出しぬ魂祭　山店
灸してなきしも我そたまゝつり　史邦
おくり火や後さかりの跨ごし　同
盆すぎて宵闇くらし蟲の聲　はせを
牛部屋に蚊の聲よはし秋の風　同
雀子の髪も黒むやあきのかせ　式之

不破にて

あき風や藪もはたけも不破の關　はせを
はつ嵐ふけとも青し栗のいが　同
初茸やまだ日數へぬ秋の露　同
しら露もこぼさぬ萩のうねり哉　同
ひよろ〲となほ露けしや女郎花　同
弓かためとる比なれやふしはかま　支考
玉かつらなまりも床し瓜根花　史邦
むかしきけちゝふ殿さへすまふとり　はせを
つね〲は後世ねがひ也相撲取　史邦
蜻蛉やなにの味ある芋の先　探丸

更科姨捨月之辨

あるひは志らゝ吹上ときくにうちさそはれてことし姨捨の月みむと志きりなりければ八月十一日みのゝ國をたち道とほく日數すくなければ夜に出て暮に草枕す思ふにたがはずその夜さらしなの里にいたる山は八幡といふさとより一里はかり南に西南によこをりふして冷しう高くもあらずかと〲しき岩なども見えず只哀ふかき山のすがたなりなくさめかねしと云けむも理り志られてそゝろにかなしきに何故にか老たる人をすてたらむとおもふにいとゞ泪落

遍昭が歌

七夕にかさねはうとし絹合羽　杉風

西風の南に勝やあまの川　史邦

閑關之説

色は君子の悪む所にして佛も五戒のはしめに置りといへともさすかに捨かたき情のあやにくに哀なるかたかたもおほかるへし人しれぬくらふ山の梅の下ふしにおもひの外の匂ひにしみて忍ふの岡の人目の關ももる人なくはいかなるあやまちをか仕出てむあまの子の涙の枕に袖しほれて家をうり身をうしなふためしも多かれと老の身の行末をむさほり米錢の中に魂をくるしめて物の情をわきまへさるにははるかにまして罪ゆるしぬへく人生七十を稀なりとして身を盛なる事はわつかに二十餘年也はしめの老の來れる事一夜の夢の如し五十年六十年のよはひ傾ふくよりあさましうくつをれて宵寢かちに朝おきしたるね覺の分別なに事をかむさほるおろかなる者は思ふとおほし煩惱增長して一藝すくるゝものは是非の勝る物なり是をもて世のいとなみに當て貪欲の魔界に心を怒し溝洫におほれて生かす事あたはすと南華老仙の唯利害を破布し老若をわすれて閑にならむこそ老の樂とは云へけれ人來れは無用の辨有閑ては他の家業をさまたくるもうし尊敬か戸を閉て杜五郎か門を鎖むには友なきを

と云とをわかす主のいはく折〳〵雲のかゝるこそと客をもてなす心いと切なりやがて月雲外にはなれ出て金風銀波千躰佛のひかりに映すかのかたふく月のおしきのみかはと京極黄門の歎息のことはをとり十六夜の空を世の中にかけて無常の觀のたよりとなすも此堂にあそびてこそふたゝび悪心の僧都の衣もうるほすなれといへばあるじまた云輿に乘じて來れる客をなど輿さめて歸さむやともとの岸上に盃を揚てつきは横川にいたらむとす

鎖明て月さし入よ浮御堂　はせを
安〳〵と出ていさよふ月の雲　同
鬼灯は實も葉もからも紅葉哉　同
鷄頭にうへ合せけり唐からし　史邦

枯のぼる葉は物うしや鷄頭花　萬乎
花葛や松ふきたふす田成畑　史邦
もや〳〵として志つまかや葛の花　山店
雨晴や煙のこもるくずの花　嵐竹
蜩なく明日は日和そ蓼の花　風斤
いなつまやなくり盡して薄原　史邦

大兒
稲妻やうみの面をひらめかす　史邦

小兒
蟷螂のほむらに胸のあかみ哉　同
鶺鴒やはしりうせたる白川原　氷固
せきれいや壁土こぬる畔のうへ　磨盤
鷹の目もいまや暮ぬと啼鶉　はせを
ひゝなきに夜を待明す鶉かな　山店
はつ鶉時計の六ッもうたせけり　史邦
道〳〵の鶉きくらん藥とり　嵐竹
唐あみに袖ぬれてきく鶉かな　正秀
尻すほになくや夜明の鹿の聲　風睡
寝かへりに鹿をころかす鳴子哉　一酌

東山をめぐりて一乘寺に出る

そひければ
僻は姥ひとりなり月の友　は世を
いさよひもまたさらしなの郡哉　同
前書されて見えず
夏かけて名月あつきすゝみ哉　同
名月や門にさし込潮がしら　同
世波にたゝよひて日暮の頃
岡崎より京に歸るとて
鴨川や月見の客に行當り　去來
名月や夕日にむかふ宮さかな　塔山
名月の西にかゝれは蚊屋のつぎ　如行
名月や佃を越せば寒うなる　山店
名月や草の闇みに白き花　左柳
侍の身を露にして月みかな　史邦
常陸へまかりける時船中に
て
あけぼのや廿七夜も三日の月　芭蕉

堅田十六夜之辨

望月の殘興なほやます二三子いさめて舟を堅田の浦にはす其日申の時ばかりに何某茂兵衛成秀といふ人の家のうしろにゐたる醉翁狂客月にうかれて來れりと聲〳〵によばふ主思ひかけすおどろきよろこびて簾をまき塵を拂ふ園中に芋ありさゝげ有鯉鮒の切目たゝさぬこそいと興なけれと岸上に莚をのべて宴をもよほす月はまつほどもなくさし出湖上花やかにてらすかねてきく仲の秋の望の日月浮御堂にさしむかふを鏡山といふとかや今宵しも猶そのあたり遠からじと彼堂上の欄干によつて三上水莖の岡南北に別れその間にしてみね引はへ小山巓をまじふとかくいふ程に月三竿にして黒雲の中にかくるいづれか鏡山

れ侍るころ其妻の男の心に
ひとしく物とまめやかに見
えければ旅の心をやすくし
侍りぬかの日向守か妻髪を
切て席をもふけられし心を
いまさら申出て

月さひて明智か妻の咄せむ　芭蕉

秋を経て蝶もなめるや菊の霜　同

蕗うごく秋の終りやつたの霜　同

ゆく秋のなほたのもしや青蜜柑　同

題鳳曲別

正行かまさひも鷹の曲わかれ　史邦

題司召

擲筵さいかくするやつかさめし　山店

題白菊

白菊もさくや茶の間の南向　嵐竹

三吟

帷子は日々にすさまし鵙の聲　史邦
籾一升を稲のこき賃　はせを
薄の穂に醤のかひをかき分て　岱水
夜市に人のたかる夕月　史邦
木刀の音きこえたる居合抜　蕉
二階はしこのうすき裏板　水
寒さうに薬の下をふき立て　邦
石町なれは無縁寺の鐘　蕉
手細工に雑箸ふときかんなくつ　水
よひかへせともまけぬ小かつを　邦
肌さむき隣の朝茶のみ合て　蕉
秋入ときの筋気いたかる　水
鹽漬にふりつゝきたる宵の月　邦
無住になりし寺のいさかひ　蕉
持なしの新剃刀もさひくさり　水
土たく家のくさききるもの　邦
花に寐む一疊あをき表かへ　蕉
小蛙の口の遠き三月　水
竹橋の内よりかすむ鼠穴　邦
馬の糞かく役もいそかし　蕉
夕くれに洗濯賃をなけ込て　水
とはぬもわろしはゝの吊　邦
椀かりに来れと折ふしゑひす講　蕉

丈山の庵はいつこ引板の音　史邦
岡崎は祭も過ぬ葉雞頭　同
　前書きれて見えす
菊の香や庭にきれたる履の底　芭蕉
見どころのあれや野分の後の菊　同
きくの露落て拾へはぬかごかな　同
人からも古風になりて黄菊哉　史邦
朝寒や手をもみ初る菊の花　風斤
借かけし庵の噂やけふの菊　丈草
わか棚やまたいきて居る紅葉鮒　嵐竹
　芽立より二葉にしげる柿の
　實と申侍りしはいつの年に
　や有けむ彼落柿舎もうたこ
　ほすよし發句に聞えたり
やかて散る柿の紅葉も寐間の跡　去來
澁柿はかみのかたきと聞てしき　丈草
木の本に狸出むかふ穗かけ哉　買山
やき米に歌こそなけれ近衛殿　史邦
虫の音や關宿船の鹿染の中　養浩
死もせぬ旅寐のはてよ秋のくれ　はせを
秋の暮留主つかはれて歸りけり　山店

　嵐蘭追悼四句
かなしさや日に〳〵ましてちる柳　嵐竹
蓖麻の實をしほり出す涙かな　山店
かたみにはいつれの草そ墓の露　史邦
千貫のつるき埋けり苔の露　去來
　高光のさいしやうかくは、か
　りやかたくみゆるとよみた
　まひけむは九月十三日の夜
　とかやうけ給りて
身の秋や月にも雛はぬ鯨のちから　史邦
わか宿は四角な影を窓の月　はせを
　『柴の庵ときけはいやしき名
　なれともよにこのもしき物
　にそ有ける』
　此歌は東山に住ける僧を尋
　て西行のよませ給ふよし山
　家集にのせられたりいかな
　る住居にやと先その坊なつ
　かしければ
柴の戸の月やそのまゝあみた坊　芭蕉
　伊勢國又玄か宅にとゝめら

千鳥掛集

序

鳴海のなにかし、知足亭に亡友はせをの翁やとりせるころ、翁わもへらく、此所は名古屋あつたにちかく、桑名大坂へもまた遠からす、千鳥かけに行通ひて、殘生を送らんと、星崎の千鳥の吟も、此折のことになん。あるしの知足、此ことはを耳にとゝめて、其程の風月をしるしあつめ、千鳥かけと名付て、他の世上にも見そなはしてんとのあらましにて、程なく泉下の人となりぬ。其子蝶羽、父のいひけんことをわすれすなから、世わたる事しけきにまきれて、はやとゝせに近く星霜をふりゆけは、世の風躰も、をのかさま〳〵にかはり侍れと、父の志をむなしくなしはてんも、ほゐなきことにおもひとりて、ことし夏も半に過行ころ、洛陽に至り漸あつさにちりはむる事になりぬやつかれ折ふし、在京のころにて、此おもむきをきゝ折ならぬ千鳥のねたそへて、集のはしに筆をそゝくのみ。我聞川風寒み千とり鳴也の詠は、六月吟し出ても、そゞろ寒きよしこの千鳥かけも、時今炎天に及へり、其たくひにや沙汰し侍らん。又聞東山殿、鴨川の千鳥をきゝに出たま

此あたゝかさ明日はしくれむ　水
夜あそひのふけて床とる坊子共　邦
百里そのまゝ船のきぬ〳〵　蕉
引割し土佐材木のかた思ひ　水
よりもそはれぬ中は生かへ　邦
云たほと跡に金なき月の暮　蕉
もらふをまちて鳴のつぺい　水
摺鉢にうゑて色付唐からし　邦
障子かさぬる宿かへの船　蕉
北南雪降雲のゆきわたり　水
二夜三日の終るあかつき　邦
考てよし野參のはなさかり　水
百姓やすむ苗代の隙　蕉

座右之銘
人の短をいふ事なかれ己が
長をとく事なかれ
物いへは唇寒し秋の風　芭蕉翁



千鳥掛上巻

星崎の闇を見よとや啼千鳥　芭蕉
船調ふる蛩の埋火　安信
築山のなだれに梅を植かけて　自笑
あそふ子猫の春に逢つゝ　知足
鶯の聲夜を待月のほのか也　業言
岡のこなたの野邊青き風　如風
一里の雲母なかるゝ川上に　重辰
祠さためて門そはひとる　言
市に出てゑはし心を師走かな　足
牛にれかみて寒さわするゝ　信
籾臼の音聞なから我いひき　風
月をほしたる螺の酒　蕉
高欄に甲をかけて秋の風　笑
渡り初する宇治の橋守　風
庵造る西行谷のあはれとへ　足
喙木鳥たゝく杉の古枝　信
咲花に昼食の時を忘れけり　辰

山も霞むとまてはつゝけし　足
辛螺からの油なかるゝ薄氷　風
角ある眉に化粧する霜　蕉
待宵の夕を喰さく帳の内　言
寐られぬ夢に枕あつかひ　風
罪なくて配所にうたひ慰まん　信
庶子にゆつりし家のつは物　足
式日の日はかたふきてこゝろせく　風
あさくさ米の出る川口　辰
欄干に顔ならふ夕すゝみ　蕉
笠持てあふつ螢火の影　笑
初月に外里の娶の新通ひ　足
薄はまねく荊袖引　蕉
朝霧につらきは鴻の聲ならす　辰
あかかねかはらなめらかにして　笑
氏入の庄園多き花さかり　言
鶯籠幾むれの春とゝまらす　風
田を返すあたりに山の名を問て　信
かすみの外に鐘をかそふる　執筆

ふに、千本の道貞といへるもの、袖にらんしやたいをたきて出けるを、聞めして其香爐を御とりかはしありて、今の世に大千鳥小千鳥とて賞せられけるとや。此後かほと至れる千鳥を聞す、よし今香はたかすとも、星崎の千鳥にひとりもゆき、あるは友なひてもゆきてきかまほし。又そのあたりの歌枕、松風の里に旅人の夢をやふり、ねさめの里に老のむかしをおもひ、夜寒の里の砧をきゝ、なるみ潟しほみつる時は、上野の道をつたひ、雨雪には笠寺をたのみ、月のなき夜も星崎の光をあふきて、猶風雅の友をよひ、つきの濱千とり、これかれ佳興すくなしとせす。むへなるかなはせをか此處に心をとゞめしこと。

正德壬辰年林鐘下浣

武陽散人素堂書

氣をたすけなんほとゝきす鳴　足
花盛みをあつむる窓閉く　言
御焼かゝくる神垣の梅　執筆

芭蕉翁もと見し人を訪ひ三河國に越え序おもしろければ伊良古崎見んと白濱よする渚をつたひからうして歸玉ひし旅の哀を聞て

燒飯や伊良古の雪にくつれけん　知足
砂さむかりし我おしの跡　芭蕉
松をぬく力に君か子日して　越人
いつか烏帽子の脱る春風　足
眠るやら馬のあるかぬ暖さ　蕉
雲をかくす朧夜の月　人

寂照庵知足子の許へはせを翁を尋ね來て

幾落葉それほと袖もほころひす　荷兮

旅寢の霜を見するあかゝり　芭蕉
今朝の月替る小荷駄に鞭當て　知足
里の踊に野菊折ける　野水

寂照庵に旅寐して

置炭や更に旅ともおもはれ　越人
雪をもてなす夜すからの松　知足
海士の子か鯨を告る貝吹て　芭蕉
脊戸より直に踏こはす垣　人
歌よせん此名月をたゝにやは　足
蕎麥のみつきを遁す關守　蕉

鳴海出羽守氏雲宅にて

面白し雪にやならん冬の雨　芭蕉
氷をたゝく田井の大鷺　自笑
船繋く岸の三股荻かれて　知足

蟠廬の高樓にいさなはれ指

めつらしや落葉のころの翁草　如風
衛士の薪と手折冬梅　芭蕉
御車の暫とまる雪かきて　安信
錢を袂にうつす夕月　重辰
矢申の聲ほとなかき萩の風　自笑
かしこの海こゝの篠庭　知足

歌仙有翠之

京まてはまたなかそみや雪の雲　芭蕉
千とり立はらく此海の月　業言
小蛤ふめとたまらす袖ひちて　知足
酒氣さむれはうらなしの風　如風
引捨し琵琶の嚢を打はらひ　安信
僕はおくれて牛いそく也　自笑
ふたつみつ反哺の鴉鳴つるゝ　重辰
明日の命の飯けふりたつ　信
わたり舟夜も明かたに山みえて　笑
鐘いくところ西かひがしか　蕉
其すがた別の後も一わらひ　足
なみたをそへて鄙の腰折　言

髮けつる熊の油の名もつらく　蕉
身に瘡出て秋は寢苦し　風
釣簾の外にたはこをたしむ月の前　信
楊枝すまふのちからあらそひ　足
小袖して花の風をもいとふへし　辰
こかるゝ猫の子を捨て行　信
うき年を取てはたちも漸過ぬ　足
父のいくさを起ふしの夢　蕉
雲陰にすこし草ある波の聲　笑
翅をふるふ鴉ひとつかひ　言
立つかなる龜は朝日を戴きて　信
三度ほしたる莿のかはらけ　笑
山守か車につける木をになひ　蕉
燧ならして岩をうちかゝく　足
瀧津瀬に行ふ法の朝嵐　風
狐かくるゝ蔦のくさむら　笑
殿やれて月はむかしの影ながら　言
老かむうはかところも打音　蕉
ふすふりし榾の煙のしらけたる　辰
陳のかりやに碁を作る程　信
山更によこおりふせる雨の脚　風

絹を裁日は殊更にめでたくて　安信
次をのぞけは匂ふ杉の戸　蝶羽
盃に花柚を飛ばす竹の上　龜世
あしたの事はしらぬ望月　執筆

歌仙畧

から風や吹ほど吹て霜白し　知足
すくんだやうな冬の雙鷺　路通
生魚のすくない折は客の來て　同
小くらい月を無機嫌で見る　足
新綿を蒲團に入るゝ下り前　同
碪をもつと遠う聞たき　通
色艶もつけぬ浮世の樂をする　同
山の中てもはやる念佛　足
しら雲の下に芳し花櫻　同
きめよき顔に薄化粧する　通
哀さをためて書たる文の來る　同
あくたもくたのせまる物前　足
何所となうとりひろけたる中屋敷　同
土をつくねて獸を燒　通

冬の月坊主は耳の根かさむい　同
京への駕籠のおらぬ栗栖野　足
見た事は咄にもなる花の宿　通
夏をこなたに布施紅の咲　同
陽炎の金原つゝき土肥て　足
口をたゝけは日はしたになる　同
大やうな御寺の世話も引請る　通
福ゝしたる在のとし並　同
後の月見てから後の十七夜　足
蘆穂の中をのほる新三　同
ひとしきりしつあて渡る鷺の聲　通
身肉を分し子に緣をくむ　同
人しれす白髪天窓に神いしり　足
夢見たやうな情わすれぬ　同
四條より結何紅のゆふ涼　通
もんとりうつて郭公啼　同
あの雲をひよつと落たる地雷　足
おさまつてよむ理趣經の頭　同
天井は生てはたらく古法眼　通
翠簾のうちから猫の穿鑿　同
花盛さつしとつまる大芝居　足

さすかたのひとつ〳〵にお
さゝかれて猶昏をおしむ
かきたてゝ見する夕日や松衛　轍士
障子開れは寒き川風　知足
精進ぬ人を上座に茶を入て　蝶羽
きのふ迯いた馬貰ひけり　亀世
不自由をこらゆれはこそ月の市　安信
新酒といふにそれこゝろ見よ　洗古
歌仙有畧之

寢覺松風の里も此近邊り成
へし
火燵から友呼續の濱近し　團友
窓つきあくる時雨一息　知足
朝鳥市の立日をわめくらん　露川
入かゝりたる月のまひ〳〵　如瓶
筵莚は筵と思ひて取殘し　足
足駄て山をおりる秋風　友
歌仙畧

初雪や寢言にいひし夢合　知足
皆うち並ぶ桝の賑ひ　團友
あら壁の匂ひ靜に風止て　安信
さらはと今日は禮口か明々　露川
夕月の剃月代にきらみたり　業言
とこらへ行て宿る雁金　如瓶
歌仙畧

露川亭にて
打まじる今日や木の葉の魚になる　知足
小春の空のとけあふた雲　露川
その里へ戻らるゝ駕こしらへて　獨卜
時宜する内に冷る煎茶　素覽
材木を取ちらしたる暮の月　吏明
吹も習はぬ濱のあき風　執筆

鳴廬亭にて
深閑と星崎寒し草まくら　舍羅
何をふれ行すゝ鴨の聲　知足

とまり得ぬ波や崩れて鳴千鳥　周東
鳴といふ鳴海の四季や啼ちどり　（尾城）尹之
此海に簖の筋引ちどり哉　如行
鷄のあとに矢橋の千鳥哉　（アツタ）夕道
狂ひけり波の兎と小夜千鳥　（アツタ）東藤
不斷さへしくるゝ耳を小夜千鳥　祖月
月雲の跡の聞鳴ちどりかな　（寺本）暮岫
老ほれか友たるものや友ちとり　（鳴）若巖
濱まつの音やおほえて啼千鳥　（寄）獨笑
海士の住里や都と啼ちとり　（大タカ）酒聖
此浦の功かちとりの陰かはり　弁鶯
浦は町やむかしの鳴海鳴千鳥　（ナルミ）業言
鳥さへ鳴つふしたる千鳥かな　安信
海を田に埋て鳴なるちとり哉　重辰
立波にねられぬと鳴や小夜衛　雨亭
此里の松にきけとや鳴ちとり　白笑
往もせす來もせぬ浦の千鳥哉　（借）牛歩
猫も我におされて鳴な小夜千鳥　一邑
礒ちとり鳴よ今夜は幾日汐　洗古

ひとり行浦やすゝとき小夜衛　房河
汐風に尾頭ならふちとりかな　蟬木
呼續の浦に鬮なし啼ちとり　（八幡）秋蒲
海士の火にそなへ崩すや村千鳥　哮斗
打て來る波をまくらや啼千鳥　鷺汀
和田殿の九十三騎や浦千とり　鯉走
幾つかは產て名に呼友ちとり　和子
旅ならぬ耳に問はや小夜衛　一海
磯ちとり其ふみあとや文字つくし　一溫
汐滿や麥の二葉を友ちとり　泥蕪
小夜ちとり枕無すやたにこ盆　龜世
けふまては人の噂や啼千鳥　知足
晝のうち鷗に眠りちとりには　蕣堂

鳴海知足子は芭蕉翁の古き
因にて旅寐の夢の見所と定
めて月に雪にやすらはれし
其心さし今もむなしからさ
れば予も又たつねよりてむ
かしに成行事とも物かたり
聞えしに日數とゞまりて古
翁の月忌にさへ當り侍れば

旅をせは日の永頂上執筆

冬之部發句

千鳥

聞あかてもとる汀や千とり足　貞德
淡路潟通ふや須磨の千鳥かけ　德元
唐まても行か千鳥の浦めくり　杉風
浦ふれて千鳥も鳴や船大工　（ヒメヂ）宇古
打も寢ぬ鍛冶か火青し小夜衛　新足
品川や塵をはなれて啼千とり　百丸
せはしなや羽もやすめす岩衛　（伊丹）人角
目の驕收る雪の千鳥かな　長父
鍋鐵の身はいらゝきに千鳥かな　德七
擢柄に頭巾を干や磯ちとり　麥秀
明かたの輕き衾や磯ちとり　金風
引汐に千鳥の聲の何國まて　（有馬）和轍
千鳥ともねるか夜寒の里の妹　（ナニハ）咋非
靜かなる中のうこきは千とり哉　甘泉
淋しさの裏啼かへす千とり哉　之白
更る夜の千鳥におるゝ膠かな　月蕁
方圓の影や心の小夜ちとり　柳水
いかになるみは炙しやもの此千鳥　全聯
不二うつる涙の寢入て千鳥かな　龍風
起はせす枕はなるゝ朝ちとり　光彥
ほし崎や波の笠着る磯千鳥　爽我
飛音や鳴ぬちとりの程拍子　泥隱
待夕すしも風の夕のちとり客　鷹山
浦山し千鳥にあかん網代守　幸來
友ちとり火燒ぬ寺に明にけり　嘉樂
四ッ二ッ明石のね覺陸奧ちとり　文翅
傘海月相舍りとや濱ちとり　寸松
天てるや女筆の行衛千鳥形　（加賀）法竹
浦風の殊の外なる千鳥かな　（伊勢）夕市
曉の欠かなくか友ちとり　（ムツ）笑々翁
呼續や枕とかへる小夜千鳥　（三河）語之
濱千とり緞子の夜着に聞夜哉　白雪
爐の炭を啼ほとめたる千鳥哉　桃先

池の魚あらしにあてぬ氷かな　知足

雜冬

一すねも二すねもすねて冬の梅　扶搖亭
花の木に花の寢言の小春かな　光彦
せめて十夜何少將は九十九夜　蝶羽
大酒や三日足たゝす惠美須講　(ナコヤ)昨丁
木枯に出現したるお寺かな　(ツシマ)一口
木からしもかしましからぬ柳哉　巽言
荷もなうて柳やかろき冬の雨　龜世
角つゝむ越路の牛の寒かな　和子
十ヲの指口へところへる寒かな　(イセ)紀之
とはいかに鍬は切まて大根引　幸巴
九合羽はしり過たる霰かな　知足
わか宿は跡さいて寐る湯婆哉　(小豆シマ)寸伽
火加減の甘塩を喰火燵かな　白雪
寒菊はちかよる梅の名殘哉　杉風
しら糸に霜かく枝や橋の不二　その女
富士ひとつこゝろかゝりよ河鰒汁　如泉
鏡つかふ冬田の鷺や世中は　柴友

歲暮

代々の賢き人々も古郷わすれかたきものにおもほえ侍るよし我今ははしめの老も四とせ過て何事につけても昔のなつかしきまゝにはらからのあまたよはひかたふきて侍るも見すてかたくて初冬の空のうちしくるゝ頃より雪を重ね霜を經て師走の末伊陽の山中に至る猶父母のいまそかりせはと慈愛のむかしも悲しくおもふ事のみあまたありて

古郷や臍の緒に泣としのくれ　芭蕉
賑はし煤とる宿の朝けしき　知足
年わすれおかし太皷はたゝかれし　如柳
としの夜もかさゝき渡すとや成ぬ　蝶羽
行としや伊勢の御燈の粘細工　琴風

たゞにあらぬやはと道好め
る人々を招き追善を催され
ぬたゞなつかしき世の胸に
うかびて句つゞるへきおも
ひなけれどしきりにとあれ
ばやまず

千鳥鳴夋やむかしの杖やすめ　路通
此浦のちとりに殘る紀念かな　蝶羽
俤のしくれもこれや片便宜　自笑
俤は繪にもかゝれぬ紙子かな　龜世
落葉燒けふの手向や七茶釜　知足

時雨

干網に入日染つゝしくれつゝ　來山
そよ時雨筧の水の生て行　知足
秋の哀すゝきあけたり初時雨　ナコヤ 木雞
さゝめ言物にもならぬしくれ哉　肥後 宗信
來ぬ人をしかるところにしくれけり　チクセン 野吟

下回 はやこなたへといふ露のむ　ハル
くらの宿はうれたくとも　ヤチハ
袖をかたしきて御とまりあ

れやたひ人
たひ人と我名よはれむはつしくれ　はせを
かつきした男見せけり一しくれ　一色
傘借せと背戸たく也夕しくれ　雨伯

水仙花

置霜の敵を味方に水仙花　乙州
水仙の組合はなし獨武者　蝶羽

茶の花　上野の道にて

茶の花や須磨の上野は松はかり　素堂
茶の花や徑わけたる星月夜　龜世
茶の花のあるしや庭に唯居らす　園友

雪

雪降や若衆の門を掃に行　才麿
降雪になほおほきかろふしの山　尼 智月
松は雪ふくへをいつる炭の音　イセ 八菊
あけほのゝ雪を耕す蹄かな　蝶羽
蠅追ふた尾に雪拂ふ隙の駒　イツモ 風水

氷

紅鹿子結ふや氷の下もみち　ツシマ 氷下
我老はうすきに厚き氷かな　龜世

凍解

凍解や去年の紅葉の行覓　一海
鐘の音や解て八十瀬の徑かな　ナゴヤ 寅三

柳

柳垂てあるしに猫を釣夜哉　木因
軒にさらり砂にもさらり柳哉　僧 魯九
そよめくやあつらへの風梅柳　知足
雨風をたけ〳〵の柳かな　(ちそく娘)津ね
鳥ともの脊にのする柳かな　ブンゴ りん女
降雨のこまかにしのぶ柳かな　繁貞
光陰をたらりと庭の柳かな　道甫
朝柳平等院の本尊かな　沾洲

胡蝶

夢に化す蝶や浮名の青表紙　露之
照れても欝金しろまぬ故蝶哉　木因

蛙

蛙啼一夜〳〵に夜着重し　蝶羽
陸にくも飛鳥を得るや蛙武者　嬉斗
野の宮の高麗狗になる蛙かな　洛 素流

すみれ　たんぽゝ

明ぼのやすみれかたふく土龍　洛 凡兆
一昨日の鐵炮くさきすみれかな　東潮
戀せしな親かたふけてはな菫　蝶羽
たんぽゝの土手やむかしに鳴海潟　桑名 東推
なんぽゝや白髮見やる足の下　知足

田螺　田打

半蔀の空明渡る田螺かな　下野 裀斗
寒歸る木曾のむかしや田螺とり　一邑
しとやかなことを習はふか田打鶴　惟然

猫戀　つばめ

鞠それて妻乞猫の行方なし　沾竹
壁の穴嘿ッ鳴ッぬとの戀　氷下
乘かけを坂に越たるつばめ哉　雨亭
つばくらや子を思ふ身の隙もなし　含羅

陽炎　布袋みたる繪に

袋よりたつ陽炎にかいたるし　杉風
燒ぬ日を陽炎もゆる塩屋哉　嬉斗
陽炎の中に骨あり田うゐ蟹　東藤

朧月

里かよひかいとり前やおぼろ月　蝶羽妻
晩鐘に朧のにほふ垣根かな　蝶羽

春之部發句

立春

代ゝ富り壺中の茄子氷櫟　露霑
弓馬の初音うつくし見手茶屋　冠里
賀に榮り齒朶から花の綾綿　闌幽
そも〳〵は曙の色や山のはる　露江
湖のほとりの玉やかゝみもち　才麿
初鷄のあした〳〵や無盡藏　舍羅
蓬萊の隱家にせん榧の殼　如風
呉國へは跡かつかする初日かな　雨亭
わか春に實植の柑子粧りけり　知足
靈夢から裸もあるに着衣始　團友
初なつな鰹のたゝき納豆まで　素堂

梅

梅か香に醉へきほとの雀かれ　知足
梅か香に妻うたかふや夜三更　（ナルミ）柳水
ね覺たる顏吹なくれ梅の風　和子
竹の戸に釣瓶の魚や梅の花　長叉
麴屋にとまり客あり梅の花　（ミノ）沸泉
釋迦はやり梅は導く鼻はしら　周東
かた〳〵は寂しかられて梅の花　（フンコ）繁貞
梅か香やこほしちからもなるみ潟　（デハ）柳舟
八月にまけは致さす梅の花　（カヾ）汀蘆
遲梅の殘る影なき月夜かな　野坡

聖廟奉納三句

松梅の庭や文武の右ひたり　知足
紅梅や萬歷ともす松の中　龜世
此春を含か神の松のはな　蝶羽

鶯

譽らるゝ鶯の身そむつかしき　（エチゴ）卷耳
うくひすを命や軒の干大根　（下野）寸馬
うくひきや千疊敷のあるし顏　扇河
鶯やむかしは寺に哥のあり　蝶羽
金持を鶯擇らぬ軒端かな　露之

閑なる事を好て山ふかく入は又里あるかことし符中に山林あり足ることをしるや此館の主人

その日には覗とゝかぬ木の芽かれ　露川

明ほのゝ鐘に咲たか此さくら　ナコヤ申桃
晝からは茶屋か素湯賣櫻哉　業言
山さくら表具してみるかすみかな　知足
やまさくらひかへて外は町屋哉　東推

山高うして海ちかきといへるをおもひ合せて

大勢の日に呑れたるさくらかな　驛白支
川霧や散はおぼえて山さくら　桴舟

奉納歌仙

笠寺やもらぬ窟も春の雨　芭蕉桃青
旅寐を起すはなの鐘撞　知足
月の弓消行かたに雉子啼て　如風
秀句ならひに高瀬さしけり　重辰
茶を出す時雨に急く從の襲　安信
賣殘したる庭の錦木　自笑
ウふのころのかさなり伏て四ッ五ッ　業言
むら／＼土の焦し市原　執筆
旗竿に蔽はほられて風の音　足
下部の祖父と女すむ家　風
きぬ／＼のまた振袖に烏帽子着て　笑
うらみを笛に吹殘しける　信
曇るやと夷に見せたる秋の月　辰
露さふけなり義經の像　言
白給に萩としのふを織こめて　風
院の曹子に薫を乞　足
廊を双六うちにしのひより　信
火を消顔の憎き唇　辰
名盞をあらそひ負てかり枕　言
一二の船を汐にまかする　笑
乘捨し眞砂の馬の哀なり　辰
刀をぬきてたふさおし切ル　風
大年の夜のともし火影薄く　足
居眠りなからくける綿入　信
菊の戸に乳を呑ほどの子を守て　笑
もきつくしたる午時の花　言
山路來て何やら床し郭公　風
笈おもけなる宮の休らひ　辰
姉妹窓の細めに月を見て　信
名を待宵と付し白菊　足
ウおもひ草水無瀨の水に投入ん　辰
秋くれぬとて扇引さく　笑
初雪のかゝる簾をうち拂ひ　足

鯛廬亭にのぼりて

星崎の朧や低し亭の上　越人

出替　養父入

出かはりの寐言に物をこそおもへ　團友

出かはりや水遠近の井戸車　蝶羽

養父入やうなつきあひて行違ふ　カヽ 柳雌

紙鳶　雲雀

鳶そらす顔や切行いかのぼり　獨笑

若草にとんと消たる雲雀哉　酔素

汐みちて上野の方や舞雲雀　露川

上巳

萬葉の姿ゆかしや雛雛　ナコヤ 機石

そらねして御門通るや鷄合　農石

三日月の光や浮てもゝのはな　加賀 句空

沖の石日にあたゝまる節句かな　鯉走

鯉もけふ伏見の桃にのぼるかな　亀世

桃咲て釣しかへたる干葉かな　治由

花

それは桐踊これは知足翁の

花の宿なれ

初花やかさねかさねに鹿の角　高翔

知足亭の初花を詠めやりて

見直すやかゝる男も花の陰　祖月

おなしく

御壽命の外十年や花の山　コロモ 一貫

老の山踏歸るさは

鳥雲にうんうんとてそ花の岫　スカ川 藤躬

いつくれて花にはさかる三日の月　フンコ 紫白

足もとのあかるい華のもとりかな　イセ 辰閭

懐に寐て歸る子も花見かな　ミノ 千川

年喰へはいよいよ出たき花見哉　新城 かめ女

さゝ浪や志賀からおとす花いかた　蝶羽

花に香て年も小半合掌にけり　亀世

櫻

鎖おろすたからの奥のさくら哉　才麿

咲やいかに鹿追ふ藥師山ざくら　下野 里杜

糸櫻吹や堅田の網さはき　楷然

山さくら世を宇治山の行脚哉　フンコ 馬貞

さくらにも談義にも寐る親仁哉　岡サキ 胡叟

知登利掛下巻

杜若われに發句のおもひあり　芭蕉
麥穗なみよるうるほひの米　知足
二ッして笠する烏夕くれて　桐葉
かへさに袖をもれし名所記　叩端
住劚て月待ほどのうら傳ひ　業言
それとはかりの秋の風音　自笑
捨かねて束呼鹿に耳ふさき　如風
念力岩をはこふまたゝり　安信
道野邊の松の一喝まめし讃　重辰
長者の輿に香を投込む　蕉
から櫓を荷ふ下部のうつゝなや　足
罨にかそふる八百の鶯　葉
森透に燈籠三ッ四ッ幽なる　端
子をおもふ親の月さかしけり　辰
それの秋すなる手打の悔しくも　足
猫ならは猫殤はれてから　風
鳥邊野に葛とる女花わけて　葉
ねためる筋を春惜まるゝ　言
燕に短冊つけて放チやり　端
龜盞を背負さゝなみ　蕉
天氣さへ勅に應して雲なひく　信
五日の風の宮雨のみや　風
菓子賣も木かくれてのみ住はつる　笑
長屋の外面たつ名はちらひ　足

芭蕉行脚のころ

夏草よあつまろまとへ五三日　知足
笠もてはやす宿の卯の雪　桃青

あるとし予かたらたぬ洛にのほりて眞珠庵のぬしにたいめせし比雨吟すへきとて第三まて出來ぬ歸國の後尾城の露川を加へて三吟となし十三驛路幾度か往來して
かく迄になりぬ

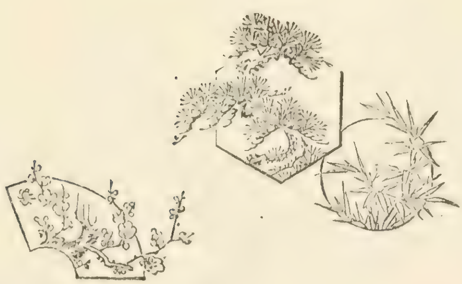
川床や片尻かけて旅まくら　知足
囀す開發せ鐘のみしか夜　如泉

鳥居を覗く八重の松はら　風

花盛尾張の國に札うちて　言

駿になるすくの明ほの　信





雀たつ若葉か底に一二輪　洛 春人
白雨に青葉か上の若葉かな　大垣 荊口
葉さくらや鳩の産家のうそくらき　蝶羽
葉櫻やたらつき足らぬ鳩の聲　采澤 竹友

郭公

ほとゝきす宗祇の質のなかれ讃　伊丹 青人
郭公茶なし酒なし去なから　之白
曉のまくらも圓しほとゝきす　長サキ 百丸
雨による物てもあらしほとゝきす　イセ 古道
雲となる聲のはつれや郭公　テハ 蘆本
子規あとのまつりに雨か降る　重行
杜鵑鳴たる跡の九輪かな　源泉
ほとゝきす口濡す間はなかりけり　左布里 夏流
一聲は青葉に包めほとゝきす　知足
山法師三ツかひとつはほとゝきす　蝶羽
耳ふさく猿は尊し子規　下野 龜世
　さし掉書たる肩に
此上は淺芽か原よほとゝきす　夕全
鳥さしも竿や捨けんほとゝきす　芭蕉
ほとゝきす濡てかたひらひとつ也　來山

雨になけ宿は澳ともほとゝきす　昨木
民種の日遣もいつかほとゝきす　露霑

牡丹

ほしさうに笑うてかゝる牡丹かな　路通
茶に醉た振してくれぬ牡丹哉　知足
はたけとは志賀の都の牡丹哉　圓友

杜若　入はしにて

二度手打澤ほとゝきすかきつはた　三千風
馬に市かきつはたには人もなし　素堂
かきつはた汗てほとひぬ道明寺　不角
駒下駄にはる／＼來けりかきつはた　養民
秋津洲は色にほれけりかきつはた　シマタ 全暇
立傘の侍殘れかきつはた　如舟
今ならは迦葉微笑らん杜若　釋 雲歩
隱れ家の深川ふかし覗よはな　知足

筍

竹の子の裸になるは誰ゆゑと　斟斗
竹の子や名聞の世に滔はす　ツシマ 萬山
竹の子の一よ折とも音なたてそ　湖十
竹の子を竹になれとて竹の垣　來山

鵲の松を南に飛ぬけて　同
家のうは手に落さうな岩　露川
冬待て雪車の釘打暮の月　同
稲を仕廻へばしけき鯛事　足
いつやらの野分に堤皆に成　同
相撲を賣てありく男等　泉
一年も添たる妻のひとり啼　同
火燵をおもふ夢の曉　同
とう／＼と船の廊の波の音　川
分別顔に出たる絫房　同
精進に名代立る花の宴　同
暮行春は今に買れし　足
居替りに女ひてりや江戸の町　同
運ふ茶臺にうつる前髪　同
海廣くこゝか國ての月見寺　泉
袖かた敷て蘭に吹れん　同
鹿聞に來るはやさしき人心　同
きのふも今日も菜は燒鹽　川
雪のあるうちは軍を止て居る　同
おくり迎ひを船の通ひ路　同
しれぬ名の立や絹干の出來分限　足

小皷打の小うたさへよき　同
夕月に晝の暑さを忘れけり　同
せめて隱居に京や願はん　泉
花の蔭豆腐に須磨の鯛ふるし　同
袱の伽羅に蝶のまつはれ　同
衣／＼を御影供參りにまきらかす　川
あまりに晴れし空もしまらぬ　同

夏之部發句

衣更

ころも更壁に詩をかく御涙　人才麿
かたひらや袖に初香の神の庭　山屛
衣かへいまたひなたを入か行　幸來
袷着てまつ立出て峯の雲　之白
あはせ出せ花さへ芥子の一重なる　來山

新樹

若葉ふく風から出して卯月哉　呂千
若葉より出山拜ムしやれ木かな　獨卜

暑

暑をも問はて知れたり羅漢の身　和子
もゝ尻と人のいふへきあつさ哉　鯉走
麻につるゝ蓬につるゝあつさかな　ナニハ 東行
鬼蜘蛛の圍にかゝらはや此あつさ　下野 羽矩
岩ひはの擾つめたるあつさ哉　カヽクラ僧 春船

納涼

子を寐せて涼しくも有か片庇　龍風
涼しさを飾て見せたや水車　木園
涼しさをみよとやはしる帆かけ船　知足
梅檀の風やお寺の夕すゝみ　醉素

名所之夏　星崎　夜寒里　寝覚里　上野

涼まうか星崎とやら挧何所しや　惟然
星崎の青田によるや波のはな　潮十
星崎のすかた亂るゝ螢かな　暮船
かたひらも夜寒の里の旅寐哉　釣壺
涼風や夜寒の里の吹あまり　素羽
短夜は寐覺の里も朝寐かな　ナニハ 千穂
一斬ねさめの里やほとゝきす　釣壺
夕顔や上野を通ふ油筒　謡之

行脚のころ

橋の小島か崎も青田かな　知足
勢田の手をうちもらされし螢哉　同
淀鳥羽の牛に帆かくる暑哉　同

知足亭にて

麓ともおほしき庭の覆盆子哉　支考
夏氣色返す／＼もなるみ潟　乙州

俳諧秋之部

鳴海眺望

はつ秋や海も青田の一みどり　芭蕉
乘行馬の口とむる月　重辰
薄庇霧ほのくらく茶を酌て　知足
やせたる藪の竹まはら也　如風
蛤のからふみわくる高砂子　安信
笠ふりあけて船まねく聲　自笑

歌仙百韻

端午

事觸ものほりの鈴も遠乘も　沾竹
誓てし粽結ふかはいはた帶　（下野）翠多
したり尾の長屋〳〵もあやめかな　（ミノ）鬪斗
綿直切顏やあやめのわたほうし　已千
子はたらぬ物か幟に子持筋　不秋
岩橋や軒のあやめを下にのみ　平之允
曙の色をわけたるのほりかな　昨非

五月雨

五月雨や三番三をふむまはり椽　泉流
五月雨や魚とる鷺のなかれ足　和子
五月雨や山もかくれてなこの海　蝶羽

水草花

花咲て猶うき草のうきに浮く　知足
泥龜や花うき草の誘ふ水　蝶羽
鯉飛んで萍のはな失にけり　つね女

百合草

雨雲のひつくりかへる百合草の薹　百里
姫百合草や小町かむかし後ロ紐　律哥
姫ゆりにゆらるゝ露そ浦山し　（イタミ）龜世
あさら井に蛙游くやゆりのはな　金風

水鷄

氏雲にまけしと扣く水鷄哉　荷兮
明かたの山もくつれて水鷄かな　（コシ）其香

蚊柱

蚊柱や角なきとてもそひくるし　好永
蚊柱もころふ時あり夕あらし　魯九
蚊柱に行あたりけり鼻の先　（廣シマ）葱好
蚊柱は夕かほ棚のひかへかな　釣壺

初茄子

初なすや腮の汐のいそかしく　（武江）松荷
玉の緒や是も齡の初なすひ　泥燕

蓮

あの蓮の動く所や魚の淵　如風
水晶の山なたれてやはすの露　魯九
立鷺の羽風に蓮の折葉哉　自笑

題狂言

すむ水の芙蓉に恥よ鬼の顏　山扉

蟬

山蟬や小紋すゝしきうす衣　獨卜
山蟬や權の太夫のからころも　蝶羽
雨雲のちきれて蟬の聲高し　嬉斗

泪けのない魂棚や御寺方　卜誰
玉祭つゝしむ事の自然なり　亀世
かゝけても燈火暗し盃の月　蝶羽
おとこ女隔ぬ客や玉まつり　知足
親をおもふ衣の山の月の色　才麿

粟

風に名の有へきものよ粟の上　惟然

青瓢

初秋中一此所に遊て

夕かほや秋はいろ／＼のふくへ哉　芭蕉
ぬすかたや離たところも青瓢　季カ、色
ふくへにて茅屋おさゆる嵐哉　亀世

朝顔　木槿

朝顔や白髪も見えす花さかり　月尋
せんくりに咲て久しき木槿かな　知足
一ひねり朝貌と中つほみなり　圍友
朝顔の花や網戸のうらおもて　伯鬼

花野　女郎花

惜からぬ風は花野のさはき哉　泥燕
それ／＼や風に見らるゝ花薄　一海
秋風のこそくりてゆく花野哉　亀サキ卜志

いたつらの色をさりけり女郎花　亀世
角もしと姉くも寐しか女郎花　一海
松風の里に汐くめ女郎花　冰口

露

静さや繪に書て錆ム露の色　白支

賓永

おほ宮造りの時

露置やましろのひかし八大名　風水
きのふにゝ似て何はものか草の露　之白

虫

虫よ／＼啼て因果かつきるなら　乙州
ぬけからの蟬実なり虫えらみ　木雞
蛩虫ゝ啼て枯木の風情かな　淵泉

鹿

丸山の松を見せけり鹿の聲　知足
をのか音の術神通ゆく男鹿かな　鵬白
延あかる臑より細し鹿の聲　魯九
棹鹿の聲うるみけり夕あらし　蝶羽
宵闇や篭にもれて鹿の聲　大ッ麥秀
参ちかし続り初もの志賀の鹿　我笑

野分

賀新宅

よき家や雀よろこふ背戸の粟　芭蕉
蒜にみゆる野菊浦萱　知足
殺渡す岨の編橋霧こめて　安信
風呂焼に行月の明ほの　芭蕉
杉垣のあなたにすこき鵜の聲　知足
はつ霜下りて紙子拥つく　安信

秋之部發句

初秋

徙竹の雀秋しる動かな　杉風
是は扨あの松風か秋さうな　梶女（キチン）
初秋や筆を呼るゝ草の雨　三惟（ナニハ）

七夕

土器や壽の字さやかに天川　露霑
はしり穗の一筋ぬきや星祭　木因

織女の娶入やよめり宵月夜　金士
ちよつとした雲のさはりや迎星　歌十
物かけに女の聲やほし迎　東白（越中）
ほし合の蒲團を敷か宵の雲　紀文
碁盤出せ星さへふたり逢夜なる　村女（いせ）
取亂すわかれの雲や天川　八菊
河風や擈の音吹ほし迎　龜世
七夕や糸いろ〳〵の竹の花　一温
三ッ股や江戸の硯の洗ひ瀉　清竹

一葉

角文字は桐の落たる二葉哉　甘泉
くる秋のきりきはみする一葉哉　すて女（かいはら）
桐の葉やいたゝく桶の水のうけ　菐雀
桐いまた風折ふしの合點から　千山（ヒメチ）

生身魂　木曾にて

かけ橋や生聖靈の袖の露　一鐵
死〳〵て生て露けし萩薄　天垂
蓮の葉も浮世の鯖にまみにけり　木因

玉祭

蓮池や折らて其まゝ玉まつり　芭蕉

名月の麓の松やおとこやま　蝶羽

十三夜

月やちる袖は木の葉の十三夜　重春
草も木もこの國ふりよまたの月　全暇
酒醒て憎の寒さや後の月　長久

菊

白菊や黄菊の中の一ねふり　由平事 白八
清香をめくらせけふの菊の風　之白
白菊や菊にあるかはなけれとも　蝶羽
中樽に千代を濁さるや菊の酒　千律
松かねに千代をあやかる野菊哉　知足孫 永參
白菊の咲や浮世の稼入年　知足
白菊に黛つくれうすくもり　ちそく孫 志ゆん女
大人に徳あり菊の酒はやし　龜世
濡色は山路の菊の自然かな　醉素
門あけて見らるゝ菊のよろこひか　ナコヤ僧 大椿
壁際や蔦に手をかす菊の花　文來

若菊

白髪にはならす此はな小むらさき　山屏

深川蕉堂より冬の中に

十六夜の月と見はやせ殘る菊　芭蕉

新綿

新綿や治れる代の弓の音　曉山
新わたや弓より散りて綾はとり　泥燕
新綿にこもる鶉や雲の雛　林鳳

秋暮

夕暮はいつもあれとも秋の海　團友
馬牛の脊もさかされし秋の暮　松荷
何うゑた跡とも見えす秋の風　初候
椶櫚の葉や草摺たゝむ秋の風　八菊
瞬とても常なき秋の扇かな　横船

長夜

長夜や蚓の聲も長恨哥　吉 蝶年
宵闇や霧の氣色に鳴海潟　其角

はせを老人此所に杖をやすめ給ひ俳諧のあまり付句并にほくとも書殘し置れけるを反古の中よりさかし出しなつかしさのまゝこゝに記

草や皆野分に今朝のていたらく　柴友
西瓜ひとり野分を知らぬあした哉　素堂
庭の面も見えすおもしろき野分哉　之白
吹出すや野分のあした又おかし　サカイ成之

間引菜

間引菜の露提てくる目籠哉　知足
間引菜や後にそおもふまゝ子立　一色

菌

狩めくり菌ひとつを鬼の首　夕全
宵の雨松と契りて木の子かな　龜世
かけ出や菌なとを數珠つなき　卜誰

碪

うた、寢の闇打返す碪哉　蝶羽
手たすけのわらはれに出る碪かな　辰閣
碪聞程こそよけれ奥座敷　團友

鷄頭花

鷄頭や紅綿繡の裏住居　林鳳
鷄頭や唐のかしらの夕日陰　龜世
夕暮に何をちらさん鷄頭花　安信

八月

裏銘は不知かつら男の六かゝみ　不變

行船や笘洩月に袖の紋　加賀北枝
いろ〳〵の枕やあらん秋の月　洛伯流
寢ておかし覺てもおかし旅の月　鐵蟬
蘇鐵にも月はやそれと薄かな　素堂

名月

名にいはく今宵の月や三五郎　立圃
名月やいまた增賀の裸ころ　言水
秋そ最中心の須磨の四絃　光彥
名月に我はへちまの袋やら　秋色
名月の濤にや水にも自在竹　柳舟
名月や照も曇もはなれもの　蘆本
今日の月いてや小町か袋には　有馬臨水
明月の鐘鳴わたる名殘かな　サヌキ正次
白砂にひたと座しけり今日の月　チクセン無天
名月や今宵一夜の秋の晴　カヽ露因
肴屋の日記に乘らん月見かな　柳水
名月や約東勝て内に居る　泉流
名月やつゐてに明る日を拜まん　知足
名月の窓やわつかに梅の花　才麿

八幡にて

覺がちなる夜の星崎のかたに千鳥の鳴を聞てほくしけるを亡父なにがし感に餘り其道を好み給ふ人々の詞をも呼續のはし〳〵つきわたして一冊にせんと心がけしにとゝせ過にし夏其心さしもむなしく鳴海のひろふかひなき身まかりにけり予其事のすたりぬるを歎き又我友ちとりの聲をも打添綴にしをつきふたつの卷になしぬまとに翁の余情もなづかしければ其頃翁ある許よりして熱田の桐葉がかたに往しがまた難波の春におもむかんとていかにおもひしや自負ひし箱物を殘し猶行先の霞とも消なん後のながめにもせよといひ置て出行しが終に其浦風にさそはれ世

をみしかき蘆の下涙とは成りぬ此卷もと翁の句より興りしなればせめて其係に此笈の見まくほしく桐葉の花も紫のゆかりなればかくおもふよしをいひやりてこひけれとはせをの露のかたみいかにし侍らんや我もし一葉の秋にもあはゞそれまた我が名殘りにもみせんなどいひしが去年の五月雨に秋をも待たぬ花と散りて哀添つゝ送おこせたりいかに世は露の玉手筥ふたりの紀念となりてある許に所持しにけり其形はさながら婦女の玉櫛笥に似ておほいさもさる物なれ高麗人の工ミと見えしかくろう塗りこめたるに金泥の繪のこまやかなるもはけうけて見るかけのあ

し侍りぬ
琴引ならふ窓によらはや
折提る道にて菊の名を忌れ　はせを
酒に興ある友を集る
ぬけ初るちゝの一歯のかなしくて　同
それ〳〵に年取用意いそか
しく
猿の小袖を染る猿引　露荷
櫻はなみ木梅は山里
行尊の笈に入たる哥枕　其角
おほく咲たる菊の
うき秋をはゝの事する物かたり　同
葉に染て涼敷夏をくらしけり
馬しゝてより出す桑の戸
時は秋よし野をこめん旅のつと　露沾
冬枯も君か首途や花の雲　其角
木枯の吹行後姿かな　嵐雪
鳴千鳥富士を見かへれ鹽見坂　杉風
送紙布
栽かれぬ陸の紙布都きたて　寶生 露蓬
我夢を鼻ひし霜の草まくら　桑門 宗波
來月は霜雪降んはつしくれ　ちり
橋までは供して行かん今朝の霜　仙化
幾時雨心そひ行江戸さくら　片川氏 濁子
朝毎のかみこや重き霜の松　李下
移てゝ送り申さん時雨哉　文鱗
時雨〳〵に鎗借置し草の白　擧庵

笈銘　蝶羽

世を面白く俳諧にかくれひとつの笈を友とし身の動く所を驛とし杖のとゞまる所を宿とす其廣き武藏野も秋を過古郷の空に通る時雨の侘しければとてある軒端に立寄笈さしおろしからうかけの紐打とけてそこ爰の物語に日を忘れけるが土丹生の寐

淡々句集

一此集元來艸稿なし。予頃年机下に扈從して、句評あれは則撰寫して袖裏にせしを、其儘に登梓す。依て新古を序てす、粗季をわけ品を分るといへとも、俳學なけれは參差多からん。見ん人用捨を加へたまへ。

一老師の句、人々に膾炙するもの、勝て計ふへからす。今彫刻する所、纔に百を以て算ふ此集に洩るものは、他日考定を乞ひ、猶新集の句を增補して、以後編を俟而已。

時延享三寅中秋の望

浪花書林

分外誌

るかなきかにけしきして物ふりたり左右に蕨手をつけしは負ふにたよりとやせしむへ獨りありきの用にはたりぬべかりける物とこそおぼゆれ此道の好ども打寄てとり出しふたゝび翁の文臺につらなる心地し其風情をゑたふされば其心ざしをのべて銘し侍りぬ

笈背古椒　拱本書箱
諸物不壞　事約用詳
獨步自負　客路友倡
坐懸肱曉　臥枕顚康
滑稽之顚　詞華餘光
屑吐之響　言寶得藏
四時佳景　身心洋々
一世消息　風月彷徨
其八已逝　爾笈爰昌
負篋終腐　秀陰無亡



三年めに
蜑の子やさらりと御津のはつ霞
寐ぬ夜寐て柳に鶏の初音哉
年踏んで越の白山明にけり
妻戀の一聲高し初かすみ

立春在元日
観世音ともに明たつ春のかせ
鹿を見ん八里あなたの神の春
風四海栄螺の笠も明のはる
蟹動きうとかぬや蜘の家の春
暦はみつた絶す身にしむ初日影

若菜
二階から目に揃へたる若菜哉

快復の吟
日を積や帆を待四海濵のはる

・やぶいり
傘音は草の廿日のはふへかな

春野
寐て吠る犬も離の夕日かな

音京御靈奉納に
御鎖たるゝや雨と山さくら

立春の翌日
蜘のゐの鏡となるや薄こほり

道明寺奉納
天の道明のつゝみや松の花

梅
大般若ふきとはうつゝ梅の花
髮小袖そしり初めや所々の梅
梅咲やけふは寐て見む障子越
日に道す子は門徳藪のむめ
柴揚て寐て流るゝや梅のはな
梅咲くや深き庵も醴雑煮
物云ふや去年むまれの梅の花

野望
下手ならん踊みたるゝ垣の梅

洛外
日は西に古敷台やむめの花

北山踏
川波のもし酒ならは梅のはな
梅咲や出家の眠る琴の前
むめさくや砥屋か軒端の水煙
白梅や老かまくらに老の膝

淡々句集

春之部

　年内立春
としの内に日光はさそはつ霞
　右御十七日に立春あり
春ふたつ見おろす富士の一夜哉
　摂府にて
佐保姫の男いそきやとしのうち
　同
咲たもつ牡丹の箱をあけの春
はるかせや窓をも明の寒山寺
　探題寄空草
初窓をみるや福寿の草まくら
　肥遯之肥字朋人換飛字半時
　庵亦以非換飛と云ふは平日
　何人と問ふ時隠者と答ふと
　を悪るの謂也
今日買んむくらの宿の雑煮椀
　歳旦
　鷲峰山の半腹に閑居の初年
宿のはる富家より高きはかりなり
春正月未きら紙そ四方のあけ
先おもふ老の春風ふちの花
　下河原閑居犬と共に四人
千人餘養ふとしのはしめかな
山椒は天下の木にて花のはる
　京師退隠のはしめ
植すからす棒を宿の飾りかな
叶ふ戀枕もすてゝはなの春
蘆の鉦はるも静に明けにけり
また夜深きに初日の灘を東鯉
　寅のとし一昔を經て武陽に
　春をむかふ
初　春　も　廿　一　年　拜　領　茶
　二度難波にて花押をとる
かくさはやさら〳〵さつと六つの朝
きのふ明日初日春風窓の梅

早春

春の月河原おもては冬の月

述懐

待事もなくて雪消の柊かな

享保元年の春鷲峯山の半腹に
半時庵をしつらひ洛より移り
たるあけの日無力齋續き

きのふ京明日をしらふの鑓尾哉

中村鶴雪五十賀

梅添ふや吉備の中山十かへり葉

偶成

きさらきの日數すくなし川あらし

春雨

春雨や棚落おろすたからふね

伊勢日記

餝りなくてそ見たし木々の花

太秦にて

鶯鳴や八角堂の朝ぼらけ

雲點春卿舎と號し時

蓋ゝ身の二見の春や箱の草

春山和尚より椿をたまはり
し返事に即興

置て行玉の使や木々の春

若狭路にて

黄梅にいふせき外科の住居かな

雉子鳴や雲の裂めの不動尊

入蜑に一あらしあり雉子の聲

使者奏者ともに飛込蛙かな

二軒茶屋にて

つまくしの眞菖たまりや木々の花

連翹の北の黄波やきさら波

二月廿五日
呉曉子一日千句に

天滿る聲を合せん百千鳥

大日恕軒五十の賀宗鑑茶杓の銘に濱松とあり

百年の旅を濱松若みとり

武陽河津氏八十八の賀

振袖や曇の中なる若みとり

紀州日﨑の宮

若蘆や伊勢の日影の水鏡

難波にゆかり有人四十餘年を
經て逢侍りしに招せられて

夢なれや春なれや宿むかし國

野に山に室を笑ふや梅の花
うくひすの定宿ふかき玉江かな
衣着て橋はく扉むめのはな
川上の虹を白眼や梅の花
早春徐歩 二章
富家ひとり野に年久し梅の月
行當り右は注連吹塀の梅
御宿
子に尋ね逢うて手に手を梅のはな
京
賤を見に行坂暑し梅の花
大坂
纜を摺船もとの頃森のむめ
祇園夜詣
紅梅や夜すから燈す的の中
住吉往來の吟二章
のほる日に匂ひを梅のしくれかな
しわ〳〵と阿波へ入ル日や梅の花
旋卯庵
梅さくや客に諷はせ笈の澁
題停牛

寐させぬや峯の嵐の梅のはな
題誓願寺
愛を去るな花と紅葉を未開紅
鶯
野からすは牛にとまるや梅の花
春日
囀るや藏もせうしも木々の影
春の日や扇てたゝく馬の尻
咲踊る梅は霞をゆかたかな
うくひすや岩を縫行水の上
鶯や木々に川あり一宿り
北野より平野に過る
花寂し川より登る坂の梅
享保七如月の頃伊丹神座亭にて夜交席あり
紅葉の蓋を預けて春の月
二月寒
そは切のうつゝに行野梅の花
柿本大明神の千年忌二月廿五日獨吟一日千發句卷頭
日は西に一人立枝や千梅花

東山にて

鹿わらは射はや佗はや花さかり

人は咲て浮るあふら山さくら

むさくとも花に行日そ車道

糸さくら則これかはなの雨

其後與州狸兄の主より糸櫻の枯て新たに芽をならへ花咲けるに京攝同門の句ゝを乞ふ老人にも中來れり情連れ例の新案にあたはす

いとさくら再ひそれか花の雨

花に倦て明れは北の山さくら

右京師花山日々寛韭の時なり

輕霜主人庭前の糸櫻

花鬱〳〵日よりとほすや薄烟

嵐山備龍亭にて

吹はらす筏や花のかゝみとき

おむろにて

腓着てぬけ道はなし花の聲

大津に行走井小坂ともいふ入口なり

そろはんのつふれつふれす家櫻

蟬丸の宮

神垣や根は家を踏やまさくら

京師の三月

九重やしかと春風はるの町

土産にはならぬなみたや花の酒

ほら貝に浮立花の夜明かな

花山

酒臭き橋もありけり春のかせ

散らは昔け花のもたるゝ腐り家

京師

旅人見よ花を離るゝ晝の月

鶯の夜〳〵おとす中かな

春野

菜の花の匂ひは寒し男山

菜の花や洞へふり込草履とり

菜の花の世界へけふも入日かな

上巳

制れ鷄のみつから起す嵐かな

けふ咲む加田の伏屋の桃の花

探題古樹作橋
曉や春の初音を渡り初
二月の末
また寒し凡定めん大和旅
北山獨歩
山そ春市原二の瀨三つ輪組
車坂にて
蟹の道横に霞や鞍馬徑
山踏
道ありと下れは庭そ寺の花
鞍馬にて
朽木ゝや生れぬ先の花の文
途中吟
相逢ふや爰にて汲ん峰の花
朝を見んと夜を行か花の旅寐かな
旅人消ヽ帆を產花の花さかり
升る日に雨を掃せて初さくら
馱鞠安心
蹴てわたし風なき夕暮の花
滿春
漕出せや丸山寺をはなのうへ

田分よりなとか田舍に花さかり
茶臼山にて
猶拜め百年後の山さくら
一日の巢は人にあり花さかり
巢離れの人は山路へはなさくら
口癖によし野も春の行方かな
高辻黃門公花に出立旅行の心は無き歟と云給し時一とせ中侍る句のことしと右認め上たり
吉野山馬上吟
馬上にて花下に遊ひ雲を踏ませて上らんとそし〳〵いひしもまさ事となりて此日のほる前夜嵐有て其響き叉そよ〳〵と春風なから花のためには敵なるらん鞍をうつみ笠に降て蹄香はし
散しくや谷〳〵盛り叉つほみ
よしの山世界の花は飲くらひ
大和路の鐘を散らすや花盛
右三句よしのへ三年登山の吟

有町や家の内なる藤の花

甲州鰍澤より十餘里江陵千
里一日に歸るかことし

波の瀧上には藤のしくれかな

攝之川口

棹の歌柳のつらゝ解にけり

探題老將花軍

桃に勝て頭の雪を散りさくら

與州佐伯柏我より盃山の銘
を付よと則神の桃と號く

みつらきの明ぬに咲な初さくら

如月千風へ老父之追悼

然とも浦山敷月のほとけ哉

獨麟禪師に謁し奉りて

潭に咲影に風なきさくらかな

右閏七月八日の明不量に赤の句有

寄鳥花

鳥か家もあらなく佐のゝはな

赤穗義士行　文章有先刊

其義一年〳〵富士の山さくら

偶成

鹽町のうら山吹やあらひ絹

神屋川にて

川の洲に晒の臼や梨の花

其角一周忌

一年の塚に髭なし春の氷

同十三回忌

角や句に敵なし十とせ過ても梨の花

同遠忌

桃柳みせたき孫の光りかな

同三十三回本式之百韻有

定ぬや花の三十日を三ッの浦

佃村に七十に成老尼ありけ
り一句〳〵と打しはふきし
に

六ッ上の春もむかしそかゝみ山

北瀧の東武にかへらるゝを
おくる

連翹や馬にも色をうつの山

文輔か父母稀年にして雨翁
同し日薙髮の事あり賀莚の
興行三月八日成けれは鷹の

鶯番ひ水の飾や桃の下
唐團かさせや桃の花便
かつらきの紙雛寒し山かつら
もし婿を取らは何鳥桃の花

稲田にて
鷲の尾のうへは雲なし桃の花
家々やいかに飾らぬ孕みひな
桃一木題目寺の垣のはし
桃の花咲や佛の旅ころも
告來ぬや伏見の外の桃の花
更科の禮者も來たり二かすみ

題寄桃戀
川竹のふしみは放す林かな
右霞谷十二景の中伏見紅桃なり

採題孤村
人見えす慰み咲や垣のもゝ

紀陽司木一日千句竟宴に申
贈る
保つへし千木の國人もゝの花

諶江一日北嵯峨に遊ふ
宿かりの柄に編笠梅柳
山伏も志はしはつまむ柳かな

鳥を釣鈎もすなほに柳哉
白露に宿かしかねる柳かな

探題柳
中にこの車大工そ門やなき

鷲尾山中吟
古柳咲や葛家の水車

二月吟
木々の芽や參宮湯治立別れ

惠脩律師七十賀　文章有先刋
矩を越す越るや法の花ころも

難波にて
鳳巾咲や切籠の若みどり
鳶鳳巾の中に無懸や貰ひ糸
藤の花蜆の息の屋形かな

安井にて
白藤の涙の底にも醉味噌かな

述懐
ふちの花かゝる浮世や鷲の觜

題春戀
二三尺先に人目やふちの花

東海道

四ッ盃につと〳〵名を付て
句を乞れけるに前書有畧之
霞汲む影をそ三ッか一ッまつ

三月盡
當三十日扇に入るや春のかせ

三月卅日八軒屋に到る船中
吟
鐘聲は八ッの軒端そ春の水
おもしろき涙なりけり春一夜

夏之部

更衣
月の芽も春、脱く山のころも哉
寒垢離の人に戻りて袷かな
うつろふや朧まんちう衣かえ
明行やあはせの星の淡路志ま
衣かえ水と水とのさかひかな
春閏あるとし四月の朔日足

補有
年回しからすや加茂の初袷

中山のいたゝきにて
目と指の動きて汗のはしめ哉

灌佛
四阿のまゝやの産家のもちつゝし

老濤會
實は採られ剪るゝ海の薫りかな
二王左右樹にはなせ鉢たゝき

武陽にて
御いとまのかさしを送る新樹かな

老松か貧におくれたるに
目にかゝる桂あるらんあさ卯ツ木

郭公
一聲を聞や四月のものゝ味
ほとゝきす只鶏の羽音かな

病臥の吟
兼て語る人なら通せほとゝきす
聲は書とめて山の端ほとゝきす
聞ねうそ軒の松風杜宇
時鳥鳴や夢かなほとゝきす

字を以て祝す
雪を脱こかみ山や鷹のはる
宇治茶秋
聲わたす空のかさしや摘のぼり
同所にて眺望
春の日や孫に漕せて柴のうへ
玉水にて
畜生めいで山吹のしつくかな
柴葉廣澤の別業に遊ふ此日
雨ふり或は晴たり
池照るや雨間を春の薄氷
池に庭あり庭中半廣澤あり
時は三月なりけり
明の春宿根の湖の嵐山
圭之句の家の字を韻礎とな
しぬ
我花の雪を讓らんむかし家
上京船中の吟
船頭も囀る淀の夜あけかな
花盛の頃寛步
花見えす禁制道のむかひ船

三月四日東大寺夜櫻の下に
遊ふ
花の月又買戾すいのちかな
三月廿五日鵜樹男月俊八へ
牡丹見に立宿文章有客之翌
朝の一句昨夜宿花裏通躰牡
丹香といふを思ひ出て
夜は明て杜に蝶のにほひかな
其夜持病にいたみ絕入たる
に雲皷水をあたふ
海棠をちからに櫂の雫かな
右海棠は母の名といふより
庭前に有をむまふ
内宮剃髮の拜所は川を隔つ
神も又別に置なり春かすみ
津ゝ雨香にて會あり明れば京
師にかへる事を
衣更着や綟子の一夜の二日有
三月有風老父追悼
世尊より跡に行方そ道廣し
素行

洪水の吟　文章有文集に入

鷺に踏れ鴎を追ふや蔓眞桑

不德と云題を探り得て

井戸堀にぬけ道はなし五月雨

紫陽草は花の中將とそおもふ

伊勢參宮法樂五吟

簷もれは額に餘るさむさ哉

同四月參宮外宮廣前の吟

我々郷やともあれ杉の初日かけ

紀陽中の島草庵にてかつら
き眺望聲綠の格

楷ゆふ數峯蒸日の皐月空

庭前即興

梅六ッ青きか原のぬすみかな

貴館の末席に侍りて

魚竹にのぼりの影や朝ぼらけ

呉邑に遊ふ斜日横山をてら
す

酒になる川に醉ふ日や山若葉

箕面瀧　飛流直下三千尺

銀の河原あそひや夏紅葉

伴自追悼

入痾四患の域をまぬかれ佳
名は雅子に殘れりといへど
も

撫子や六册たらぬ物かたり

若竹

竹の子のはたかになつてすまふ哉

紀三井寺眺望布引の松五六
本あり

濱帶を裁やさゝ舟皐月松

鹽濱入川

是も辛苦空へ植るや汐乙女

口州君御茶賜りし時露路に
て

別に夏おくは奥山から茶

伏陽北條君御庭にて

眞茂りの常盤さらしや水の花

生ると剪る事なかれ合歡の花

撫子の親とたのむやねふの花

蓴菜のゆらくは露か玉かつら

南紀分光父におくれたるに

右ほとゝぎす鳴やと讀るゝ
ど何となく一派大切の事歟
「ほとゝぎす鳴や五尺のあやめ草　は世を
「杜宇鳴や利休の落し穴　嵐雪
千里にも着日待宿ほとゝぎす
入梅廿日餘り降つゞきけれ
ば
雷を待こゝろふたつや郭公
住吉の濱にて
此うへは車一輌ほとゝぎす
伊達にまつ人も夜のぬし杜宇
初音聞なから句のなき事を
卯の花はちれともなかりけり鳥は
病後
埋み火やたま／＼鐘と時鳥
ふりむくや富樫もかくそほとゝぎす
扨よめる乞食をまたけ杜宇
釣逃す魚は手に有ほとゝぎす
玉津島騷雨
杜宇か風の嵐の傘は肩
鷄頭の若葉になひけほとゝぎす

又初音聞て逢さる戀路かな
ほとゝぎす瀨田に矢矧をつぐ夜哉
拾得も思ひ出す夜の初音かな
閏の時に
此四月六十日そほとゝぎす
杜鵑もし此時そ三日の月
李夫人を抱はけふりの初音哉
茄毛一周忌松坂の產生涯好
色の人なり
此人のいせ物かたり苔の花
五月朔日千友館興行武陽句
家深し五十三次寄申
端午　下河原にて
紫燕鳥の家中凉しきのほり哉
是をとて雪をたゝむや切あやめ
隼の一波こほすのほりかな
男山のほりの櫻咲にけり
葵
水と雲糺の口のはしら哉
富天西國に赴くに送る
竹の子のきぬ脫次第竹の雲

七面にのぼる
涼しさや高さ三尺富士の雲
　龍堂七面開帳
峰吹や薫りて御戸を明の空
　同夜四月吟
長崎の舛もさらに寒さかな
　山本の貧家に宿る
蚊に寐ぬ夜つく〳〵醍醐の山櫻
　六月七日苗木の城主遠山何
　某殿初て國に入玉ふとて望
　月の泊り駒引たてゝちくま
　の橋上ふみ轟しいさぎよき
　風情なりけり
山鉾や淺間おろしの入部笠
　日光尊宮を拜し奉りて
第一天子第一照る日杉の花
　江府にて茅廬に移りし夜
水鶏そとたしかに聞や宵寐覺
　歩行之吟
涼しさも暑さも橋の車かな
　右武陽大八之響を
　京師六月七日神輿渡御
つるめその弓張月や松かしは
　船中吟攝錦城を見て
月高く涼しき城の夜明かな
　攝霞閣朝日　喚洞亭
昨夜捲しすだれに寐入盛かな
　炎暑
六月や雲に南瞻部州の圖
彌は獅鏡にむかふ暑かな
　紅蒸
照押て鎌うしなふ野守かな
　夏日先斗町に遊ぶ
川の字になつて河原の暑さ哉
暑き日や桑に抱きつくめくら鶏
　攝府に蝸廬を作り六月三十
　日住吉御神事の日移る
世をわすれ草の庵も荷ひもの
　人皆苦炎熱
貧しさの己を憎むあつさかな
　同夕暮は
涼しさの富貴は來たり松の月
　蓮
逆さまに笠着て花の踊りかな

蘆暑くわかれの浦を月や見む
　正宜翁追悼
わかれ今長きは夏の夜なりけり
　四條の橋落けるを
杖をはし雲に行方やさつき川
　螢谷船中吟
掃よせて折やほたるの花もみち
大黒の二俵をかへす田植かな
　富て貧し貧しくて富皆以心
裏放下
森の鵜のうきをうらやむ鵆かな
　泉府北宿之吟
涼しさのいつみの國の寒さかな
　竿秋一日千句蔡花園にて興
　行と聞ゆ小山田の鹿の寐覺
　も
おとろかす哉京若根難波潟
　和歌浦雲蓋院に遊ふ時に夕
　陽
庭すゝし入日の本へからころも
　蘆邊茶屋にて
こなし歌散るや汐花しほれ麥
　題蚊帳
蚊を聞や廬にむすふ草の庵
　音羽の瀧にて
山神の小便清し蟬のこゑ
　加茂にて
夏を蟬芝の上行水の聲
　住よし法樂
葉の端に書のつゝみや若白髮
　探題寄名所戀
うつふいて夜をともりくの園かな
　青篠草庵に遊ふに日あり
僧をとめてせんかたもなき暑さ哉
　青篠出鶴の時
しかはあれと共に炊けは夏の月
　右年ふれはよはひは老ぬと云し事を
　由井の濱にて
夏草や鹽家をいつる齋坊主
釣り人に鷗並ふ花藻かな
　身延の吟
蟬衙所々の經聲水の音

むかしの夜聞ふや修學寺あまの川
　顯りに京師を思ふ
此夕露もむかしの祇園梶
弓勢はたのまて一首あまの川
薹（ハヂカミ）のもみちの橋も一夜かな
僞も命もほしの河原石
　高瀬舟中吟
けふ汲んて東竹田の七ッ井戸
　淀川下り船
星逢ふ夜水をまくらや船遊び
馬ならばつたなかるべし星の機
硯の世空行牛に手向かな
星二輪咲や川風瀬のうへ
橋照るやきよき顏みせ星二人
おめ／＼と星見る鳶のしづくかな
　壬七夕の吟
鵲は宵から寐るや雁の文
　七月四日未土用也三本木の
　水閣にあそふ
　探題神樂岡半月
初月や夜は夏なれや短山

　題番椒
喰ならふ王昭君かなみたかな
　水閣に遊びて風の字を得た
り
笛持てる人も來れり秋の風
　七月十三日
憎んたる鶴をつく／＼魂むかへ
　魂祭
來ぬ人を知れはとそ世に魂まつり
　中元
　孤新二萬六千日
子にも吾れ親にも露の月夜哉
魂棚や秋津島根の草遊び
瓜をさして馬と夕へのはしめ哉
　中元
刺繍の鹽こそ木々の初紅葉
　寛保二年七月十五日上京船
中吟
六十九我名月の文月夜
　老をいたむ
京の秋としをたとへは荒井の帆
　七月十六日鴨川の岸に遊び

馬上よりおそきを呵る蓮見かな
明星の落るをむかふはちす哉

述懷

鳥も來す咲や日本の桐の花

一字題 戀

晝も猶す向ふは雪かわか楓
とりとめぬ世の俤や雲のみね
敵かれに生るゝを蠅の千とせかな

音羽にて

瀧戸樋の糸をこなたへところてん

六月七日の吟

牛飼の七夕つめや初すゝみ

同八日朝

生れたる所は晝の河原かな

夕立

白雨にたつや楠子の墓の草
ゆふたちの射制て咲や潮の玉

季夏望日城北河邊に遊ふ船中の吟

六月の影を鯉塚漕はたれ

同時他に三舟あり

今日足りぬ涼しき笙は人の船

六月十六夜

夜水をうたせて月の雪見かな

宇治止宿

撫子や障子の穴の朝日山

祇園神輿御山へ入らせ給ひければ

撫子や正哉嵐の植きり

六月廿二日立秋有廿五日天滿宮神輿の御供御旅所に到る

夜と秋の透間あらすな御祓船

秋之部

蜘柳また散る桐の船あそひ

殘暑

蒸殺す飯にもならす女郎花

七夕

から崎や松に妻來す星一夜
鹿の耳はしめて立か天川

前に向へは明の風猶慕れぬ
何となく袖ぬれ袂重し
思ひかけなき名そ露の玉かしは
竹の筒の筆立を送られし妙
工は武陽の構入なり
死んで逢ふ鹿も有らん筒の中
越州君御嫁君斉君
月も弓鶴か岡松おとこ山
野分
鶏頭を吹消す明のあらし哉
武陽移居の夜宿鶏かちなり
けれは
遠く蘭鐘とはなすや秋の宿
享保元年山崎に遊ぶ
船引玉のたはむ尾花かな
半時庵と東籬に上たる時文
章有変に賦す
諂らはぬ日とそやすけれ黄鶏頭
同新夏科に移り遊ぶ時は
諂らはぬ身こそやすけれ黄鶏頭
右日と身の一字観すべし時

と云文章有略之
述懐
穂にも出す雲にも遠き木賊かな
京師卜居の表を魚輔にかし
て
獅子舞のかしらをわたす尾花哉
名月
名月や花も紅葉も浮さゝゐ
月の香や杖つくもかみ手に億利
名月や人より先は水の月
病後
おほつほの近江の君と月見かな
或日晴或は曇
神風に伊の国の月見かな
香爐峯に日面清光を
名月の皆に伏見や淀かづら
雨ふりければ
月此夜降に禰宜はなかりけり
一とせ石山源氏の間に遊ぶ
死なて明日本の間に月のにほひ哉
同十六夜日高觀音にて湖上

て如意灯を見盡す
文字消てしばらく月のもみぢかな
稻妻
いなつまや嵐の明のくるま僧
稻妻にゆかしき唐の木草哉
浮瀬にて　文章有略之
いなつまの有夜しらせよ四郎右衛門
久世戸の文殊にて
或は臣或は富貴霧の海
晴夜船中吟
又床し月の病のひとつまつ
まのゝ長者の末路と聞て
入江今六左衛門かうづらかな
七月廿三日京師ぼんと町雨
後の明
空遠し雨の土産の朝日川
探題　山家琴
酒買の來ぬ夜しらへん坂の月
同一字　題鯨
うたかはす月消す息の時雨かな
一とせ松かけて奥へ行脚に

出る日
秋の蟬北斗はおなしところ哉
朱のつきし箕は誰箕深山萩
松皮百合我門人となりてう
らなく予をとりはやす事を
遍照と頼風なくは草の花
山蜂の妻はいつれそ蘭の花
梨の葉の秋をかはくや夜明方
鷄の秋をくはるや竹林
題山家
小豆撰る窓にまはるや鹿の妻
蝸牛佛果を得たるぬかこかな
うれしさの五寸に足るや花薄
蘭君一句と仰あり轄下の御
額送青軒と有
風蘭の下に草の匂ひかな
八朔の吟
梅かゝや今朝吹かへす秋二月
ものゝふのしふきは枝のたのも哉
八月三日妙道寺に親弟大圭
か墓を築く者は秀鏡なり贊

十六夜や梅に翻る山の眉
梅もときいまた揚家の娘かな
草紙干す屛より高し葉鷄頭
　大圭か母におくれたるに
わすれては忘れて朽ん袖の柿
　才麿か娘の身まかりける時
露を射て一夜もとめす竹の風
　陸奥小野に止宿
曉や灰の中よりきり〳〵す
　宇治に遊び歸るさ
一日の貴人をもとし風の桐。
　大徳雪江武陽に歸るとて京より留別送られたるに
「海道やさらに衣の破れ桐　雪江
禪機ありし淨土宗かな破草
　鞋の心もあり
破れたるわかれも遊ひ風の桐
　偶感
待〳〵て待をうるめの初音かな
　享保十七子ノ八月廿九日六
　兩御車むつかしき音にて京

　極通を南の方へ挽奉るを拜
　み奉る歌
月なき夜光りは天のなみた哉
　病中倦夜
鐘鳴や狐なきしは雁の後
　東窓漸しらみければ
盜人の涙なるらん草の露
　小庭五六株憎むあり愛せるあり
朝ほれて晴なほ露のかしは哉
　重陽
花と見つゝ傾城ともの禮の袖
けふはかり神の露なら[illegible]れ菊
　武陽旅宇の吟
　東離にとらす南山を見す
皆買うて揃へる菊のやどりかな
きくといふ女使もむかし哉
世界栗我宿はかり菊もかな
命傷買ぬむかしの菊の離
　放下
竿に鉢まはるや菊の天津空

の影を眺望また更科のとあ
りけるを思ひ出ぬ
名月や京は八月十六夜
三晴一吟
例なき三夜の笑や橋の月
霖雨しきりなりければ
雨あつて夫婦の中の月見かな
偶に清光兩國橋上に獨歩し
て京師の方を思ふ
晴て月三笠の山はなかりけり
名月や霖覺し鳥の行方哉
降る國も有らん霖るな月見ふね
今宵濡つ天のはし立踏わたる
右天滿橋徐歩
名月や椅子に眠れは物狂ひ
馬て行犂も有らん月の華
日に桂男さかりのかゝみ山
名月や闇の破戒そ悔むらん
剃殘す山は愛宕か橋の月
嘸今宵禪は編笠杉の月
雨ふりければ京師を思ふ

降月や頻りに粟生の光明寺
同
此夜なしいかなる狄月や見む
名月や野に吹入なし螺の貝
來ると往と逢うて月見や渡し舟
名月や藏なき寺を尋見ん
和歌浦にて
嬉しさを今宵遷すやふし吉野
高津新地別墅にて攝府東山
を吟ず五文字を以京攝を別
つ
船へいさ望も月のひかし山
夢に晉子云吳楚東南折山更
幽一句は一字に有予云
影を師になして踊らん月を見て
頁夜清光なりと思ひ則覺た
り
三五の夜更たり潮のはつ氷
若雨ならば
今宵かく影さつ橋そ破れ傘
貴人眉の字を賜りける時

冬之部

小春の陰
木々散るや日の趣は若みどり
茶の花のほしの林や雨の中
喚洞の藻蟲亭に遊ふ初冬の
文章有畧之
我いろをこほして軒の時雨かな
冬獨活の窩にあそふ紅葉かな
偶成
遊に溺の雪をはこふや風の鷺
徐歩
空高く鳶見うしなふ枯野哉
來山追悼李天へ遣す十月果
たるよし
終に行海道ちかひ神の旅
述懷
宇宙の嵐に遊ふ木の葉哉

力なく花見る鹿の寒さかな
富家に遊ふ
鸜鵒の飛來る宿は野咲かな
時雨
ふりむきし鹿を包むや村しくれ
いかにせんゑくれの跡のかれ柳
播府の繁花を
降音や富家は貧しき小夜しくれ
たゝかれて時雨をふむや夕日影
初しぐれます〳〵神の鏡かな
高津茶店にて
嗅さらはむかふに海のゑくれを見
日の花を折つては戻すしくれ哉
一ゑくれ渡つて月の帆かけ船
嘶や時雨のうらのあらひ馬
一しぐれしみつから浚や椿樺
一時雨晝は春雨五月雨
右は文字にて聯綴するてに
をは也
日を峰へ戻さぬ後の時雨哉
右此句は先年「日の花を折ては

竿秋宗匠ひらきに
菊朝日動くや盤の淡路しま
開路五十の賀
七十の只今はたち菊のはな
探題垣の秋
碁にも似す作らぬ菊の嵐哉
朝に夕をたのみ來るを思ひ
〳〵て日月逝ぬ
あゝ老ぬ風にかちたる菊の花
探題　寄菓戀
偸むなよ尼になつたる桃の花。
九月十三夜
眞夜月なく十三夜は快晴な
りければ
おそろへし八月はなし軒の月
久世戸の濱亭にて
唐崎は此弟そ後の月
來月は日蓮菩薩けふの月
半夜半晴
千里寒し四ツより遙後の月
十三夜は到つて清光十五夜

を土俵の外へ
夜をかつら日本生れの男かな
十四日興洞亭に遊ふ
十三夜は藤の忠通作有り
古入此志らぬ一夜そ秋の月
九月に水仙を見たるは天王
寺廣田の祭りの日なり
水仙や十八日のからころも
萬宵舍は日夜几邊に寄來て
新月に風月を樂しむ九月廿
日に死す文章有先に刊
枝て吹戻す風なし桐一葉
又
穴あくや啼す夜毎の秋の風
暮秋
覺て噺鹿の上なり廿日月
來ぬ鹿をたつぬる風の紅葉かな
紅葉
つかむとも鷹に宿かせ初紅葉
享保五秋日の吟輕入集に入
入相の嵐に怒るもみち哉

病後

蘆の葉にとまる命や玉あられ

祇園先生の庭中の芭蕉
孟冬不枯刻むか如く破
たるを

芭蕉葉やみつから梳り亂き髪

寒菊の裝束いそくあらしかな
獨學愚蒙聲

高〳〵と田園まさに蕪かな

若州雲の濱

花となんかへつて目には雲の濱

玉泉禪師秉拂の時

風吹手吹雲の遊ひ吹枯尾花

祇空はさかみの國早雲寺宗
祇の墓前にて薙髪の事あり
て祇空と改む宗祇の句は
「世にふるもさらにしくれ
のやとりかなといへるを翁
は「世にふるもさらに宗祇
のやとりかなと檜笠浮雲の
趣きは延られたり竹笠者に
おくる時は

世にふるも更にはせをのやとりかな

空の字なかく保ちたまはん
めてたしとそ申遣はしける

冬至

先動く十一日のいとやなき

顏見せ此日にあり

人に花朔旦冬至衣の音

江武にて春暖を待北羽へ往
ん事を思ふ

降をまち消るを松の冬籠り

雪

初雪や何を秘佛の山かつら

はつ雪や波のとゝかぬ岩のうへ

常憎き人を初雪松柳

はつ雪や靈となる人明わたり

初雪の埋みたゝよふ蕪鐵かな

はつ雪を破つて鶯のわかれ哉

心なき寺のけふりや森の雪

不猶の祇園清水よるのゆき

乞丐の傘きさまや竹の雪

戻すと申出しを思ひ出て峰
の晴さる趣を云ひ盡せり又
降てはれぬ風骨やあらんと
一句を擲破して此句をまふ
く
祇林近野寛歩
花やあらんねふか呂の初しくれ
達摩忌
科てるや肩に獨のはつしくれ
明は寐んしくれの車盡るまて
片しくれ陰に龜の歩みかな
右先年歳旦に「蘆のかめ春
も靜に明にけり此句春の字
を以隔句たり蘆の龜靜にと
續ては輿なし靜の字春意あ
り陰の字冬に用ゐて可然歟
冬獨活の窠に遊ふ紅葉かな
此句窠の字可然歟大倉蒲五
郎か云り米市の切を鐘入の
工夫にて仕たると俳諧を俳
諧にて工案にわたる事甚野

なり然共俳學なくては道立か
たし
烏林君御別野にて即興
來ては染戻りに落すしくれ哉
江府にて申出る
雨に似ていかさま更て一しくれ
攝府之吟
汐照るや生駒武庫山二時雨
水野大君御日切にめされて
さらりと戸明りしくれの幾世界
病夜
車かと明ぬ時雨をまくらに手
探題　修羅道
枯蘆や起て戰ふ一しくれ
同　寄戀々
闇の夢も付日を松のしくれかな
蘆高き嵐にゆかむしくれ哉
腐り柚の枝に眠るや北時雨
病中順快陰
よし生て何を春風上無月

俳言は今京に有寒牡丹
いせ人はと云ひしはむかし
の戯言なるべし
寒雨
晴間暫し樹を抱く垣も氷柱哉
夕立の恩をむくふや炭と花
水仙や葉にはつかしき懐手
題忠臣
一人行主をしかるやさよ千鳥
至後
見よりは室を出ると聲にけり
室咲をもて来れる使に即興
力雄の手に一枝や明の室
氷
抱し葉を風にとらるゝ氷かな
寒至つて暖日多し
繊なさす水に疊むやはつ氷
年忘
伐喰ふや氷あそひの白拍子
老情
寒菊の花に等しき佗寐かな

寒夜
霜寒し雲に喰入峯の月
題鉢たゝき
瓢單をうつゝに覺ぬほとゝきす
暁情
いつく〜歟霜の月夜の車牛
冬妓
目にいとみ心にまねく師走哉
病妓
月見るや師走籠りの白拍子
若蘆祝
右稱名たくみとり亦名蘆虎
巧婦たゝき飛すや雪の船
歳暮
袋綸の襞なきとしも一夜哉
臘廿八日天王寺に遊ぶ
冬の芽や鳥の衣のきぬくはり
唐まつのひとりのかるゝ師走かな
小船も掉もかり物としの波
卯胡桃ともに道あり年の坂
譽られぬ姿やとしの不動尊

武陽にて
雪に訪ふ土産ははらふしつく哉
探題　池雪
かつまたの曙方や雪の横
杏川を訪ふに至つて寒し剪
くへんといふ梅櫻は隣のな
りといふ
それ年はあゝら剃たる雪の庵
雪日除歩
淀矢矧いかてか三つの橋の雪
右攝江三大橋一望佳致
魚洗ふ軒の富貴や竹の雪
題庚肆苦寒の陰
破れ笠や人も斷く雪嵐
獨麟禪師の一詩の二字を沓
冠におく
隱れたるより開はなし六ッの花
題向鏡
親に逢ふとおもへは著し六ッの花
大圭宗匠ひらきに申遣す文
章有略之

くれなゐの句は雪に有冬の月
魚輔攝府に移るに申遣す
龜の蟄三つの浦かせ冬の月
八幡奉納
山上山下郡名二つ有とを
神は久世町は綴きのほとり哉
重病今はと覺し時
朝霜や杖て詣し富士の山
大坂賦山にて
水仙の禹王を拭ふ夜明かな
同溪尾にて
盛有老そ無の玉かつら
鬼貫追善前書有我に十歳兄
なり俳名佛兄と云ければ
兄なれや佛なりけり星なれや
延岡大君に奉る
威風四面日も事はしら嶺の松
大神宮奉納
竹の日の雪に音あり向田園
輕舟更て千鳥を聞
漕とめよ障子に月の川千鳥

に
木からしや琴の跡行岸の蟹
　鶴と梅とを畫たり畫讃
又留主歟されど孤山の夕霞
　富士の山の自畫賛
月を呑日を産山の富貴かな
　干網の木に蜻蛉の逆さにと
　まりたるに打釣箭計とふと
　く書て
干す時もおもはず釣や浦の秋
　萬歳の繪に傍鶴のとし禰宜
　に似たり
久しき世伊勢の袂のうたひ鶴
　同州より馬柄杓のとく作り
　たる盃に銘と句を乞ふ銘は
　寶の親價なき玉といへども
　一つきのにごれる酒に何ま
　さらめや
李白一斗
詩百邊花の嵐の朝からす
　宗旦像之賛

樂天元旦を呼て元白と云庵
主今日一人の元伯なり雲花
を愛し暖夜に月有
散るを待傷清しおち葉ところ
　小圓歟と問へは茄子と答ふ
　塵とりと歟といへは瓜と笑
　ふそれは何かはくるしかる
　らんたはむれの自畫贊
よしあしのめも一夜書風の雲
　小督の畫の扉に立て空を詠
　たるに
仲國は京へ着べし明の月
　墨繪村竹の贊
此君の黒髪凉し禰ころ
　破れたる笠に犬のつら出し
　たる所を畫しに黄耳と呼れ
　師子と愛せられしも實
盜人を呵る歟軒のしくれ跡
　松竹の讃
此君は十八なれや若みとり
　大竹壹本畫たる贊

四季既にさらは閉帳としの糸
としの尾や都の町の狐釣り
行年や能に馬なし梅の花
雷の茶の湯も花の師走哉
大河あり橋ある花の末はすかな

晉退隱の冬

朝顏の實を干す緣も師走影
とかくいふ人は師走そ乃盧
梅提て來て寐轉ふ人を歲寳
一年を射たる弓あり腰の波
あり〳〵と年を戻すや薄氷
能馬て越すや三百五十川
春蹴たる鞠は空より年の脚
卯月より九月めや產家空
海辛く潮甘くとし暮ぬ
踏折て枝なき鶯の師走かな
越次第極る月のすゑのまつ
津の國のうしともいはす嶺の松
いかなる葉見て見捨んや年の隙
接つたる唐を戻すや大晦日
倶に倦く硯もとしの富貴哉

牛飛んて鼠を追ふや大晦日
樅の花見た人訪んとしの暮
眞桑瓜されは思へはとし一夜
鹽船の汐を窺ふ師走かな
かんてんのかくても年の妻戸哉
とても行年を扣くや車追ひ

晝晦

明日は花針ある樹朶の枯まき葉

繪贊之部

野馬一疋畫たるに

ひやうたんは此うつ蟬そ干とせ駒

山を畫水をかき岸を畫まつ
をかきたる傳見るにいと寒
けきはたまえみたる妙手の
妙ならんかし讃つかまつれ
と冠里君より仰事ありける

筆も玉まくと書替て遣す

稲を横に畫たるに

寐ながらに民を起すや千代根草

三教の畵に

煎酒て喰へし淀の初紅葉

梅の繪至て長く直に書たる

に

此花や誰に答る一枝禪

日々是好日

たまくらや人には屑の松の風

季有や答云「世の中の人に

はくすの松原と身を安き物

に廿られしは慈鎮の性根な

りけり日々是好日は手中の

語なり

人丸賛

都にもかも山さくら眉の雪

菊に鍬の繪讃英一蝶か畵な

り山氣日夕佳なりと云翫耕

亦已種といふも夫天命をたの

るのたのしみ

うへ倦て鳥と還るか嚢みはな

菊を花と斗り躬恒はよめり



夕暮の宗左を待歟君か春
　布袋の背に稚子を負て和尚
　　甚空を向たる一蝶か繪に
月到天心處地を乳になして生の松
　片葉の蘆の繪に
此片葉蟾宮にあり水の影
　緋桃の繪に
實や此花に玄都の朝ぼらけ
　松一株に竹の畫
辛崎や伊勢の春風稜竹
　瓢の炭取に名を付山賤と號
　く
炭二入留主預るや駒か家
　薩州中西氏鉢の木を舞三幅
　の繪に一ふくは漆園の老仙
　栩々然として胡蝶となつて
　禪家の話頭を傚ふに似たり
　中入むつかし／＼企藝上な
　き長分ミミ長
打拂ふ扇そ袖のさつき富士
　石窟戸之前に佯俳優抜樹を

爲髪羅を以手繦となして天
照太神を慰め奉り其日の光
長く傳ふる是則舞ふ袖訣の
まねき招し濫觴ならん此人
其時も有けんかし
面白やいかに老せぬ花すゝき
　五十而知天命六十而耳順か
　はす七十に近く欲る所を舞
　とも不踰矩いはほにも咲花
　とこそ見れ
踏ところ先へ進むや福壽草
　赤染衛門の繪に
　匡衡の家人赤染藤の公任辭
　官の表文を吾頁人に教へた
　ると云は此人歟
見はてぬや筆も榮花の荻の露
　蕉翁發句の極めを望むに時
　春なりければ
正に此筆の香猛し芭蕉の芽
　同し句のたんさく夏來る事
　あり新案に不及

序

はいかいとて、みたりに笑せんとはかりはいかん、花實をそなへ、風流にしてしかも一句正しく、さておかしくあらんやうにと、世〱の好士の教也。然にはいかいは、何にてもなきあとなから、この事好さるかたの、いひくさなれと、何かまた世の中それならさらんや。もとより連歌に露かはらさる大事ならんか、さるを兼載の好にて、心ものび他念なきとて、長坐にはかならすもよほし、おもひよる事しか也。

園田長官　守武

○洒竹云、右は守武千句跋文中の二三節を蓮谷が接ぎ合して一文となしたるものにて守武が此書に序したるにはあらず時代異なるなり

俳諧溫故集

目録

しくいひなすはたとへていはゞよきかたちの人もよき衣装をみくるしく着なすにおなしたゝ連歌にかへていやしき事は無用ならんか誹諧といふ道は各別の道にして生れなからのはいかいなる事を知るへしさて集を撰ふは一瓶の立花の如し花を立るとて花はかりは立すさしもなき草木の枝の或は細くふとき或はなかく短きをそれ〳〵に配りて用るといへり其立花をくつして花なき枯木のほつゑはかりひとつふたつつゝ揃て是をも花瓶より出たれはとて花とするかとしされは今の世の人句を見て誰は上手たれは下手などゝ褒貶する事こそさらにうけられぬことなれたゝ名に寄て善悪をいひ或はひいき〳〵にくちにまかせていふ事なるへし俊成卿の千載集を撰ひ玉へる時は人をは見すたゝ歌をのみ見るといへりけるすへてむかしよりをのれか誹諧のつたなきをしらすたゝ人のよきはいかいをそしりて巳を高慢さへすれは此世の人上手とおもへる事神慮もおそろしき事ならんかし

道遙軒貞徳述

○洒竹云、右の一文亦貞徳か此書に序したるわけにはあらず御傘の序文を其まゝ此に載したるなり

序

俳諧は面白き事ある時興に乘していひ出し人をもよろこはしめ我もたのしむ道なれはおさまれる御世の聲とはこれをいふへき也そも〳〵はしめには誹諧と連歌のわいためなし其中よりやさしき詞のみをつゝけて連歌といひ俗言を嫌はす作せる句をはいかいといふ也されとも連歌の作法をうしなはしか爲に花四本月八つ出せり此道未練の人は雪月花四季　句躰を風流に連歌のやうにしたてゝきやしやなる句をのみ好む輩はたゝ和歌連歌をしていやしき誹諧はいらさる事にて侍らすやこれらの人は愚鈍不智の分別ならん凡此道に長して天下に譽れある人もまた宗鑑守武等の流ひし句躰はひとつに連歌めかす又和歌の風情にもあらす和歌を用ひす言葉のよろしきを見たてゝ誹諧の連歌といふひとつの道を立侍るすへてはいかいは連歌にかはる事おほしといへとも君か代のひさしき祝ひのこゝろは和歌も連歌も誹諧もいさゝかかはる事有へからさかるかゆゑに此道格別の習ありて淺き道にはあらず末代には其德利歌よりも廣しいかにはいかいられはとて賤しき事をすへからすされども上手のいや

小堀氏宗甫

冬に今朝霞や春の先備へ

千早破城合戦の時に

長崎九郎左衛門師宗

さきかけてかつ色見せよ山櫻

秀吉公朝鮮御陣の時

深水三河守入道宗甫

からたちは剪て其まゝきこくかな

寛永五年盛法院にて

細川玄旨法印

浮世かな年たけの子の生とまり

同

よしや降れ麥はあしくと花の雨

羅山子林道春

きて祝へもの〻ふによき具足餅

慶安と改元ありしを

半井卜養法眼

改年の御慶安穏の天下かな

藩年五萬石を給ひて

西岸寺任口上人

はたはらや取そめ祝ふ五萬さい

熊野へまゐりけるにくしの
山といふ所にて

鴨長明法師

くしの山たをれ死ぬへき岩手哉

紫野一休和尚

目にたつや卯月八日の花くらべ

深草元政上人

梅の花つぼみ申といふ字かな

東海寺澤菴和尚

とゝむれど花にさらはや歸る雁

紫野一休和尚

蘆原の釣の翁よ秋の月

松花堂昭乘

紫の菊の之上や南禪寺

高野山楚仙上人

此方の雪あけて配るやかさ袋

祇園にて

紫野一休和尚

でんがくの甘味にまさるけふの月

愚道和尚

大ふくの茶のあつさにや梅干

俳諧溫故集　上

東武　電風菴蓮谷選

四序混雜

權中納言定家卿
散花を追かけて行嵐かな

大納言爲世卿
糸さくら花の縫より綻ひぬ

西三條實澄卿
山かせを腰にさしたる扇かな

岡田將監來たりけるに
近衛殿下信尋公
五月雨にようこそ來たれ美濃の者

貞德西武に對して
烏丸大納言光廣卿
名乘けりそも／＼是はほとゝきす

御前を恐れ順て立花　西武

烏丸大納言光廣卿
颯々の鈴なり涼し枇杷の枝

貞德に鯛をつかはして
うらゝ迄おめてたいかなとしの暮

太閤秀吉公
小田原やおもひのまゝに刈おふせ

八幡太郎源義家
亂れ藻は角力草にそ似たりけり

文治五年の秋泰衡を征伐の時
右大將源頼朝卿
頼朝かけふの軍に名取川

曾我の兄弟のものか親の敵をねらふをあはれとおもひ出して
畠山庄司重忠
夏山やおもひしけみのこかるゝは

太閤秀吉公
柴田うち瀧川なかすさつき哉

細川玄旨法印
きそはしらぬ老の雛をものしらかな

春の部

歳旦

元朝や神代の事もおもはるゝ　守武
元日の見るものにせん不二の山　宗鑑
鳳凰も出よのどけきとりの年　貞徳
春立といふや言葉のかざり縄　立圃
我等式か宿にも來るや今朝の春　貞室
去年よりもそやし立けりけふの春　望一
元日や明てとゝろも青二才　重頼
耕すは詩の種まく試筆かな　西武
初夢やわり符るほど金銀花　令徳
萬歳や舞ふもうたふも戀の華　梅盛
面白やと神も覗くや日のはしめ　安静
打初る碁の一日や今朝の春　徳元
夜か明て天下の春やたつた今　玄札
をれにいはまや先御代をとゝ千々の春　季吟
藥子やけふ春そむるちゝの春　未得

鷄旦

元日に田毎の日こそこひしけれ　古 芭蕉
漆刷毛しらすにひさし山折敷　調和
年よらぬ藥もふるや神の春　幽山
うごかぬや千枚分銅國の春　不卜
門松や輕微なからも老か宿　擧白
正直に生れかはりて今朝の春　休甫
我戀の松島もさそはつ霞　西鶴
元日やされは野川の水の音　古 來山
餅のうへにけふし契りぬ鏡草　山夕
鏡ひとつ貢ぬ日もなし江戸の春　其角
元朝や晴て雀の物かたり　嵐雪
蓬莱の麓に通ふ鼠かな　鬼貫
初日かな光りかゝやくかゝみ山　一晶
萩の葉の二葉見なり摂竹　無倫
初空や鶴の音もその貢物　露言
あたへ待連もうれしく〳〵君か春　神叔
鏡とて餅に影あり花の春　似船
初空や誰すり足も鞠の暮　介我
元日の畫や留木の立わたり　沾徳

四十歳の春を迎へて

衆好は死なといふたに花の春　支考
長松か親の名で來る御慶かな　古 野坡
椀屋より手を打つゝけ神の春　沾洲

西岸寺任口上人
花薄誰にわかれて炭俵
正三位長官常和
若水を汲や岩井の旅心　宗祇法師
冬は猶奈良の習ひて朝茶哉　心敬僧都
九つの品川しるき遊かな
雨乞の吟
牡丹花肖柏
空にしるや雨の望の秋の空　宗長法師
橘の香にせゝられて寐ぬ夜哉　櫻井元佐
宵〳〵は笹にみだるゝ螢かな　宗養法師
墨の袖あらひてほしの天の川　救齊法師
若和布藻や汁のつまこめ出雲海苔
花の都のよそほひを
千利休

鶯も笠きて出よはなの雨
里村法橋紹巴
梅の花香なからうつす筆も哉
狩野常信
若葉より名は古めかし尉か髭
瀬戸藤四郎春慶
淋しさの友達になる火桶かな
老の身のくるしさも
千利休
寒ければ頭巾をゆるせ神無月
そろり新左衛門
祇園會や詮議まち〳〵引の山
蜷川新左衛門親當
花芥子の無常すゝむる夕かな



縫あけのそろりとをりる柳哉　貞佐
三日月をゆりまろめたる柳哉　助叟
淀の夜は雨聲となりし柳かな　青蛾
木兎の眠り落たる柳かな　琴風
まだうごく鳥のあとの柳かな　立隱
唐帶を母はひかへて柳かな　一漁
入も門差て雨ふるやなきかな　芭蕉
青柳にとほれかゝるそ星月夜　硅琳
下〳〵の見るものにせぬ柳かな　成屋
猫のちからをなふる柳かな　遊谷
青柳や二筋三すし老木より　柳居

鶯

鶯や國栖の翁の笛の弟子　貞室
鶯や附木ほに出る藪の内　沾德
うくひすや山は音羽の遲朝日　貞佐
鶯や谷にもひとりいせの道　沾洲
うく比壽の富士を見あけて初音かな　遊谷
鶯の身をさかさまに初音哉　其角

野老

ゆて野老かりのやとりの折敷哉　貞佐
花と葉を入には見せぬ野老哉　遊谷

俳諧の姿はいろ〳〵にてたとへは人の面の如し我貌に似ぬとて人の句をそしるへきや丸きものあれは角なるものあり手あるものには翅なく翔の輝翔なるには叉花なし

卑俳の甘いに苦い野老かな　硅琳

業老を題す

皮むいて見れは若やく野老哉　併夢

初午

はつ午や鼓の影ふむ黃頭人　沾德
初むまやいせか見たくは此天氣　貞佐
はつ午や狸むしなは隙て居る　白雲
初午や家守の朝寐あら無沙汰　超波
はつ午や掛來る沖の虹　沾洲

乙鳥

つはくらや何を忘れて中かへり　乙由
乙鳥や淺路の波をつまみ喰　貞佐
立波をふたつに割て燕かな　古路
世の中の横幅しらぬ乙鳥かな　柳居

佐保姫や奈良の帝をゑぼし親　古 青峨
若水や六月も買ふ水なから　貞佐
行灯に赤子の貌や花の春　百里
元日やかいこの中の歌之助　琴風
手鑑の聖武皇帝閉の春　專吟
芝浦や車のうへに初かすみ　超波
唐崎やひとつ年よる松の春　珪琳
若水や老を忘れて津々井筒　乙由

年序

雀とはなしみの節や飾藁　柳居
竹馬や杖になり行く今朝の春　蓮谷
萬歳や袖を帆にしてわたし舟　餅夢
初鷄や袋か日頃の米の恩　菊輔
千町田に遊ふや鴈の筆はしめ　瓢斗
春たつや入は小町の花の色　蓮谷
浦島やいろはに戻る筆始　同

閑居

萬歳やかそへたてゝも竹はしら　黒露

人日

七草や跡にうかるゝ朝烏　其角
一とせの心拍子はなつなかな　無倫
七草や跡の拍子は鳥の骨　桃隣
鳥部野に是は目出度薺かな　蓮谷
大内の朝起つゝく若菜哉　超波

梅

咲花の兄は兄なる色香かな　望一
進上に闇をかねてやむめの花　其角
梅干を見知て居るか梅の花　嵐雪
餅焼となりにくしやむめの花　秀和
しら雲をはなれきつたる梅の花　竹亭
鼻毛には寐てもさはるな梅の花　貞佐
梅さくや二三人づゝ礼の辻　沾洲
梅咲やよその子かりて肩車　珪琳
氣のはらぬ入相聞て梅見かな　園女
梅か香やあのもきたうな梢より　蓮谷
三日月や梅にちられて沖の石　古 由夕

柳

投入はこちら向ても柳かな　春澄
舟しはし風を譬たる柳かな　不卜
入相の姿を見せるやなきかな　古 調和
思ひ出て物なつかしき柳かな　才麿
唐繪にも假名にしたるゝ柳哉　乙由

雨たれを目てうけなかす蛙哉　同

無常

鳥部野の焚つけ比のかはつ哉　同

武士

鬚ひけをあらへは濁る蛙かな　同

農人

小田蛙鍬のひかりをのかれけり　同

職人

傘張のはり合になる蛙かな　同

町人

舟か〱夜明にちかき蛙かな　同

喜

雨蛙けにも産屋の椽の下　同

怒

鳥たつて吹矢に留るかはつ哉　同

哀

あふのけに浮猿澤の蛙かな　同

樂

歌によむ聲て呑るゝ蛙かな　同

生

山城へ出かゝつて居る蛙かな　同

死

草茎になるとも知らぬ蛙かな　同

晝

水をこす砂につくはふ蛙かな　同

夜

長明かぬる夜はいかに小田かはつ　同

晴天

日和しやにさりとては又なく蛙　同

雨天

鐘遠く埋つて雨の蛙かな　同

會者

人まれにうつの山邊や連蛙　同

定離

闇暮て内外になく蛙かな　同

土筆

宗論やとくさの花をつく〱し　東潮

稽古矢の先に女やつく〱し　沾洲

歩兵からとつつとられつ土筆　貞佐

武藏野や人ひとり來て土筆　古朝叟

雛

紙ひいないせ物かたり繪入哉　貞佐

猫戀

出て三日人ならいかに猫の戀　貞佐
猫の戀ねつみもとらす哀なり　琴風
短尺の數にも入や猫の戀　洒堂

彼岸

精進すなといはれし親の彼岸哉　來山
さくら咲ひとへに彌陀の彼岸かな　支考
杖ついて種蒔に行ひかんかな　蓮谷
極樂をおほえて歸る彼岸かな　超波

苗代

苗代に待事ありや鷺の首　才麿
なわしろや世にたのもしき秋の月　暮四
なわしろや比は案山子の弓始　蓮谷
苗代や水の一夜の風ほろし　又莫

椿

山川へ翡翠と落る椿かな　素堂
鎌倉はつつかい椿につはきかな　馬光
神鳴も落ねにもろき椿かな　貞佐
猪にかゝれて落る椿かな　蓮谷
鳥に落て蛙にあたるつはきかな　桃隣

蝶

落花枝にかへると見れは小蝶哉　守武
行駒の足にまつはる胡蝶哉　不卜
蝶かろし比は着物ひとつかな　湖春
白壁に見うしなひたる小蝶哉　蓮谷
雨ふりやあはれ小蝶の住所　貞佐

蛙

手をついて哥申上る蛙かな　宗鑑
附木屋の手なら足なら雨蛙　其角

上京吟

日に寢て月に鳴出す蛙かな　玉纖
井筒から都見に出る蛙かな　蓮谷
水門に踏こたへたる蛙かな　宗瑞
敷島の道端になく蛙かな　蓮谷
ふところへ月もかけこむ蛙かな　馬光

蛙二十章

神祇

反橋にむねのつかへる蛙かな　貞佐

釋教

梅若へ鳴て手向る蛙かな　同

戀

ちる花を南無阿彌陀佛と夕哉　守武

樫の木の花にかまはぬすがたかな　芭蕉

花咲て死ともないか病かな　來山

よし野にて

ちる花にとく〲戻る清水哉　吉磐谷

そのもろこしには牡丹の花を賞して詩に遊べるとや日の本にはさくらの花を詠て假名もしの和かきに遊べるなり春もやゝ萬花咲みだれて千枝にわかるゝけしきはむべなれど風に散はつる事をおもへば見る人の心をものづからいたましむるにやむかし西行法師此御よし野に來りて花の夕立しきるらしとよみしも此山の名殘をしたふ心にやあらんげにや此吉野山に花見るばかり目をよろこばしむる人もあり又和歌を詠じ連歌を樂じ俳諧を思ふ人もありておのかさま〲の風情をこめけるも世俗のたとへにいふ命の洗濯とは此事なりしからば世の中に絶えて花といふものなかりせは春の心のたのしみも盡ぬべきか

是は〲とはかり花の吉野山　貞室

西行上人賛

捨果て身はなきものとおもへとも
雪のふる日はさむくこそあれ
花のふる日はうかれこそすれ

花の雲鐘は上野か淺草か　芭蕉

やしなひ得ては花の父母也
子をまうけたる人に

睡らせて養ひたてよ花の雨　貞德

みちのくの文字摺の石を見んと道をたどり行ほどに草臥て馬を待つに

思ひ出や蹴つまつきても花の塵　擧白

庵崎あたりにて隱士を訪ふ

落雁にのまれて見ゆる雛哉　超波
咲くさい天和もゆかし紙雛　蓮谷
くり言を雛もあはれぬ虎か母　其角
紙雛や箱たち出て峯の雲　白雲

汐干

帶ほどに川も流れて汐干哉　沾德
親にらむ平目を踏て汐干哉　其角
汐干てや煙るものには不二斗　貞佐
けふ迄に足袋ぬき捨る汐干哉　宗瑞

寒食

寒食や揚屋より火を焚初る　擧白
寒食や其日にあたる佛連　立吟
寒食やいはけなき子にすねらるゝ　琴風

出代

出かはりやおさなごゝろに物あはれ　嵐雪
出かはりやこなたの雨もけふ斗　ブンゴ りん
出かはりや人の心もあさり汁　珪琳

櫻

口僻に世は捨安し山さくら　無倫
只の時も吉野は夢の櫻かな　西鶴
遲さくら蟻の飯引深山かな　信德

見櫻ならふや文珠ふげん象　西武
武藏野に入行あたる櫻かな　立吟
名のつかぬ所かはゆし山さくら　湖春
入相の黑みを染ぬ櫻かな　言水
ちるは〱醉のさめたる夕さくら　自悅

上京の時に淸水寺へまうづ

此地主は二階へあかる櫻かな　貞佐
いり相の鐘に痩るかやま櫻　智月
撞櫻ありさては櫻もちる合點　珪琳
そも我は鐘に用なき櫻かな　秋色
宮寺のさくら見なから豆腐賣　岩翁
夢を見に生るゝ人や山さくら　蓮谷

月移花影上欄干

月かけのひた植かゆる櫻かな　不卜
追〱に來る人毎のさくら哉　園女
世の中をされ給さつとの櫻哉　沾德

花

薄くもりけたけき花の林かな　信德
云傳たし都の花に目と心　泰德
先折るな人の言葉の花さかり　立圃

菩提山にて

袖下のあかるき山はつゝしかな　浮生
正月を馬鹿てくらして二月哉。　秋風（ナルタキ）
花の咲木はいそかしき二月哉　支考
糸ゆふに引あけらるゝ雲雀哉　三河 隆平
山吹やみはなきものと淵の上　白雪
あらなんや外山の霞はつ芝居　幽山
花遠しつかはつかなん御忌の鐘　泰徳

國俗に儒醫と唱へるあり孔門に醫なし醫にして俗にあらすかの齊人玉に似たる石を玉石となつけて市に賣したくひにこそ思はるれ今腐儒の腐の字を得て句つくる也

雉子の毛を豆腐に植る浮世かな　才麿

ある人の妻のよそより猫の子三ッかりて見侍しにひとつ二つの前にひとつ死にけるにふたつぬしへかへすとて

心よりうきめをみつの猫の子の數さへたりてかへすかなしき

と讀てつかはしけると語る。を聞て

猫の子も妻こはぬ間そ人の愛　沾徳
卯杖とも志らて逃けり猫の妻　卜史
春雨やもらぬ家にもうとん桶　來山
朧の字分別もなく月夜哉　蓮谷
山寺の晝寐はしまる涅槃哉　雞山

日光へおもひたつに

雀子も笑へ旅出の投頭巾　蓮谷

蛭子賛

神代より太刀は左そ櫻鯛　貞佐

夏の部

衣更

一ところに袷になるや黒木賣　其角
衣かへおもへは須磨の枯木かな　貞佐

當麻寺にて

にいつちへか行たるよしに
てあはず
我來たと手折女に知れ花の庵　未陌
東福寺にて
禪寺は花に啼まてさとりかな　重頼
。花の咲初るより散はつるまではあらんと思ひしかどとく歸へきよし古鄕へせうそこを越せし返事に
雪にあうて吉野え見ぬぞ花さかり　貞室
小座頭や花見ぬまても吉野山　來山
手習の師を車座や花の見　嵐雪
花ひとつたもとにすかる童哉　立圃
しら雲をうち粉にしてや花の山　水國
居凪なりて太泰に住ける比
花をやるさくらや夢の浮世もの　かいはらすて
歸らんと花の木陰のかゝみ立　琴風
結搆な花の蒔繪や東山　瓢斗
蓮谷亭にて
三井寺の賛
龍宮に花あらはあの鐘はなと　貞佐

うへを下へえいとう山の花見かな　加友
藤
遊ひたいこゝろのなりや藤の花　かゞちよ
棚藤や横から見ての天の川　貞佐
遊女の歲旦五章
あのやうにかしくと書ん飾竹　深
寶引は蚊に惚られぬ爲なれや　素
喰摘や引手あまたの明の春　包
盃や公時らしきはつ笑ひ　袂
みせはやな白粉よりそ明の春　童
春
まん丸に出れとなかき春日哉　宗鑑
鶴鷺の足より長し日の烏　貞室
海棠や咲てちる迄ひと眠り　重頼
しら雲のあたごは冷る新茶哉　擧白
深川はふしみに似たり桃の花　一晶
身の内か晉口になる蜆かな　古立志
刺たてゝ布袋はさむし寶船　超波
白魚や石にさはらは消ぬへし　枳風
裏茶屋へ宵〱預け爪　貞佐
あら海のいかれる時かみたけ菸蒻　專吟

目には青葉山郭公はつ鰹　素堂
人のまことと先あたらしき鰹哉　其角

短夜

みしか夜の夢の名殘や獏の澤　空存
短夜は子にそふ母の晝寐哉　一晶

重五

蘆田鶴の香をかき出す粽かな　言水
定江戸のその粽とは幟かな　貞佐
幟から風をあますや薄羽織　玉芝
あやめ／＼白むらさきに心なし　百里

五月雨

さみたれや傘に釣る小人形　其角
五月雨や茶には何汲濱の人　鞭石
さみたれやせめてあかるき傘の下　超波
五月雨や月にも星にもえら團　黑露
五月雨や鑓も鎧のおもさ程　瓢斗
服部の百姓泣や五月雨　蓮谷
五月雨の最中や鐘の濁りやう　立吟
五月雨の晴間や龍のけつまづき　貞室

夏の草

撫子の咲と蓄や兄おとゝ　貞德
ある智恵のあまりて咲か芥子の花　吾仲
浮草や今朝はあちらの岸に咲　乙由
芍藥や唐の畠を見る心　鞭石

はせを翁の墓にて

晝かほや我も乳筋の土に臥　貞佐
散る時のこゝろ安さよけしの花　越人
なでしこのちりけはあつきひかけ哉　西武

卯花

うの花やいつれの御所の加茂詣　其角
卯の花や日光迄は垣つゞき　百里
耳かきに貴樣なるか花卯木　白雲
うの花やむかし戀せし物のかけ　古青峨

田植

早乙女や泣子のかたへ植て行　乘捨
早乙女の見に行く宮の鏡かな　言水
物すこく男はかりの田うゑかな　不卜
早乙女やよごれぬものはうた計　來山
おふた子はうへを見て居る田植哉　菊輔
早乙女や皆横かほは同し顔　隆平
早乙女やあたまのうへに臺所　超波
間／＼に顔見合て田うゑかな　乙由

衣かへみつから繡らぬ罪ふかし　園女
出女の夕日におろす袷かな　塵壽
長持に春かくれ行衣かへ　西鶴
古袷もの見の松にはつかしや　芭蕉

郭公

卯月きてねふとに鳴や郭公　宗鑑
さてはあの月か鳴たかほとゝきす　藻風
鳴にさへ笑はゝいかにほとゝきす　光貞妻
郭公ほとゝきすとこ寐入けり　古調和
亭主の夜すこし變りて時鳥　百里
ほとゝきす雲踏はつし踏はつし　露川

箱根山の地獄といふ所にて

かひなしと此世から賣ほとゝきす　貞佐
時鳥まつやら淀の水くるま　宗因
古茶新茶宇治はいそかし時鳥　瓢竹
あたりにも起たさうなりほとゝきす　舍羅
年寄は毒か藥かほとゝきす　珪琳
子鰯には鼻こそつまめ時鳥　琴風
ほとゝきすなけやいはほのかける程　遠谷
辻や辻櫓にかけたか郭公　貞佐

岩城へ宗因きたりけるに

飛んた事我に聞せよ時鳥　風虎
一間まなかの床の橘　宗因

若葉

先度迄目のまふ谷も若葉哉　專吟
柿の木のいたり過たる若葉哉　越人

牡丹

親玉と見しはほたんの莟かな　立圃
眠る蝶それともにちる牡丹かな　來山
大黑とおなし低さのほたん哉　專吟
曉をふくむほたんの樂屋かな　琴風
手をついてよいほとらいの牡丹哉　遠谷
生貝の耳をはたらくほたんかな　貞佐
入相はうへを鳴行牡丹かな　琴風
あるへいの途中いたはれ白牡丹　專吟

鰹

初鰹そののち絕て鰹かな　周竹
葛の葉のうらはともあれ初鰹　貞佐
義秀に殘おほさよはつ鰹　超波

戶塚にて

この砌ひたり鎌倉筋鰹　英一蝶
我戀は夜鰹にあふ端居哉　言水

跡先の見らるゝ雨の螢かな　蓮谷
思にくらく棘をつかむ螢かな　はせを

鵜船

鵜遣ひよ若きは人の目に立す　信德
おもしろうて軈てかなしき鵜舟哉　はせを
石灯籠蚊やに消行鵜舟哉　其角
乘たやと子の聲くらきうふねかな　貞佐
松明の消えて飯くふう船かな　蓮谷

虫干

鎧着てつかれためさん土用干　去來
虫干や一疊通り宇津の山　貞佐
むし干や心の猿はつなくとも　百里
虫干や見ぬ世の匂ひ奈良はさそ　蓮谷
捨人や木草にかけて土用干　其角

蟬

頓て死ぬけしきは見えず蟬の聲　芭蕉
から〳〵に身はなり果て何と蟬　西武
せんたくの袖に蟬鳴夕日かな　杜國
水うてや蟬も雀もぬるゝ程　其角

暑

鉦入のはなし聞くさへ暑かな　珪琳

日の岡やこかれてあつき牛の舌　正秀
落す文ひろふ扇の暑かな　貞佐

遊女の賛

川竹のなかれといへと暑かな　超波
夕飯はいやと寐ころふ暑かな　珪琳
負た子に髮なふらるゝあつさかな　園女
鵜にゑはしぬれてもあつき梢哉　其蒼
暑かな柳の狂ふ相手なし　安士
痩こけし空也も人の暑かな　蓮谷
子なからも膝を迯けたる暑かな　宗鑑

納涼

切落の四條へつゝく凉かな　沾德
迷ひ子を送る子もあり夕凉　貞佐
凉〳〵門て留主する夕かな　鷺助

黒塚にて

つかのまや鬼こもるとも夕すゝみ　重頼
花過て實のなき人の凉かな　蓮谷
子を寐せて火宅の門の凉哉　珪琳

扇

去人の紋見つけたる扇かな　尙白
夏野行ちから草には扇かな　珪琳

蚊

蚊も志はしはらはて軒の詠哉　貞佐

避蚊辭　宗因述

そも〳〵いけるものゝ心なくんばあるべからす蚤の息も青空天上にのほり蚊のほそ聲は貴人頭上にとゝまる心の行ところいへばいはるゝ大鋸くすふすべて膝をいるゝ紙帳の中一宵のあた言たれか見るべき見たらば大事か笑はゞ大事か大事もない事

蚊柱に大鋸屑さそふ夕かな　宗因

唐の蚊は詩人をくらひて桃のことし唐の蚊か美人の帳にこかれよりて痩て柳に似たり

唐の蚊やつゐに枯たる藻鹽草　嵐雪

人妻の何やかやり火夕をしみ　珪琳

うたゝねて沖にちいさきかやりかな　老鼠

むく鳥の辰巳へかへる蚊遣かな　未陌

初蚊屋やはいられぬ蚊のかこち聲　白雲

夏の月蚊を疵にして五百兩　其角

面影の見えてもくれす蚊遣草　古青峨

かやり火やひさしふりにてわく火鉢　蓮々

かやり火や蚊屋釣かたに老ひとり　其角

蝸牛

猫の子にかゝれて居るや蝸牛　才丸

宇賀神に汝もなるかかたつふり　貞佐

烏羽玉のぬかこに角やかたつふり　専吟

かたつふり角ふりわけよ須磨あかし　はせを

文七にふまるな庭のかたつふり　其角

螢

強力のもみ出したるほたるかな　春澄

柴舟にこかれてとまる螢かな　其角

豐國宮にて

秋ちかしその代は遠し鳴螢　一鐵

黒い子と川向行ほたるかな　貞佐

宇治川の螢も今の世は

かしこさに合戰なしに飛螢　許六

親もなし子もなし闇に飛螢　春澄

通圓は頭巾に包む螢かな　超波

虱辨　　嵐雪述

しらす身の毛いよたちて襟のほとうさ〳〵としつるか飯粒の半したるものさすりあてたりとく〳〵物のうへに放し放ち目鏡ふたへに疊て渠がさまを伺ひ見るに白き肉黑き腹呼吸につれて動搖ゆるくまなこきら〳〵と見すゑ手足四つか六つかありて怒けなるか護摩堂にましはす明王尊に似たり虎とも戰ひ龍ともあらそふべし誠や必死の人の床にはかいふり戻りてあさむきにらむとこそ本草には見えたれいまた死ぬましき人には尻むけてゆくおそらしと見ればこそさも覺ゆれ已か姿のなへての虫におとれるものかは歌うたはぬは聲のなければ也今少身かろからば待宵のふるまひもしかねやはすべきを襲虫にゆかりたる鬼の子なればかゝる世にうとみ果られたる業生の種こそいとつたなけれ臭襪の中に質をうけて褌にくゝり縫目に隱れて人の血氣を犯し吸ふ事蚊の子の鐵牛をかむより猶甚しその生涯の終れる所は火取の中に細き煙と飛び木枕の角にからき耻をはさらされぬされば眞如の性のみてる事や摩竭何とかいへる魚の百由句より蟭螟の微細なるまで行わたりて憎愛かはる事なしとこそ見ゆれ内裡に物祈ける聖りの御灯の光りに一夜しらみ拾はれたるに物の化の事おさまりけるとそ智識の肌に馴まとひて德を同しういはれけるもさるべき因緣にや柱の穴に生をたくはへて舊年のあた人には報ふともきもあれきやついかにゆるしてんとかたなひねくり槍を取地獄までもいらち思ふ間にころ〳〵とこけて見えずこはもらしつるはと驚てあなくりもとむれとなし淵に物落せし人の顏して手打はたきてより夢にもしらみにしらみしのゝめの空にしらみ果ぬ白身坊か衣被けしものか

題虱

夏衣いまた虱を取つくさす　芭蕉
蟲しらみ窓の螢にかゝるなり　其角
髭に伽羅虱もすます單もの　才麿
さむき身に果報すくなき虱哉　衜白
穏屋作るかりに居にける虱哉　沾洲
殻になる虱もさむし大内桐　琴風
しられすや富貴の虱花の中　濟通
痩て來る高麗陣の虱かな　序令
虱あり補に露あり自然居士　百里

横雲に鼠の喰しあふき哉　珪羅
かゝる日は中〳〵ぬるき扇かな　鷺水

清水

日さかりの岩より絞る清水哉　常牧
揚梅の落てきはつく清水かな　未陌
石佛なくてもあらんしみつかな　一晶
思ふ事流れて通る清水かな　荷兮

蓮

はつかしや蓮に見られて居心　湖春
六月の地獄にもさく蓮かな　珪琳
蓮の葉や汀を舛の山斗　貞佐
小刀の罪おそろしき蓮かな　曉雨
蜑の手のいつれかぬつと蓮哉　冬魚

白雨

ゆふたちにいらぬ物買ふ舍り哉　不卜

雨乞の吟

夕たちや田を三めくりの神ならば　其角
ゆふ立や牛の兩の籠まて　玉蛾
白雨や泣もなかれぬ晝日中　蓮谷
夕立やさもなき人の腕まくり　專吟
ゆふたちや藥屋をかふる傀儡師　其角

夏

雪月花一度に見する卯月夜　貞德
順禮の棒はかり行夏野かな　重賴
乞食かな天地を着たる夏衣　其角
かふる葉は高根の露そはつ茄子　貞佐
夏かけやこゝろの外に松五本　一晶
月鉾や松原西へいるさ山　沾德

嵯峨にて

ひとくちに申すもおろか鮎と釋迦　一鐵
灌佛や乳にたらねとも比丘尼寺　乙由
めつらしや入梅の中の峯の雲　晩山
八兵衛や流さなるまい虎か雨　其角
舟人のはたかに笠や雲の嶺　專吟
むしやう〳〵むしやうに喰な青山椒　吟市
水瓶に温公たつや眞桑瓜　超波
かくれ家や蚤の心を種として　似春
子を思ふ道もすへるか五月やみ　珪琳
竹の子や嵯峨は弓矢の捨所　青卸
鬼灯や星のはやしの爪はちき　貞佐
水無月やなかは流るゝ年忘　素堂
此裏に有常とこそ桐の花　冠里

七夕や娵いりしては又さられ　白雲
七ッ子に問つめられつ天の川　珪琳
むさし野にくらへて細し天の川　沾洲
我やねをはつれて嬉し天の川　超波
七夕やとりかたならは三輪の神　濟通
鵲の橋や繪入の百人一首　許六
桐一葉空へ飛へかし天の川　菊輔
鵲やをのれかわしをはし柱　超波
昆布の芽の道は通はぬ天の川　敬雨
せきれいの尾に尾をつけて天の川　蓮谷
瀧飛のけろりと浮や星つかひ　嵐雪
月の七日嫌はらて星の出舟かな　宗因

天地を題として

天にあははひよこの羽も星の妻　宗因
地にあらはれん木實呼へ女七夕　其角

玉祭

買ふ時に捨る親なし玉まつり　琴風
みなし子のひやうたんなめて玉祭　超波
玉棚やひやつき初る秋の宿　餅夢
目に見えぬものはいそかし玉祭り　乙由

燈籠

高灯籠ちんから記にはなかりけり　貞佐
高灯籠晝は物うき柱かな　千那
見る人もまはり灯籠に廻りけり　其角

盆の月

淋しさの事はしめなり盆の月　蓮谷
蚊やひとへのかれて見るや盆の月　瓢斗
浮雲のうき名はたゝし盆の月　大梅

踊

橋立の松はふり出すおとりかな　氷花
朝夕に見る子見たかる踊かな　りん
雪折のなくて踊のけしきかな　貞佐
刀豆のぬちれて戻ておとりかな　超波
一まはり待ぬ遅きおとりかな　侚白
一長屋錠をおろしておとりかな　其角

稲妻

いなつまや誰目から出て雲に入　古山夕
稲妻や石臼耳にあらたまり　露言
いなつまや獪士くさき闇の庭　カゝ東潮
稲つまの裾をぬらすや水の上　ちよ

秋風

秋風や藪も畠も不破の關　はせを

蚤

不二の山蚤が茶臼のおほひかな　芭蕉
景清もあきれし蚤の行方かな　才麿
それにさへ願ひ絶ぬや金の蚤　嵐雪
ぬり笛にはまるや蚤の運の末　尚白
蚤に似てをさへし虫の哀なり　百里

享保巳酉のとし南粤といふ國より象を日本へわたしけるに同五月廿五日江戸にきたるかゝる泰平に生れあひて象を見る事辱けなさに

天笠の常夏かくや水くらひ　沾洲
大象の傾城わゆみあつさかな　古青峨
今や鬼不二のふもとのかたつふり　京仙鶴
草まくら紙帳を象のさやに見し　泰室
雨さつと牙に涼しき小さゝ原　超波
その鼻てかなへはいかに巻荷葉　遊谷
夏の夜の星はかうやく喜三郎　蓮之
五月雨や海を衾の象さしき　貞佐
乾の巻の終りなりけり水無月　江戸書林 源六

俳諧溫故集　下

秋の部

立秋

凌宵の花吹消して今朝の秋　乙由
三夕ももとやひとつの今朝の秋　元隣
かたひらの尻はつかしや今朝の秋　尚白

むかし露といふ字を質に置玉へるとは連歌師の風流なり

しら露の手形をとりて今朝の秋　蓮谷

乞巧奠

七夕や秋をさたむるはしめの夜　芭蕉
大切の夜は明にけり天の川　其角
肌さむきはしめや星の別れより　乙由
浮草のうかれありくや女七夕　才麿
眞似事を梶の七葉や七習子　貞佐

甲むし島や雨夜の古戰場　其蒼
秋の部に入てなかはや裸むし　琴風
虫は髭老は白髮に鳴音かな　立志

薄

淋しさの急には見えぬ薄かな　鬼貫
角文字やいせの野飼の花薄　其角
狐つり身より出たる尾花かな　堤亭
嵯峨中の淋しさくゝる薄かな　嵐雪

秋の月

月やあらぬ我身ひとつの影ほうし　貞德
月しろやむかしに近き須磨の浦　鬼貫
蛤のくりはまとこそ水の月　立圃
我を連て我影かへる月夜哉　素堂
江の月や深み淺みの蜊から　鋤立
天の戸のすかし物かよ三日の月　光貞妻

深川にて

舟水や照月なみを揺はらひ　貞佐

月撰ㇾ入といふ題を

關守をうけ玉はらん不破の月　虚谷
雨雲や笠めす月のかくれ簑　令德
有明や二斗とる椎の梢より　沾德

一梢をりても月の木すゑ哉　貞佐
罪ならで配所の月や佐渡生れ　其角

承應元年八月長頭丸より貞
室西武へ點をゆるし侍りし
時柿園にて與行

天なかく千とせほむるや秋の月　貞德
深きしをんの花の夕霧　貞室
鳩鳥もみちぬ松に孝見えて　西武

李夫人去漢皇情

月最中姿をふくめ補香爐　貞佐

揚貴妃歸唐帝思

名月や殘るものには鏡立　超波

會芭蕉菴ㇾ辭　山素堂

ことしはせを庵に月を翫ひてたゝ月をいふ越の人あり筑紫の僧ありまことに浮草のうき草にあへるかごとしあるしも浮雲流れの身として石山の螢にさまよひ更科の月に嘯きて庵にかへるいまだいくかくもあらず菊に月に催されて吟ずる事いそがしいかな花月も此爲にいとまあらじ思ふに今宵を賞する事みつれはあふるゝの悔あれば也中花の詩人

秋かせの心うこきぬ繩すたれ　嵐雪
腹あてや背にかはり行秋の風　專吟
古鄉といふもの出來て秋の風　乃莫
秋風やよらすさはらす膳所の城　瓢斗
かつくりとかけ初る齒や秋の風　杉風
秋といふ風は身にしむ藥かな　其角

露

白露や無分別なる置所　宗因
朝露や指にはさまるうつの山　蕭山
白露や角に目を持かたつむり　嵐雪
白露や浮世一分五厘程　挑外
みがけとやとくさにかゝる露の玉　玄札

女郎花

愛着の其根は枯れじ女郎花　梅盛
身の上をたゝゑほれけり女郎花　凉菟
狩人に立ふさかるや女郎花　カヽちよ
栗の穗のみは數ならぬ女郎花　柏原すて
口明て笑はぬ花や女郎花　超波
猪にうたかふ氣なし女郎花　古青峨
女郎花たとはゝあはの內侍哉　季吟

朝顏

朝貌の折角咲てうき世かな　常牧
あさ貌に置とは露の强み哉　來山
蕣やところ〳〵に海士のうけ　專吟
朝貌や人はちいさき影ほうし　貞佐
朝貌や戾れはひらく九十九夜　珪琳
あさかほや其日〳〵の花の出來　杉風
朝貌や死ねは生るゝ花の秋　蓮谷
朝かほや三輪かつらきの枕もと　沾洲

蜻蛉

とんほうに夕暮過る烏かな　沾洲
とんほうや飛なほしてももとの枝　超波
秣すゝき見捨て岩にとんほかな　珪琳

虫

淺茅生やまくりもおろす虫の聲　去來
悔いふ人のときれやきり〳〵す　丈草
行水の捨所なし虫の聲　鬼貫
武藏野の闇も又よし虫の聲　超波
年よれは聲はかるゝそきり〳〵す　智月
脫からにならひて死ぬや秋の蟬　丈草
むつかしや嵯峨にも置す虫の聲　尙白

うつらこそありとは見えて粟畠　休甫
屋根なきは源氏の繪雲鶉籠　古青蛾
妻子にも寐覺を耻る鶉かな　貞佐

雁

酒買に行か雨夜の雁ひとつ　其角
初雁や山へ配れは野にたらす　かゞちよ
はつ雁や一聲とゝくもしか關　乙由
初の字は此方からそ天津雁　蓮谷
はつ雁やおもふ田へたゝ一もんし　沾徳
初雁やかりの浮世に目か覺る　珪琳
初雁や跡からさむき松の聲　蓮谷
はつ雁や驢も立つゝく男ふり　貞佐

碪

猿引は猿の小袖をきぬたかな　はせを
古郷の火燵を思ふきぬたかな　蛟足
衣うつや耳はこゝろの這入口　蓮谷

鹿

鹿の聲こゝろに角はなかりけり　乙由
關守の白髪の種や鹿の聲　蓮谷
鹿の尾や物の淋しき後むき　古立志
鹿の音や案山子の形も戀の果　乙由

筧からつたうて細し鹿の聲　蓮谷
飛鹿も寐て居る鹿もおもひ哉　桃隣

鳴子

拾石に結むて休む鳴子哉　玉蛾

鎌倉の妙本寺の佛會を拜て

法花經の縁にひかるゝ鳴子かな　蓮谷
あほうとは鹿も見るらん鳴子引　其角

稻花

神風やさはると孕むいねの花　貞佐
世の中の命あつめて稻の花　超波

案山子

乞食にも斯はなられぬかゝしかな　笠翁
錢金に縁なき貌のかゝしかな　乙由
道くたり拾ひあつめてかゝしかな　桃隣

秋暮

西行の姿は秋のゆふべかな　宗因
物いはぬ人揃ふたりあきのくれ　乙由
耳つくのひとり笑ふや秋の暮　其角
廣澤や脊負てかへる秋のくれ　野水

自畫贊

立出てうしろあゆみや秋の暮　嵐雪

忘れたるに似たりたゞ我國の風月に富るなるべし

唐土に不二あらばけふの月見せよ　素堂

翫月辭　野立圃

常に相伴ふ人〳〵今宵の月は爰にてや見んかしこにてやといひ定めて日のうちより出迎ひまふけたる月さすかに名を得し光なりとくち〳〵にいへりさるにつけてむかし今の言の葉の數〳〵思ひ出られ我おろかなる心にわきまへがたき事のふと言出たるを此人〳〵に問ふ今宵は名高き月といひつたへしその名は何といふ名ぞといへば人〳〵笑へりまたいふ名にしおふ花の都の名高き日技の山名になかれたる月の桂川などこそいへとよひの名とさしていはん事思ひもよられず月とばかりは四季ともにいふ也秋といはんにはきのふおとゝひもいふなりとともに笑ひ侍りて

しらぬ名に見とらるゝ月の今宵哉　立圃

更夜

名月や今宵生るゝ子もあらん　信德

名月や耳の山風目のくもり　來山

鯛は花は見ぬ里もありけふの月　西鶴

名や廣き大千世界月ひとつ　立圃

雲折〳〵人を休むる月見哉　芭蕉

烏帽子屋はゑぼしきて見よけふの月　其角

名月や柳の枝を空へ吹　嵐雪

大切に雲こそ包め今日の月　路通

芝海老の髭もほに出て今日の月　貞佐

新月や海をはなるゝ一粟　琴風

精進の泉水はなし今日の月　白雲

名月や旅たつ空を我寐時　貞佐

見る花に定る日なし月今宵　山夕

鎌倉の古さよけふの月に星　黑露

名月や空にも雁の羽箒　卯雲

名月やならは手柄に忍ふ戀　菊輔

名月や岩に蛭子のたゞひとり　蓮谷

須磨寺は平家かたりて月見かな　花雀

名月や白いに黑い道の色　蓮谷

名月や何とて黑き武藏坊　其蒼

名月や爰は朝日のよい所　杉風

二千里の外は他人の月見哉　沽洲

鶉

あたし野や燒もろこしの宵斗　其角
茸狩や我ふり袖も踏て行　常陽
夕かほや秋は扇にのせられす　乙由
舟になり帆になる風のはせを哉　出雲 一晶
武藏野や沖は手里のそはの花　風水

宗祇法師三回忌

世にちれと地獄へ落ぬ一葉かな　宗鑑
秋の田や計りつくして稗二俵　尙白
立鳥や皆妻おもふこかれ聲　無倫
買ふ音を捨る寒さや夜蛤　貞佐
せきれいやかたい貌して岩の上　超波
六歌仙ふたりうなつく細みそ哉　蓮谷
迎ひ火のかけに及んて手紙かな　琴風

對園女辭

西鶴述

伊勢小町は見ぬ世の歌人今の世のいせの國より園といへる女の俳諧をわけて濱荻の糸遠き浪速の里に志しての我に嬉しく二見箱硯の海にそめて筆のうつり行事草をみけるに思ふまゝにそうこときぬべし光貞の妻萱原の捨など花におほみて紅葉かちる世に詠の絶にしに名をいふ月の秋に此女この所におはしの舍りをなし神風の住よしの春もひさしかれとそことふき侍る

濱荻や當風こもる女文字　西鶴
文月やひとりはほしき娘の子　其角

みやけをねたる人あり人丸の柿の實山の邊の栗のからけふの得ものにあまりなりと笑ひ興して

栢のから吉野の山の木の實見よ　嵐雪
澄のほる空や目にすき秋の色　一晶
枝豆や蛇と蟬とのから衣　超波
蔦這ふや松の戶塚のはいり口　敬雨
行秋や虫も供して草まくら　蓮谷
生殘る身のなくさみや墓まゐり　珪琳
入鉤やあれのおるしのこほれ松　超波
鞘かける蘭のゆふへや不二おろし　馬光
をのか身を心ほそいか秋の蠅　隆平
筋違ひに秋を背負ふやひは法師　蔦翁
白かねを罪の秤や墓まゐり　其角

こちらむけ我も淋しき秋のくれ　はせを

松島にて

島〳〵を暮て廻すや秋の色　鋤立

母におくれたる子をあはれむ

おさな子や獨飯くふ秋のくれ　倘白

ない山の不二に並ふや秋の暮　其角

紅葉

日は入とも半時請合ふ紅葉哉　貞佐

行秋の道〳〵こぼすもみぢかな　古 乙由

小おとこのかたしけなさや下紅葉　秀和

いなつまに下染させて紅葉かな　蓮谷

ちる音も色もさらさの紅葉かな　立圃

菊

かんたんの叉寐は園に菊咲り　沾德

菊さくや飯に來露の降時分　蓮谷

松の尾に杜氏通夜して栗菊　貞佐

野はつれの道さだまるやきくの垣　超波

さま〳〵の花の隱居や菊の花　蓮谷

みどり子の百會におひぬ菊のわた　無倫

蘆穗

あしのほや貌なてあける夢心　丈草

蘆のほやまねく哀にちるあはれ　路通

十三夜

十三夜山とへたつる蚊屋のなし　貞佐

三日月のおさな顏あり十三夜　珪琳

諏訪の面に波の名殘や十三夜　貞佐

野も山も狂言かへて十三夜　乙由

栗

大江山にて

ふみも見じ鬼住跡の栗のいか　素堂

いかくりに袖なき猿の思ひかな　其角

葛葉

歯の跡もあり葛の葉のうら表　嵐雪

きのふ迄水にたてしか葛の葉の　宗因

秋雲

秋の雲富士をいろ〳〵になふりけり　古 卜尺

吉野氣をはなれて白し秋の雲　鬼貫

秋

四十雀鳥もまよはぬ山路かな　慶友

老の名のありともしらて四十から　芭蕉

七草や酢みそのかれて秋の花　言水

落葉

木の葉ちるひゝきにゆかむ撞樓哉　春澄
寒くとも三日月見よと落葉かな　素堂
黑木竈煙ものが落葉かな　貞佐
はつかしの森になりたる落葉哉　乙由
果はみな佛の道に落葉かな　珪琳

篠田森にて
葛の葉の心もをれて落葉かな　蓮谷

初雪

はつ雪やきせるの先にひえの山　如泉
初雪や甲にふられてあそふ龜　白雲
はつ雪や河原の空に大文字　宗瑞
初雪や袖笠なとは人による　超波
初雪やさかやきを剃人もあり　安土
はつ雪やみそれてしまふ笹の音　木因

雪

白炭や燒ぬむかしの雪の枝　忠知
雪の松曾根も久しき名所かな　宗因
うとん屋へ行念佛なり夜半の雪　其角
何と見ても雪ほと黑き物もなし　德元

はな次郎といへるを連て夫の夜はなしに行しを
我子なら供にはやらし夜の雪　とめ
雪ふりて我に寐よとの晝間哉　路通
雪ふりやあれも人の子樽拾ひ　作者不知
つれ／＼をすさむ丹波の粉雪哉　休甫
武藏原雪の折へき音もなし　貞佐
應／＼といへとたゝくや雪の門　去來
雪の夜や寐ころんで聞とうふ賣　晩山

凍死の吟
山をぬくちからも折れつ松の雪　大高氏子葉

寒山贊
寐る恩に門の雪はく乞食かな　其角
白からし京の御目から江戸の雪　秋色
藪の雪おもはすうらを見せにけり　玉蛾
大雪の內迄きこゆ地引網　貞佐

和州さのゝわたりにて雪にあうて
身のほとに過けり雪の三輪か崎　蓮谷
雪ともに傘返しけり送り人　擧白

遊女吟三章
初雪や遊ふ身なから又あそひ　高尾

冬の部

木枯

木からしの果は有けり海の音　言水
こからしに二日の月の吹ちるか　荷兮
木枯や色にも見えすちりもせす　智月
こからしや俗の目に見る物ならず　蓮谷

貴船にて
凩に身の毛もよたつ深山かな　同
木からしをうけつなかしつ尾長鳥　珪琳

時雨

一順の四句めふりなり一時雨　宗因
耳かゆく耳こそはゆきしくれかな　一晶

風聲天地のかたりなりとあり
天地のはなしときるゝしくれかな　湖春
その柴のぬれ色買はん初時雨　乙由
しくるゝや常氣のつかぬ小倉山　超波
月と日に皺をよせたる時雨かな　珪琳

當麻寺にて
さよしくれ人を身にする山居かな　其角
ゆふたちのからく老たるしくれかな　黑露
いかつちのかもは眠れる時雨哉　宗瑞
神鳴もなく面白しむら時雨　餅夢
何を取船とも見えず初時雨　甘谷

鎌倉一覽亭記　雷　蓮谷述

錦屏山といふ山は千歩十八曲をのほりて頂上に方五間の亭あり是を偏界一覽亭といふ此名ある事はむかし左馬頭基氏の物數奇にして年やゝ祖佛にもつかふへく風雅をもたのしむへしといへる佗ならんとなるへし今は其亭も霜の爲に絶て葎おろそかに礎はかり名のみとむらんしかれども其世の面影を見むとすらんもあふけは松に月晴てうつふけは蚕かいさりのあはれもふかし花に雪に面白からん月に郭公にわひしからんその草此木に心を置わたして何か風情をこめられしもすべて此山のもてなしにして人をなくさむるにとほしからねは見る人ならで誰か此風色をおしまざらんや

山を見てそして海見る時雨哉　蓮谷

隱逸の名もさま〴〵の紙子かな　蓮谷

氷

茶の水に我と蓋する氷かな　宗鑑
餓鬼の目をおもひやらるゝ氷かな　貞室
荒海へ舟から投るこほりかな　超波

一休和尚も油斷の二字は常に忘るべからずといへり

精出せば氷る間もなし水車　珪琳

栢莚か一子に對して

獅子の子は投てすべらぬ氷かな　貞佐

苔情水にて

とく〳〵の音を仕廻うて氷かな　蓮谷

鉢敲

千鳥たつ加茂川越えて鉢敲　其角
彌兵衛と聞けは哀れや鉢敲　素堂
今すこし年寄見たし鉢たゝき　嵐雪
世の中は是より淋し鉢たゝき　倘白
こと〳〵く寐覺はやらし鉢扣　其角
鉢敲いかに浮世を茶せん髪　超波
長嘯の墓もめぐるや鉢たゝき　はせを

鉢敲歌

晋其角

鉢たゝき〳〵　暁かたの一聲に
はつ音聞れてはつかつほ
花はしら魚もみぢのはせ
雪にや鰒を寐さむらん
おもしろや此樽たゝき
寐覺〳〵てつねならぬ
世をおどろけはとしのくれ
氣の若うなるはかりなり
七十古來まれなりと
やつこ道心捨ころも
酒にかへてん樽たゝき
あらなまくさの樽たゝきやな

凍え死ぬ身の暁や樽敲　其角

頭巾

うらあかし伊達な人丸頭巾哉　玄札
縮すたれ鼻でわけたる頭巾かな　木導
いろ〳〵の頭巾の果や丸頭巾　古柳居
生駒山晝なかくしそ若頭巾　青峨
人形の手にもなしたり角頭巾　介我
山寺の味噌つきは皆頭巾かな　隆平

初雪やたれかまこともひとつ夜着　薄雲
白鷺やまけすおとらぬ雪の色　小紫

寒

行脚の僧に對して
寒いかゝ雲に起臥夕あらし　任口上人
門口に不二見えぬ日の寒かな　沾洲
年寄は鼠もひかすさむさかな　園女

旅行
大名の寐間にも寐たる寒哉　許六
鐵拐の息を見つける寒かな　瓢斗
そは切に吸物のなき寒かな　許六

耳塚にて
耳とつて鼻もかまれぬ寒かな　蓮谷

曾根崎にて
珠數かけて二羽飛ぶ鳩の寒かな　同

麥林庵夜話
灯心のありたけ噺す寒かな　同
紙子のやれも夜は紛るゝ　乙由
隣から金壹枚の松たれて　巴静

霜

白仙長老と夜話せしも此事のみ
古寺や輪切大根の霜の音　東潮
熊坂の長刀あふる霜夜かな　老鼠

奈良にて
寒いかと鹿を撫けり今朝の霜　蓮谷
初霜や衾にこもる鐘の聲　野坡

妙身童女を葬りて
霜の鶴土へふとんも被されす　其角

霰
心つれて反橋をるゝあられかな　重頼
飛脚屋のまはしろもかな玉あられ　甘谷

愛宕山にて
土器を投てうけたるあられ哉　蓮谷
菅笠にかゝるはつみなる霰かな　同
土舟はとても走らぬあられかな　貞佐

紙子
から鮭に喰ひさかれたる紙子かな　木導
名聞を襟に殘してかみこかな　露川
定紋の重荷おろして紙子かな　蓮谷
爰を切れかしこを裁とかみこかな　黑露

隱逸傳をよみて

顔みせや先月までは奈良の末　超波
かほみせや是も榮花の夢の內　蓮谷
かほみせや海龍王の娶さかり　吉青醜

寒念佛

聟といふ寐所もあり寒念佛　貞佐
まほろしの夢助老て寒念佛　蓮谷
酒假の飲酒はいかに寒念佛　其角

冬

せこの者來へき宵なりとまり狩　守武
明くれて大根うまし神無月　信德
革足袋のむかしは紅葉踏わけたり　一鐵
鵜の巢を喰そめる碁立かな　無倫
茶の花や利休が目には吉野山　素堂
おこし置て寐られぬ伽の炭火哉　未得
たま／＼も青き葉もありかへり花　素狄
霜解やあらぬ落葉を足つたへ　擧白

半醉半醒の辭

祐成顔をくふ時は時宗はくはさり鳧　曲水
爐開きや江戸の圖て見る目黑山　貞佐
ゑびす講釣せて人や玉たすき　專吟

東海寺澤庵和尚の古墳にて

ちる紅葉木て鼻こくる夕かな　珪琳
鷲鷹や鼎を屏風に立なから　柳居
達磨忌や蘆の一葉を寶舟　遠里
旅籠屋の跡ゐら涙のふとん哉　菊輔

義仲寺にてはせをの墓を拜て

十月や花も實もなき墓參り　珪琳
子は衣裝親は常也ゑひす講　其角
枯野のや筑波ひとつは沖の石　百里
から鮭も空也の痩も寒の內　芭蕉
ゐら宵の夜のちきりや亥子餅　宗因
茶の花のゐふ／＼咲て寒かな　李蹊

いせの乙由へ文通のはしに

荻の葉の枯てそれから不通かな　蓮谷
鶯も一首よみけり年の內　乙由
御師殿は先こなたへと大根引　其角

煤掃

鼠共宿はとゝはゝ煤はらひ　幽山
夫婦してはつれぬ戸あり煤はらひ　乙由
大黑のひなたほこりやすゝはらひ　同
煤はきやけにもめてたき鼻の下　玉蛾

世の中や丸いあたまに角頭巾　蓮谷
通れは斯とかたちす投頭巾　沾德

火燵

愼めや火燵にて手のさはる事　春澄
飯櫃と猫と夫婦の火燵かな　擧白
火燵きれとすゝむる人を暦かな　貞佐
侍は腹さへきるにこたつかな　支考
山寺に拾子そたてる火燵かな　古蓮千
我手さへたゝは遊はぬこたつかな　立志
いろ／＼にはける疝氣を火燵哉　珪琳

火桶

抱て寐ても肌はゆるさぬ火桶哉　貞室
年となく夜のあまるや桐火桶　宗瑞
火桶抱ておとかひ臍をかくしけり　路通

千鳥

波風はたてと中よし友千鳥　貞室
一羽たち二羽たつ後の千鳥かな　巴靜
狼の跡ふみ消すや濱ちとり　史邦
唐崎や雨も千鳥も黒蒔繪　蓮谷
菅はへな笠になり行ちとり哉　其蒼
覺にけり我内になりさよ千鳥　甘谷

由良の湊にて
上るりに泣所なり濱千鳥　蓮谷
ある人のみまかりたるを
なけやなけ獨づゝへる友ちとり　珪琳

網代守

膝もとに月こそ出れあしろ守　木導
網代守宇治の駕かきとなりにけり　許六
惠心寺に奉公はせてあしろ守　支考
子もたすのからくも生て網代守　超波
むかし／＼茶師の甥なり網代守　蓮谷
能遊ふ鶴なとかめそあしろ守　貞佐

冬籠

金屛の松の古びや冬籠　はせを
大根といふ味方あり冬こもり　珪琳
てんかくの跡さひしきそ冬籠　百里
人を吐息をならはん冬こもり　千那
冬籠虫けらまても穴かしこ　貞德
つく／＼と壁のうさきや冬こもり　其角

貌見世

貌見せや此二丁町明の春　巴人
かほみせや此朔日の日の長さ　珪琳

やうかるかや小車の我から物に狂ふとはかの祐成のしのひ妻その夜はさむし千鳥なく月海上にうかれ女の泪にくもるむら雲は雨を起して鳴神もいかてか中をさけてまし巳の日の拔ゆふしての誓ひをたのむ加茂川やいく瀨をわけて足そろへうかれ色にてスツトントンとんと打てはしとゝうつ打けん杖の下よりも獸となりし石もありけに此の中のうき事をおもはさるこそまさるなれ又逢坂の關守も一夜はゆるせとまるまし百夜とかこつかよひ路をとかむる聲は深草の中にも是は犬子艸ほゑ出にしをころ／＼とひとり莇藻の床とかや伏見の里に明わたるよめか君の心のうち父こひしとはのたまはて油地獄に着玉ふ

鼠にもやかてなしまん冬籠　其角
引つれて小松くはへる鼠かな　同
野鼠の是をくふらん土筆　同
ほとゝきす我は鼠にひかれけん　同
松ならて穴へ餅ひく鼠かな　貞德
鼠とる涅槃の猫と詠めり　言水
盂蘭盆や蟵と鼠の巢にあくむ　桃隣

顏出して鼠あつかる夜宮かな　百里
ぬくめ鳥中に鼠のなく夜哉　貞佐
梅か香に鼠の髭のうごくらん　立志
年寄は鼠もひかす寒かな　園女
蓬萊の麓に通ふ鼠かな　西鶴
妹か手は鼠の足かさよ千鳥　其角

漫戲五倫

君臣有義

家の子等けふを忘な年忘　其角
飯鮹のをのれ足くふ河內越　沾德

父子有親

鮠汁や憎き頰には猶くれし　其角
おもへはそ打是見丸の桃の露　沾德

夫婦有別

鉢敲めをとの出ぬもあはれ也　其角
けにたのむ石に水筋はなれ鴛　沾德

長幼有序

袴着は娘の子にもはかまかな　其角
梅折は鼻をさし出す弟かな　沾德

朋友有信

物くさ太郎といふ題を
煤掃の埃を詠て肘まくら　遷谷
町人の鑓見つけたり煤はらひ　菊輔

年暮

韋駄天もつれて廻るか年の暮　貞德
年の矢はうつほのそこになりにけり　貞室
目に遠く耳にちか寄年のくれ　西武
幾つやら老かさなりてとし忘　玄札
年暮れぬ笠きてわらぢはきなから　芭蕉
白晝に雑子拾ひけり年の暮　言水
おそろしや女の目かね年のくれ　信德
いね〳〵と人にいはれつとしのくれ　路通
合點して逗ておどろく師走かな　雲皷
人形も左りをきかせ年の暮　貞佐

享保九年
神風やいせの山田なる橋氏の家にゆかりせられて爰に住む事十四年ことしは六そしの老をかさねて古郷のかたに歸驛の思ひをよすさらは内外のおほん神に此心を敬し奉るにも爰の人〳〵に別れをさへまたいつかはと思はましや

鳥護増賀夜
梟一羽鏡に寒し年こもり　支考

花感西行時
花にそゝく泪やしてにかしこまり　同
つもりこし年のひたひの師走かな　德元
大年やひらめのむ鷄の物思ひ　其角
靜さのよい暮鞠の事てなし　和英
おもへとや泣れ笑はれとしの暮　嵐雪
歌をよむ身の尊さよ年のくれ　文鱗
年波や壹分か錢をもしほくさ　珪琳

あこぎ浦にて
月と日のたびかさなれは師走哉　遷谷
市に入りてしはし心を師走かな　素堂

光陰道行　晋其角

妻戸を明て出玉ふ晝は人目をかくれ里あなめ〳〵とかこちけん破れ扇の要より結ふおもひは葛の葉のうらみかはせし二見かた伊勢の野飼の花薄きき

よしやさは鵺を待夜の郭公　沾洲
平相國清盛官位に進む事
花に鰹爰か平家の奢りかな　露言
富士川にて軍兵鳥の羽音に
おどろく事
鷺飛んておくびやう風の寒哉　蓮谷
田原又太郎先陣の事
母衣かけて一騎もなかれす川柳　古青峨
宇治合戰の事
秋霜や爰を最期と甲むし　蓮谷
宗盛奢超過する事
車にて花見をはやひかし山　其角
源頼政自殺の事
茶の花やみのなる果の名もむかし　蓮谷
重盛醫王山へ金を送る事
唐までも親のひかりそ金銀花　其若
北山弉符の事
關東の聞えにも雖へきのこかり　沾洲
待賢門夜軍の事
木のもとに皆討死の椿かな　珪琳
野間のうつみにて義朝うた
るゝ事
かゝり風呂の煙にちるや梅の花　琴風
頼朝伊豆國へ流罪の事
うさを知れ蛭か小島の田植腰　專吟
同義兵をあくる事
大根はや伊豆の白旗十三夜　貞佐
牛若丸千人斬の事
長刀の五條も涼し橋の月　支考
牛若奥州下向の事
夏の夜を吉次か冠者に恨かな　其角
赤澤山角力の事
角力とり並ふや秋の唐にしき　嵐雪
頼朝ふし木隱れの事
佐殿と見てもたのもし露落葉　貞佐
同七騎落の事
昔いつ武者六七騎門の雪　沾徳
實盛討死の事
鬚髪を洗へは濁る蛙かな　貞佐
義仲遊輿の事
山吹もともへも出る田うゑかな　許六
高綱景時先陣をあらそふ事

君と我爐に手をかへすしかなかれ　其角
有なしの世話やいさむる雲の嶺　沾徳

答雲虎和尚　園女

ある書の旨趣拜し申候本求眞不求妄大道の根源誰もなる所憚なから不斷一心深頭にのぼりての所作は柳緑花紅只其儘にして常に句をいひ歌につゝりて遊ひ申事に候無益の口業に候はゝ一切經も無益の口業にて候法くさき事は嫌ひにて所作所行は念佛と句と歌と也極樂へゆくはよし地獄へ入れはめてたしそこに更々無分別に候申たき事候へとも歩行なりがたく候まゝ御ゆるし候へかし

和玉韻

自己念其不覓心　法灯已耀一灯心
市中點々有明鏡　全識人間清淨心

誰か見んたれかしるへき有にもあらす
無にもあらさる法のともし火

源頼光朝臣の治世より尊氏將軍の御代迄その間の治亂を題として此題にその句の叶ふを諸集の中よりひろひ侍りて左に備ふるものならん

頼光朝臣繁榮の事
大將は一段たかきぼたんかな　貞佐

渡邊綱羅生門へむかふ事
綱か立てつなか噂の雨夜かな　其角

四天王大江山へ發向の事
落栗や綱公時が笈のうへ　山夕

千丈か嶽を登る事
なまくさい風落すなり山さくら　嵐雪

源義家弓馬を嗜む事
鳩飛ふや八幡太郎弓はしめ　氷花

同奥州攻の事
前九年敵にしても花の山　專吟

宗任都にて歌を詠する事
問ふ耻は宮古に殘り梅の花　琴風

平忠盛祇園の火ともしを組ふせる事
麥はらのひかりおそろし五月闇　浮生

源頼政鵺を射る事

辨慶勸進帳を讀む事
强力のいふかまことか鬼あざみ　壺月
辨慶衣川にて死する事
鷄頭は立往生の十夜かな　乙由
工藤祐經權柄の事
うつて通る當時鰹の光かな　貞佐
和田酒もりの事
龜菊があふきもふるし年の暮　園女
草摺の只今きれる暑かな　氷花
曾我兄弟狩塲へ忍び入事
萬歳や狩塲〳〵をふたりつれ　珪琳
同夜討の事
兄弟か貌見合すやほとゝきす　去來
十番切の事
武藏野や不二の霞のこけ所　其角
祐成うたるゝ事
はなれかたし宵とあしたの鮓のおし　貞佐
時宗生捕るゝ事
蟻共に引出さるゝ小蝶かな　白雲
公曉に實朝公殺るゝ事
熊蜂にさしころさるゝ燕哉　瓢斗

武藏守泰時政務の式目を定むる事
名月の出るや五十三ヶ條　はせを
最明寺時頼裁許の事
月影の更に依怙なし天か下　蓮谷
青砥左衛門なめり川を渡る事
螢火は百かものあり滑川　宗因
最明寺修行に出る事
かまくらの御行方あり留守の雪　貞佐
常世か家に最明寺一宿の事
でしなには自然鎌倉山さくら　超波
常世鎌倉へ馳參する事
花に風ちきれたりとも鎧草　不卜
不禮講の事
曉の反吐はとなりかほとゝきす　其角
稻村か崎干潟となる事
甲貝みるめも耻る汐干かな　堤亭
長崎次郎高重最期の事
かまきりや死とも斧は持なから　蓮谷
相摸入道高時滅亡の事
運盡てついに散たか赤い芥子　同

佐々木より梶原遲し郭公　専吟
一の谷ひよどり越の事
鷲の尾に請狀はなし花の友　沾徳
忠度と六彌太組討の事
寄れ組ん兩馬か間に磯清水　宗因
忠度一首の歌の事
忠度と灰にかゝれし火鉢かな　其角
八島合戰の事
川海老や陸にあかれはきり／＼す　超波
平家舟にて月を見る事
具足着た親のみおほし月見舟　野水
義經弓流しの事
寒梅や將のはたらき不意に有　古佳風
敦盛うたるゝ事
熊谷もきるにきられぬ牡丹かな　蓮谷
景清みをのや志ころ引の事
我見ても腕のつよさよはしら鮓　貞佐
那須與市扇の的の事
矢おもてに連待舟の扇かな　蓮谷
菊王丸矢疵を負ふ事
實引や主のまへても膝かしら　貞佐

盛綱藤戸の渡の事
麥波の淺瀨を申す蜑ありや　立志
頼朝卿平天下の事
水仙に弓引草もなかりけり　乙由
粟津か原合戰の事
新そはや磯うつ波のまくり切り　倚白
巴勇力の事
鐵棒てたゝきくたくや斗り炭　正秀
今井四郎自害の事
兼平か喰うて死にけり太刀の魚　白雲
義仲流矢にあたる事
田の面に射て落しけり天津雁　堤亭
景清頼朝公をねらふ事
三千の忠を包むか芥子ひとへ　琴風
景清清水の觀音の歌瑞にあふ事
枯枝や繼そこなひの梅の花　超波
主馬判官盛久舞の事
五月雨そ長居はおそれ鶴か岡　似春
義經富樫の關を通る事
關守のこゝろゆるすや栗かます　其角

物さして今朝からなふる角力取
　奴の四火に世のあはれ聞
脱ちらす鞠場を見れは雲の上
　丁銀にさへ光陰の垢
木鋏てきめれは雨は尻を持
　居風呂あさく凄き山伏
冷汁をさつふとかけて蚤の息
　裸て舁そ覺悟なされい
小田原の亂三島へ行かよふ
　餘慶にとてはいらぬ鼠尾草
月夕のかゝる〻玄關横へつけ
　座頭の踊うしろ前かな
烏さへ氣にかけなから先肴
　久米平内か側て二分借
中の町ともした所川向ひ
　守りにしても虎杖の文字
谷の花むしろ蒴しを引めくり
　誰かあらん蛙うくひす

粟穗庵即興吟

不通せし隣も常の柳かな　貞佐

　山もたかいに笑ふ夕陽　蓮谷
百鶴の腹から爪の糸は出て　沾洲
・昔迄いふな此先か川　超波

三吟蓮谷亭興行

鳴〱は四十八字や遠かすみ　東里
　外山のさくら尻に敷草　貞佐
通れとの辻番うつむ柳にて　蓮谷
　北にはこんふ西に生薬　里
寒月や酒を〆木の中の綱　佐
　男かたゝぬとはかりの聲　谷
温泉の見所はなし大箱根　里
　投出すあしは麥をうつ竿　佐
荒馬に客僧乘せてせこめはや　谷
　目の明數も老の小便　里
産つかれ今きさかたの水煙　佐
　首てもあけやう我うねのたけ　谷
飯の湯は見通ふ内にあつく飲　里
　いつれ越へき山草鞋うり　佐
とつと奥隅の隅なる花の庵　谷
　蒴しむしろにおほろかけ事　里

正成吉野の皇居へ參る事
鶯の親正成は山路かな　柳居
千早城寄手の事
明かたや城を取まく鴨の聲　許六
笠置落城の事
餌にうゑて落けり雪の村雀　蓮谷
正成天王寺にて未來記をひらく事
未來記は根にたのもしき蕪哉　貞佐
櫻井宿にて楠子に別れの事
撫子にかゝるなみたや楠の露　はせを
正行へ父正成敎訓の事
親のいふ事はみなよし年の暮　蓮谷
正成湊川にて討死の事
餘花ありとも楠死んで太平記　素堂
萬民大平をうたふと云題を
鞘あてをさする御代かな山さくら　貞佐
新綿や治れる代の弓の音　晩山
此御代にあふきをかりて年忘　珪琳

桑々畔主人在世のうちにあの會此席にていひ捨玉へる句ともを集て今又獨吟の哥仙となし侍りぬ

四方の花またも强きは芝居かな　貞佐
雲も迎ひに春の出鰹
畔といふ手かゝりあれば爪あけて
茶舟水舟よい臣下なり
暮限の路次とはかたし草の月
鷄頭五尺何事もなし
秋鰯數は手まりの唄かけて
杜秤にさかるも地獄めの前
虛無僧は挨の四谷をふき通り
玉ひかりなく笠て田をうゑ
坂に畑雲のきれ〲しからみて
狩場の屛風むさんにも釘
燒餠のしは腹切てうまからせ
手に草履はく雪中の臼
糸巻の禮に大工へ腰をかけ
店貫濟んだ其夜孕むか
うとん玉二里踏おほえくれの月
花野めくりき手折手向ん

後序

俳諧といふは和歌にありてその始ひさしき事ならん凡俳諧の道は淺きに似てふかく僞に似て又まことありされはこそ心もおよひ詞もたれる自然の妙には風波の怒りをなため旱魃のうれへを助る道理もあらんまして歌人は居なからといへは身を雲水の旅に侘すとも千山万水を眼裏にちゝめて心にはいかいを思はゝ名所も近く心にあるきて雨雪のつれ／＼を忘るゝ翫び也世に人の心のわたくしより俳諧は心くたれる道にして益なし事とのみ思ふらめとひとへに此道は三綱五常の道をさとして富貴にほこらす貧賤に盜す世法の進退をしれとの庭訓ならんやさるは此道に思ひ入事侍らは都も鄙も師にありて學ふにむなしからさるへしさはいへと三人寄れはその中にその師ありてそれよく其塲をはからはゞ無師獨悟の俳諧ともこれをいふなんめりいてや先達とあふく守武宗鑑も中興はいかいに斷腸の一歩を起されしより貞徳芭蕉にいたりて風骨の大道をひらき玉へる也さはあれと其党の俳諧の風姿を伺ふに犬筑波淀川など聞えし集はありし昔の心情を盡して花實兼備の高みに遊ひしより其風流におも

雛ちかき二十五日の湯島なる　佐
鑓若黨てさはく迷ひ子　谷
二地紙箱木の下闇を宿と寐は　同
鮓や今宵の蓋をとらまし　佐
讀もせず捨て袂へ取ゆかぬ　里
橋なら飛んて思ひしらせん　谷
屋敷から出まいとも先餅はつけ　佐
この一戸前お袋の神　里
貸なくす鍬も梓にかけらてれ　谷
千住の眉は陸奥樣を見す　佐
軒並ひ拂ふかあるに迷るあり　里
さみせん折て短夜の月　谷
下りつれる鷺はまつりの後町　佐
比丘尼の尻の黒木て見たし　里
うか／＼と戀そつもりし通帳　同
釘かたまらぬ棚に去ら雪　佐
猿丸の案し姿は反吐の時　谷
櫛の齒かゝる伴頭の瘤　里
毘沙門の使は來たり花さかり　佐
詩をつくりけん岩に鶯　谷
東里　十二句

貞佐　十二句
蓮谷　十二句

坤の巻の終りなりけり年の暮

書林　市郎右衛門



るに倉庫にみてる財は盡る期もあれと人のかたみの發句こそみよく〳〵盡せぬ寶にして松の常盤のながゝらん後迄も名は更に竹の千とせの春秋を契らんさるはむかしも俳諧集をつくりし人もあまた侍りて其情を盡しけん其情は遠く筑紫のはてしなきより奥はゝるかに松前の末迄も今に名をつたへて心をしたはるゝも身は下なから情を花鳥の風雅に遊へる冥加ともいふならめかれを思ひこれをうらやめとて我心に心をほのめかされておもはすも彼先に我丹誠を盡して書集置けん名もほのかならぬ發句の中より音羽の瀧の音に聞えて名に流れたる古人の氣骨を削りし秀練の句を鏡の山の月とかゝやかさんと書集にあつめて爰におこかましくもひとつの集を作らんとおもひ寄侍るにも我はいさ簷螢窓雪にむかひて俳諧の一札に肘をしひらかす酒落も侍らぬはよしある發句の心の深さ淺さを思ひはかるにも彼あるしの好とかいへる赤烏帽子の古言にひかされてまつは好悪の一決にまとひしより何かはへたつる闇とやならん誰かいふ蛸は天地の廣きをたのしまむと壺の中に入て身をかゞめ蟹は隱家の狹きをさひしまむとをのか甲に應して穴をいとなむも是皆心ほとへる浮世のありさまならんとさはかりのたとへのふしも我忘却のたすけとなりて心やりにも溫故集とい

むく紅梅千句もあさはかならねは犬子集も猶面白からんそれよりこれよといふか中にも守武千句ははいかいの万葉ともいふならんかしすへてその世に立めくる編集の句毎には衆妙幽玄の心こそあらめ詞も姿も皆古めかしくて今めくはいかいの風姿には雲泥の論ありてをのつから深山櫻の花さかり見る人なくてちりはつるもほいやなからんいて〳〵我思ひ出れは世にありふる編集もいかはかりかはありけんそれか中にも人の耳に名も疎からさる古人の句を興して我心にしらふれはいと中〳〵に數ありて指にかそふるも又さら也さりとてかはり行ははいかいの風姿にして飛鳥川の淵瀬にはかきらさりけめきのふにけふの流行ありてあしたの風姿は夕の風情にたかふ姿はよし古うして遠く見捨る神ありとも近く助かる神あらは人もかたふく一ふしもあらんやと時しもあれ年は正德壬辰ならんさる世の人の發句を拾ひまつは心にもてはやして筆を硯の海にそゝけはをのつから濱の眞砂の數まさり行ほとになん〳〵として十万句におよひぬるもだとへ夢になしてもいかにおかしきものとかは知るさはとて永く箱の底に程ふるならば埃にまふれ紙魚となりてつゐに谷の埋木人しれす朽すたらんもそもまたその罪深からんかやされは我冬こもりしてをろ〳〵思ひすます

附録

女流俳句集

大野洒竹編

園女句集

春の部

ゆづり葉の茎も紅さすあしたかな

壬申の八月神風や伊勢の古郷を立て古き都のこゝに來りぬその年もあら玉の春を迎へて

難波女や何からとはん事はしめ

日參茶屋

長生に徳あり姥かすわり餅

春風春水一時來

新らしく揃かけはやあら莚

梅を折隣もあさき釣瓶哉

氣のはらぬ入相聞て梅見哉

寄今古梅

さくさめの何に色こき梅の注連

晋子十三周

名號の香に年はめくりて梅硯

壬申のとし菅神御忌にあたりたまふに古き神書を奉るとて

梅年をおよそ八百何十年

貫之の梅に

梅か香や慮外なからも旅勞

手をかへて折ゆく春の木草かな

春の野に心ある人の素顔かな

ふ題をもとむるより乾坤の二卷となれるもむかしを今になしていてそよ人をなくさめんとおもへる微意ならん此集をもしもや人の手毎につたへて見玉へるよしも侍らは我管見を見ゆるし玉へかし我はたゝかいやりならぬ古人の句を感して此集をつくりけんゐにしも一樹の陰一河の流れとうたへる風流に思ひためけるもかりそめ事にはあらんかも

延享五戊辰年二月廿五日

鎧度のほとり　雷風菴蓮谷書

思夜櫻

夜さくらや太閤樣のさくら狩

散たとの狀は屆つさくら狩

牡丹花は實に香を愛し給へりしや酒も香あり花も香ありされはこそ夢といふ菴にはふして金角の中には乘りたまひけるやかゝる風流の身より出來れは其ことはいはんもさらにや猶あやしきは此翁の和泉の堺を今や主はおかぬか主はおかぬかといひもて過させしをおき申さんと呼入し人ありけれはそれよりそこに住たまふことありとやいふは風流よふも風流いまむきの題にて俳諧の發句すにげなくはゝかありや

笠の圖にとれや氣にあふ春の道

出代も頭巾て行くや花の頃

寄拾遺歎冬

山吹にいしう射たりや雀弓

六田渡

山吹に川よりあかる車かな

男もすなるやまとしまねの月を女はをして見んとするをあさける人もあへけれといさしらすといはんもいかゝ侍らんいときなき時やり初しこきのこのひいふ三つ四つ六玉川の水のもと末もわいためなくしていく瀬のいたりをなんたとりしかされはよとちうせい駒のくつはつらをひかへていさゝかの所の水かひてんとて見すもあらす見もせぬ所〳〵を筆の鞭打はいといふ俳諧の句にやをらになひ出し山吹よと呼かけてわたさぬ川をさはあらしかしとまれかく

伊奈木川

手操舟風は柳にまかせたり

青柳は手にも及はし放下僧

鼻紙の間にしほむ菫かな

いそかしや菫を摘めはつく／＼し

鏡石

雉子の啼鏡の奥や天の原

染たらて山まてそめる菫かな

明野

咲ぬ間もものにまきれぬ菫哉

大和見にまかりさふらふと
て

燕にしばしあづける舍かな

かくいへる我も別を惜しみ
て

契りおく燕と遊ん庭の猫

形池

陽炎やおのか翅を池の水

伊賀越

松山の間／＼や花の雲

いその宮

鳥の聲花ある方へ四方拜

宮川をわたりまた夜深し

色あひもわつかに春の夜明哉

御材引

講親のはたこの馬や花かつき

芭蕉翁訪はれし時、のうれ
んの奥ものゆかし梅の花と
ありしかへし

時雨れてや花まて殘る檜笠

花の前に顔はつかしや旅衣

角ひしの猿の酒ても花こゝろ

蒲團まて朝の寒さや花の雪

舍たつとて

眠たかる人にな見えそ朝櫻

追／＼に來る人ことの櫻かな

けふ見る花にわらはべかと
もてはやして

こそづかる菓子の封切櫻かな

尾部山

三絃の拍子にかゝるさくらかな

歌の尾も馬上の吟の暑かな
手のこひも笠てかはかす暑かな
ゆふ顔や淡汲かけて水車

住吉にて

けふ來ても何の傳授か夏神樂
蟬の羽の輕きうつりや竹の皮

朝態

乙女子かすへりて落よ雲の峯

秋の部

思へたゝ硯洗の後の恥
兀山に秋のとりつく山もなし
朝露のうちにと萩の便かな
名月や琴柱にさわる栗の皮

寄芭蕉雨

名月や雨にひらいて文字なき葉
神垣や御百度うつてけふの月
名月や筆の言葉の引廻し

蕉門を招きて

名月や後は誰着ん檜笠

雨後曉天晴

得た貝を吹て囲みのゝ月見かな

海邊薄

むら薄輪にはる風や觀の餘り
はつれ〳〵栗にも似さる薄哉
迷子の親の心やすゝき原

法隆寺

二王にもより添ふ葛の茂哉
風の名の付て吹より新酒かな
小原女や野分に向ふ抱帶
おもしろや水の春とは引板の音

深更砧

いねかしと思ふ喘のきぬたかな

住吉奉納の内

成仲の松の祝ひをけふの菊
けふの菊朗詠集を御家流

重義亭にて

世の人のしらぬ花あり深山椎
行秋や三十日の水に星の照

まれすなるみちはいなひて
もいなとは人のいはせまし
ものをと百丸子といへる好
ものゝおのこのもとになん
まゐらせぬ

山吹に馬乗出して六玉川

小鹽井

大炊の目出たき顔や藤の花

藤やたゝ君にふれたるむすほゝれ

ぬれ筒も藤しつみたる暮の色

駒鳥の聲ころひけり岩の上

夏の部

四月朔日當麻寺にて

更衣みつから織らぬ罪深し

同し日香久山にまかりて

あら美しうの花は誰更衣

はや膝に酒こほしけり更衣

引裾にもの忘れけり更衣

うの花や投やりさまを細こゝろ

卯の花や品もかはらぬけふの花

猿澤にて

水若葉被着て來し人の影

手枕や月は布目の幅の中

祭ちかし入帆につゝく幟哉

多田院にて

金にて鑄つへき顔や合歡の花

寐所へ扇にすゑし螢かな

山深みそれに名たてそ姫くるみ

川中にとゝして見たし夏の月

白雨に呼出さるゝ柏かな

素手を宿して

進出て爪むく客の國咄し

こゝろみんと爪に眉かく端居哉

涼風や餘所の鉦鼓に南無阿彌陀

靜掃風軒散髮眠

卷〳〵の中に吹かるゝ團扇哉

負ふた子に髮なぶらるゝ暑哉

氷花子餞別

智月尼句集

春

鶯や手もと休めん流しもと
鶯に晝笑はるゝ帽子哉
ねち上戸けふは柳にやらしませ
莟なる梅あたゝむる春日かな
雪汁のぬくみいそけよ芝の花
是てこそ命惜しけれ山櫻
それでこそ命惜しけれ櫻花
入相の鐘に痩るか山さくら
山さくら散や小川の水くるま
我年のよるとはしらす花盛
兄弟はたんたいさかへ花にこそ
花咲て近江の舟の機嫌かひ
あふ阪や花の梢の車道
　羽黑の呂丸は未だ若うして
風雅の友をしたひ初て洛に
上り程なくなき身となりし
こそ尙あはれなれ
國の子はわろさ云ふらん手向花
　盤子白川へ行脚を聞て
鉢の子に請よ櫻は散りぬとも
　孫を愛して
麥藁の家してやらん雨蛙
溜池に蛙生るゝぬるみかな
桃見せて泣す尿せす婢子哉
手を上けてうたれぬ猫の夫かな
山つゝし海に見よとや夕日影
大和路の望の春も暮にけり

夏

　眞愚上人にわかるゝ

冬の部

初時雨阿佛の旅やつゝら馬
近道を阿闍梨につるゝ時雨哉
　神祇
此猿はやしろ久しき時雨かな
置霜やけふ立尼の古葛籠
　賓晋齋のもとに馬下し侍りて
霜やけを不二の光にこゝろ儘
白糸に霜かく杖や橋の不二
　蘭子東行を送る
雪に思へ富士に向はゝ故郷の繪
忘れものゝ舍か寒し椚木原
年よれば鼠もひかす寒かな
ある程の伊達仕盡して紙子哉
さゆる夜のともし火凄し眉の劒
木枯やこほれて晝の牛の聲
　住吉に詣てゝ神慮を仰ぎ奉る
木枯やゆつり合て海の汐
　露は秋時雨は冬となんさためてやこそ〳〵と反古とり出て火桶ひとつをはりまはす是は何の翁に俊成頼政をならふにもあらすたゝひとつにて吾冬を過さんとなり春より後はといはゝあらはあるまじわれなはもとのつちくれこそともしとはゝかく答ふへき
膝もとの折敷に糊の木の葉かな
　閑居
葉の音に犬吼かゝる嵐かな
行年や老を擧めたる小町の繪
籠菊かあふぎも古し年のくれ
へたてゆくまゝの俤かきくらし
　雪とふりぬる年の暮かな
俊成の女とは誰としの暮

天水にたまる月影も一盃
おそ〳〵とむかへは月の御光哉
名月に鵜は聲を吞まれけり
立待や煉直さん臼の上
居待月起て守らん枕挽
寐待月舟さしつかに行次第
年よれは聲はかるゝそ蟋蟀
枯れぬ間に問へやとはれや菊の花
きり〳〵す鳴や案山子の袖のうち

嵐蘭子を悼む

鳴出して米こほしけり稲雀
淋しさを我もの顔や秋の鳩

亡父の七回忌をとふらふに我と同し道なる人〳〵來りければ

案山子にもあはれさまけし尼仲間
七度の花のはじめや早稲の花
秋ひとりさへられもせぬ寐覺哉
知てしらぬ身のほと悲し秋の暮

冬

木〳〵の根の獨くつろく霜こほれ
初雪の疊さわりやしゆろ箒
雪の夜や朧豆腐のなつかしき
わさとさへ見に行旅や不二の雪
佛の日誰にわかれの雪の肌

老の寐さめのかきりなきに

雪やけや夜毎に孫か手をふかせ
いふまいと思へと雪吹死手の旅

木曾義仲の塚に詣てゝ

雪消えてあはれに出し朝日塚
白雲の若菜こやして消にけり
降雪になほ大きかろ不二の山
待春や氷にましる塵あくた
雪信か草花珍し冬こもり
幽靈に水呑ませたか鉢たゝき
鉢たゝき夜更けて道の廣さ哉

路通の行脚を送りて

見ゆるさへ旅人寒し石部山

さつはりと衣たゝかれ衣更
たゝ有明の月そ殘れると吟
しられしに
歌かるた憎き人哉ほとゝきす
晝まてはさのみいそかす時鳥
白牡丹子は幾人も持けれと
手枕や月は布目の蚊屋の内
洒竹云此句一本園女の句とす今重出す
獨寐や夜わたる男蚊の聲侘し
竹の戶や撓めもしらす二番生
箏や皮つきこはし甲武者
手鞠なら散るともあかれ飛あかれ
夏菊や藥とならん床の上
あるとなきと二本さしけり芥子の花
芥子咲て見るや近江の船の足
なくられてこほるゝけしや日の移
崎風はすくれて凉し五位の聲
凉しさや夏田の畔の晝あかり
芭蕉の舊菴木曾塚にて史邦
に別るゝ時
宵寐して凉しく步め朝のうち

路通西國旅寐も去年今年と
立歸り文來りしを發句して
返す
其まゝにあれよ凉しき骨海月
琴彈て老を嗡せよ夕凉
晝貌や雨降り足らぬ花の顏
逢坂やいとゝせきあふ蟬の聲
分なから童へらしさよ飛螢
母の墓にて
我影のそれりと覗く落葉哉

秋

朝顏の咲や親にも呵られす
盆に死ぬ佛の中の佛かな
名月や志賀の礒田の稷いろ
二つあらはいさかひやせんけふの月
手をついて月指のそく松の間
川上て菜を洗ふたそ月の影

秋色女句集

春

けさ見れは若菜に揃ふ地黒好

霜の鶴土に蒲團も被けられ
すと子を悲みし人もともに
流水むなし

親も子も同し蒲團や別霜

雛の尾のやさしくさわる菫哉

蜆取早苗に習ふこゝろかな

そも我は鐘に用なき櫻かな

井戸端の櫻あぶなし酒の醉

花の色は乳母にはなれよ櫻町

其後はことに粟津の田にし哉

指折れは涅槃の月の焙爐物

夏

褰を着て寐よとの鐘か子規

雨だれに袖もあやめの匂ひ哉

交りを紫蘇の染めたる小梅哉

五月雨や人伺公してかいつふり

はしめて召されたる御方に
て

見ぬ方の御園の瓜の汗ふかん

簾下けて誰つまならん涼舟

どう見ても何やら足らぬ底清水

氷花子餞別

石に針生姜も入す清水哉

其角を悼む

日〳〵に諸手合はせて百合の花

佛めきて心おかるゝ蓮かな

水仙の花の高さの日影かな

御火燒の盆ものとるな村烏

動く時木の葉ちりけり井戸の內

木枯や色にも見えす散もせず

凩を杖に突きけり老の坂

我形のあわれに見ゆる枯野哉

芭蕉翁三七日

像の畵に物いひかくる寒さ哉

四七日

冬の日や老も半はの隱れ笠

六七日

跡の月思へは氷るたゝき鉦

盡七日

嚙したく反古のはさむ生火桶

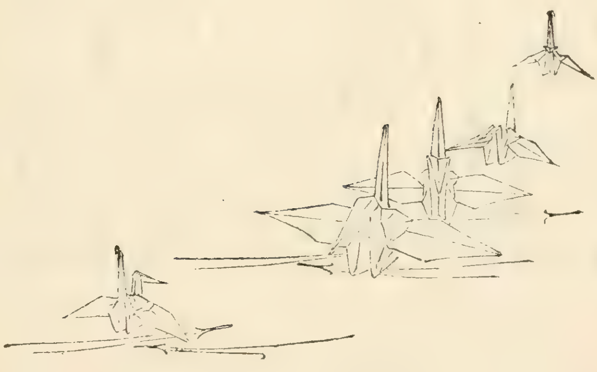
酒盛や一重にて年の暮

流るゝや師走の町の煤の汁

押よせて鶩一羽年のくれ

年內立春

冬の春心の外や梅の花



友寐して錠立寒し戀の丸　秋色
齒くろ貰ひに霜の袖笠　晋子
よそにのみ早打みれは轟て專　吟
數ふる雁に爪のない指　色
月のうぢの葛籠男はくもる也　子
伏屋のうさい酒臭い菊　吟
うら問に落ちてくやしき私語　色
御産所ながら同し産月　子
折からと四條を畫て繪帷子　吟
水の出はなを長と不和成　色
はつかしや此かちよりの草履取　子
筑摩のまつり世にはぬり笠　吟
をしたては薗生の竹のすうはりと　色
天の川瀬に化物の首尾　子
誕さへ枕にぬるゝ月の色　吟
たれに抱せんすまふかもうし　色
ちり迷ふ花に靜も半合點　子
白い齒見せよ猫も狂言　吟
春めくや馬に嗅する菓子袋　子
かゝみ山から楊枝めせ／＼　色
不住の身兵衛の時を語出し　吟

潜はなれては鮫をしらぬ舟　子
居風呂を軒の鱸にのそかれて　色
しのぶのみたれ仙臺の繪符　吟
殘月に小遣ひ錢百文わたす　子
波はよせてもうらのない足袋　色
近道へすゝめ串せは樒まくら　吟
九佛の日記を十佛の〆　子
松盃に逗留中をもしほ草　色
たま／＼あふは玉味噌に小菜　吟
夕鳥ひしりの弟子を一つなき　子
あの山見さい江戸にない山　色
大義して御本陣まで花に折　吟
清浦近しいさ瓔綢　子
うくひすに心の駒の朝はしり　色
上下の者のおほろ／＼と　吟

○

百韻（表）

花の雨胸は額間を裂夜かな　冠里
梅黒しとて耳を召さるゝ　秋色
蠶には言葉おろさす戀に　嵐雪

秋

萩に來て筑摩の人か五本松
船梁の露はもろ寐のなみた哉
初露に風さへしめる扇かな
身を恥よくねるとあれは女郎花
箱王か指す雁や暮の鐘
紙漉のせまくらはなせ月の宿
けふの月婆とは呼はぬ小町哉
楊貴妃の睦言もなしけふの月
月みつと和泉式部も恨かな
秋の蚊やしかも拂はて老の伽
曉を引板屋にかはる妻も哉
茅屋つむ戀もかろき世を誰か家
白菊にうはの空なる銀化粧
　冠里公へはしめて召され侍りて
武士の紅葉にこりす女とは
夕貌やさすがとひても器量ほど
○洒竹云、此句玉藻集習月の句とすは誤りなり、今寶永元年の俳諧のぼり鶴に從ふ

冬

　京の人に逢て
白からし京の御目から江戸の雪
しみ／＼と子は肌につく霙かな
十徳の袖は涙の氷かな
　歌の島
とも寐して鍼立寒し戀の丸
鮟鱇や沓のとなへも二葉より
　嵐雪三回忌題拂子
冬枯に畢竟おとる尾花哉
獨居やしかみ火鉢も夜半の伽
　遊戯
寄れ杖ふり海鼠になりし鼠哉

○

歌の島

千代尼發句集

帶も袂も、裙にひとしく、又平か族に藤の花もたせし頃より、其名あまねく、あめかしたに聞えければ、志らぬひのつくし人も、鳥か啼あつま人も、此尼の風流をしたはぬはなき世とはなりけらし。いてや句の姿は、あはれなるやうにてつよからす、いはゝよきをうなの、なやめる所あるに似たりと、古人の詞のことく、つよからさるは、をうなの句なればなり。今老の身のおほろけなるすゑまても、かく蕉風のいとすぢを、みたさゝる事をつね〳〵かんしあへる中にも、無外庵のぬし、志たしみ深く、遠近にちりみたれたる句を、書あつめぬれは、をのつからすける人々の、かゝみともなるへき事、おほけれはとて、志きりに櫻木にちりはめて、千代尼句集と題するものなりと、法師の物かたり有しまゝに、後序に筆をつく。

寶暦十三癸未初冬　　加州　金陵　闌更

眞はついと通るすく道　枳風
冷汁はさつはりとして雲もなし　岩翁
かうかまへたる筆匂ふ也　青流
行月にこの松傘をさしかけて　千山
平砂にならふ鳥は足輕　大町





七くさや都のみを見る日數

なゝくさや我は背戸にてよみ盡し

風の手にけふまて入ぬわかな哉

七草や雪を拂へはそれてなし

白い手の鳥追もあり若菜畑

山彦は餘所の事なりわかなつみ

鶴の畫賛

入音を鶴もしたうて若菜かな

梅咲や何か降ても春ははる

梅か香や風のあい〳〵木にもとり

梅の花咲日は木々に雫あり

むめかゝや石もかほ出す雪間より

梅かゝや戸の開音はおほえねと

咲事に日を撰はすや梅の花

梅かゝや尋ぬるほとの枝にさへ

梅か香や鳥は寐させてよもすから

文臺のうら書

梅の月涙の間に〳〵二見かな

うめか香やとに月夜の面白し

梅かゝや谷へむかひに行戻り

梅咲や水さへ水にならぬ折

仇を思にて報ずるといふ事を

手折らるゝ人に薫るやうめの花

追悼

梅ちるやまつのゆふへも秋の聲

梅花佛手向

なこり〳〵散までは見す梅の花

梅かゝや朝〳〵氷る花の陰

梅か香や何所へ吹るゝ雪女

大黑の繪賛

百手からこほれ初てやうめの花

繪賛三章

もとかしや香はとゝけともんめの花

梅かゝにつれ立日さへまた寒し

鶴ひとつ何のこゝろや梅の花

うくひすや又云ひなほし〳〵

鶯はともあれ爰の初音かな

黃鸝や聲からすとも富士の雪

うくひすや都きらひの竹の奥

鶯やよし野の沙汰に氣もつかす

うくひすや初音に聞くは幾所

千代尼發句集

春

福わらや塵さへ今朝のうつくしさ
よき事の目にもあまるや花の春
はつ空や鳥はよしのゝかたへゆく
我裾の鳥も遊ぶやきそはしめ
かさらねは初音も來よし庭の竹
松竹や世にほめらるゝ日の始
竹も起きて音吹かはす初日かな
福わらや御所の裾にも袂にも
鶴のあそひ雲井にかなふ初日かな

布袋の賛

はつ空や袋も山の笑ひより
また顔の空へはおもしはつ霞
木のもとは翌の事なり初霞
地に遊ぶ鳥は鳥なりはつかすみ

文臺のうら書

初かすみたつや二見のわかるほと
わかみつや流るゝうちに去年ことし
若水や藻に咲花も此事
若みつや迷ふ色なき鷺の影
萬歲やもとりは老のはつかしく
萬歲の口や眞砂は盡るとも
七草やつれにかゝ合ふ草もあり
道くさも藪のうちなり若菜摘
人あしに鷺も消るやわかなの野
若菜つみけふより花の道廣し
七種のひゝきからある水の音
仕事なら暮るゝおしまし若なつみ
手の跡を雪のうけとるわかなかな
花までは出惜しむ足を若菜哉
ひとつ家も摘出す雪の若菜かな
七くさや翌からは目の地につかす
七草やあまれとたらぬものもあり
一いろのあまりは白き若菜かな

祖師五百年御忌法會二章

流れ合うてひとつぬるみや淵も瀬も
すゑの世になかれてぬるみ増りけり

山咲のほとけかゝるや水の幅
あしあとは男なりけりはつ櫻
初はなやまた松竹は冬の聲
明ほのゝさくらに成て朝日かな
とち見んと花に狂ふやよしの山
けふ來すは人のあとにか初さくら
唯かへる心て出たにはつさくら
見て戻る人には逢す初櫻
むすはれて蝶も晝寐や糸さくら
明ぬれといよ／＼白しはつさくら
影は瀧空は花なりいとさくら
月の夜の櫻に蝶の朝寐かな
何にすれて端／＼青し山櫻
潜るとて刺はせねとも山さくら
晩鐘を空におさゆる櫻かな
短冊は風をあつかふさくらかな
花は櫻まことの雲は消にけり
見る人も麁相なりやはつさくら
ふか入のした日の脚や山さくら
花守や人の嵐は晝はかり
たまされて來て誠なり初櫻
女子とし押てのほるや山さくら
見ぬものを見るより嬉しさくら花

奉納

うち外を鳥　仕事や神の花

畫贊

道くさに蝶も寐させぬ花見かな
富士の笑ひ日に／＼高し桃の花
それほとにかはかぬ道やもゝの花
よし野から鳥も戻るや桃の花
桃咲やよしのゝこゝろ捨てから
里の子の肌また白しもゝの花
桃咲や幾度馬に行あたり
隱れ家も色に出けり桃の花
もゝさくや名は何とやらいふ所

富士見にまかる人に

桃の色目におさまりて富士見かな
戸の開てあれと留守なり桃の花
青柳のけふは短きしほ干かな

うくひすや冬其儘の竹もあり
鶯や梅にも問すよそ歩行
黄鳥のものに倦るか竹の奥
うくひすは人も寐させて初音哉
みよし野に闇一結ひ柳かな
晝の夢ひとりたのしむ柳かな
青柳や地の果もなき水の上
うくひすは起せとねふる柳かな
青柳は何所に植ても靜なり
結ふと解ふと風のやなきかな
なかれては又根にかへる柳かな
青柳やとちらの世話て水の音
柳から殘らす動く氷かな
おそろしき根を恥入て柳かな
手折らるゝ花から見ては柳かな
根を置てけふももとらぬ柳かな

ゑびすの賛

釣竿の糸吹そめて柳まて

八十の賀

百とせに爰一眠り柳かな

桑名のわたしにて

見るうちにわすれて仕まふ柳かな
青柳の朝寐をまくる霞かな
もえしさる草何〳〵そ春の雨
はる雨やうつくしうなる物はかり
春雨や土の笑ひも野に餘り
春雨にぬれてや水も青み行
蝶〳〵や何を夢見て羽つかひ
蝶折〳〵扇いて出たる霞かな
たんほゝや折〳〵さます蝶の夢
蝶〳〵やをなこの道の跡や先
わか風て我吹おとす胡蝶かな

飛しうの人に對して

蝶〳〵や禍から戻る位山

五百年の法會

をしなへて聲なき蝶も法の場
聲たてぬ時かわかれそ猫の戀
ふみ分て雪にまよふや猫の戀
淡ゆきや幾筋きゝてもとの道
吹〳〵と花に欲なし鳳巾
鳥は音に跡先さそふ霞かな
山吹や柳に水のよとむころ

あいさつに
二むかしつもる目はなし松の花
隠居をとふきて
囀りを世にや譲りて松の琴
聞かさは何の心やはるのそら
下萠や水仙ひとり立しさり
送別
見送れは墨染に成花になり
藤の花なかうて連におくれけり
鶯の聲もさかるやふしの花
おそろしのよりやもとりて藤の花
まつかせも小聲になるや藤の花
あそひたい心のなりや藤の花
地にとゝく願ひはやすし藤の花

夏

花の香にうしろ見せてや更衣
綿ぬきや蝶はもとより輕〳〵し
わたぬきやはしめて夜着のおそろしき
綿脫やまた朝〳〵にうそもあり
脫捨の山につもるやころもかへ
おもたさの目にあつまるや更衣
冬からの皺をぬかはや更衣
二日三日身の添かぬる袷かな
餞別
日はなかし卯月の空もきのふけふ
卯の花は日をもちなから曇り見
卯の花や垣の結目も降かくし
うのはなの闇に手のつく若葉蔭
垣間より隣あやかる牡丹かな
水に添はゝまた名もあらむ白ほたん
蝶〳〵の夫婦寐あまるほたんかな
指折は翌へもかゝる牡丹かな
衣通姫の賛に
ゆふかせに蜘も影かる牡丹かな
水の書水の消したり杜若
萍の身はまたおもしかきつはた
行春の水そのまゝやかきつはた
をうなの身まかりけるに、

拾ふものみな動くなり鹽干潟
海士の子に習らはせて置汐干哉
蝶〳〵のつきたてゝ居る汐干かな
鎧もちや雛のかほも戀しらす
轉ひても笑うてはかり雛かな
とほし灯の用意や雛の臺所
穴の明松風もなし朧月
おほろ夜やそれてはならうて人は人
拂ふ事松もかなはすおほろ月
朧夜や見屆たもの梅はかり
おほろ夜や松の子ともに行あたり
言さして見直す人や朧月
朧夜やうたはぬ歌に行過し
世の花を丸うつゝむや朧月
きし啼て土いろ〳〵の草となる
若くさや尾の顯はるゝ雉子の聲
耳遠い事てもあるかきしの聲
隱すへき事もあれなり雉子の聲
ふたつみつ夜に入さうな雲雀哉
折ふしは雲のうしなふひはり哉
蝶〻は寐てもすますに雲雀かな

草むらの留守に風置ひはりかな
あかりては下を見て鳴ひはり哉
ある折はうそにも落て雲雀哉

畫贊に

身あかりや雲雀の籠も地に置す
乙鳥來てあゆみそめるや舟の脚

畫贊

舍りして宿とはならぬ燕かな
雨雲に腹のふくるゝかはつかな
啼雲雀呼戻したる蛙かな
踞はふて雲を伺ふかはつかな

養生濱といふに

蛙鳴てその鑊ゆかし濱つたひ

畫贊

わか草や駒の寐起もうつくしき

送別

若草や歸り路はその花にまつ

祖洲五百年御忌法會

地も雲に染らぬはなきすみれ哉
駈出る駒も足嗅くすみれかな
吹つもる塵出なほして松の花

澤にあるうちは名たゝぬ菖蒲哉
風よりも軒のものぞ軒あやめ
短夜のうらみもとすや五月雨
また神のむすはぬも出て田植かな
つれよりも跡へ／＼と田うゑかな
田うゑ唄あしたもあるに遣すから
けふはかり男をつかふ田植かな
早乙女やわかな摘たる連も有
ゆふかほは朝／＼もとるさかりかな
夕顔や女子の肌の見ゆる時
夕顔や物のかくれてうつくしき

あいさつ

ゆふかほの宿や茶の香も水くさき
あつき日や指もさゝれぬ紅畠
涼風の道入て見えぬ紅はたけ
こほれては常の水なり紅の露
みしか夜のつのる花かや紅畠
山陰やこゝもとの日は紅の花
あさの間は空にしられぬ暑かな
鹽竈のほそう立日はあつさかな
晩鐘に散殘りたるあつさかな

來て見れば森には森の暑さ哉
うきくさや蝶のちからの押へても
螢を岸に繋くや蜘の糸
浮草に我は根の付涼みかな
萍やとりおとしたる咲處
藻花や濡すにあそふ鳥は何
涼しさや氷室の軒／＼より
蓋とりてつめたきかさや氷餅
はつ蟬や風にも用のある日から
せみの音やからはその根に有なから
松風もをのかのにして蟬の聲
松の葉もよみつくすほど涼けり
涼しさや梢／＼の吹あまり
涼風や押れ合たる草とくさ
すゝしさや手は届かねと松の聲
涼しさやあるほど出して鷺の首
影坊の森てはくるゝ涼みかな
唐崎の書は涼しき軒かな

送別

道もその道に叶うてもの涼し

八十の賀

雲のゆかりそれかとはかり杜若
灌佛や蔦の若葉もあゆみそめ
蚊屋つりの草もさけてや花御堂
晩鐘に塵もちらぬわか葉かな
日の脚の道付かへる茂りかな
葉櫻やしらぬむかしのものに成
むさし野に聲はこもらす行々子
淋しさは聞人にこそかんことり
分入は風さへきえて諫鼓鳥
竹の子や其日のうちにひとり立

餞別

若竹となりて千里も遠からす
風毎に葉を吹出すやとし竹
若竹の風は日に〱かはりけり
わか竹や雀の耳に這入る時

婦人の追悼

そのわかれ浮艸の花けしの花
鷄の聲つもりし耳やほとゝきす
ものゝ音水に入夜やほとゝきす
あすの夜は寐させてくれよ蜀魂

畫賛

音をいかに雲井にむすふ郭公
起あかる鳥もあるへしほとゝきす

風人にたつねられて

木々の闇植ても置す杜宇

あいさつ

道〱に殘した聲やほとゝきす
きぬ〱のあちらにはなし蜀魂
男さへきかれぬものをほとゝきす
唯置て枕の塵やほとゝきす
おもひ切てこちら向時ほとゝきす
唯もとる道なか〱し時鳥
子規聞人の口もとちて置
姫ゆりやあかるい事をあちら向
ひめ百合や姿見をする子供から
水音は水にそとりてくひなかな
下闇に居りわすれてや飛螢
しのゝめやとめし螢を置忘れ
川はかり闇はなかれて螢かな
花と針の心間たき茨かな
降らいでもぬるゝ名のあるあやめ哉
音はかり箟失なふあやめかな

琴の音の家にかよふや今朝のあき
秋たつやはじめて葛のあちら向
はつ秋やまたうつくしい水の音
初秋やまた顯はれぬ庭の色
秋立や風幾たひも閑なほし
かたひらの襟にはくさし萩の香
荻の聲のこるあつさを隙て居る
秋の部へこほれてはいる暑さかな
朝の間はかたついて居る殘暑哉
文月の返しに落る一葉かな

　　はじめてのあいさつに

文月や空にまたるゝひかりあり
荻も穂に出るやほしのあそひより
ほし合や心して行雲の脚
かさゝきや別れの橋は懸ねども
朝かほや星のわかれをあちら向
夕顔も寐るやくそくそほし祭
ほし逢や月入までは何の陰
鵲もねふたき宵の八日かな
朝顔やまた灯火の影もあり
あさかほや鳴所替るきりぎりす

朝かほや起したものは花も見す
朝顔は蜘のいとにも咲にけり
蕣の花や木陰のおそろしき
朝貌はその日に逢うて仕舞鳧
牽牛花やをのか蔓かと蔦に咲
あさかほや誠は花の人きらひ
朝かほや稀は日もまつ草の花
朝顔や草臥直る夜は持す
朝かほや夏の夜ならは夢の内
朝顔に釣瓶とられて羅ひ水
いなつまも鴉の聲にわかれけり
稲妻や何に志るしをつけて行
いなつまの裾をぬらすや水の上
蝶々の身の上しらぬ花野かな

　　畫賛二章

蘆間から風の拾ふや捨小舟
蘆の葉にすわらぬ尻となりにけり

　　文臺うら書

よしあしの穂に顯はれて二見哉

　　千種貝の題にて

波のうへに秋の咲なり千種貝

涼しさやとに八十年の松の聲

ひよ子の贊

子の闇に鷄も迷ふやゆふ涼み

涼しさや恥しいほど行戻り

あいさつ

涼風の植所なき住居かな

伊勢の人に對して

あいさつはうちどの風てしまひ皃

越の日和山にて

ゆふたちの道よりもなし日和山

夕立や卒爾な雲の一とほり

眼にさはる鳥は消たり雲の峯

松風を植て聞たしくもの嶺

あいさつ

仰むけはきれいにあつし雲の峰

送別

何里ほど我目のうちぞ雲のみね

山のすそ野の裾むすふ清水かな

青〳〵と見えて根のあるしみつかな

誓の旅に赴きし人

道くさも手のうつくしき清水かな

紅さいた口もわするゝしみつかな

行さきて又我に逢清水哉

手あくれは結ひめのなき清水かな

近道を來て日の足らぬ清水かな

目にむすふ谷間〳〵の清水かな

近道によき事ふたつしみつ哉

都のかたへ旅たつ人に

おくらはや清水に影の見ゆるまて

結ふ手にあつさをほとくしみつかな

眞如平等

清水には裏も表もなかりけり

釣竿の糸にさはるや夏の月

秋

蚊屋の涙かほにふるゝや今朝の秋

秋たつやきのふのむかし有の儘

これこそと何も見初すけさの秋

萩の葉のもの言かほやけさの秋

名月の舟やあそこもこゝもよし
舟からはちかしとむかふ月見かな
名月やあかるいものに行あたり
明月や何所までのはす富士の裾
明月や留主の人にも丸なから
うら町の軒あかるしけふの月
名月や唐崎の雨明てから
あかるうてわからぬ水やけふの月

硯の題

明月やそのうらも見る丸硯

石山畫賛

名月や雪踏分て石の音
いさよひや今あそこにて見ゆる鴈
十六夜や叩く人のうしろより
いさよひやいさよいと云果ぬうち
十六夜の闇をこほすや芋の露
いさよひの闇や恥かく人もあり
はつかりや通り過して聲はかり
初雁やならへて聞はをしい事
はつ雁や山へ配れは野に足らす
初雁や聲あるものを見失ひ

はつ雁や見捨た花を草の時
聞人の目の色狂ふ鶉かな
賣られても秋をわすれぬ鶉哉
縫物に針のこほるゝ鶉かな
車かと鳥もあやふむふたうかな
蘭の香に遊ふ日はなし菊の花
菊畑やけふ目に見ゆる足の跡
咲花をいくらか捨てけふのきく
菊咲て餘の香は草に戻りけり
白菊や紅さいた手のおそろしき
菊咲てけふまでの世話わすれけり
きく畑や花の行方は雲井まて
菊の香や茶に押合ふも此日より
朝〳〵の露にもはけす菊の花
菊畑や夢に彳む八日の夜
けふはかり見てすむものを菊の花
しら菊や寒いといふもいへるころ
けふに成て草臥おかし菊作り
今日のきく獨咲てはなかりけり
しら菊や日に咲うとはおもはれす
子とも手にかなふ盛りやきくの花

送別三章

日和〳〵道はすゝきの東まて
下冷を咲あたゝめよ道の草
見送るに目のはなされぬ花野哉
とう見ても春散種や草のはな
秋風のいふまゝになる尾花かな
草の戸や手にょこれたる花も咲
晩鐘に幾つか沈む尾花かな

畫贊

雉子のつま隠し置たる薄かな
桔梗の花咲時ホンと言さうな
川音の晝はもとりて花野かな

あいさつ

千秋を咲むすひてや草の庵
秋の野や花と成草ならぬ草
明てから蔦となりけり石燈籠
鶏頭やならへてものゝ干て有
鶏頭やまことの聲は根に遊ひ

剃髪の人

蘆と見て露にもぬれそ萩の花
木からものゝこほるゝ音や秋の風

行水にをのか影追ふ蜻蛉かな
虫の音に心も置す降夜かな
脱捨の笠着て啼やきり〳〵す
蟲の音や野におさまりて庭の内
名月や人に押合ふ鳥の影
明月や雪間につもる水の音
名月やよしのゝ葉にも咲あまり
名月や行ても〳〵よその空
明月やはつかしの森いかはかり
明月や白きにも似す水の音
晩鐘の耳失ふやけふの月
名月や眼に置なから遠歩行

畫贊

きぬ〳〵は月にもありて明をしみ
名月や手届きならは何とせむ
何着てもうつくしうなる月見かな
明月や鳥も寐くらの戸をさゝす
月見にも陰ほしかるや女子達
名月や闇を尋ぬる鳥もあり
月の夜や石を出て啼きり〳〵す
人中を潜る欲なき月見哉

その中に唯の雲あり初時雨
水音の背の高う成時雨かな
松風のぬけて行たるしくれかな
此うへは白きものとてしくれけり
初しくれ風もぬれすに通りけり
また鹿の迷ふ道なり初しくれ
京へ出て目にたつ雲や初時雨
九重の人も見え透しくれかな
田はもとの地に落付や初しくれ

畫賛

仰向て見る人もなきしくれかな
きのふけふあしたは只のしくれ哉
みよし野はよその春ほと歸り花
春の夜の夢見て咲や歸花
明ほのも暮の姿やかへりはな
寐た草の馴染はつかし歸り花
咲〱も果はうそなりかへり花
見るうちに月の影減る落葉哉
落葉まて風の物とや持歩行
水のうへに置霜流す落葉かな

寒山の賛

降り〱わからぬものは落葉かな
冬枯やひとり牡丹のあたゝまり
鷺の雪降さためなき枯野かな
いろ〱を石に仕あけてかれのかな

決定心

根は切て極樂にあり枯尾はな

安心

ともかくも風にまかせてかれ尾花
枯野行人や少さう見ゆるまて
道くさの草にはおもし大根引
降ものに根をそゝきたる蕪哉
手のちからそゆる根はなしかふら引
こからしやすくに落付水の月
似た事の三つ四つはなし小六月
待暮も曙もなき紙衣かな

尼になりし時

髪を結ふ手の隙明て巨燵かな
こほれては風拾ひ行千鳥哉
三つ五つまてはよみたる鵆かな
池の雪鴨やあそへと明て有
花にとは願はす雪のみそさゝゐ

影坊も出ては隠るゝ後の月
ゑかられた畑も踏よし後の月
後の月はしめてせはきいろりかな
とり殘す梨のやもめやのちの月
たち盡すものはかゝしそ後の月
山彦は宵に戻るやのちの月
夕顔の身は持にくし秋のかせ

三界唯心

百生や蔓一すしのこゝろより
約束を何〳〵持や種ふくへ

一瓢庵にて

九十九をよそに持たるふくへかな
花や葉に恥しいほと長瓢
行秋の聲も出るやふくへから
木陰から出て日の暮る紅葉哉
ゆふくれを餘所に預けて紅葉哉
折〳〵は霧にもあまるもみちかな
色に出て竹も狂ふや蔦紅葉

餞別

闇からぬ空はともあれはつ紅葉
水の色赤うなりてや鹿の聲

夕くれを引あつめてそ鹿の聲
獨きく我にはほしき鹿の聲
音添うて雨にしつまる礎かな
冬瓜の枕さたむるかゝしかな
風の日は餘所の仕事を鳴子哉

追善

鳴たつやよそのわかれに暮まさり

遠忌

百とせのその日も鳴のゆふへあり
ゆく秋や持て來た風は置なから

山代の温泉にて

温泉の山や秋の夕べはよその事
行秋やひとり身をもむ松の聲

冬

降さしてまた幾所か初しくれ
柳にも栗みしかしはつしくれ
日の脚に追はるゝ雲やはつ時雨

行としやもとかしきもの水斗
閏月のそのめも見えす年のくれ
朝起もひとつに年はくれに鳧
行としや連たつものは何と何
としの尾や柳に青う結ひゆく
としのうちの春やたしかに水の音
年のうちの春やしらすに行もあり
着よこしたなりに春とやとしの内
十のもの幾つの春そ年の内
春めかぬ詞つかひやとしのうち
おもひ出したやうな春なり年の内

追加

うくひすにとらはや庵の風ふせき
着てたては夜の衾もなかりけり
影法師の横になりたる火燵かな
しら粥の茶碗くまなし初日影
酒賣のもとりは樽に野梅かな
子規たしかに峯の早松茸

とゝ川の春やくれ行葭の中
船待の笠にためたる落葉かな
月代やしくれの中の虫の聲
粟津野や山から京のほとゝきす

荊口尋られしに

名月の前へ廻るや旅まくら

賀助然于山彦撰集

月花やよきこたへある里の山
落鮎の日に〱水の恐ろしき
根をつけしをな子のよくやすみれ草
動かして見れと竹にも暑かな
晴てからおもひ付けり初しくれ



吹たひにあたらしうなる千とり哉
山彦の口まねぬ寒きからすかな
拂はぬはをのか羽とや雪の鷺
鳥影も葉に見て淋し冬の月
夏の夜のちきりおそろし橋の霜
水にうくものとは見えぬ霰かな
朝の日の裾にとゝかぬ寒さかな
水仙の香やこほれても雪の上
水仙は香をなかめけり今朝の雪
水仙は名さへつめたう覺えけり
冬の梅咲やむかしのあたゝまり
折〳〵の日のあし跡や冬のむめ
はつ雪や見るうちに茶の花は花
聲なくは鷺うしなはむ今朝の雪
初雪や鴉の色の狂ふほと
はつ雪やほむる詞もきのふけふ
初ゆきや落葉拾へは穴かあく
はつ雪や麥の葉先を仕廻かね
はつ雪は朝寐に東見せにけり
はつゆきや子供の持て歩行ほと
初雪や水へもわけす橋の上

はつ雪や降おそろしう水の上
初ゆきや凬のねふりのさむるまて
はつ雪や根の付さうな竹の間
はつ雪は松の東に殘りけり
そつと來る物に氣つくや竹の雪
しなわねはならぬ浮世や竹の雪
吹事をわすれて見るや竹の雪
青き葉の目にたつ比や竹のゆき
花となり東となるやけさの雪
雪の有ものにきかすな松の聲
つめたさは目の外とにあり今朝の雪
手をうちていやそちてなし竹の雪

あいさつ

取あへす塵に敷けりけさの雪

五百回御忌東御門跡へ上る

葉も塵もひとつ臺や雪の花
山彦をつれて歩行や鉢たゝき
鉢たゝき夜毎に竹を起しける
臘八や流るゝ水も物いはす
けふはかり背高からはや煤拂
散事を待とはおかし餅の花

花讃女句集叙

喜莫喜於生。悲莫悲於死。而有生則有死。有死則有生。何必悲。又何必喜。々乎悲乎。生乎死乎。恍然一大夢場耳。今且以非夢之夢。圍夢之非夢。有死而死者。有死而不死者。其死而不死者。非容貌尚可見。聲音猶可聞之謂也。其志之優。彼稱之。其言之芳。此美之。可傳於不朽遺於後世者。是耳。苟爲人者。飽食暖衣。無一事可取。齡頽體罷。溘焉斃者。是死而死者。與犬馬何異。豈不亦悲乎。友人横山萬舊妻。古川氏。諱本公。婉容貞順。箕箒之暇。好作片歌。裁蜀錦於春花。磨隨珠於秋月。天趣高朗。鏘然作金玉之聲。人皆稱之美之。今茲文政庚寅七月念四。以疾卒。年僅二十三。顧人情之所鍾。炊臼之夢。鼓盆之感。其誰無憾。萬舊竊謀採亡妻之詠若干首。以合騷士追悼之章。刻以傳於不朽。嗟呼本公雖既死。比之彼飽食暖衣死而死者。則其志之優。其言之芳。宛然在焉。謂之容貌尚可見。聲音猶可聞。亦可。所謂死而不死者非邪。死々生々。連環無端。夢之非夢。亦奚疑。今也剞劂竣工。來問序於余。々乃書此言以還之。

庚寅臘月初五　　荆山居士璞

百なりの蔓、百世の後はひこりわたるは、一すしの心根のいさほし、末なかく柾のかつらに等しかるべし。今や馬の口とる男の子、蠶飼ふ賤の女か、茶のみはなしにも、千代尼の句〳〵をもてはやして、おのつから喜怒哀樂の示しともなりぬ。まして此道を好る、をさな童のふところ紙に入れ安からんと、こたひ半居か小册に物せしも、萬世其德をかゝけるの類ひならん歟。

加陽槐庵六世　大夢坊

嘉永己酉初秋

やあさかの沼の、かつみすへき人もあらねと、只手習ふすさひになむありける。されは珊はさけ、玉はくたけやすく、この水無月のはしめ、こゝちやましうなんと聞えけるに、なにさまくらのおもく〳〵しうなりて、棚はたの宵もすき、みそはきの露ことしけき、玉祭ころもまつはゆゑなかりしか、野分のかせのあら〳〵しくふきまさりて、いかなるあしたにかありけん、二十とせあまりみつのその日を一期となして、やかて空せみのこゑなきものとはなりにけり。あるしそれか反古とも書あつめて、物せんと聞えしを、もらひなきの春山か、つく〳〵ほうしの薄羽をりに飛はしりて、したしきむつましき人らの、おりふしの句共ひきあつめつゝ、さくら木にうつし、かものなくうみの子、うみのまこのみるめをしのふたよりにもと、つけおこしぬる、それかかへしことに、ひか〳〵しきひとふしをかいつけおくるといふ。

さるみの老人

文政十三年冬

如雪漁夫書

あやたすきあやしきまてに、をりなしたるからにしきのからうたは、こと國にもまたなくめて興するわさになん。あか大やまとは、もとよりめもしのかしこき御國ぶりにして、あやしき文とものおほかる中に、非有非空ののりのみち／＼しきを、山とりの長／＼しきふみに書なしたるは、誰かは並ふへきさえもあらさりけらし。されは人はかたちこゝろより、さえあるかたこそめやすけれ、とまうされし人もあれはにや、つき／＼の世にも、かれくれきこえたるふみ人またすくなしとせす。しなくたりて、ひな／＼しき女のかきほのかけより、やまふきの一重ににほひいて、はせを葉のひろこれる雫のもとにも、あさかほのつるのひとすちを、さくりしもあんなりけり。友ちとり萬舊のつまを花讃といふ、かそいろのゆるしてより、これか家さまをおさめて、きり／＼すつゝれさすゆふへまてに、夜寒のともし火にむかひ、窓の竹のおきふしにつけ、庭の小萩のたちゐによせても、したかふの道もはらに、河柳のいともしつやかにそひなして、すてに／＼なてし子のみもとまて生出ぬる、その茂りさかゆくさき／＼をさへ、ねきて露もいとまなきわさなりなから、なさけを花鳥にかよはし、心を草はにくたきて、つくり出せるはいかいの句さく、ふた卷みまきにあまれりとなん。こ

山寺の馳走ふりなるきの芽哉
木々のめをゆふへの雨か育てしや
木天蓼は何のくすりそ猫の戀
稚子の目はやき土筆夥し
春の旅も朝はせはしき雉の聲
早蕨のまねき出したる原の富士
雀子の徙うつりすや晝時分
道連にならんと蝶も羽袖かな
手折たる草にもてふのたはれけり
蝶々の霞ませに來る廣野かな
綿うちか日向にちるや白つはき
大津繪に出てもたせん赤椿
麥搗の日に／＼落す椿かな
芹の根に顔出して行かはつ哉
鳴田螺我も月夜はうれしいか
愚にも世は渡りけりたにし賣
燕に見すかされたるかすゝかな
せはしくも家は忘れぬ乙鳥哉
春の日や眠い顔なる賣卜者
年寄た心は見えぬはるひ哉
はるの日を彫かけてあり小紋形

春雨や濡ても見たき旅心
のとかさや橋からみゆる不二の山
あくひする間を草に入雲雀哉
飴うりの空に隙なし紙鳶

みちとせてふ桃の節句も
ことしはをとめかためにと
て我ふるきをもとり出けれ
は

叱られた昔なつかし雛の鼻
椿ちつてこけかゝりけり紙ひいな
是ほとの月夜もほしや雛の棚
蛤の口から出たか三日の月
めき／＼と馬のそたつや桃の花
機たてぬ家とてはなし桃の花
汐干狩子供にひろひ勝れけり
振袖の脛を見てやる汐干哉
花盛己かちらしてひと景色
夜の花戀も思はぬこゝろから

角田川に遊ひてかへるさ花
のもとに樽を枕にせるはへ
りけるにかの羅浮山の師雄

花讃女句集

春の部

萬歳の齒固に夜は明にけり

父君にかはりて家〳〵にことほき申させんとうなゐ子に上下うち着せ出させ侍るとて

元日や讓らぬものは年はかり

けさ春の小路ひろくそおもひつる

聞ものはみな産聲そ明の春

我も春にあはゝやと鏡に向ひし嫗にたはむれて

若やくや老か白髮も花の春

けふは寒い空と思はすきそはしめ

來る度にさかぬそ梅の花なれや

扇をる家は靜かようめの花

おとなへは法師のそきぬ梅の窓

蓑虫も春にはなりぬ梅のはな

きのふまて枯た柳にわか葉哉

をりふしは睡る柳そ土につく

しつかさの見ゆや湖水に青柳に

此ところの鶯ちかし藪屋敷

うくひすや法事過なる寺の庭

長かけの先から見ゆれ春の風

はるかせのあいてや殘る削かけ

摺箔の小袖にふけや春の風

不破の關倒れかゝりし霞哉

事たらぬ家たけ嬉しうとの味

海苔の香や食好みなる老法師

佛にも備へさうなる白魚かな

宵の春梅もたぬ家の奇楠や薫

近くなる臺子の音やはるの月

埋み火にとめ木薫るやおほろ月

朧〳〵其夜をのりのつくならん

澤山に松の花見ん玉つしま

朝起は耳にもくすり郭公
さん橋はぬれてすへるそ時鳥
ほとゝきす啼や薬蘭に打ひゝけ
灯の空の間もなしほとゝきす
空は目にあはぬ眼鏡や蜀魂
山寺の僧耳うとし郭公
時鳥庵も客あるこゝろかな
初そらのうらの夜明か時鳥
盗ひとの出て行跡やほとゝきす
月のうへにまた都あり子規
　冬のたかんな春の茄子あな
　慢勝な人の心や
曉や夢に啼てもほとゝきす
片足は駕籠て聞けり郭公
　けふは老人にみかたして
明はやし耳は老ても郭公
一本は相撲へ足らすはつ鰹
我家の見かへて逢ふ若葉哉
物言ふた地藏にとへと閑子鳥
　市中の住居のいとかしまし
　くて

鳥にも鳴てきかせよかんことり
花といへはこそ風もあれけし坊主
けしはかりちると思ふは面白き
實櫻や人馴て來る寺の猿
麥秋や櫛さへもたぬ一在所
飼猫もうゑた聲なり麥の秋
念佛のうしろにわかす新茶哉
稚遊ふほとにちりけり宵のかや
家うれし月か動かす蚊屋の裾
かやり火によく見てやりつ姉の顔
繼〳〵も袖の香淸し菖蒲賣
蓑笠の姿もうれや菖蒲の日
鎧きぬ世の中のこそ聟粽
笹粽それにも狆は吼るなり
三味線はしらぬ里にも田うた哉
早乙女の憎けは見えぬ鷹田かな
御田扇みやこの土産にもらひけり
みしか夜の顔か見ゆるそふつか醉
しほりしては又さみたれつものゝ本
蜘の圍にひまこそ見ゆれ五月雨
　かねてぬかひしとのむなし

か事を思ひ出て此人や向ふの廓中に榮花の夢や見るらんと我夫のわらひ給ひしけに朧の夕月夜ゆかしく蛙のうたも風情ありておかし

梅てさへ女に化ヶぬゆふさくら
借着せぬ果報はこよひ櫻かな
脇さしはけふもさゝぬか花さかり
つい戻るこゝろて出たを夕櫻
一夜さは花には喰もしてみたい
椎の實も五升うれてや花盛
降につけ吹につけ動く花こゝろ
有明の月にならんてさくら哉
管弦の灯のはしりこむ櫻哉
小原女に賣せて見たし扱ひ鮎
無事なるを尊しとせよ花大根
飛〱にすみれ咲けり筒井つゝ
山吹や垣をくゝれはつねの水
やま吹に流を付る日頃かな
朝〱のあかね移して藤の花
行や春其角か奴寐てゐても

世の中にたつさはる身のいたつらに過る月日のみ多くて

存分にいつ花はみん暮の春

夏の部

花の時の帶のひろさや衣かへ
卯の花の白うさくとて袷着る
月の夜をこつそり散や花卯木
うの花やまたうら若き尼か菴
牡丹咲てあたりに草はなかりけり
さくや牡丹ちるへきさまはなかり鳧
掌に月もかくすや白ほたん
かきつはた切らんと捜す葉の茂
待人のみゝへ入らぬかほとゝきす
声は〱とこたまもそうや子規

老のいさめの身にしみ侍りて

椋の著莪もぬれた色なり夏の月
雪の山と見てもあつさよ雲のみね
伽羅たけは又物好の蠅か來る
雨になる雲をつくるかところてん

市中

鮎なるゝ間を見る程よ庭の月
山姥のやまめぐりする清水哉
蓮の葉にふくよき舍利を乘てみし
晝顔や西瓜のうへに咲てゐる
ゆふ顔の盛をまうす念佛かな
夕顔に忍はせて置宵すから
涼風もたつや御秡の禰宜か袖

秋の部

そほ降てたしかに秋の來りけり
一葉ちるや箒築ふきか庭に先ッ
星合やきぬたに合す唄もあれ
野に露もおき初る夜かほし祭

八日たつ秋のこゝろやわかれ星
工み過て秋のはなれし灯籠哉
玉棚やみな露くさき物はかり

世わたる業のさま／＼なる中に年頃よりか枴かけたる男の精靈の迎とか聲おかしく呼ありくそを招て玉祭せしあやしの具ともひとつになしてかれにあたふる亡たま送るとゝなへつゝ捨るかこときいつれをとわきかねたる志はさの今さらにあさましくこそ

露の世は包て志らし眞菰苞
いつも春のこゝろなるへし鬬相撲
負角力ことに目たつや橋のうへ
躍子や乳母かこゝろのなんはん手
秋の闇おとり過行町はつれ
蟬丸か菴や膝にも露のおく

父は汝をにくむにあらず母は汝を疎に非すと祖翁の曰

からてやんとなき君の御ッ
前に出つへきのみゆるしを
うけて
五月晴世は廣くこそ思ひけり
白百合やひろい御寺のうしろ畑
餘の花はみな日の中そゆりの花
丹頂の七日下りや青たつら
汚れたる月夜にしたり鳴水鷄
闇のやみに包む螢をはつと放す
きさいの宮にてむたりの呼
女たちを垣間見しつる男の
心いかゝありけん
むれよ螢物云ふ顔の見ゆるほと
念佛の鉦に角かくすかたつふり
宵柏かうしは伊達あり蝸牛
鵜遣が妻もつまなりちらし髪
殘り枝のいよ／＼重し蟬の聲
せみ啼や脂の流るゝ呪詛釘
暑日や女の罪の鐵漿匂ふ
なま道心のおほつかなさを
髮剃てみても浮世はあつさ哉

暑日やしふいかほなる辻羅漢
かんさしよ櫛よさて世は暑いこと
女のもの書ふりいとにくし
ましてや我うしきかいふへ
きこともなく蚯蚓かきせん
罪ふかしといなむを筆もち
そへてゆるさゞれは
墨つけてあたら扇を暑うせし
わいへんは戶張帳はあらす
もよき風は合壁にたてこま
れたり
催馬樂の拍子に暑きあふき哉
色／＼の風を擔けぬうちは賣
子は寐ても手の休らぬ團扇哉
さゝ波や志賀の暑をすゝき捨
すゝしさや兎の消し竹生島
子を寐せた間をぬけて出て涼み哉
うちを守れと殘されてしの
ひかねつゝわつかに水うた
せて
草に露こしらへ物もすゝしいそ

鴫立や傘着て出たる夕月夜
蜻蛉や稼の日なりし川番所
雁啼や雨に市たつ八百屋物
きのふから雁待つけし海の音
椋鳥や夜も白川の關のうへ

小町のゑに

ちりきはは芥子似すとも鷄頭花
曳切て待月遲し鳴子なは
寐そびれてひと夜砧の相拍子
うつ手には哀さもなしさよきぬた

あなむざんや弓箭取身は何やらんと熊谷も心弱くそ思ける

笠取れは坊主あたまのかゝし哉
尉と姥は捨て置ても菊の花
赤菊のゆふへ淋しくゑたりけり

彭祖ものちはいかゝ有けん

生延て蝶何になるきくの花
菊の主物たくはへのなき人そ

菊は花の隱逸なる物とや

つくり菊世はむつかしと菊もみん
尾花さへ更た顏なり十三夜
更行や後の月白く竹青く
ゆら／＼と夕日もて行紅葉かな
むら栬これをも冬は踏事か
椎の實や子供好なる寺おとこ
見にゆけは鐘つきはてつ秋の暮

越人を先達にして

秋の昏ひさこの中に這入はや
かんこ鳥の子に癌ありて啄木鳥
秋寒し舟にかふさる星の數
旅籠屋の枕きたなき夜寒哉
行秋や赤く候とて唐からし

杉本氏の癖は志らぬと酒は愁の玉箒とや

暮の秋左兵衛は笑ひ上戸なり

冬の部

三日月は空の横かも初しくれ

し實に親心のいかゝ有けん
稲つまに又見歸るや子の寐顔
いなつまに打かふせたる投網かな
朝顔の葉うらに闇の殘りけり
あさかほのめてたき霧の色かな
身しまひの内を蕣さきにけり
蕣もちるといふ名はもたさりし
闇ならよかろとは伊丹の翁
か花のゝ深せつ我もたしな
き露を大事に
萩茂る庭に勝手のちかひけり
蓬生は人にゆつりてけふの月
けふの月千里の外に遊ふなり
月今宵更る夜とも只しらす
名月や鯛も鰹もなまくさし
海ちかき山も持けりけふの月
我菴や戸さして寐ても月の中
草花の長と呼ふ家か秋の月
深川に遊びて
水舟は誰に賣とて月もくむ
招かはや普請功者の月の友

蟹うりも心のとけく月や見る
けふの月約束過て雨にせし
忍ふそ戀の面白みなるへし
十六宿やたしなき闇を戀こゝろ
刈萱はあまり艶なし花すゝき
どう見ても薄にかへん花もなし
月の入るへき山もなし
武藏野は空につかゆるすゝき哉
詫しきもたのしきも有り蟲の聲
虫の世とまうすなるへし廿日過
秋風や葉にすかりたる蟬の殼
西行も思たらすとこそ悔み
侍らめ
鳥よけの繩はきれたりあきの風
露の間の朝顔も朝な〳〵に
咲かへては盛久しと詠もす
へし
摺子木も五寸へりけり秋のかせ
鴫たつて合歡もそよ〳〵動きけり
夕くれの空くもらせて鴫のたつ
堂守の鉦やひゝきて志きの立

待つゝ道〳〵の寒さを思ふ
冬の月心てあるくあすこゝ
籠らはやふたつまて鍋持し冬
狩人の身のなるはてか網代守
なく千鳥傘のせんなき夜雨哉
大汐や耳をこすりて啼衛
鳴衛寐た子にかける夜着重し
鴨もこの風は寒いかしろかゆる
とゑ〳〵と鴨たつ六つの御太鼓や
冬も離あらはかさらん池の鴛鴦
水鳥や焚木にかゆるさらし臼

狐の女に化たる圖に

池の氷あはせ鏡の月夜かな
馬にさへ年はよるもの稽のやと
髮洗ふ事はまらすよほた明り
大津繪に赤い花なし桐火桶
夫婦別ありて火燵のはしら哉

ふとん着てねたる姿やといふ句にすかりて

北嵯峨の山もかふるか紙衾
うとかりし隣のちかき枯野哉

煤掃やとの鋪針は誰か夏
知る人の君になきこそ市てあれ
春を待身は立よらし鏡山
さら梅とこそ化すならめ納札
よき人の淋しかられつとしの昏
もう春か除夜も芽獨活の匂ふ家
紙子着た人もうき世の大晦日

追悼之俳諧

蓬もさひしひともと芭そよ〳〵と　花讃（亡人）
われと見かへる露の吾袖　萬舊
月窓諦吹とる涙あれて　民玉
鍋の鑄かたの砂かこほるゝ　萬里
鳥のたつ榎は寒く立くらし　簑笠
頭巾の角に日の薄うさす　玉
たゝ無我に魚くふ聖おわすなり　舊

松の木にひつゝいてゐるしくれ哉
家根葺か宿も時雨の軒端哉
はつ冬や上手になりし小鍋立
赤菊のちいさく殘る小はるかな
芭蕉忌や筒にさしたるあすならふ
くつは屋の袴おかしやゑひす講
自剃する尼か小庭やかへりはな
山茶花や貰人もなくくれもせす
餘の花はやはりちいさし冬牡丹
寒ぎくや冬の日和か葉に見ゆる
寒菊や障子こしなる釜のにえ
木枯の吹出したりな井戸ひとつ
凩に歌舞妓見る夢をさまされし
顔みせやとゝにもひらく冬ぼたん
帶解は浮世の花香のつぼみ哉
秣やれは馬のふき出す落葉哉
頭巾着ぬひるは寢し鉢たゝき
みな老とおもふ夜更や鉢叩
置霜や戀せし鹿のいかに寐る
初ゆきは譽たはおりてしまひけり
霜ほとな雪に出たつやみのと笠

松風おとつるゝゆふへ沾聞ゆる夜更とにかく例の宵まとひをわらはれなからもまた
納豆賣の聲も寐耳や雪の朝
捨られたかゝしも友や雪の道
むつましき友を得て
あちらてはまた我を見ん雪の人
北國のさまを聞侍りて
大雪や死なすゐるそと思ふのみ
雪うれし君の御目覺うるはしき
水仙や姉もなく兄もなし
終に下女か手をのかれたるなまこ哉
一休の買てゆかれし海鼠哉
酒のめと我をしかるか河豚の顔
大根引はたけの冬を深うせし
いかに寒き五條わたりの冬の門
寒夜や行灯にさす針の音
尼寺の門番さむき男かな
寐勝手の又かたかゆるさむさ哉
夫の歸をともし火のもとに

片枝のあないたましや野分松　市龍
しら露やむすふ千草にさゝまらす　秋武
菊の花しら露はかり殘るとは　橘才
百日紅散た木すゑに秋やたつ　三交
とりとめぬ秋のすさみや鉦のおと　柳蛙
桐、一葉落て寂しやあきの庭　低花
此塚に汝もなくかむしの聲　櫻里
明月や何を申すも秋の空　晴雨
鳴たつや油さしても佛の灯　青龜
むさんやな菊吹折れて袖の露　秋丸
なき人の事言出して夜寒哉　雲雨
鴫啼や西山にたつ夕けむり　里山
蓮の葉のそれか姿か露の玉　専交
夕暮の鐘はいかにも菊のはな　一翁
其旅のとまり／＼か木ふるり　酒好
朝顔のしほめは老のなみた哉　古文
朧露やたよはき蝶の羽にこほれ　三光
ひとり行野するの友か女郎花　女盥思
面影は菊のかけなり秋のてふ　得之
たはむ葉や心つくしの露もちる　秋利
あゝさことそ憂るからへを水の月　一橋

鳴入た跡は泪かくつはむし　扇里
一筋は萩の路なり墓もうて　赤心
誰か泣た手向なるらん墓の露　梅里
十六夜やひとり欠たる月の友　竹嶋
思ひ出して梢に鳴か秋の蟬　山住
聞てさへ撞のはいかに秋の鐘　如松
世をかへて行道／＼のゝきく哉　南蝶
其音の聞はさひしや秋の風　高堂
白菊に世を見果しか塚の主　花伯
散にけり縁も夢の風見草　露月
見つくせは白露いとゝ志ろうみゆ　ゆき秀
桐ひとは空には風なありとこそ　彈琴
秋のてふ西日にすかる哀なり　龜峰
草に一夜やどれる露もありと聞　知麿
初雁やたしなき聲を送り雨　尼琴笑
おる度に袖ぬるゝなり野渡の萩　秋守
たよ／＼と風に押れつ秋のてふ　柳雨
白萩やこほれて折て露の種　惟通
化野や見餘る秋を露におく　在止
露の身に着るとは縫はす秋袷　汝柳
放されて飼馬ふけつ月の前　さい馨

二階を居間に口をつけかへ　笠里
世は花と髮ゆひ直すおり〳〵に　里
蝶を追こむ戀の手かゝり　舊
雲雀鳴御嶽とやらか見えかすみ　玉
よなけるこかぬ水のさはしり　里
婆々は餅爺は闕守る掛もちに　笠
たちはな匂ふ月のいるかた　玉
笛になる此竹もまた氣にあはす　舊
となりと醉うてねたり起たり　笠
年取のまめに御無事に生延ん　里
それも涙の千とりなきよる　執筆

右一折

表手におつるなみたのみちのくや
　歸らぬ人をしのふもちすり　尼 智淨
おほかたのなかめせしかとこの秋の
　夕くれはかりそてやくたしゝ　水通
雨風に手をあてなからちる柳　僕 簑笠
烏瓜は何になれとや竹かれつ　同 其影
散や一葉小草に露のふりかゝる　其笑
花のはら手向かなくは女郎花　其逸
聞ほとの音みなさひし秋の風　員根

草の先大事な露はこほれけり　其水
夜の嵐むしにも秋のせまりつる　蔦秀
淋しさの身にしむ朝や我袖も　春山

うき世をのかるゝよきひんなりけりと心さためしもいはけなき子らにまつはれ侍りけれはいひかひなくもおもひはたさてよのちりにましはる事とはなりぬ

なけかしな秋とても又夢なれは　蔦舊

悼おの〳〵前書略

秋のゝにきゆるもおくもしら露の
　ともになみたのたねと成けん　直麿
散ほとの風もきかぬに濱萩　靑阿
靑雲にかくれてしまふ萩薄　北元
世の中そ野山の色もかきりあり　里丸
そへ竹の朽て花しや雨の菊　さいか
香は菊にゆつりて蘭の花ちりぬ　松杜
手向んと花つむそれも袖のつゆ　杏花坊
夢ならはさめもしやうに秋のくれ　千英
雲にいる月やほろりと散やなき　杉二

散るや萩垣にも秋はとまらぬか　保立

定なきよの定なりとか　招く尾花の袖も
かひなき　露のやとりと思ひなからも
虫さへ秋をかれ〳〵に啼　梅里

萬舊ぬしうせし妻の言葉草
さくら木にものし給ふと聞
て其心のせちなるてとおも
ひとり侍りて
なき人をしのふ袂やいかならん
きく我さへそぬるゝとちなる　寛芳

をくれゐて翅そ志ほる友づるの
齢は千代とおもひなれしを　務米子

澁柿の甘くもならす秋の行　翠腊
枯尾花さくらの人のいかに居る　蛟睫
すこ〳〵と鶉の越て行かれ野哉　桃秀
山もとや小松ましりの花すゝき　古山子
おくり火の跡や月夜も闇にする　竹種
後の月きぬたに冷る膝かしら　山樹
色〳〵の心おほえや青ふくへ　藤亭

平家物かたりをよむ
もろき世の夢も紙衣も破れけり　民玉

小善根福徳因縁
極らくの果報寐てまつ十夜かな　萬里



取あへす墨にもすりてきくの露　欣輔
余所の事とおもはし露の袂にも　風窓
不意と聞音の身にしむ霜夜哉　淇夕
音信のいつか時雨となりにけり　蘭園
花ちらはみなかるかやになりぬへし、　萬里
文月や蝿よけに見ゆる草の雨　民玉
秋は行に恥かき道具へりもせす　寥松
ほとゝきす聲にわかれて飛さりぬ　鶯笠
塞翁も目のさめた夜か一葉ちる　護物
朝露の散るや桔梗のさくはつみ　一溪
ひとりは寐ふたりねはては月と我　仙瓢
名月の嵐は風てなかりけり　抱儀
鐘の聲へたゝる里の秋さひし　萬賀
轉かして見も淋しやきぬた槌　渉水
寒梅や朝はかふさる井の烟　風葉
月の雲ときの月夜や花芙蓉　牛舩子
松の月むしにあつける灯かな　淇雪子
楢かしは時雨聞夜となりにけり　みなと
落る日を見なくす木々の時雨哉　舩露
手向しやはかまのまゝの水仙花　月桂
世はさため有もの花に陸のなき　茶舍

朝雨のほつとはれたる椿かな　猨簑
うつくしき夫婦中なりとくさ刈　如雪
南天のひともと有りて冬の家　禾葉
松ひとは散れは動て夏の海　杉露
山茶花や虻はなほ／＼餌になる　山松
島陰や一あしつゝに白魚の灯　丈阿
朧夜とおもへはさむる舟の夢　月菴
目をとちて居てもあかるき櫻哉　聞和
ぬすまれたやうに花ちる宵の雨　竹和
散はてた跡も柳のしなひ哉　萬器

ことしも又死そこなうて

ほん／＼と虻の出たかるせうしかな　雨塘

心葩全き貞婦花讃の早世もおもへはいかなる前世の契りにやそれもよの中是もよの中草子の心押はかり春山法師か追福の集いとなむと聞ておのれ筆に花はなくとも硯の水をそのまゝに手向けて、

此花のこの香もとゝけ淨土迄　古友

多代女句集巻之上

春

春たつやわらひ催すひかし山
初空やほのかなからも柱かけ
向ひなは薬にならむ初日の出
むきあうて時うつしけり初日かけ
まつこゝろあれはそ耳にはつ烏
賑はしき釣瓶つかひや明の春

家内打つとひて

譯もないものゝこゝろははなの春
早ひと日寐こゝろまてか花のはる

渦(ウツ)峰の古城蹟を東にかまへ
たれば

朝日よき峰にむかひの宿の春
灯ともすもわするゝまてやしめ飾
通用の門かさいはい恵方かな

門松や濡る出入も幾むかし
花やかに年は寄たし飾蝦
あまりあれは人にも遣りぬとそふくろ
書そめやこゝろの外に手のかゝむ
折／＼は乳母もあしらふ手まりかな
遣り羽子に情き男の手出し哉
買なからしのふところは懸想文
色に香に名も似合しや福寿草
小松よりまた引にくし畑せり
七草や数を合せに隣から
見る事をおもへ薺のすくり屑
土とめの杭の崩れやふきの塔
色見えて氷のしたの田芹かな
旅人のきせるさし出すとんど哉
夜はよるの人珍らしき朧月哉

日光山

合す手にしはし忘るゝ餘寒哉
凍とけや蟹乞つかふ叢のへり
雪解や蝶も來さうな障子かけ

多代女句集

序

我晴霞女史之於俳諧乎。天資也。以風月爲師。以花鳥爲友。遂窮蕉翁之奥旨。成名家。宜哉名馳于海内。人欣慕艶稱。因四方欵門者多矣。女史自以爲。猶未足焉。老而益勤之。今茲年七十八矣。自知人生之有限而吟詠之無限。乃著一册名曰晴霞句集。句皆清新俊逸。人々欲言而未能言。女史輙能言之。今也刻之傳于世。則誰不仰其風彩哉。女史此擧蓋期後榮也。女史者我女兒也。於我輩亦有餘榮。尤可嘉也。依賦一絕。其詩曰。一卷成編花與月。花香月影有餘清。風流好事晴霞氏。分華一門身後名。

癸丑初夏日　　東奥鏡沼隱士七十一翁

菊　畦　撰

高ふらぬ氣をやふ入のみやけかな
便船や藪入とまて氣のづかす
にくらしうなりけり猫の戀志りて
打とけた聲終きかすねこの戀
長〳〵と山の裾ひくかすみかな
かつを木に日あしのゝこる霞かな
ひと筋にかすみたらぬや離しま

御齋所の濱邊

木なかしの岩根つたひや朝かすみ
春かせや野はおしなへて去年の草
はる風や濵につまつく鶴の脛
炭とりの底をたゝくやはるのかせ
行くも來るも皆はる風の堤かな
貝踏の見ぬ間に殖て春のかせ
のとかさや晝めし喰に野へ出る

平潟にて

長閑さや來るもいそかす返る濵
植木屋の室まて見せる二月かな

三國にて

初午や夜るの手あての迎ひ舟
紙鳶に手のとゝきさうなり愛宕山

陽炎の膝にたちそふ床几かな
いとゆふやあら野つゝきの砂川原
門たてる尼もなかめつ春の月
はるの月あと戸も引す小唄かな

行德船中

雨の干ぬ羅のすき間やはるの月

家の巽の岡に草の戸をしつらひたるに松窓老人より晴霞の號を贈られけるとし

戸口たけ土間にさしけり春の月
年よりの出る夜となれはおほろかな
雉子鳴や道さまたけのはしら賣
隱くるゝもすはやき雉子や草の風
きしのこゑ抱子に袖をかさしけり
坂おりる氣先ゆるむや駒鳥の聲
日の落る山すれ〳〵や歸るかり
聲こほし〳〵雁ゆく雲間かな
ゆくかりや聲をのこして雲かくれ
春のかり笠着るうちに遠くなる

あやしの茶店に休らへは

つはくらの下に山うるはなし哉

塀こしに枯つる傳ふ雪解かな
是からは田に月のすむゆきけ哉
さし向る灯先くるふや風の梅
雪も降日も照りうめを匂はせる
匂ひのみした梅やかて月さしぬ
山里や梅をへたてる牆もなし
有明のはこひも遲し梅の花

　坂東太郎

川幅や目はとゝかねとうめの花
外からはみな花うらや垣の梅
籔過ておくれぬうめや枯かつら
我かけにものも言たし月の梅
道にして田の緣ゆけは月とうめ
うめ咲や十日はやくは注連かけん

　是非庵かひとり子の賀に鉢
植を送る

梅の花添てゆつらむわか齡

　家老四十二の賀
初老は人の壯なるものなり
萬の事務めてゆるかせにお
もふ事なかれ謹てゆるかせ
にする事なかれ

ぬきん出てさけよ梢のうめの花
續てはなけれと磯のやなきかな
柳あれは皆にたやうな小店哉
月かけの門にあまりし柳かな
精出して伸よと撫る柳かな
うつかりと人ゆき過る柳かな
根に雪の掃ためてあるつはき哉
片枝は藪をはつれてさくつはき
うくひすに奇特や鍬を置て聞
鶯や宿はともしを配るまて
うくひすのはひつて淺し篦竹藪
黃鳥の氣にも入たか束ね柴
鶯の潜つて見るや井のかさり
うくひすや莖たち摘を見おろして
黃鸝や風の寒さも飽ぬ聲
空にみち空にきゆるや御忌のかね
降ゆきも地に落つかす御忌の鐘

　古河驛を出てはしめて士峰
を望む

父母にあふたとゝちや不二の山

蝶鳥には疎まれかちなりけり
桃さくら雛見るこゝろ年よらす
行燈に替て更しぬ雛まつり
替らぬやむかしを今に草の餅
春雨や手のおよふたけ巻すたれ
はるさめや先へはぬれぬ鶯の聲
はる雨や海士は濡るゝを常なから
鐘つきの麁相か暮す春のあめ
よく寐たるあとも日永し旅もとり
轉ひ寐もつひ日の永きあまり哉
暮遅し居りつゝめれは草臥る
　老の身には覺束なかりしか
初花やおもひ途たる一安堵
はつ花やよりもつかれぬ瀧のうへ
はつ花やひと木のうちの晴曇
入かねて月もおわすかはなの上
一色に明てしはしや花と水
ひとつ脱こゝろしきりや花くもり
花の香や暮さたまりて一まとひ
うしろにはしにくし花をもる日影
　曉天
やゝあつこ雲はきれたり峰の花
はなの戸に脱もそろはぬ草履かな
小むしろに遣習ふ子や花の蔭
　むかしはものを思はさりけり
なまなかに花の見やうを覺えけり
歸くるやこふも花見の連らしき
　晴霞庵に人々を招きたるをり
風凪て皆花に醉良晝かな
　諏訪の社ちかく隱居したる
　老人雨考を訪ふに清民素幽
　なとも尋ね合されけれは
我のみとおもふに雨の花見かな
言あうて皆ひとつ着や花の蔭
ありてなきものは翌なり花さかり
　御殿山にのほる
花の中皐世わたりの烟かな
散はなをたゝも置ぬや江のうねり
花に月何處からもれて膝の上
ちる花に襟かきあはす夕へかな

かさす手の裏寒けれと揚ひばり
美しい空にはらりと雲雀かな
ひばりきくほかに物なし山の茶屋
膳時をおぼえて來るや雀の子
すゝめ子やかせをたよりに飛ためし
野に畑に日和ひろしと蝶の飛
畫船やさそはぬてふの附てくる
日のはれやいくたび來るも同し蝶
仕合な虻やつまんで放さるゝ
灯をひけば築山てなく蛙かな
草やまや雨のかはきを啼かはつ

安積山に遊ひくらして

なけ蛙芽はるかつみに取付て
はつ花の日をかぞへつゝ鮒鱠
馬刀突に付てまはるやちいさい子
足もとに見ておどろかぬ落し角
出代や胝かくす手の置ところ
出かはりや立派に時宜は述ながら
戯になさは罪さそ山をやく
やまま焼に夜かねにくいか池の鴛
奇麗さや打て退たる畑に雨

遊行柳にて

畑うちのけなけにしるや古歌一首
蝶鳥もよろこぶ日なりたねおろし
簑敷てむしり肴や種下し
接た木は昔花ものや隱居寺
見て置て猶ふ氣もなき接木かな
下園やところ／＼に鴫の糞
夫／＼に名もありけなりもゆる草
やかて伏そふりを見せす萩芽ふく

金英の芽しきも忘かたくて

悟らぬはことしも菊の根わけ哉
道草といふは是らか木爪のはな
疎な手に持そわするゝすみれかな
青麥や海のうへまてひとみどり
防風や暮てもこてに香のゝこる
高汐に見えすく芦の芽出し哉
有明の野すゑに白し春の水
日の入しあともゆるりとはるの海
歷ゝの手ぬるかりけり小鮎くみ
行やらてしばし開けり茶つみうた
家ふたつに孫ひとりつゝ持て

男手をまつて懸るや青すたれ
かさねるもわひし祭の鍋の數
見ぬうちは誠しからす鍋まつり
御佛に風も引さぬ產湯かな
灌佛の日も旅に居て餅のおと
夏こもりや貰ふた花も掴みさし
蝶の來て眠りをうつす夏書かな
直をしらぬにそ佛なれはつ鰹
はつ松魚ともおもはぬに貰ひけり
來合て膝を交へし新茶哉
おなし日に二度まて貰ふ新茶哉

鎌くら

旅籠に貝うりに來るや麥埃
小構や海棠の後若かへて
まれに來る人も氣長し若楓
開て來た窓さ〻直す新樹哉
しつとして昇る日を待牡丹かな
あふなしと見るまて開く牡丹哉
外にないやうに取なすぼたん哉

洲先にて

酔さめを花に吹る〻ぼたんかな

昇る日にふところあけて牡丹哉

腰越

みしか夜をあらそふ芥子の一重哉
ちる事をしらて日をし杜若
似た花のあれと賤しやかきつはた
朝酒はあるしひとりや燕子花
とりわけて夜明の花やかきつはた
人も此からみもちたし蓼の味
料理場の灯をあてに折花柚哉
門掃てさしてある戶や桐の花
風待や山梔子の花に立むかひ

竹馬追悼

口なしの花に過さる日數かな
留守の間も久しかく迄樹の茂り
小楚に俎板なほす茂り哉
明のこる船の灯かけや子規
空はまたおほろ離れす時鳥
深山木に庭の古ひやほとゝきす
ひとり居て證據なき夜そ杜宇
木移りになくや染井の郭公
小みしかく待夜も明てほとゝきす

花すこしちつて晴けり朝ぐもり
花にくれさくらに明て日は遲し

菊畦老人神路山をはしめと
してよし野をかけたる旅立
の餞別

指折てまたんかならす花のつと
揃へすに葉も出て淋し山櫻
見なからもみやうの足らぬ櫻かな
懐に入るは揃へて散るさくら
笋も出さうな藪や遲さくら
木樵より外に人なし遲さくら
桃のはな隣は酒の小うりかな

江持村遊佐氏を訪

連翹やふりも替らす垣の外
連翹や隣おもひの枝くはり
山ふきやむしろのうへの土細工
やま吹や鶺鴒の尾に散かゝり
はれかまし石壇なりに咲つゝし
餅店やつゝしさしたるふり釣瓶
沈丁香夜るもかくれぬ匂ひかな
水嵩に車はけしや藤の花

ついそなくよく寐て起て別れ霜
端ちかう椎の雨きく利茶かな
客ひとり得たりきゝ茶もよい時分
ゆく春や出ぐせしつめる朝の雨
たま〱に内珍らしや暮のはる
日も山にちかし翌なき春のそら
春をしむ人に出逢ぬうゑ木店
猶なかうおもふひと日や彌生盡

夏

彌生に閏ありけるとし

ひとつ脱ぬきしかけふは更衣
あらためて松風きゝぬころもかへ

老情

淺ましや十日後れてころもかへ
湯あかりや持向はれて着る袷
袷着てはしめて輕し我こゝろ

東都濡居

傘さしてよける道なし苗運ひ
雨の中聲まとまらす田植うた
あまさしと月を手元に田植哉
開る戸に寐覺ふかるゝ青田かな

朝比奈切通し

ちからたけ吹れてゆきぬ青あらし
さみたれやこほれて芽はる鳩の豆
有かひもなき棚はしや五月雨

那須の温泉に雨籠して

見わすれし獨活の葉伸や五月雨
窓先や麻に逢に五月晴
椽の塵掃て暮まつうちは哉
又ひとり腰かけに來る團扇哉
内に居て鳴呼かましさや白扇
追かけてひらいてわたす日傘哉
はれ／＼と鳴て土手越す水鷄哉
草臥てあとはおほえぬ水鷄かな
突つける火先や馴て鵜の進み
ゆけは來るほたるの道や蘭の戰き
ひくう來るほたるや椽のこほれ水
宵は待夜中はさひし飛螢

兎かくして見る目に涼し水すまし
それもたつき機へるやうに水馬
窓に月あるもしらぬか灯取虫
晝は終見たこともなし蛾虫
盃をとり遣る中や灯取むし
徒然や雨の浮巣にさし向ひ
今朝はまた花うりも來す蟬の聲
掃除すむ朔日はれや蟬のこゑ

向島鯉庵に遊ふ

せみの聲朝から簾ひと重かな
日をよけて雨の通るや蟬しくれ
雨に風猶燃すゝむ火くしかな
あはれ火くし見ましとすれと目にかゝ

繪島夜泊

休みなく浪の音して明やすき
みしか夜の閑に寐をしむ獨哉
短夜や雨水すんて有明る

旅にありて

明易き夜やこゝろ得て川手水
夏の夜やかねなき里の面白み
間口たけ捨水時やなつの月

淺草
賣れのこる市の庭木や杜宇
江のうへの闇はものかは不如歸

摺上川にて
早き瀬や影もうつさす蜀魂
花は目に殘りて耳にほとゝきす
横竪に奈須野は廣し時鳥

東都槇町僑居に雨塘一蕙讌
物の人々打よりて戀といふ
題を探りて
又こよひ嘘にせまいとほとゝきす
としましにきゝ憎からす閑呼鳥
あのか名の聲に似もして行々子
川蟬やきかても志るき昔いすかた
枝ならす風ふみしめて雨蛙
よき宿や蚤をわすれて一寐入
置まとふ蚊遣や風の吹かはり
手探りも四角に釣し蚊帳哉

福島客舍
膳引たあと掃出して蟵さはき
さしのほる日を屋根越の幟かな

小風ふくあやめなかめて朝たはこ
さや〳〵と粽のかせや床はしら

畫賛
あふき立てなりの止ぬや競馬
竹の子や地面ひろしと飛離れ
筍や木戸の志まりの內と外
竹植て寐こゝろを人に問れけり
竹うゑたまゝの端居や小宴
竹植や月も手つたふ樣にさす
あやまりてひと足ひくや菖の花
青梅やから茂る葉も友ちから
篠ふから急な下りや百合の花
路の中さし出かましや百合の花
散〳〵ていふせき屋根や栗の花
蠶ところの天氣祭や椎の花
紫陽花や雨たれはしく簀子椽
わたし守軒より高し花葵
油斷して裾縫るゝなはな茨
膳の出ぬ間を石菖に茶の薫
若竹や美人の素顏垣間見る
ひと釣瓶汲にぬるゝや合歡花

夕顔の奥に露けき灯かけ哉

ゆふかほや隣のなきを本意なかる

夕貌や賤しからさるひと搆

浮くさや雨になかれてかせに寄

打こしてひる顔さきぬ細なかれ

夏草や最そつとほしき通り雨

そほ降は雨とおもはぬなつ野哉

夏山や杖のひゝきも雲のうへ

なつ山や爪先にちる走り水

蓮をいたはりて

立かゝり丸薬こほすしみつかな

目志るしの櫻わすれぬ清水哉

遊女の畫に

髮かさりして窮屈な茅の輪かな

日の落る方をうしろに茅のは哉

をしいかな月なき宵を川社



町がらによつて賑はし夏の月
六月や泊りからすは山へ行
水無月や草木にもまつ此ゆふへ
水無月やけふも見くらす東山
うらやまし水無月志らぬ木蔭家
見ぬうちに人となる子や嘉祥喰
木のもともおなし暑やひとくさり
あつき日も絶す志たゝる岩間かな
炎天やのそけは庫裏に人も居す
日さかりや何處まて往ても瓦屋根
夕立や葎に雀木にからす
ゆふたちや蜑はのかれに又潜る

白華山

鐘の聲その中にあり雲の峯
腰かけて茶を乞暮や風かをる
うつすりと月は梢に風薫る
きゝなれぬ穴入の臭や竹むしろ
月の外まつものはなし簟
小さかしき女房や櫓に土用干
表具屋にひと日まかすや土用干

正田佛孫子母堂追悼

聞からにむなしき汗を握りけり
梅の枝に斧打かけて晝寐哉
おし明て夫婦別間に晝寐かな
涼しさとこゝらまてなり灯の細り
鉢植のすゝしや數の多からて
涼しさや木かくれ星のひとつより
洲に下りて涼しき鷺の歩みかな
涼しさや潜ては出るかいつふり
涼かせやしはしと枕引よせて
涼風やぬけてひろかるひとつ窓
涼かせや朝かほも手のほしさうに

我三府にといへるにはたかへて

眞中へねたれはすゝし背莚
はやう來て門も敲けぬ蓮見かな
龜の背にひとひらいるや蓮の花
灯をひけは明けてある夜や蓮の花
今すこし朝て置たし蓮の花

観魚亭このかみの許にて

膝に手をおくとき蓮の匂ひかな
曉やかたわれ月に蓮のはな

引おこす萩やしたにも咲後れ
寺めかてよい料理なり萩の花
横に寐てうけるや萩の運ひ凪

月寒かりしあした

夜のうちの手際や萩のみたれ咲
神事すむ里のいひきや花木槿

畫讃

古人この芭蕉に雨の夜もすから
名にめて丶植ても見しか藤はかま
ひと鉢の蘭の香をひく間數かな
見せたかるあるしの留守の芙蓉哉
黑塚や西日に凄き唐からし
慾のないもらひものなり唐からし
庵ふりや菊はつくらて蕃椒

竹畫讃

雨露の深きめくみや竹の春
蜻蛉の腹の見えすく籬かな
とんほうや一寸居るにもさりきらひ
日の弱る秋につるゝや蟬の聲
肘杖やひとりにをしき虫の聲
老にけり虫に寐ぬ夜の常になる

日のあるをわひる細音や草のむし
物かけや晝もむしなく瑞巖寺

飯坂溫泉

一坐敷とまりは起てきり／＼す
降雨の晝を夜にしてきり／＼す
消のこる行燈にしはしいとゝかな
蟷螂や秋を音になく意地もなし
いちらしう高飛するやあきのてふ

神前

ひくらしの猶凉しめる御庭かな
何となや日は暑けれと秋けしき
はゝき木に殘るあつさや賣屋敷
夜るはから有う筈なき殘暑かな
稲妻のゆきわたりけり峯の塔
いなつまや音もしさうに灘の上
あきかせのふくに雀の又さかる
木かくれに有明澄や秋のかせ
わすれては目にもかゝらぬうちは哉
知るひとになれはけなけや角力取
ちるを見て立とまりけり畑の露

沖の石にて

多代女句集巻之下

秋

立秋もこゝろへかほや植木賣
秋たつや親にまさりし今年竹
掃先へまはる蛙や今朝の秋
椽さきや相手なけれと今朝の秋
七夕や寐ところも過て笙の音
たなはたの夜もひとりなり別坐敷
七夕やかきりある夜の晴くもり
書あまるねかひや梶のうら表
梶の葉やさすかに姉は手にふれす
摺箔は時代ものかやかし小袖
草市や露をあたひの持重り
魂棚や手のとゝく子のうれしかり
よく風の這入る坐敷や玉まつり
迎火や軒もそろはぬ濱手前

棚經や入かはる間に又一人
棚經や供にも別に一ひねり
灯籠の數もあはれや餘所なから
軒につるあまりを松のとうろ哉
をとり子にかした釣瓶や行へなき
袖におく露ふりこほす踊かな

　小町の畵書たる京うちはに
　贊せよと望まれて

さそふ水あらは濯らん夕氣色
風過て灯も立られす盆の月
取はやす事にはせねと盆の月

　くさ〳〵

おとろへやひと葉の桐にあとしさり
朝かほや海の淺黄を垣ひとへ
自由さや鉢あさかほの置處
此日こそ蕣にます檣もなし
草はなやこゝろとむれはもとの道
つれ〳〵とたつや夕日の女郎花
手こゝろに折そろへけり女郎花

良夜無月

とても降雨とおもへと月戀し
夕くれを見せしと照るや秋の月
初かりやこゝろにとめる數もなし
見えはせて聲の行方や雨のかり
揃ふたを見るかはしめや磯の雁
はり合になるか鳴〳〵わたる雁
聞かしの聲やあり〳〵月の雁
木の空に夕日まとめて雁の聲
落鮎や祭もとりの人たかり
吹よわる峰のあらしや鳴鶉
我ものと烏おもふや崩れ簗
羨みし折もありしか崩れ簗
きつかふた川も支へす葛の花
切あともまた咲さうな紫苑哉
因縁のありさうな葉や秋海棠
向ひ來る雲を日覆の花野かな
雨掛を床几に見せる花野哉
ひと雲に影日向あり蕎麥の花
破壁のあらし防かん釣たはこ
高うなる時かさかりや鷄頭花

雲行に月いそかしき野分かな
垣あれて孫瓜のあかき暴風哉
吹揚てそらに更行きぬたかな
笠島や何處の碪のはこひ風
釣合や引はなるこの愛かしこ
山松に日は落著て引板の音
朝寒や竈のまたにつゝれさせ
あさ寒や珠數爪くれは□へよき
送られた勝々ひとりの夜寒哉
爐明りに草鞋解せる夜寒かな
秋は猶きむさなれぬは寐覺膳
秋の夜や身のおとろへに寐後れる
誰そきゝはせぬか夜長のひとり言

斎川村にとまりて

炊するおとも夜かなし壁ひとへ
筋かひに雁とからすや秋の暮
つゝけては蛙もなかす秋のくれ
いそかしい中に我のみ秋の暮
あなかちにくるゝてもなしあきの雨
網ほさぬ門とてはなし秋まつり
柚の色にこゝろもとりぬ魚の店

置露も苫のたすけや石の肌
ひとつ灯をうけて賑はし竹の露
霧吹や半蔀あげしわらぢ店
霧ふかし今出る船の聲はかり
途きれなき霧や日和の底明り
霧雨や灯かけほのめく岩のしめ
つまる日に伸る芒の穗出しかな
二穗三穗洲に葉殘る芒かな
川へりや同しかたきの花すゝき
懸稻に袖のほめきや通り雨

田　家

戸明れはことに月夜や稻の波
はつ月や翌をちきりて門別れ
初月や拂うて見たき根なし雲
三日月や蘆の葉先のひとあらし

大梅東海の二人に弊庵を訪かれて

まつ宵や翌をはゝみし庵の客
名月や取つきかねて消る雲
名月の露にかたくや岸の蘆
入かしとおもふ日脚やけふの月
こゝろおく雲はさはけてけふの月
十六夜や昇れはおなし峯の月
いさ宵や川水つかふ在所ふり
旣望の闇や小笹の汐明り
きら〱と月の眞砂や露交り
澄とけて月はすわりぬ松の上
澄月やあたりの雲の餘所〱し

晴霞庵をはしめておまへたる時は花のあした月の夕へに招きし人ゝ席にみちけるに皆なき人となりて今は舊友淸民に對するのみなりけり

膝抱て二人無言や月の友
長かれとおもふも月のひと夜かな

今宵の空淸かりければ人ゝをうなかす文めくらしてまつ晴霞の扉をひらきける

ひとり手に火もこしらへて庵の月
ちよつぼりと藪山くらき月夜かな
冷つきも忘るゝ月の手すりかな

橋掛にまはり道して神送り
江のうへの朧にくるゝ小春かな
日のうちに月まて出て小はるかな
辻街のゆきゝ夜まて小春哉

廿三坂

との山も小はるならさる木蔭なし
達摩忌やおそくて寒き背中つき
たるま忌やをり重りし圍爐裏の間

時雨塚可親亭翁忌

おもひ入かれ野をけふの障子こし

新たになりたる別室に靈像をうつし奉りて

折からのしくれも聞や板ひさし
雲ゆきや降らぬしくれを手向草
爐ひらきや柳はさむき影法師

けふはかりと翁の宣ひしか

此うへにまた年よらん初しくれ
龍膽のなりも崩さすはつ時雨
沁る湯に取あふ竹の時雨かな
饗應に蠅そくむけるしくれ哉
あら川の音に添ゆくしくれ哉

きゝふるす荻に又聞時雨かな
還出して時雨にあふや藪の蕣
腰かけて行を見送る時雨かな
吹上て風のはなるゝ落葉哉
餘所の犬まてか寐にくる落葉哉
幾釣瓶くんても同し木のはかな
掃庭に舞てちゝつく木の葉哉
森に入日も木からしの申刻かな
木からしの撫ちからなし髁山
まうて來て年のはつれや散もみち
冬枯や稀に戸のあく別坐鋪
ふゆかれや高う見らるゝ窓障子
目になれて明暮もなし枯すゝき
よくかれて人にみらるゝ尾花かな
木の間もる日のはつ〳〵や八手咲
茶のはなや坂を登れは日も昇る
能き衆の泊る坐敷や冬木立
夕榮やこゝろのひまに歸り花
ふうはりと綿もきせたし冬牡丹
かねの聲千とり啼つゝ夜のしらむ
ひとつふたつ別に聲すむ千鳥哉

風呂鋪の松露を舟の枕かな
枝たれて谷川のそく木通哉
牛道のぬかりへはまる木の實かな
落栗や翌は秋なき山の鐘
うら枯や日は一はいにさす入江

鹽竈

神さひて秋もちり敷木の葉哉
　足らぬは過たるにまされり
とかや
けふの日やひとつふたつの菊の花
きく咲や待はひさしき物なから
豆はねる門の日よりやきくの花
しら菊やをしまるゝ日の最暮る
風そふや菊にさし出す手行燈
菊いろ〳〵白きにもとる人こゝろ
痩畑や伏た形にもきくの花
しら菊のひとり氣高き月夜哉
へる機に日かけとられて菊の花
日は降て風よけはなしきくの花
　九日迎山亭にて
限りある月をかきりにきくの花

九日も十日も菊の月夜かな
夕鵙の鳴も見えすく紅葉哉
花ほとは人を酔さぬ紅葉かな
峰越の雲に照そふ紅葉哉
染かねて日をへる谷のもみち哉
岩はなにさし出て薄き紅葉哉
入顔も染るもみちのひよりかな
朝ゆふとまたるゝ庭のもみちかな
見返れは雲に入日や後の月
後れしと露もいそくや後の月
行秋や暮てもしはし高根晴
行秋やこしもかゝまぬ女郎花
行あきや隙の明たるさゝけ垣
けふきりの秋とおもへは暮早し
翌からは名のつく雨や暮の秋

冬

此ころは月も夜ことや神無月

逆しまに傘さし出す霰かな
行雲のあられこぼして月夜哉
貴馬の手綱ゆるさぬあられかな
山〳〵の重荷おろして冬の雨
をるとなくをれは夜更や冬の雨
よい月の本意なくてらす冬野哉
菰かけて一夜こしけり積大根
竹垣にひと株つゝの干菜かな
水仙のつよみおぼえぬ活て後
有さうな家やのそけは水仙花
水仙やひと刷毛てすむ窓の切レ
水仙や根はつゝまれて市へ出る
寒きくやいつもおるしとさし向ひ
足らぬ日をたく山さうにつはの花
垣くゝる日はつれなくも石蕗花
ひと枝とまとまりもせす冬の梅
稲塚をさし出た枝やふゆの梅
しるひとの家てありけり冬つはき
さまてなき巌ふところやふゆ椿
花嫁のうちはさひしき師走哉
用もなき師走の文のなかさ哉

寐なからに聞や師走の市の聲
臘八や忘られぬ日の晴くもり
木の空に鳥もみそるゝか御佛名
常盤木のかれ木に交る寒かな
汲なかす魚の鱗や寒の入
出る月のあらししつめて寒の入
下寺の別時済けりふゆ構
門川やよく澄底に冬の月
我とわかこゝろに聞て冬籠
よいころに毎日起てふゆごもり
雨聞てのはす手あしや冬籠
ひとり居る日もすくなくて冬こもり
ものくさの看板かけてふゆ籠
炭継てしはし手を組ひとり哉
あるうへの馳走や炭の起りはな
炭継や氣には入ねと人まかせ
埋火や果はひとりに影ほそる
うすみ火や正月に似た雨の音
埋火やこゝろの外に聞あらし
窓にさす月も更たりくすり喰
着なれては耳にさはらぬ紙子哉

浦千鳥屋根は雀の夜明かな
居た鴨は見えねど太き水輪かな
戸にさはる根山おろしや鴨の聲
かもなくや晝見て置し外厠
日の廻るまては動かぬ小かも哉
松の葉のこぼるゝ中や浮寐鳥
暖い日を背中にあてゝうきねどり
起臥の別に志つかや鴛の妻
憚らぬ世の起ふしや番ひ鴛
日の筋や岩間離れて並ふ鴛
さゝ啼やこたつはなれてよい氣合
笹鳴やもの數いはぬ坐の志まり
活過てわれも寒いそふゆの蠅
くらい火て髪月代やあしろ守
霜月や荒神松を佛にも
仕舞まて拍子あはぬや里かくら
間ひやうしの揃はぬもよし里神樂
先へやれ傘のあとから鉢たゝき
志つまつた夜を引立て鉢敲
朝の間に花屋の見舞冬至哉
置霜や後れ氣見せぬ松葉掻

礒はたや色あさやかに霜の草
朝しもやあたゝかさうに井の烟り
あさ霜や早木つゝきの口かせき
初雪やむかしのこゝろ今寒し
影すむや江こしに雪の小松山
積ゆきや門は月すむ細なかれ
離れぬは氣しき少し雪の家
よい月の出て果もなし雪の原
あたゝかに遊びふかしぬ積るゆき
黄昏や馬屋出てゆく雪の鹿
とけさうて手のつゝけたし松の雪
我あとを降消せ雪の片折戸
戰くなりとりひしかれて雪のあし
雪をれやちと早けれと起つゝけ
隱れ家の猶かくるゝや竹の雪
起て先雪に志はしや物わすれ

畵讃

少將のすかたは雪に立かゝし
つと出れは闇なり川の氷るおと
照る月の池に隈なき氷かな
藤棚のかけ急度さすこほり哉

天明のころかとよ、九州豐後國なにかしの寺に、德をかくし光りを韜て、徹底無我の和尙住職してけり。片田舍はいつくもさる習にて、筆子あまた預りて、歲の暮のもちひをはしめ、炭薪野菜のたくひ、何不自由なくくらしける。さてしもとしなゝそに餘りけれは、いつまてかかくてやはとて、あらかじめ別室をしつらひ、檀那とも呼つとひいひけらくは、來る幾日閑居へひきうつるへきに、たれかついてのちく〜の厄介なからんやうに、荼毘の法式をも埒せんと思ふなり。みなく〜其分急度心得られゆへといへり。扨其日に至て、棺槨旛天蓋四火茶湯、かたの如く取よろひ、旦那筆子とも袿袴にて、行粧おこそかに、境內門前まて圍繞三帀し、和尙は棺のうちより四方を見巡らし、莞爾く〜と笑み、引まけなから隱宅へひき移り、九十餘にしてめてたき終りをとりしとかや。晴霞菴多代女は、みちのく岩瀨郡、須加川驛市原氏、子三人產り、姉は他にかしつきしか、ゑにし薄く家に歸りて沒す、二男總司本家を相續し、阿部侯より俸祿三百石、用人の席に列る。三男元介邑長撿斷也。孫彥さへあまたもちて、いとめて度果報なりしかと、天地闕欠のおきて、それはた遁れ難くて、三十一歲にして令婿なき人の數に入てより、家の業子達の撫育に、身意を勞らし、積欝つもりて病かちなりしを、舍兄峯擧亭

妾配りものにつかえぬ海老の髭
子はほしくあるまいものか暦賣
あるうへに買てうれしき年木哉
三弦もうたも下手なり年忘

清民亭

延た日をけふと　へ年わすれ
棚のむき替てあかえしとしのくれ
すゝ掃や雪の降こむあふら皿
煤はきや庭木を洗ふ暮の雨
内藏に餅のこたまや夜もすから
置順に巨たつ塞くや餅莚
ゆくとしや只居るこゝろいそかはし
行年や障子を徹す日のぬくみ

如雲子かものせし松島の碑は翁の名文なりそれ摺たるを屏風に仕立て

物いはぬ人に親しく年くれぬ
偽りのない鐘きくや大晦日



才男子の耻へき處なり。夫のみならす、世人の捨難き貴緣さらりと放擲したる辭世の一句、かへす〳〵も稱嘆するに尙餘りあり。且四時の吟藻性情あきらかに、格律すなほにて、松窓の門に學ふといへとも、曾てそのあとを踏す、當世流行に諂らはす、いはゆる俳家の劉鐵磨と申さん歟。されは彼筑紫潟の徹底和尙にひとしく、集なりて後は塵世を白眼にゝらみて、にこ〳〵と笑みをふくみ、俳諧三昧に百年の壽命を養ひ、風月花鳥とゝもに遊戯したまへと、短きちひれ筆にあらましをかいしるしておくりぬ

嘉永六年癸丑解制　　　　斷橋七十三叟

主人こゝろ遣りくさにもとて、俳諧をすゝめられしかは、雨考なかたちして、金令みち彦に随ひ、淺香市集を編む。其後破衲と同く、松窓乙二の門にあそひ、文政六年癸未江戸に遊て、諸風子と交接す。而後其名おのつから、四海に溢るゝ事は口さかしく、いはても人々の知る處なり。今年八十になん〳〵とす、さはれ容貌淸癯すといへとも、氣精なほさはかりにもあらすして、彌生の初め二人の子達にすゝめられて、花見くらせしか、日輪懸鼓の如く、西山に臼つくを見て、忽世のはかなきを觀想し、老懷の一句を得たり。それをしも辭世集と名つけ、剩年頃いひ捨しくさ〳〵をみつから撰て、をこかましくも梓にちりはめて、わか後の世を忍ふ人に、殘さんと思ふはいかにやあらんなと、消息してけり。破衲つら〳〵正風の淸味を思ひ廻らすに、詩三百篇萬葉古今の風骨を、もとつ種として、いやしくも名聞利養にかゝはらす、たゝ己か悲哀喜懽の情動くに随ひ、思ふまゝを十七文字にくゝりつゝめて、思ひをやるすさひ草なり。しかはあれと、世に古今あり、人情はたそれに随ひて、昔はむかしふりあり、今は今の風俗（ナラハシ）あり、あなかちに昔を是とし、今を非とすへきにもあらす。既に詩歌者流にも、自撰の集世に行はれしためし少からす、畢竟自己の心腑に落さらん言艸は、世に殘さしと思ひ起したる、聰明俊

俳諧文庫

第一編●芭蕉全集…老鼠堂永機宗匠 阿心庵雪人宗匠 訂
第二編●芭蕉以前俳諧集 卷上 大野洒竹君編纂
第三編●芭蕉以前俳諧集 卷下 大野洒竹君編纂
第四編●其角全集…老鼠堂永機宗匠 阿心庵雪人宗匠 訂
第五編●許六全集 減價 大野洒竹君校訂
第六編●也有全集 減價 岡野知十君校訂
第七編●嵐雪全集 減價 雪中庵雀志宗匠訂
第八編●支考全集 減價 老鼠堂永機 其角堂機一 宗匠訂
第九編●芭蕉十哲集…老鼠堂永機 晋雪庵柳涯 宗匠訂
第十編●元祿名家句集…大野洒竹君校訂
第十一編●一茶大江丸全集…岡野知十君校訂
第十二編●蕪村曉臺全集…大野洒竹君校訂

大判洋裝並綴
紙數壹冊
貳百五拾頁以上

正價
●壹冊金參拾錢 ▲減價分壹冊賣價貳拾錢
●五冊以上八分引 ●拾冊以上壹割貳分引
●貳拾冊以上壹割五分引 ▲郵稅壹冊八錢宛

第十三編●俳諧論集…巖谷小波君校訂
第十四編●素堂鬼貫全集…大野洒竹君校訂
第十五編●續俳諧論集…巖谷小波君校訂
第十六編●俳諧句合全集…角田竹冷君校訂
第十七編●蓼太全集…不白軒梅年君 雪中庵雀志君 雪袋人字貫君 校訂
第十八編●俳諧珍本集…大野洒竹君校訂
第十九編●俳諧文集…巖谷小波君校訂
第二十編●俳諧逸話全集…鵜澤四丁君校訂
第二十一編●附合作法全集…伊藤松宇君校訂
第二十二編●俳諧類題句集 卷上 尾崎紅葉君校訂
第二十三編●俳諧類題句集 卷下 尾崎紅葉君校訂
第二十四編●俳諧紀行全集 減價 佐藤飯人君校訂

明治三十一年十月廿九日印刷
明治三十一年十一月一日發行
明治三十六年十月廿五日再版發行

定價金三十錢

校訂者　大野洒竹

發行者　大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　野口安治
東京市小石川區指ケ谷町百廿三番地

印刷所　翔鸞社
東京市牛込區神樂町一丁目二番地

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目
博文館

雪中庵雀志宗匠校閲
五乳洞鈎雪君編

俳諧提要

正價金五拾錢　郵税六錢

中判和装　横綴紙數　三五六頁

──((目　次))──

古來に俳諧に關するの書、汗牛充棟も啻ならず、斯道を樂むもの寧ろ其種類の[illegible]にて採擇に惑ふの有樣なり、而も實際に輕便にして、且拔倆を發達し、初學者をして速かに其大要を知らしむるに足る者有る無し、茲に概ね古今無數の名吟を羅列して之が適切なる通解を與へず、徒らに浩瀚なる大著を形成し以て凡庸の耳目を眩惑せんとを是れ期す、何んぞ其裨益せんことすらも得べからんや、本書は大に其趣を異にし先づ一覽する處の原則を說示し時勢の變移に依り、其活用を指示するものゝ如し[illegible]に簡潔明徹なる文辭を以て直ちに實際に適切なるの方法を訓示せる等、實に古今未だ此類の著を見ず、初學者は勿論苟も斯道に志を有するの士一本を備へば其利益鮮少ならざる也

老鼠堂永機宗匠著（再版）

俳諧自在

正價金壹圓　郵税拾四錢

袖珍　洋布　特製

有情無情天地の森羅萬象を提へて、之を十七文字の中に收むるもの、是れ我俳句にあらずや。此平民的文學を解釋して、其起原沿革及び作法等を精細に叙述し以て初學者の指南車たるものは此書なりとす。俳家の泰斗永機宗匠の心血を灑がれし書、請ふ一本を購ふて斯道の妙を味ひ給ふべし。

三宅靑軒君著（七版）

俳諧獨學

正價金貳拾五錢　郵税六錢

洋裝　大判　並製

僅かに十七字中に物象情懷を詠じて、限りなき餘韻、風趣あるは俳諧なり、今や斯道に志すもの都鄙に多く、俳運の盛なる將さに元祿時代に迫らんとす、本書は斯道の栞として丁寧懇切に句作の方法式例を擧げ、初步より堂奥に至るまで殆んど漏らす所なし。

角田竹冷、佐藤[illegible]八、大野酒竹三君校

◉蕪翁句集

全三册美濃判　木版和紙綴　正價壹圓　郵税拾錢

俳諧寺社中校

◉一茶句集

全二册和裝　木版和紙綴　正價貳拾五錢　郵税六錢

